

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第9集

町^{ちょう} 田^だ 遺 跡

1 9 8 9

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

庄内川右岸の鳥居松段丘上には、常に人々の生活跡がみられます。旧石器時代から江戸時代までの遺跡が各地に分布し、文化の中心地的存在であったと思われます。そういう中で、埋もれた遺跡に光をあて、知られない先人達の知恵を究明して、過去の文化遺産を引き継いでいくことは私たちの責務と感じています。

今回の調査では、縄文時代・弥生時代の生活や中世の条里制遺構の一端が解明でき、春日井市をはじめ愛知県内についても多大な成果を上げ多くの新しい知見を得ることができました。また、昆虫・種子・珪藻や火山灰分析など自然科学分野を取り入れた総合報告書として高く評価できるものと信じております。

発掘調査の実施にあたりましては、地元住民の方々を始め、関係者及び関係機関の御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成元年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 中根 昭二

例 言

1. 本書は愛知県春日井市町田町に所在する町田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は名古屋環状2号線(一般国道302号)建設に伴う事前調査として実施し、愛知県の委託事業(教育委員会を通じて)として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、昭和62年4月~10月まで実施した。
3. 調査担当者は、平野清・山仲廣司・神谷友和・後藤浩一・佐伯二郎であり、調査補助員として長井富美男・坪井裕司・市川浩代が協力した。
4. 調査に当たっては、次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局、一宮市教育委員会、春日井市教育委員会、松阪市教育委員会
5. 本書は、第1章を山仲廣司、第2章第3節・第3章第1節・第5章第1・2・4節を後藤浩一、第4章を森勇一・伊藤隆彦・永草康次・楯真美子、その他を神谷友和が分担執筆した。埴輪の項については岡田雅人に協力して頂いた。
6. 遺構・遺物の整理・製図等については調査員があたり、次の方々の協力を得た。
長井富美男・坪井裕司・市川浩代・山口昌通・岡田雅人・梅田純代・戸谷仁美・加藤真理子・河瀬豊子・河野律子・小島麗子・小林真希子・竹村日出子・中村美代子・松田弘子
遺構・遺物の写真撮影は後藤・神谷が担当した。
7. 調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
8. 編集は執筆者と協議したうえで神谷が担当した。

目 次

第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経緯	(1)
第2節 地理的・歴史的環境	(2)
第2章 遺 構	
第1節 層序と遺構	(4)
第2節 弥生時代の遺構	(8)
第3節 条里制遺構	(16)
第3章 遺 物	
第1節 縄文土器	(18)
第2節 弥生土器	(20)
第3節 SK・ピット出土の遺物	(24)
第4節 水田跡出土の遺物	(25)
第4章 自然科学的分析	
第1節 S字状口縁台付甕の分析	(32)
第2節 尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について	(44)
第3節 町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴	(50)
第4節 町田遺跡産の昆虫遺体と古環境	(54)
第5節 町田遺跡産の大型植物遺体	(58)
第6節 愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について	(60)
第7節 町田遺跡における珪藻遺骸群集	(64)
第5章 考 察	
第1節 町田遺跡火山灰下層出土の縄文土器の編年的位置づけ	(74)
第2節 勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について	(78)
第3節 庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態	(86)
第4節 条里制遺構の考古地理学的考察—町田遺跡を中心として—	(94)
付 表	(100)

図 版 目 次

- | | |
|--|--|
| <p>1 遺構図 (1) 全体の遺構配置図</p> <p>2 遺構図 (2) 西微高地・水田跡A・B地区</p> <p>3 遺構図 (3) 東微高地・水田跡B地区</p> <p>4 遺構図 (4) 東微高地・水田跡C地区</p> <p>5 遺構図 (5) S Z 01</p> <p>6 遺構図 (6) S Z 02・S Z 03</p> <p>7 遺構図 (7) S Z 04・S B 22</p> <p>8 遺構図 (8) S B 01・S B 02・S B 06・S
K 35</p> <p>9 遺構図 (9) S B 03・S B 04・S B 05</p> <p>10 遺構図 (10) S B 07・S B 10</p> <p>11 遺構図 (11) S B 08</p> <p>12 遺構図 (12) S B 09</p> <p>13 遺構図 (13) S B 23</p> <p>14 遺構図 (14) S B 12・S B 13・S B 14・S
B 15</p> <p>15 遺構図 (15) S B 11・S B 24</p> <p>16 遺構図 (16) S B 19・S B 20・S B 21</p> <p>17 遺構図 (17) S B 18</p> <p>18 遺構図 (18) S B 16・S B 17</p> <p>19 実測図 (1) A～S区トレンチ出土</p> <p>20 実測図 (2) 縄文土器</p> <p>21 実測図 (3) 縄文土器</p> <p>22 実測図 (4) S D 03</p> <p>23 実測図 (5) S D 03</p> <p>24 実測図 (6) S D 03</p> <p>25 実測図 (7) S B 01・S B 02・S B 03・S
B 04・S B 05・S B 06・S B 07</p> <p>26 実測図 (8) S B 08・S B 09</p> <p>27 実測図 (9) S B 10・S B 12・S B 14・S
B 15・S B 16・S B 19</p> <p>28 実測図 (10) S B 17・S B 20・S B 21</p> <p>29 実測図 (11) S B 23・S B 24・S Z 04・S
K出土</p> | <p>30 実測図 (12) S K・ピット・S D 06出土</p> <p>31 実測図 (13) 水田跡出土</p> <p>32 実測図 (14) 埴輪</p> <p>33 実測図 (15) 埴輪</p> <p>34 実測図 (16) 埴輪</p> <p>35 実測図 (17) 弥生土器</p> <p>36 実測図 (18) 弥生土器・土師器・石製品・
陶丸・土錘・金環・るつぼ</p> <p>37 実測図 (19) ヘラ記号をもつ土器・墨書土
器・緑釉陶器</p> <p>38 調査区全景</p> <p>39 西微高地・東微高地全景</p> <p>40 S B 01～S B 09・S B 04～S B 10・S B 04全景</p> <p>41 S B 03・S B 05・S B 01全景</p> <p>42 S B 06～S B 09・S B 06・S B 07全景</p> <p>43 S B 11～S B 21・S B 12～S B 21・S B
11～18全景</p> <p>44 S B 24・S B 22・S B 17～21全景</p> <p>45 S Z 01・S Z 02・S B 12～15全景</p> <p>46 S B 16～S B 17・S B 22～S B 23・S Z 04
全景</p> <p>47 S T 01～S T 07・S T 04～S T 18全景</p> <p>48 S T 12～S T 17・S T 13～S T 19・S T
29～S T 31全景</p> <p>49 S T 06～S T 10・S T 21～S T 28全景</p> <p>50 S T 21～S T 28・S T 21～S T 28・S T
29～S T 34全景</p> <p>51 遺物出土状況</p> <p>52 弥生土器</p> <p>53 弥生土器</p> <p>54 須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器</p> <p>55 縄文土器</p> <p>56 縄文土器</p> <p>57 墨書土器・ヘラ記号をもつ土器・A～S区</p> |
|--|--|

	トレンチ出土
58	埴輪
59	緑釉陶器・陶丸・土錘・金環・るつぼ・石製品
60	昆虫遺体
61	大型植物遺体・植物珪酸体

62	火山灰の偏光顕微鏡写真
63	珪藻遺骸の顕微鏡写真(1)
64	珪藻遺骸の顕微鏡写真(2)
65	土器表面の実体顕微鏡写真
66	岩石片を含む土器薄片の偏光顕微鏡写真

挿 図 目 次

第1図	町田遺跡調査区位置図(1:5000)	る割合	(52)
(1)		
第2図	町田遺跡と周辺の遺跡分布図(1:50000)		(3)
第3図	町田遺跡南壁基本土層図		(4)
第4図	トレンチA~S区配置図(1:800)		(5)
第5図	トレンチG~J区北壁断面図(1:100)		(5)
第6図	方形周溝墓配置図		(8)
第7図	SD03土器出土地点		(9)
第8図	西微高地・竪穴住居跡配置図		(10)
第9図	東微高地・竪穴住居跡配置図		(12)
第10図	水田跡C地区南壁断面図		(16)
第11図	条里制遺構配置図		(16)
第12図	水田跡計測値算出基準		(17)
第13図	町田遺跡関連試料胎土重鉍物組成		(35)
第14図	町田遺跡関連試料胎土重鉍物組成(グループ別)		(37)
第15図	S字状口縁台付甕実測図(1)		(40)
第16図	S字状口縁台付甕実測図(2)		(41)
第17図	各遺跡の位置とその周辺の地質		(44)
第18図	グループ別の岩片および鉍物組成		(46)
第19図	グループ別の岩片および鉍物組成		(47)
第20図	時期・器種別にみた各グループの占め		
第21図	町田遺跡産の昆虫遺体		(55)
第22図	分析試料採取トレンチ位置図		(60)
第23図	62B区P~S区トレンチ北壁断面図		(60)
第24図	試料採取地点柱状図		(61)
第25図	町田遺跡産珪藻遺骸分析結果		(68)
第26図	化石珪藻群集形成のプロセス		(70)
第27図	沖田遺跡竪穴住居跡出土の縄文土器		(75)
第28図	清水の上貝塚C層出土の縄文土器		(75)
第29図	春日井市の地形及び地形断面図		(78)
第30図	古地形の復元		(79)
第31図	勝川・松河戸遺跡出土の縄文土器		(80)
第32図	松河戸遺跡62E・F区出土の石器		(81)
第33図	松河戸遺跡62E区埋積浅谷南壁断面図		(82)
第34図	松河戸遺跡62E・F・G区の縄文集落		(83)
第35図	勝川遺跡遺構配置図		(88)
第36図	町田遺跡周辺の水田地割		(94)
第37図	水田跡と地籍図の地割		(94)
第38図	A地区尺度算出模式図		(95)
第39図	B・C地区尺度算出模式図		(96)
第40図	長地型地割の尺度		(97)
第41図	A・B地区水利模式図		(98)

表 目 次

第1表	各土層断面図対比表……………(5)	析結果の関係……………(43)	
第2表	方形周溝墓計測値……………(15)	第11表	岩片および鉞物の同定結果……………(45)
第3表	竪穴住居跡計測値……………(15)	第12表	試料とその分析結果……………(51)
第4表	水田跡計測値……………(17)	第13表	各グループに含まれる試料の個数(52)
第5表	S D03出土土器個体数……………(21)	第14表	昆虫遺体分析結果……………(54)
第6表	埴輪出土地点別個体数……………(31)	第15表	町田遺跡から産した珪藻遺骸のリスト ……………(66~67)
第7表	町田遺跡関連試料土器胎土観察結果 ……………(33)	第16表	勝川遺跡主要遺構計測値……………(89)
第8表	町田遺跡関連試料胎土重鉞物組成(34)	第17表	A地区畦畔計測値……………(95)
第9表	重鉞物組成と実体顕微鏡観察による分 析結果……………(38)	第18表	「3歩」を単位とした尺度……………(96)
第10表	重鉞物組成と実体顕微鏡観察による分	第19表	B・C地区畦畔計測値……………(96)
		第20表	水田跡尺度一覧表……………(97)

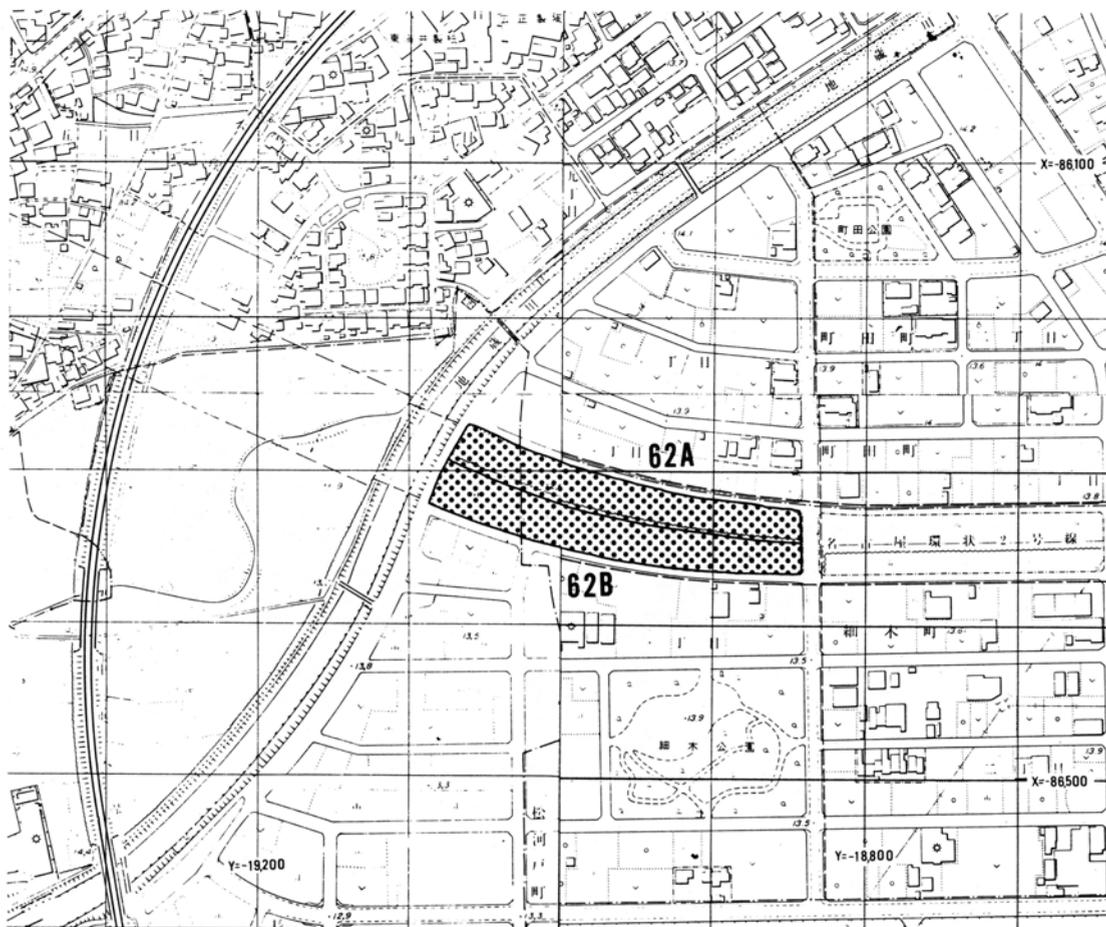
第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

町田遺跡が所在する愛知県春日井市町田町一丁目周辺から東にある松河戸町までの一帯が名古屋環状2号線（一般国道302号）建設予定地にかかることになったため、愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに愛知県埋蔵文化財センターが、地藏川と庄内川に挟まれた地域の古代の条里制遺構の存否及びその範囲確認を主目的として、昭和61年4月～5月にかけて12ヶ所の試掘トレンチを設定し、延べ500㎡の試掘調査を実施した。

その結果、地藏川左岸より多量の弥生土器片が出土し、弥生時代と思われる竪穴住居跡も3軒検出し、弥生時代の集落遺跡（町田遺跡）の存在を予測することができた。また、現在の水田の畦畔が条里制の地割に一致し、現在の水田下に古代・中世の条里制遺構の存在を推定できることから発掘調査が必要となった。

今回の調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局から愛知県教育委員会文化財課を通じて委託を受けて、当財団が昭和62年4月1日から同年10月31日まで面積9882㎡の調査を実施することになった。



第1図 町田遺跡調査区位置図（1：5000）

第2節 地理的・歴史的環境

春日井市は名古屋市の北東に位置し、市の北部から西部にかけて岐阜県多治見市、小牧市、西春日井郡豊山町に接し、東南部は庄内川を挟んで瀬戸市、名古屋市守山区にそれぞれ接している。地形的には、尾張丘陵と濃尾平野の接触地帯にあたり、市の南側を庄内川が流れる。地盤傾斜は東高西低でほぼ庄内川の流れる方向と一致し、標高436mの弥勒山をはじめとして南に新第三紀丘陵・その西南の各段丘面・庄内川周辺の海拔11mの沖積地の四区に大別される。市の大部分を占める段丘面は、上位から桃山面、田楽面、小牧面、鳥居松面の四段に区分することができ、いずれも洪積世に形成されたものである。

町田遺跡は、春日井市の南西部に位置し、鳥居松段丘面縁辺裾部に沿って流れる地藏川左岸の庄内川沖積地（標高11m）に立地する。遺跡のすぐ西を流れる地藏川は近年の改修工事で現在の地へ流路整備された。旧河川は現河川のさらに西、より段丘に近接したところを流れていた。遺跡の中央部には幅75mにおよぶ島状の微高地が存在し、最近まで畑作が行われていたと思われる。また、西側にも微高地があり、勝川大塚古墳の推定地と考えられる。

旧石器時代の遺跡は、町田遺跡の北東4kmの小牧面上に梅ヶ坪遺跡があるが、未調査である。縄文時代の遺跡は、梅ヶ坪遺跡の東方1kmに縄文土器が出土した篠木遺跡があり、ここから4km北西の田楽遺跡は石器散布地として知られていて、いずれも段丘上に立地する。しかし、当財団の62年度の調査で沖積地にも立地する縄文遺跡の存在が確認された。一つは、町田遺跡で、西微高地の東側裾部で多量の土器が出土し、もう一つは、松河戸遺跡の微高地上から大量の石器や剥片が出土し、集石状遺構が検出されている。

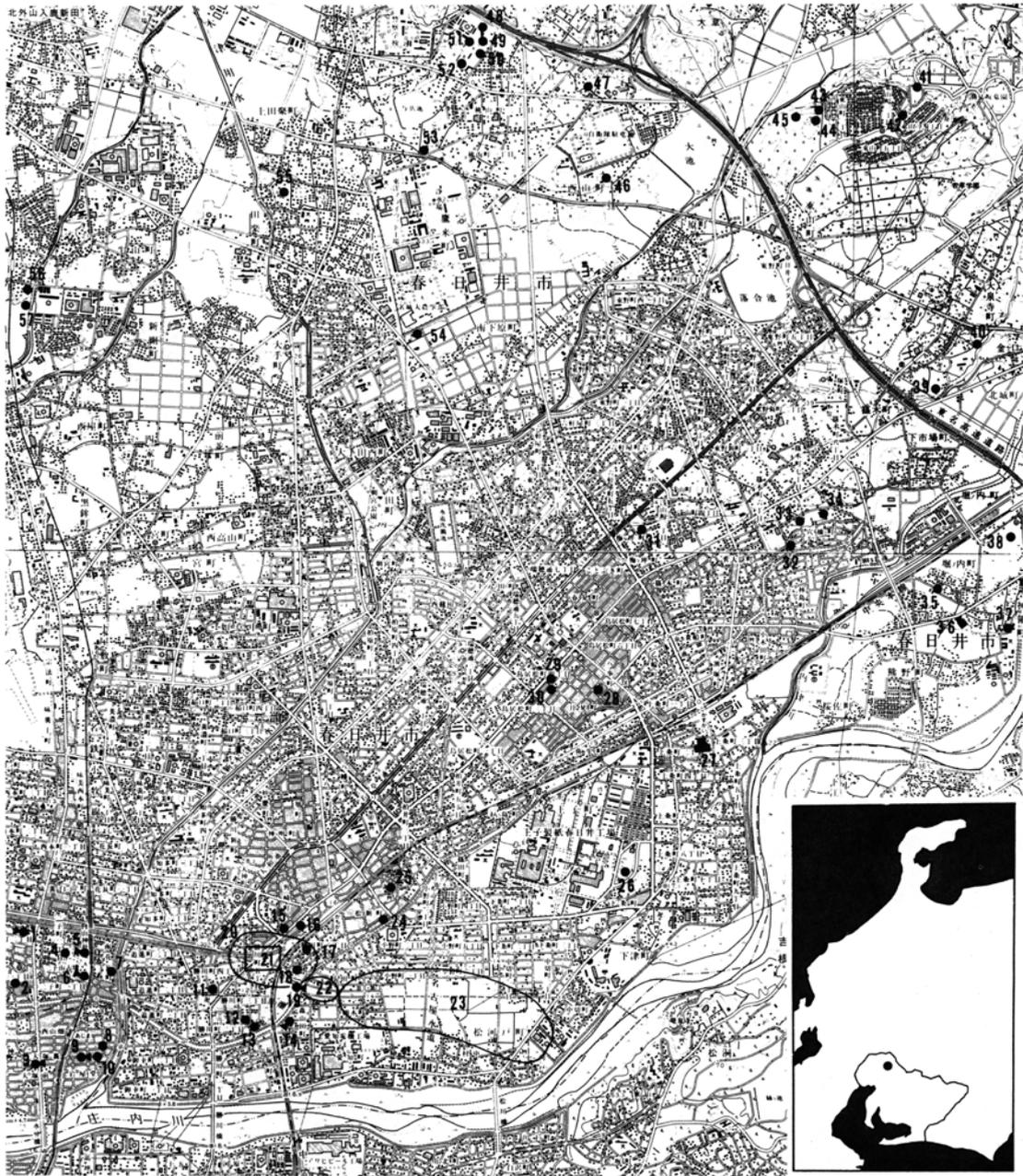
弥生時代の遺跡は、庄内川流域に多く点在し、中でも大留から勝川にかけては顕著である。安政5年には、神領町で銅鐸が2個出土している。町田遺跡の西に広がる勝川遺跡はJR中央本線西側の上屋敷地区（標高13m）とJR東側の南東山地区、さらに段丘下の苗田地区（標高11m）に分割することができる。南東山古墳のある南東山地区は、かつて「南東山遺跡」として春日井市教育委員会により発掘調査が実施され、竪穴住居跡が7軒確認されている。上屋敷地区では方形周溝墓が40～50基と数多く検出されている。一方、段丘下の町田遺跡では、微高地上に竪穴住居跡や方形周溝墓を検出している。また、苗田地区も段丘下に立地するが、木器製作を目的にしたと思われる掘立柱建物群や木器未製品貯蔵土坑が検出され、大量の木製品が出土している。弥生時代に勝川地域を中心に集落が存在し、しかもそれは段丘上だけでなく段丘下の沖積地にも存在したことが明らかになった。

古墳時代の遺跡は、6世紀になると、町田遺跡の西2kmの味美地区に二子山古墳、白山神社古墳、春日山古墳といった大規模な前方後円墳が造られ、勝川から味美、味鉢にかけては県下屈指の古墳群を形成している。なお、二子山古墳出土の窖窯焼成の円筒埴輪片は市内下原地区の下原2号窯で焼成されたものである。

奈良時代になると、勝川5丁目に寺（勝川廃寺）が建立された。この寺の瓦は庄内川上流の高蔵寺瓦窯で焼成されたものである。弥生時代から奈良時代にいたるまで、勝川地域は一つの中心的存在であったことは明らかであり、町田遺跡もそうした流れの中で理解すべきであろう。

古代から中世にかけては、安食荘が春日井市南部から名古屋市北部にかけて存在していたと推定され、広範な地域に条里制地割が実施されていたであろう。町田や松河戸遺跡で確認された条里制遺構は中・

近世の時期であると考えられるが、おそらく古代から現在まで連綿と続いていたであろうと考えられる。



- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 春日山古墳 | 2. 伊勢山古墳 | 3. 大塚古墳 | 4. 御旅所古墳 | 5. 白山神社古墳 |
| 6. 二子山古墳 | 7. ドンドン塚古墳 | 8. シギ塚古墳 | 9. 長塚古墳 | 10. 岩屋堂古墳 |
| 11. 愛宕神社古墳 | 12. 兎塚古墳 | 13. 東白塚古墳 | 14. オシメンド古墳 | 15. 笹原古墳 |
| 16. 山神古墳 | 17. 狐塚古墳 | 18. 南東山古墳 | 19. 勝川大塚古墳 | 20. 勝川遺跡 |
| 21. 勝川廃寺 | 22. 町田遺跡 | 23. 松河戸遺跡 | 24. 松新遺跡 | 25. 春光稲荷古墳 |
| 26. 王子遺跡 | 27. 上条遺跡 | 28. 八事神明社古墳 | 29. 鳥居松2号墳 | 30. 鳥居松3号墳 |
| 31. 梅ヶ坪遺跡 | 32. 篠木遺跡 | 33. 篠木2号墳 | 34. 篠木3号墳 | 35. 堀之内1号墳 |
| 36. 高御堂古墳 | 37. 神領銅鐺出土 | 38. 堀之内遺跡 | 39. オセンゲ古墳 | 40. オフジ古墳 |
| 41. 潮見坂9号窯 | 42. 潮見坂10号窯 | 43. 下原2号窯 | 44. 下原3号窯 | 45. 下原4号窯 |
| 46. 西山製鉄遺跡 | 47. 桃山8号窯 | 48. 桃山4号窯 | 49. 桃山1号窯 | 50. 桃山3号窯 |
| 51. 桃山6号窯 | 52. 桃山7号窯 | 53. 桃山5号窯 | 54. 鷹来1号窯 | 55. 田楽遺跡 |
| 56. 牛山遺跡 | 57. 牛山1号窯 | | | |

第2図 町田遺跡と周辺の遺跡分布図 (1:50000)

第2章 遺構

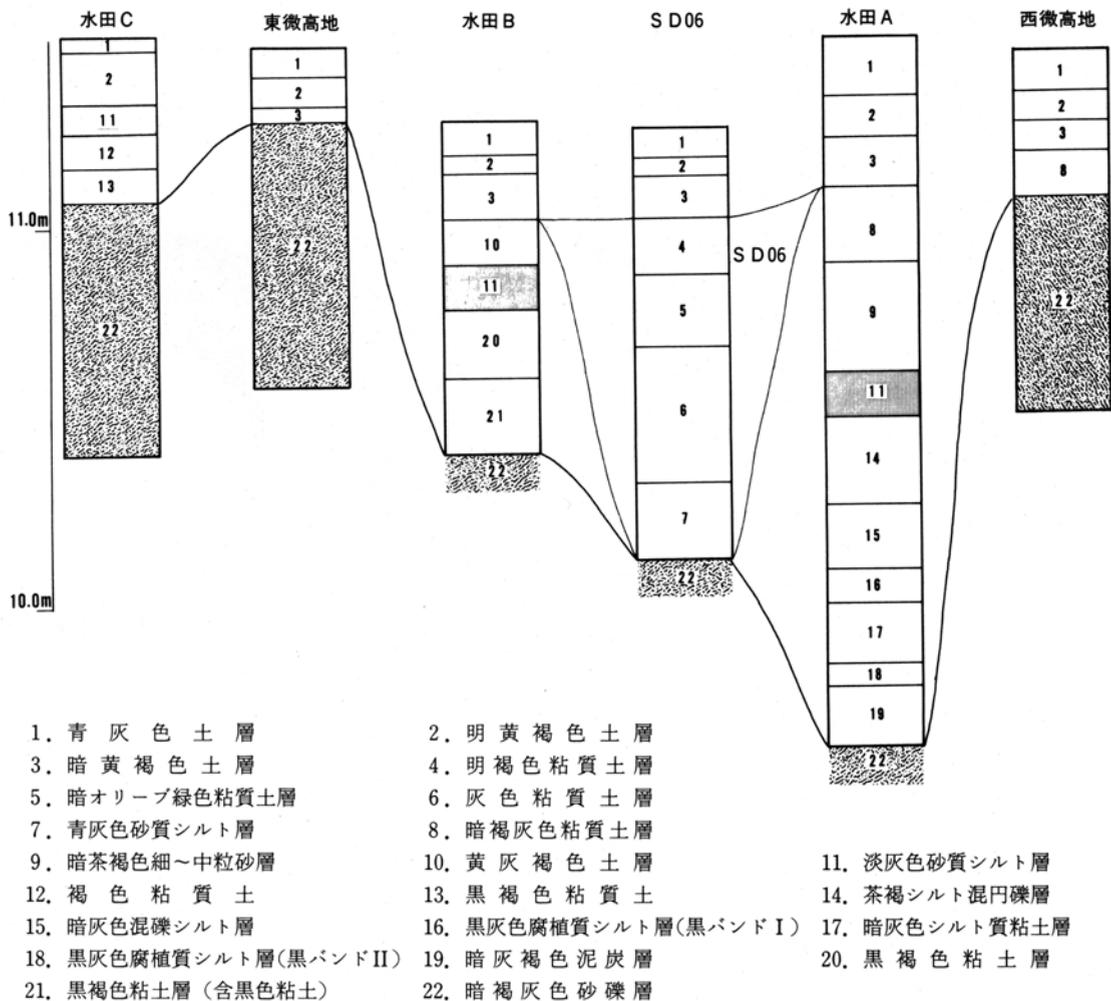
第1節 層序と遺構

1. 層序と立地

東西約200m・南北約45m（調査面積9882m²）の町田遺跡の層位の様相を概観し、遺構の立地や時期や層位との関連についてみていくことにする。

検出した遺構面は、標高約11m前後の沖積地に立地していて、遺構の性格やその地形からみて5地区に分けてみていくと理解しやすい。5地区というのは、東端の水田跡がある水田跡C地区、東微高地上に展開する弥生時代のムラがある東微高地地区、東微高地西側の水田跡がある水田跡B地区、大溝（SD06）の西側の水田跡がある水田跡A地区、西微高地上に展開する弥生時代のムラがある西微高地地区をさしている。

基本層序（第3図）は上から順に第1・2・8・10・11・22層である。水田跡C地区では11と22の間に第12・13層がはいり、水田跡B地区では11と22の間に第20・21層がはいり、水田跡A地区では8と11の間に第9層が、11と22の間に第14・15・16・17・18・19層がはいり、水田跡B地区では8と11の間に第9層が、11と22の間に第14・15・16・17・18・19層がはいり、水田跡A地区と水田跡B

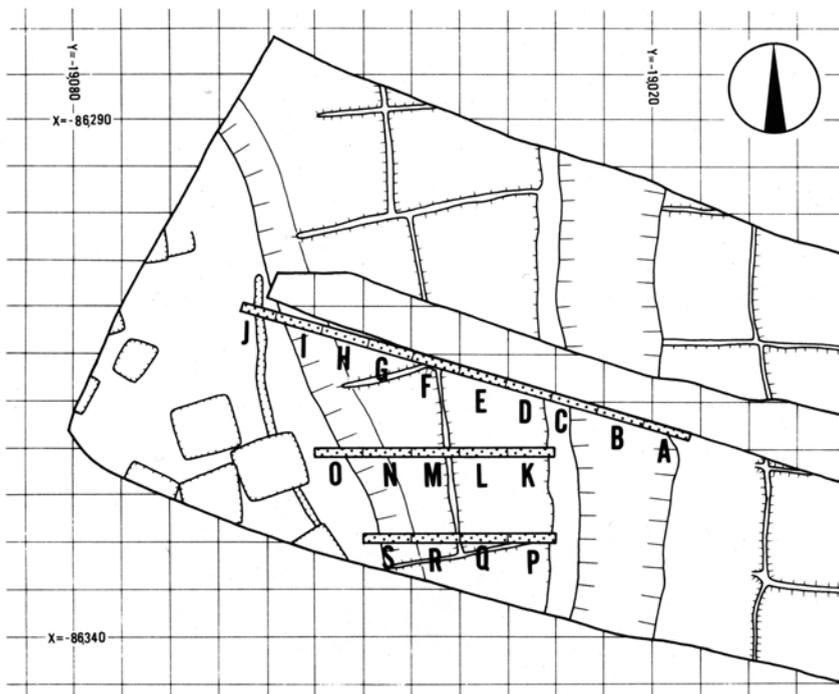


第3図 町田遺跡南壁基本土層図

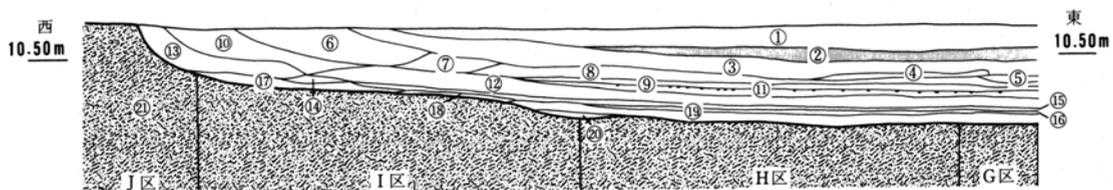
地区の間にS D06が南流し、第8～11層の間にそれが存続していただろう。東側と西側に微高地を確認し、その上面より弥生時代の遺構を多く検出した。標高は東微高地11.3m・西微高地11.1m、面積は東微高地3,000㎡・西微高地800㎡である。水田に伴なう畦畔は第11層中に検出することができ、断面でも確認することができた。その第11層が水田（条里制遺構）の耕土と考えられる。各水田跡第11層の平均の標高をみていくと、A地区10.5m・B地区10.7m・C地区11.2mとなり、水田跡A～C地区が水田として活用していたころ、東・西微高地はそれらより高く、水田化されていたかどうか十分に解明できなかった。各水田跡の標高を対比してみると、C地区が最高位であり、次いでB地区・A地区という順である。さらに第22層の基盤層をみてみても、同様のあり方を示している。もともとの自然地形を利用して水田化していったというこ

第1表 各土層断面図対比表

第3図：町田遺跡南壁基本土層図	第5図：トレンチG～J区北壁断面図	第23図：P～Sトレンチ北壁断面図
第11層	第2層	第13層
第14層	第3層	第12層
第15層	第8層	第11層
	第9層	第10層
第16層	第11層	第8層
第17層	第12層	第7層
第18層	第15層	第6層
	第16層	第5層
第19層	第19層	第4層
	第20層	第3層
第22層	第21層	第2層
		第1層



第4図 トレンチA～S区配置図 (1:800)



- | | | |
|---------------------|----------------------|---------------------|
| ① 暗茶褐色細～中粒砂層 | ⑧ 黒灰色礫混シルト層 | ⑮ 黒灰色腐植質シルト層(黒バンドI) |
| ② 淡灰色砂質シルト層(中世水田耕土) | ⑨ 暗灰色シルト層 | ⑯ 暗灰色泥炭質シルト層 |
| ③ 茶褐色シルト混円礫層 | ⑩ 灰褐色砂質シルト層 | ⑰ 淡灰色円礫混砂質シルト層 |
| ④ 鉄斑混淡灰色砂質シルト層 | ⑪ 黒灰色腐植質シルト層(黒バンドII) | ⑱ 淡灰色円礫混細粒砂層 |
| ⑤ 暗灰色混礫シルト層 | ⑫ 暗灰色シルト質粘土層 | ⑲ 暗灰色泥炭層 |
| ⑥ 淡黄褐色円礫混砂質シルト層 | ⑬ 灰褐色砂礫層 | ⑳ 暗緑灰色細礫混細粒砂層 |
| ⑦ 暗灰色礫混シルト層 | ⑭ 黒灰色礫混粗粒砂層 | ㉑ 暗褐色灰色砂礫層 |

第5図 トレンチG～J区北壁断面図 (1:100)

とであろう。

水田跡A地区と西微高地との関連性や、下層の水田の有無をみるためにトレンチ（第4図）を設定して調査した。幅1m、長さ20～40m程を3本設け、それらを5m間隔で区切り、A～S区という名称を与えた。水田跡A地区の柱状断面図と第5図断面図を照合しながらみていくと、さらに細かな層位がでてくるが、全体として西微高地から水田跡A地区への自然堆積であるというのがわかる。図版19の土器はトレンチより出土したものであり、層位ごとにグループ分けすることができる。調査時では、層位毎に掘り下げていったけれども、同一層をさらに10cm単位で小刻みに下げていった結果、A～S区の各小地区出土の土器を第5図の断面図に代表してみることができている。すると、I：第10層、II：第8層～第9層、III：第3層～第8層、IV：第2層～第3層と4つに分けられる。

2. トレンチ出土遺物

A～S区までの出土遺物（図版19）の中から図化できるものを示した。第10層出土が最も多く、堅穴住居廃絶後の様子を語っているようである。第10層出土は壺・甕・高杯が出土する。壺1～3・6・16、甕7～9・14・17・23、鉢10、高杯21、器台15、有孔土器11～13ミニチュア土器20がある。1～3は外反する口縁部で外面に凹線文をもち、2・3は内面に羽状文を施している。6はくの字状に外上方にのびる口縁部で端部は方形状である。16は底部が丸底で口縁部は欠けている。7は口縁部が受口状で外面に刺突文を施している。体部に縦方向の後横方向の刷毛目を施す。9は有段口縁をもち端部は方形状におわり、外面に羽状文を施す。10は口縁部が屈曲し端部は丸くおわり、外面に刺突文と直線文を交互に施す。14は叩きをもつ甕の底部である。粗い叩き（凹の幅4・深1mm）で右上がりラセン状に叩きをした後刷毛目を施している。23は台付甕の脚台部であり内弯気味である。17はS字状口縁であり屈曲が弱い。高杯21は脚裾部が外方へのび、端部は方形状におわる。器台15は脚柱状部であるが、外面に3条一組の櫛描文を4帯施している。有孔土器11～13は底部のほぼ中央に一孔をもっていて、平底と尖底とがある。12の内面は横方向の篋削りと縦方向の刷毛目をもっている。ミニチュア土器20は手捏ねで仕上げている。

第8・9層から壺4・5、高杯22、甕18・19、須恵器蓋24、杯26、甌30が出土する。4は内弯する口縁部で端部を外方へつまみ出す瓢型壺である。5は外反する口縁部で端部が丸くおわる。内面に指圧や横方向の篋削りを施している。18・19はS字状口縁の口縁部と脚台部であり18は厚手で下端が突出している。高杯22は小型で脚裾部が屈曲している。24はつまみをもつもので、26は内弯気味であり、30は底部に長楕円形の透しを4方にもち、その中央に正円の透しを1つもっている。外面に横方向と縦方向の篋削りをし、内面はナデによる平滑である。第3・8層は須恵器の蓋28、甕29、器台25、緑釉陶器皿27である。25は小型であり、外面に2帯の波状文を施し、内面は自然釉が濃厚に付着している。27は須恵質で内外面全てに緑釉が施釉されている。

第2・第3層から灰釉陶器の椀31や皿32、灰釉系陶器の小皿33や椀34・35が出土している。その他の遺物として第19層下層から縄文土器片約200点が出土した。微高地裾部の最下層であり、おそらく二次堆積によるものであろう。S区第9層で凹石1点とM区第8層で金環1点が出土した。凹石は縄文時代との関連が考えられるし、金環は西微高地上一帯に築造されていたといわれる勝川大塚古墳の

副葬品の一部ということが考えられる。さらに第11層上層で火山灰(第4章第6節参照)を発見した。厚さ2~14mmの極薄のレンズ状の堆積であり、ほぼ同一レベルで斑点状に広がっていた。さらに第19・16・15・10層で¹⁴C年代測定(第23図参照)を行ったところ、第19層で5000±100 y.B.P.・第10層で3120±120 y.B.P. という数値が導き出され、その結果、火山灰と縄文土器に絶対年代が与えられた。以上のことや各小区の層位から出土した遺物を検討した結果、第10層は弥生時代後期~古墳時代前期、第9層は縄文時代晩期~古墳時代、第8層は奈良時代~平安時代、第3層は鎌倉時代~室町時代という年代幅の中で堆積したのであろう。それからみて、第2層の水田跡A~C区(条里制遺構)は、中世(15世紀代)の時期ということがいえる。なお、下層には古代の条里制遺構や弥生・古墳時代の水田跡を予想したが、断面や遺物の様子からみて、水田が存在したとは断言できなかった。

(付 記)

1. 第3図のSD06について

図中にみられるSD06は、最近まで存続していたことが知られている。周辺の水田が工場用地として埋め立てられた時に同時にSD06も埋められた。そのため断面図ではそのような図になっている。SD06の開始については、おそらく中世の水田化にあわせてできただろうと考えている。出土遺物からでは、弥生土器~近世陶器までが混在していて、弥生時代に既にSD06が存在したとは考えていない。

松河戸遺跡や町田遺跡の条里制遺構をみていくと、時期の異なる水田でもほとんど同一場所に畦畔が築かれているのでSD06も変わることなくそこに存在したであろう。大畦畔に沿ってSD06があるのも条里制遺構との関連を無視することができない。第3図のSD06は最終段階であり、始まりは中世の条里制遺構の頃であり、それ以前にさかのぼるかどうかが十分に解明することができなかった。

2. 第1表について

報告書には、第3図・第5図・第23図という3本の基本の土層断面図が載っている。それぞれの立場からみたものであるが、層位をみてみると、統一ができていないということがあげられる。それによって対比しにくかったり、困惑してしまうという恐れが十分に考えられ、それらの困難をさけるために、第1表をのせることにした。つまり、3本の土層断面図の関連性を示し、内容の理解に役立てて頂きたい。しかし、地点が異なるため、必ずしも同一層名があるというわけではなかったため、複数層で示さなければならないということも生じてしまった。全体を通しての基本は第3図を代表して。

第2節 弥生時代の遺構

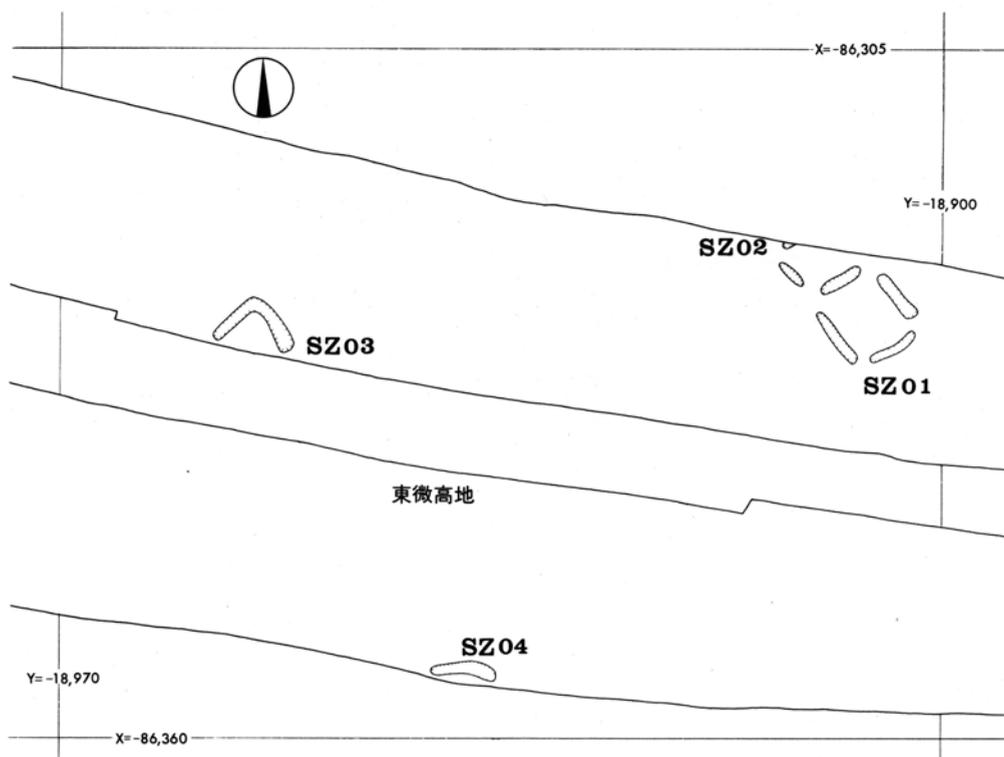
1. 方形周溝墓

東微高地上に展開する弥生時代のムラの中で、方形周溝墓を4基検出した。北から逆時計回りにSZ01～04と名付けた。

SZ01 4辺を検出し調査できた。4角はどれも途切れて陸橋部をもっている。主軸をN-32°-Wにもつ長方形で7.8×6.8mの大きさをもっている。SK01～04・ピット8で一部切られている。長辺の東側溝の長さ4.2m・幅1.0mで西側溝の長さ5.0m・幅0.9m、短辺の南側溝の長さ4.1m・幅0.8mで北側溝の長さ3.6m・幅0.9mを測り、深さは40～50cmでU字形の断面で舟底状をなしている。遺物は周溝内の埋土より小片が若干出土している。時期は高蔵期頃と考えられる。

SZ02 3辺を検出し、そのうちの1辺はSZ01と共有している。4角は途切れて陸橋部をもち、SZ01の短辺に相当する溝がSZ02では長辺という平面形態である。主軸をN-60°-Eにもつ長方形で約6.5×5.5mの大きさをもつだろう。長辺の南側溝の長さ3.6m・幅0.9mで短辺の西側溝長さ2.6m・幅0.8mを測り、深さは30cmでU字形の断面で舟底状をなしている。SZ01との先後関係などについてはわからなかった。遺物はほとんど出土しなかった。時期は高蔵期頃と考えられる。

SZ03 2辺を検出し、L字状の平面形態をしている。主軸をN-39°-Wにもちやや長方形で約6.5×6.4mの大きさをもつだろう。長辺の東側溝の長さ5.1m・幅1.1mで短辺の北側溝の長さ4.6m・幅0.9mを測り、深さ20cmの舟底状の底面をしている。遺物はほとんど出土し



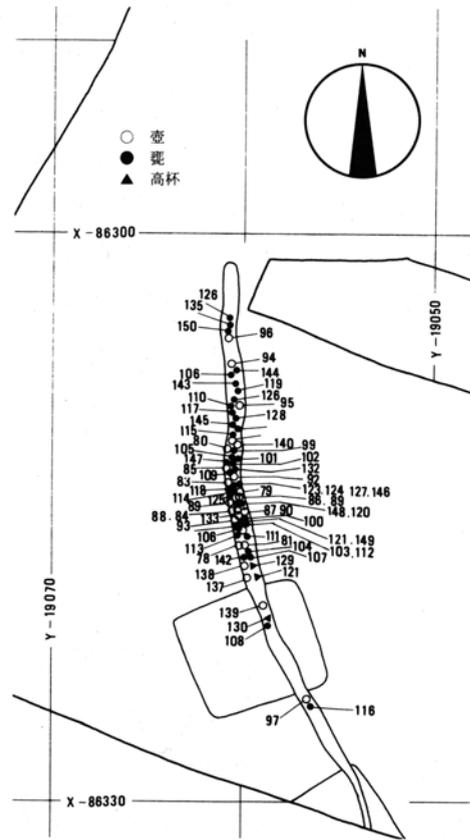
第6図 方形周溝墓配置図

なかった。時期は高蔵期～山中期頃と考えられる。

S Z 0 4 調査区の南壁付近で北側の周溝のみを検出した。溝の長さ5.2m・幅1.0mを測り、深さ20cmの舟底状をなしている。南壁を詳しくみると、2ヶ所にU字状の断面をもつ遺構を検出した。S Z 04北側溝の東・西端より若干外側に遠のいた位置であり、埋土も全て同じであるため同一方形周溝墓であるといえる。長さ約8mの大きさに4角が切れて陸橋部をもつ平面形態であろう。遺物は北側溝の底面より出土し、壺300は横位で口縁部を北西にむけた状態で出土し、表面の摩耗はみられるが周溝墓に伴う土器である。壺頸部に羽状文のみを施文する珍しい文様構成をもつものである。時期は高蔵期頃と考えられる。

2. S D 0 3 (溝)

西微高地の東側縁辺に沿って細長い溝を1条検出した。溝の幅0.8~1.0mで深さ20cm程を測り、北側底面と南側底面の比高差が約10cmあり南流する溝といえる。その溝の中から大量の土器(図版22~24)が重なり合う程出土した。図化できたのは109点で、そのうち壺22点(20%)甕44点(39%)鉢6点(6%)高杯6点(6%)脚台5点(5%)壺底部6点(6%)甕底部20点(18%)で甕の割合が最も高い。個々の出土地点(第7図)をみると高杯が下方で壺・甕は均等に出土している。出土状況では、ある方向性や法則性などみることができなく、集中して出土した状況であり廃棄した土器群ということができる。時期は高蔵期頃と考えられる。



第7図 S D 03土器出土地点

3. 竪穴住居跡

東・西両微高地上から総数24軒の竪穴住居跡が検出できた。東微高地上で14軒・西微高地上で10軒あり、完掘できたものは9軒にすぎなく他のものは部分的に調査できたり、調査できなかったものである。以下に、個々の竪穴住居跡について述べていく。

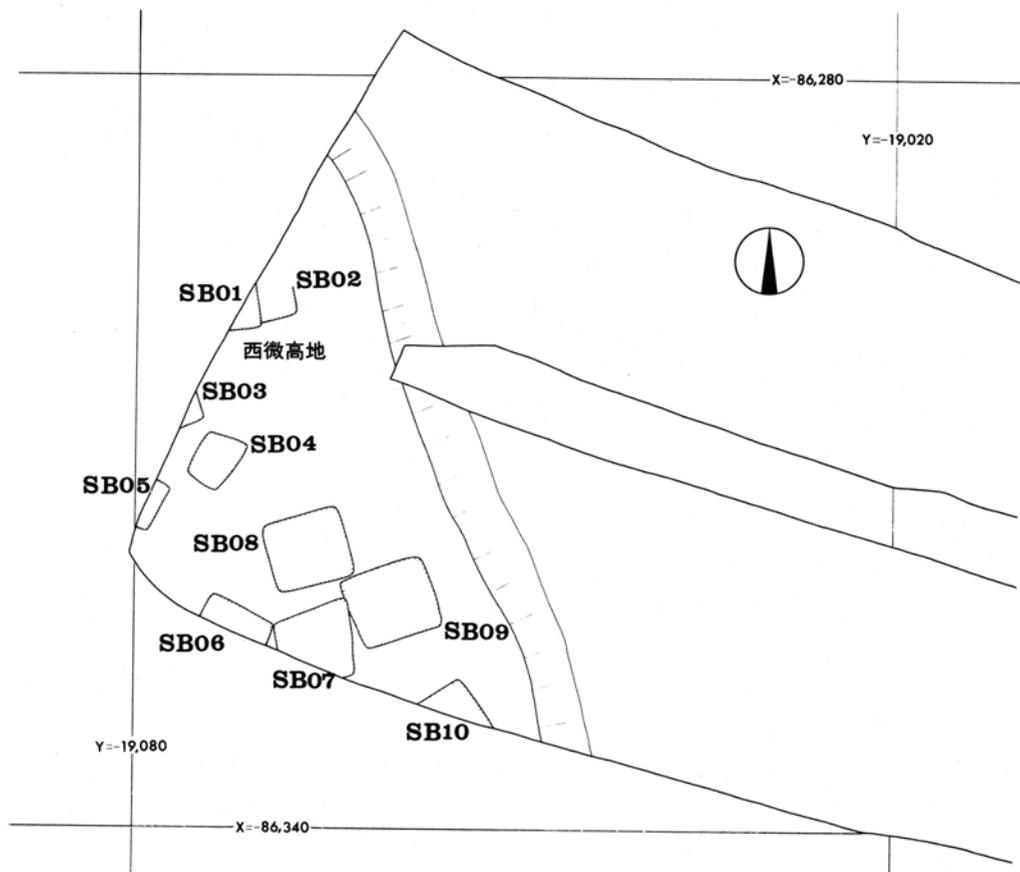
S B 0 1 方形住居と思われる南東コーナーの一部のみが残存し、S B 02と重複している。現状の東辺の長さ3.3m・南辺の長さ2.6m・深さ約10cmで壁付近に壁溝をもっていない。主軸はN-6°-Wである。住居内でピット1~3を床面で検出し、ピット3が支柱穴の可能性があり。埋土は一層のみである。遺物は小片が若干出土するが、ピット2の南西側の床面より

鉢(図版25-152)がほぼ一個分出土した。152は床面上に倒立の状態で底部が口縁部の方に落ち込んだ状態で出土した。胴部下位が膨らみ外面に刺突文をもっている。時期は欠山期頃と思われる。

SB02 方形住居かと思われる南東コーナーの一部のみが残存し、SB01に切られている。現状の東辺の長さ2.0m・南辺の長さ3.0m・深さ約10cmで壁溝をもっていない。主軸はN-14°-WでSB01とは同一方位ではない。住居内でピット1~4を床面で検出し、ピット1か2が支柱穴の可能性ある。埋土は一層のみであり、遺物(図版25-153~156)は壺153・甕154・脚台155・156が埋土内より出土した。後期の時期である。

SB03 方形住居と思われる南東のコーナーの一部が残存し、SB01・02の南方に位置する。現状の東辺の長さ2.2m・南辺の長さ1.8m・深さ10cmで幅10cm・深さ5cmの壁溝をめぐるしている。主軸はN-17°-Wである。住居内でピット1・2を床面で検出したが支柱穴ではないだろう。遺物(図版25-157~160)は南東のコーナー付近と南壁付近でまとまって出土した。台付甕158は床面に横位の状態で、器台159は少し北によった上層で、高杯160は埋土内より出土している。時期は後期である。

SB04 隅円方形と思われる住居跡全体を検出し、SB03の南東である。東側の開くやや台形状をなして、東辺の長さ4.5m・西辺の長さ3.6m・南辺の長さ2.6m・北辺の長さ3.0mで深さ5~10cmと浅いものである。主軸はN-34°-Eで幅20cm・深さ5cmの壁溝を南側部



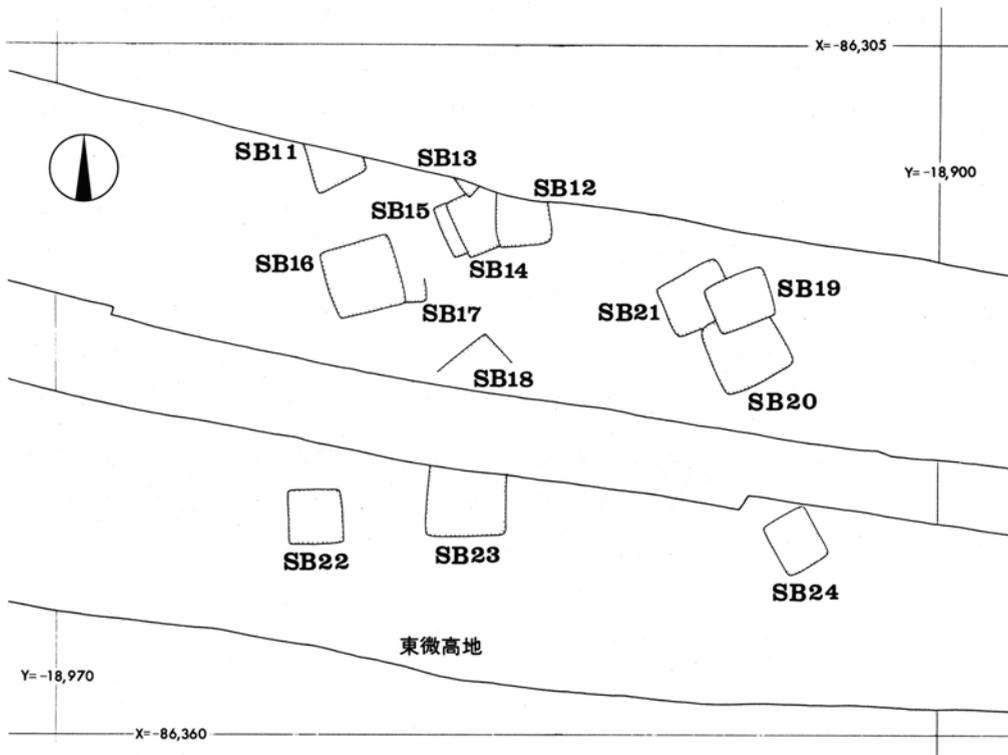
第8図 西微高地・竪穴住居跡配置図

分のみ確認できた。住居内にはピット1～7とSK01～03を床面で検出し、支柱穴は不明である。SK01・02は深さ約5cmで性格は不明であるが、SK03は深さ約25cmあり貯蔵穴とも考えられる。遺物(図版25—161～164)は若干出土し、SK02周辺で高杯161、壺164、SK01周辺で壺162、高杯163が埋土内より出土した。時期は後期であり、161は混入の可能性がある。

- SB05 方形住居かと思われる東壁部分が残存し、現状の東辺の長さ4.0mで、北辺の長さ1.2m・南辺の長さ0.8mで、深さ約15cmである。主軸はN-31°-Eで壁溝をもっていない。住居内にピット1・8を床面で検出し、支柱穴はピット1・2と考えられる。それ以外のピットの性格は不明である。遺物(図版25—165・166)が若干出土し、壺165は口縁部に凹線文を施し、甕166は口縁部に刻みをもつ。2つの土器は高蔵期頃と考えられるが住居跡の時期としてよいのか問題を含む。
- SB06 方形住居かと思われる。北壁部分が残存し、現状の北辺の長さ5.5m・東辺の長さ1.8m・西辺の長さ2.2mで深さ約10cmである。主軸は、N-63°-Wで壁溝をもたない。住居内にはピット1～5を床面で検出し、支柱穴はピット1と考えられる。それ以外のピットの性格は不明である。遺物として、小型高杯の受部(図版25—180)1点があり、古墳時代初頭頃かと思われる。北側のSK35を切り込み、南側のSK36によって一部切り込まれている。
- SB07 方形住居の大部分が検出でき、南側がせばまっている。現状の東辺の長さ6.0m・西辺の長さ2.1m・南辺の長さ0.7m・北辺の長さ5.9mで深さ20cmである。主軸はN-8°-Wで壁溝をもっていない。住居内にはピット1～5・7～9を床面で検出し、支柱穴はピット4・7・9と考えられる。それ以外のピットの性格は不明である。遺物(図版25—167～179)はかなり出土し、台付甕175はピット7の南側の床面で出土した。その他は埋土内よりであり、時期は後期であろう。SK33は、住居廃絶後つくられた土坑である。また、ピット9の南東周辺の床面上より炭化材が多く出土し、その炭化材を試料として¹⁴C年代測定を実施したところ1550±80 y.B.P. という年代が与えられた。
- SB08 西微高地のほぼ中央で完存している。東辺の長さ5.3m・西辺の長さ5.2m・南辺の長さ6.0m・北辺の長さ6.0mで深さ20cmである。主軸はN-76°-Eであり、壁溝をもっていない。住居内にはピット1～10を床面で検出し、支柱穴はピット1・5・8・10と考えられる。他のピットやSK01の性格は不明である。遺物(図版26—181～207)はかなり出土し、壺181～190、甕191～195、小型高杯198・199・201、高杯200、小型丸底壺202があり、埋土内より出土している。時期は古墳時代前期と考えられる。
- SB09 方形住居が完存した。現状の東辺の長さ5.6m、西辺の長さ5.5m、南辺の長さ6.0m、北辺の長さ6.5mで深さは約0～5cmとほとんどなく、主軸は、N-73°-Wで壁溝のみが全周している。住居内にはピット1～6を床面で検出し、支柱穴はピット3・4・6と考えられる。SK01は深さ30cmで南壁中央にあり、貯蔵穴と思われる。遺物(図版26—208～215)は壺208・209、甕210・211、高杯212・215である。209や212はSD03との関連も考えられ

る。ピット1と7の間の床面より石鏃1点(図版36—522)が出土している。

- SB10 方形住居かと思われる。北東部分を残し、現状の東辺の長さ4.8m、北辺の長さ4.0m、深さ10cmである。主軸はN-33°-Wで壁溝をもっていない。住居内にはSK01があり長さ1.1×0.8m・深さ5cmで性格は不明である。遺物(図版27—216~218)は若干出土している。時期は後期と思われる。
- SB11 方形住居の南側部分が残存し、現状の東辺の長さ1.1m、西辺の長さ4.1m、南辺の長さ4.2mで深さ5cmである。主軸はN-18°-Wで壁溝をもっていない。住居内には南西角にSK01があり、長さ1×0.4m・深さ10cmほどである。SK07とSK08は微高地にあったものでSB11を切り込んでいる。遺物はほとんど出土していない。時期は後期と考えられる。
- SB12~SB15 東微高地中央の北壁付近で住居跡が4軒重複していた。切合関係からみて、SB15→SB14→SB13・SB12であり、SB12とSB13との先後関係はわからないし、共存していたか不明である。SB13は南側の角のみ残存し、現状の東辺の長さ1.1m、西辺の長さ1.8m、深さ20cmほどである。住居内にピット1・2があり、支柱穴とは思われない。遺物は若干出土し、時期は後期と思われる。
- SB12 隅円方形住居で、北側を一部調査できなかった。南辺の長さ4.0m、東辺の長さ3.2m、西辺の長さ4.2mで、深さ40cmと深いものである。主軸はN-4°-Wで、ピット1~6とあり、支柱穴はピット1・2が考えられる。遺物(図版27—219~222)は若干出土し、甕219、高杯221がある。時期は後期後半であろう。



第9図 東微高地・堅穴住居跡配置図

- SB14 SB12と13に挟まれた方形住居であり、現状の南辺の長さ2.6m、西辺の長さ4.8m、北辺の長さ1.7m、深さ20cmである。主軸はN-23°-WでありSK01やピット1~21とピットが多数ある。ピット17と9が、支柱穴と思われる。SK01は0.9×0.8mで深さ20cmである。遺物(図版27-223~232)は、壺223・224・226、甕227~229・232、鉢231がある。225は壺か高杯の可能性があり、時期は後期であろう。
- SB15 方形住居の西側部分が残存し、現状の南辺の長さ0.9m、西辺の長さ4.3m、北辺の長さ1.1mで深さ20cmである。主軸はN-24°-Wであり、住居内にピットなどみあたらなかった。遺物(図版27-233)は埋土中より若干出土し、高杯233は後期後半と思われる。
- SB16 SB16・17の2軒の住居が重複し、SB17→SB16という先後関係がみられる。SB16は完存し、南辺の長さ5.3m、北辺の長さ5.5m、東辺の長さ5.6m、西辺の長さ5.5mで深さ20cmである。主軸は、N-16°-Wであり、住居内にはピット1~27と数多くある。SK05やピット130は東微高地上のものが切り込んでいる。支柱穴はピット14・2・21・18の4つが考えられる。住居内より若干の遺物(図版27-234~236)が出土し、甕234・235、高杯236である。時期は後期後半と思われる。
- SB17 方形住居の南東のコーナーの一部を残存し、現状の東辺の長さ1.7m、南辺の長さ1.7mで深さ5cmで、主軸はN-8°-Wであり、それ以外は不明である。
- SB18 方形住居の北側のコーナーの一部が残存し、現状の東辺の長さ3.0m、西辺の長さ5.0m、深さ10cmである。主軸はN-40°-Wで、住居内のピットは不明である。
- SB19~
SB21 東微高地の東北で3軒が重複しあっていた。SB20→SB21→SB19という先後関係があるが、調査時では十分に把握されなかった。
- SB19 方形住居で、大きさは、東辺の長さ3.8m、西辺の長さ3.7m、南辺の長さ4.5m、北辺の長さ4.8mで深さ10cmである。主軸はN-71°-Eで、住居内にはピット1・SK01・SK03がある。SK01は0.7×0.5mで深さ15cm、SK02は0.5×0.4mで深さ10cmである。SK03・SK04は東微高地にあったものが切り込んだと思われる。遺物(図版27-237~247)はかなり出土し、壺237、甕238、高杯246、器台247である。甕238はS字甕であり、上層で出土していた。時期は後期終末~古墳時代初頭であろう。
- SB20 隅円方形の住居で大きさは、東辺の長さ4.0m、西辺の長さ5.5m、南辺の長さ5.8m、北辺の長さ1.4mで深さ20cmである。主軸はN-22°-Wであり、住居内にピット1~9がある。支柱穴はピット1・2・5と考えられる。遺物(図版27-249~275)はかなり出土し、壺249~252、甕253~258、高杯259・260、器台261である。258は内面篋削りで中期後半の特徴をもつ。
- SB21 隅円方形の住居で大きさは東辺の長さ1.8m、西辺の長さ4.2m、南辺の長さ3.2m、北辺の長さ5.0mで深さ15cmである。主軸はN-64°-Eであり、住居内にはピット1~12とあり、支柱穴はピット8・10・4であろう。遺物(図版28-276~285)は多く出土し、甕276~279、高杯282~284、器台281・285である。282はピットの埋土より出土した。後期後半であろう。
- SB22 方形住居で大きさは、東辺の長さ4.0m、西辺の長さ4.2m、南辺の長さ4.2m、北辺の長

さ4.1mで深さ10cmである。主軸はN-10°-Wで、住居内はピット1~10とあり、支柱穴はピット2・3であろう。遺物は若干出土している。

S B 2 3 方形住居で北側が未調査である。現状の大きさは、東辺の長さ4.3m、西辺の長さ5.3m、南辺の長さ6.2mで深さ5cmである。主軸はN-1°-Wで、住居内にはピット1~6、SK02がある。SK01・SK03は東微高地に掘り込まれ、SB23を切り込んでいる。遺物(図版28-287)は若干出土し、甕287は外面に条痕文を施している。

S B 2 4 方形住居で大きさは、東辺の長さ4.1m、西辺の長さは4.2m、南辺の長さ3.5m、北辺の長さ3.6mで深さ10cmある。主軸はN-28°-Wであり、住居内にはピット1~20と数多くある。SK01は東微高地に掘り込まれ、SB24に切り込んでいる。遺物(図版29-288~299)はかなり出土し、壺288、鉢289などがあり、SK01より脚台292、高杯294・296・297が出土し、ピット4から小型器台299が出土している。他は埋土内出土である。北西の壁付近の床面から炭化材が出土し、¹⁴C年代測定により、1840±110 y.B.P. という実年代が与えられた。

4. 土坑 (SK)

SK01~SK74まで確認できた。いずれも不整形な平面形態であり、また大きさまで異なる。埋土より遺物の出土したものもあれば全く含まないものもあり、時代や性格について不明なところもみられる。以下主なものをとりあげていくことにする。

SK05 148×118cm、深さ24cmの楕円形の土坑である。SB16を切り込んでつくられている。底面より弥生土器(鉢302)が横位の状態で出土した。

SK33 80cm四方の方形の平面形態で深さ6cmである。SB07を切り込んでつくられ、埋土より弥生土器(甕305)が出土している。

SK35 長さ3.9mの不定形な平面形態であり、深さ10cmである。底面ではピット01~12まで検出し、遺物も小片(弥生土器甕315・壺316)が出土している。南側をSB06によって切り込まれている。規模やピットの検出からみて堅穴住居跡の可能性も考えられる。

SK36 南側を南壁によって調査できないが、130cm程の楕円形の平面形態であり、深さ14cmである。SB06を切り込んでいるが埋土の様子からみてかなり新しいものである。

SK45 SB22によって北側を切り込まれている。418×233cm、深さ10cmで不定形な平面形態である。底面は平らでピットなど何もみあたらなかった。

SK47 215cmの楕円形状の平面形態であるが、南側の南壁によって調査できなかった。深さ34cmあり、遺物は甕309・壺310が中位あたりから出土した。底面はすり鉢状になっている。

SK56 209cmの楕円形状をなすと思われるが、北側は北壁で調査できなかった。深さ4cmでかなり残っていたという現状である。遺物はほとんどなく弥生土器(鉢301)が出土した。

SK60 278cm×268cmの不定形な平面形態であり、深さ16cmである。底面は平らでピットなどはみあたらなかった。遺物は若干あり弥生土器(甕311・壺312)が出土した。

第2表 方形周溝墓計測値

方形周溝墓	方位(真北)	溝の長さ(m)				
		東溝	西溝	南溝	北溝	溝の大きさ
SZ01	N-32°-W	4.2	5.0	4.1	3.6	0.8~1.0
SZ02	N-60°-E		2.6	3.6		0.8~0.9
SZ03	N-39°-W	5.1			4.6	0.9~1.1
SZ04	N-87°-W				5.2	1.0

第3表 竪穴住居跡計測値

竪穴住居跡	方位(真北)	辺の長さ(m)				出土遺物
		東辺	西辺	南辺	北辺	
SB01	N-6°-W	3.3		2.6		図版25-152
SB02	N-14°-W	2.0		3.0		図版25-153-156
SB03	N-17°-W	2.2		1.8		図版25-157~160
SB04	N-34°-E	4.5	3.6	2.6	3.0	図版25-161~164
SB05	N-31°-E	4.0		0.8	1.2	図版25-165・166
SB06	N-63°-W	1.8	2.2		5.5	図版25-180
SB07	N-8°-W	6.0	2.1	0.7	5.9	図版25-167~179
SB08	N-76°-E	5.3	5.2	6.0	6.0	図版26-181~207
SB09	N-73°-W	5.6	5.5	6.0	6.5	図版26-208~215 図版36-519
SB10	N-33°-W	4.8			4.0	図版27-216~218
SB11	N-18°-W	1.1	4.1	4.2		若干
SB12	N-4°-W	3.2	4.2	4.0		図版27-219~222
SB13		1.1	1.8			若干
SB14	N-23°-W		4.8	2.6	1.7	図版27-223~232
SB15	N-24°-W		4.3	0.9	1.1	図版27-233
SB16	N-16°-W	5.6	5.5	5.3	5.5	図版27-234~236
SB17	N-8°-W	1.7		1.7		若干
SB18	N-40°-W	3.0	5.0			若干
SB19	N-71°-E	3.8	3.7	4.5	4.8	図版27-237~247
SB20	N-22°-W	4.0	5.5	5.8	1.4	図版27-249~275
SB21	N-64°-E	1.8	4.2	3.2	5.0	図版28-276~285
SB22	N-10°-W	4.0	4.2	4.2	4.1	若干
SB23	N-1°-W	4.3	5.3	6.2		図版28-287
SB24	N-28°-W	4.1	4.2	3.5	3.6	図版29-288~299

※ 第2・3表とも、現存する状態の数値である。

第3節 条里制遺構

15世紀～17世紀初頭の条里地割に基づく水田跡を34筆検出した。現水田下には二面の水田跡が確認され（第11図）、そのうち下層の水田跡を調査した。

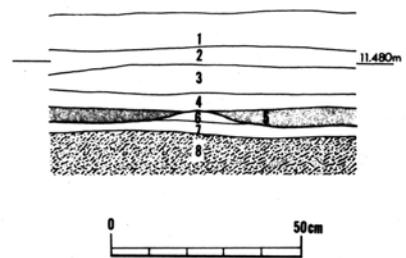
水田跡

地割および自然地形により3地区に分けられる。S D06の西肩に平行して南北方向にはしる大畦畔と西微高地に挟まれたA地区、その大畦畔と東微高地に挟まれたB地区、東微高地以東のC地区である。以下、A・B・Cの3地区に分けて説明する。なお、水田跡の畦畔は長地型の地割に基づいて築かれており、次の2種類に分けられる。「長軸方向を有する畦畔」と「その畦畔に直交して水田をさらに小さく区切る畦畔」である。前者を「基本畦畔」、後者を「区画畦畔」と仮称して以下説明をおこなう。

水田跡A地区 大畦畔と西微高地に挟まれ、地割は西微高地に大きく制約される。基本畦畔である東西畦畔は、西微高地に対して直交するように、約25度南西方向にずれて築かれている。また、基本畦畔間の距離（南北方向の長さ）に注目すると、S T02・03は約5m、S T04・05は約10m、S T06・07は約15m、S T08・09は約20mと南にいくにしたがい約5mずつ長くなっている（第4表）。このことは西微高地が南東方向に伸び、南にいくにしたがい西に水田を拡張できないことと関連する。S T02とS T03を一筆の水田と仮定するとA地区の水田一筆当たりの耕地面積は近似した数値を示し（第4表）、均等な耕地面積を確保するための配慮であったと考えられる。

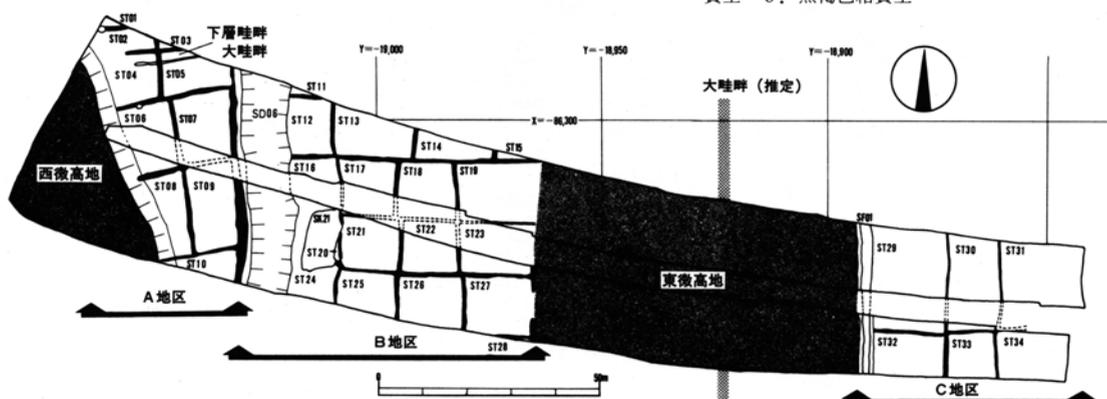
水田跡B地区 東西畦畔が基本畦畔であり、さらに南北方向の区画畦畔により、細かく区切られている。基本畦畔間の距離（南北方向の長さ）は北にいくにしたがい約1mずつ長くなる。区画畦畔は、基本的には南北方向に真っすぐ伸びるが、S T14西畦畔やS T15西畦畔などずれるところもある。一筆の水田の形態は、方形に近いもの・やや東西方向に長いものがある。

水田跡C地区 1町を109mの長さにすると東微高地上に大畦畔があったと推定され、B地区とは東微高地をへだたてて坪が異なる。基本畦畔は南北方向であり、東西畦畔である区画畦畔



第10図 水田跡C地区南壁断面図

1. 青灰色土層（現水田耕作土）
2. 明黄褐色土層
3. 暗黄褐色土層（上層水田耕作土）
4. 暗褐色灰色粘質土層
5. 淡灰色砂質シルト層
6. S T34西畦畔
7. 褐色粘質土
8. 黒褐色粘質土



第11図 条里制遺構配置図

によって区切られている。ST32北区画畦畔の長さは15.9m、ST33北区画畦畔の長さは10.2mを測る。

下層畦畔

A地区のST02・03南畦畔より2m南にずれたところで、基本畦畔と軸方向が平行して検出された。

SD06 (用水路)

大畦畔の東に隣接して南流する大溝である。溝幅9.0~10.6m、深さ1.0mを測る。水田に水を取り入れた後の排水を処理する用水路と考えられる。遺物(図版30—335~340)も若干出土した。

SF01 (農道)

東微高地の東沿に南北に伸びる。幅2.4m~1.2mを測り、北半では西側に溝1条、南半では両側に溝1条を検出した。

SK21 (大型土坑)

ST20を掘り込んで築かれている不整形土坑。南北14.0m、東西7.2m、深さ0.4mを測る。埋土は青灰色砂質土で、細片の中・近世陶器類(図版30—320~329)が出土した。昭和14年地籍図(第36図)にも類似の土坑が認められる。

小型土坑

2m未満の小型土坑で、A・B地区で5基検出された。いずれも、以下の類似した特徴をもつ。①主軸は畦畔と軸方向を同一にし、畦畔を掘削する。②耕作土と同じ淡灰色砂質シルトに粘土塊が混入し、人為的埋戻しが行われたことが想定される。③土器は細片の中世陶器が少量出土する(基本的には無遺物)。土田遺跡のもの(註)と類似した特徴も有すが墓墳というよりは、何らかの水田関連遺構と考えておきたい。

SK71 SK73に接し、ST02北畦畔を掘削して築かれた隅丸方形の土坑。長軸1.8m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。遺物(須恵器杯313・施釉陶器314)が埋土内より出土した。

SK72 ST06北畦畔を掘削して築かれた方形の土坑。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.25mを測る。遺物(近世陶器すり鉢318・均質手の灰釉糸陶器皿319)が埋土内より出土した。

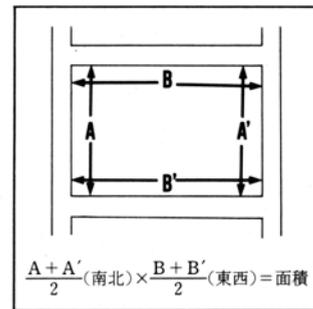
SK74 ST12北畦畔を掘削して築かれた楕円形の土坑。長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。遺物なし。

SK24 ST21西畦畔を掘削して築かれる円形の土坑。径0.9m、深さ0.1mを測る。遺物なし。

(註) 土田遺跡の土坑は「中世墓」と推定されている(赤塚次郎「方形土坑」「土田遺跡」(勸愛知県埋蔵文化財センター 1987 98~105頁)。

A 地区			
	南北 (m)	東西 (m)	面積 (㎡)
ST02	5.1	(17.2)	(87.7)
03	(5.3)	(16.0)	(84.8)
04	10.2	(17.8)	(181.6)
05	10.2	(15.3)	(156.1)
06	15.6	(10.9)	(170.0)
07	(15.2)	12.0	(182.4)
08	19.4	(10.2)	(197.9)
09	19.6	10.0	196.0
B 地区			
ST12	13.2	20.8	274.6
13	(12.9)	16.9	(218.0)
14	(13.9)	17.3	(240.5)
15	(13.5)	(10.0)	(135.0)
16	(12.4)	(20.8)	(257.9)
17	12.5	12.2	152.5
18	(12.5)	(11.2)	(140.0)
19	13.5	(19.1)	(257.9)
20	(11.7)	19.8	(231.7)
21	(11.6)	12.0	(139.2)
22	(11.9)	12.2	(145.2)
23	11.7	16.4	191.9
24	(10.8)	20.3	(219.2)
25	(10.0)	12.0	(120.0)
26	(10.0)	13.9	(139.0)
27	10.4	14.8	153.9

第4表 水田跡計測値()内は推定値



第12図 水田跡計測値算出基準

第3章 遺物

第1節 縄文土器

町田遺跡より出土した縄文土器は、資料の性格により大きく2つに分けられる。微高地およびG～J区トレンチより出土した「集合資料」と、A～S区トレンチの火山灰下層より出土した同時期の土器組成を示すと考えられる資料である。ここでは資料の性格により2つに分けて記述することとする。なお、条痕文土器もこの項に含めて記述する。

(1) 微高地およびトレンチ出土の縄文土器 (図版20—36～43)

微高地より縄文前・後期、条痕文系の土器が10点、トレンチより条痕文系の土器が2点出土した。いずれも、微高地の遺構検出時、およびG～Jトレンチの包含層(第5図第9層)より出土したもので、遺構に伴うものは確認されなかった。

36は口縁部に幅2cmほどの無文帯を残し、羽状縄文を施す。施文原体は上段LR、下段RLの縄文で結束は認められない。前期中葉の北白河下層IIb式に比定される⁽¹⁾。東微高地のSB05周辺で出土。なお、他に2点同時期と考えられる土器片が東微高地上より出土している。

37は口縁部を肥厚させ、肩部に張りのある浅鉢。口縁部と肩部の堺に沈線を施し、肩部には列点文を付す。後期後半の元住吉山II式併行と考えられる。東微高地東端で出土。

38～43は条痕文系土器群、総計8点出土した。

38～41は壺。38・39はいずれも口縁直下に指頭圧痕を施す貼り付け突帯をめぐらす。40は内傾口縁壺。口唇部は横ナデにより平坦面を形成し、外面は貝殻による横位の条痕調整を施す。41は胴部。上位は横位条痕、下位は縦位の羽状条痕を施す。貝殻による条痕。

42・43は深鉢。42は口縁部は外反し、口唇部は櫛状工具により押圧する。口縁部は横位、胴部は縦位の条痕を施す。43は外反する口縁部内面に指頭圧痕を施す。外面は右下がりの櫛状工具による調整を施した後、口縁直下に同施文具による横位の調整を施す。

38・39・43は西微高地、41・42は東微高地、40はトレンチ内より出土。38～42は水神平式、43は岩滑式に比定される⁽²⁾。他に水神平式の条痕文土器がトレンチより出土している。

(2) 火山灰下層出土の縄文土器 (図版20—44～58、図版21—59～77)

層位：G～Jトレンチ(第5図)は西微高地に接し、土層の観察により浅谷状の落ち込みが認められる。先述した条痕文土器の包含層(第5図第9層)直下に¹⁴C年代で3,770±120 y.B.P.を示す暗灰色腐植質シルト層(第5図第11層)中より、火山灰が検出されている。縄文中期の土器を包含する暗灰褐色泥炭層(第5図第19層)は、その層よりさらに3つの間層を挟んでいる。土器はその第19層の最下部、基盤となる礫層の直上よりまとまって出土した。暗灰褐色泥炭層を自然科学的に分析した結果、当時止水域であったと想定されており⁽³⁾、おそらく西微高地上にあった土器が転落し、二次堆積したものと考えられる。

分類：分類の基準は既に提示しておいた⁽⁴⁾。今回も、北屋敷系土器群(1～4類)、船元系土器群(5類)、勝坂系土器群(6類)に6分類して記述する。ただし、2類の一部は3類に変更し分類した。

1類(図版20—44～50)

口縁部に文様が集約されて施され、その特徴により、さらに次の2つに細分される。

1類a(44～47)隆帯によって区画文を作り出し、その区画文内に文様が充填されるもの。44は楕円区画の隆帯上・隆帯内に「く」の字形を呈する連続爪形文を施文する。45～47は同一個体で、半楕円区画の隆帯上・隆帯内にへら状の施文具による連続刺突文を施す。

1類b(48～50)肥厚した口縁部に文様が施されるもの。48は「く」の字形を呈する連続爪形文を、49・50は棒状の施文具による連続刺突文を口縁部に施す。

2類(図版20—51～56)

幅広の貼り付け隆帯で口縁部を肥厚させ、その直下より刺突文を施すもの。51・52は同一個体で隆帯直下より胴部に至るまで、へら状の施文具による連続刺突文を施す。53～55は波状口縁をなし、53・54は隆帯直下に棒状の施文具による刺突文を施す。

3類(図版20—57～58、図版21—59～66)

半截竹管状施文具により文様を構成するもので、その特徴により、さらに次の2つに細分される。

3類a(57～62)貼り付け隆帯を施したのもでも2類より明瞭でないもの(58・60・61)と、口縁部を肥厚させるだけのもの(57・59)。57・58は隆帯直下より、半截竹管状施文具によって縦位の平行沈線文を施す。62はその胴部で、縦位の平行沈線文の下に羽状の平行沈線文を施す。59は隆帯直下に半截竹管状施文具による文様を施す。

3類b(63～66)半截竹管状施文具や沈線のみによって文様を構成するもの。63・64は口縁部に半截竹管状施文具による横位の平行沈線文を施す。施文は浅く、沈線間に微隆帯を形成する。65は口縁部に、66は胴部に沈線文を施す。

4類(図版21—67・68)

内傾する口縁に楕円貼り付け文を施すもの。

5類(図版21—69～75)

船元系の土器群で、船元Ⅲ式に比定される⁽⁵⁾。69は隆線と半截竹管状施文具による隆帯で方形区画文を構成する。70は隆線に沿って半截竹管状施文具により連続刺突文が施される。71～73は縦位の縄文を地文とし、72・73は横位の半截竹管状施文具による沈線文が施される。74・75は内湾する口縁部に沈線文が施される。

69・70は船元Ⅲ式A類、71～73は同B類、74・75は同E類に類似した特徴を有す。

6類(図版21—76・77)

勝坂系の土器群で「勝坂3式(新相)」に比定される⁽⁶⁾。76は内湾する口縁部に把手を有し、器面は太い沈線により渦巻文や三叉文・鋸歯状文が施される。77は屈曲する底部に縄文が縦位に施され、底部下半は無文である。

(註)

- (1) 網谷克彦「北白河下層式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 1981 201~210頁
- (2) 石黒立人「〈条痕文系土器〉研究をめぐる若干の問題」『マージナル』No.5 愛知考古学談話会 1985 24~33頁
『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—資料編Ⅰ』愛知考古学談話会 1985
- (3) 森勇一「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『年報 昭和62年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988 118~137頁。
- (4) 神谷友和・後藤浩一「町田遺跡」『年報 昭和62年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988 58~59頁。
- (5) 船元系の土器およびその分類基準は「里木貝塚」の報告書に依拠した。
間壁忠彦・間壁霞子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 (財)倉敷考古館 1971。
- (6) 勝坂系の土器については、研究者により編年が異なる。ここでは、下総考古学研究会の編年(1985)に基づき、中山谷編年(1987)を参考に勝坂系の土器の編年を考えた。なお、町田遺跡の勝坂式土器は下総考古学研究会編年のV式に該当する。
高橋良治他「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8 下総考古学研究会 1985
中山真治「縄文時代中期土器群について」『中山谷遺跡』小金井市中山谷遺跡調査会 1987 214~228頁

第2節 弥生土器

(1) SD03出土土器 (図版22~24—78~151)

SD03からは、74点の弥生土器が出土した。底面および下層から出土している。

壺 口縁部の形態により9つに分類できる。

壺A (82~85) は、くの字状に外反する口縁部をもち、端部が上方にのび方形状におわる。外面に凹線文を施す。83は口縁端部に刻みをもつ。85は口頸部を欠損し体部のみ残存し、外面に2条一組で構成する直線文と波状文を交互に施し、内外面を刷毛目調整している。

壺B (91~98) は、ゆるやかに外反する口頸部はやや内傾し、方形状におわる。外面に凹線文をもつ。97・98は外面に直線文と波状文を上から順に交互に施文している。98は凹線文のあとに、さらに波状文を施し、内面は指圧の後刷毛目調整をしている。

壺D (88・89) は外反ぎみに上方にのび、端部は方形状におわる。外面に凹線文を施す。体部に円窓をもつと考えられる。

壺E₁ (80・81) は、大型で内弯状に上方にのび、端部は方形状におわる。外面に凹線文を施す。

壺E₂ (90) は、小型で内弯する口縁部で、端部は方形状におわる。外面に凹線文や羽状文を施す。

壺F (87) は、ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は上・下端が肥厚する。外面に刻みをもち、頸部に4条の篋描沈線を施す。

壺G₁ (78) は、口縁部が外反し、端部は方形状におわる。内面に刺突文を施す。

壺G₂ (86) は、外反する口縁部で、端部が外方に垂下する。外面に櫛描波状文を施し、内面に羽状文を施す。

壺H (79) は口縁部は屈曲し端部は方形状におわる。口縁部下端に刻みを施す。

甕 口縁部の形態により7つに分類できる。

甕A (99~102・106~116) は、くの字状に外反し、端部は方形状におわる。外面に縦方向後、横方向に刷毛目を施すもの(108・112・113・115・100)、横方向後縦方向の刷毛目を施すもの(109)、横

方向の叩き後縦方向の刷毛目を施すもの（106・107）がある。口縁端部外面に面的に刺突を施すもの（99・102・106・111・113）、下端に刻みを施すもの（108・110・112・114・115）、上下端に刻みを施すもの（100・107）がある。内面に粗い刷毛目を施すもの（99～106・111）がある。

甕B（103・104）は、くの字状に外反する口縁部で端部をさらに折り返し状に仕上げている。104は内面に粗い刷毛目調整を施す。

甕C（105）は、くの字状に外反する口縁部で端部をやや上方につまみ上げ方形状におわる。外面に刺突文を施す。

甕D（117・118）は、口縁部はくの字状に外上方に短く伸び、端部は丸くおわる。外面に刺突文を施す。

甕E（119・120）は、くの字状に外反する口縁部は屈曲して上方にのび、方形状におわる。外面に刺突を施す。

甕F（121）は、くの字状の口縁部でゆるやかな屈曲部をもつ。

甕G（124）は、外反する口縁部で端部は方形状におわる。外面に条痕文を施す。

鉢 鉢は、口縁部の形態により2つに分けられる。

鉢A（123・125～127）は、口縁部は外上方にまっすぐのび、内面に稜をもち端部は方形状におわる。127は内面に板状具調整を施す。

鉢B（128）は口縁部はくの字状に短くのび、端部は方形状におわる。外面に刷毛目調整を施す。

高杯 高杯（129～131）は、受部口縁部から横に水平にのびるツバをもち、方形状におわる。脚部はゆるやかに外反し、端部上下端は肥厚する。底部は円盤充填を施す。外面に刷毛目を施し、内面に篋磨きをするもの（130）や刷毛目調整を施すもの（131）がある。

底部・脚台部 脚台部（132～135）、壺底部（136～141）、甕底部（142～151）と多くあり、口縁部との組みあわせはよくわからない。132～134は甕の脚台部と思われる。136～139は小型の壺の底部で、140・141は大型の壺底部と思われる。150・151は、外面に条痕文を施すもので、150は布目圧痕が裏にある。

SD03より出土した土器で実測できた個数は107個（第5表）である。口縁部では壺と甕がほぼ同数あり、鉢や高杯がかなり少ない。ほぼ同一時期の所産であり、高蔵期の時期の一括資料と考えられる。外面に刺突を施す甕Eや口縁部の屈曲する甕Fは、どちらかという新しい様相が汲み取れて、周辺には竪穴住居跡が多くあり、それらからの混入という可能性が強い。甕Gの条痕文土器（124・150・151）はこの頃まで残存していたのであろう。

第5表 SD03出土土器個体数

分類	個数(点)	計(107点)	
壺	A	5	22
	B	8	
	C	2	
	D ₁	2	
	D ₂	1	
	E	1	
	F ₁	1	
	F ₂	1	
甕	G	1	26
	A	26	
	B	11	
	C	1	
	D	2	
	E	2	
	F	1	
条痕	1		
鉢	A	5	6
	B	1	
高杯	4	4	
脚台	5	5	
底部	壺	6	26
	甕	16	
	小型	2	
	条痕	2	

(2) 竪穴住居跡出土土器 (図版25～29—152～299)

- S B 0 1 鉢 (152) が床面直上より倒立の状態出土した。口縁部はやや内弯ぎみで方形状におわる。外面を刷毛目調整し、内面を平滑に仕上げている。体部上位に刺突文を施す。口縁部は磨滅が著しい。時期は弥生時代後期と考えられる。
- S B 0 2 壺 (153)、甕 (154)、脚台部 (155・156) が埋土内より出土した。153は外上方にひろがり、口縁部端部は方形状におわる。155は脚端部が尖りぎみにおわり、小型の土器の脚台部であろう。156は脚端部は尖りぎみにおわり、刷毛目調整を施し、甕の脚台部である。時期は弥生時代後期と考えられる。
- S B 0 3 甕 (157・158)、器台 (159)、高杯 (169) が出土した。157・158は南壁付近の床面で横位の状態で出土し、同一個体と思われる。口縁部に刻みをもち、外面を刷毛目調整を施し、脚端部が丸くおわる脚台部をもつ。159は器台のくびれ部であり、外面に櫛描文を2帯施している。時期は弥生時代後期と考えられる。
- S B 0 4 壺 (162)、高杯 (161・163)、底部 (164) が埋土より出土した。163は内外面を篋磨きで仕上げ、円孔を三方にもつ。164は平底で壺の底部と思われる。161はツバをもつ高杯で住居跡内に混入したとも考えられる。時期は弥生時代後期と考えられる。
- S B 0 5 壺 (165)、甕 (166) が出土し、165はピット5の埋土より出土した。165は外面に凹線文をもつ壺である。166は端部は方形状で下端に刻みをもつ甕Aである。住居跡の東壁部分からのみの若干の遺物の出土ではあるが、時期は弥生時代中期後半の可能性が考えられる。
- S B 0 6 器台 (180) のみ埋土より出土した。外上方にのびる口縁部で端部は尖りぎみにおわる。小型器台の受部の可能性が考えられる。
- S B 0 7 甕 (169～171)、高杯 (176～179)、底部 (168・172)、脚台 (173・174・175) が出土する。168・171・175・176・178は床面上より出土した。169は端部が方形状におわり、刺突文を施し、内面は刷毛目調整する。176は杯部底部であり、脚部は外反すると思われ、外面に2条の沈線を施している。178は外面に櫛描文と刺突文を交互に施している。173～175は甕の脚台部で、168・172は壺の底部であろう。時期は弥生時代後期と考えられる。
- S B 0 8 壺 (181～190・202)、甕 (191～195)、高杯 (198・200・201)、器台 (199)、底部 (196・197)、脚台 (203～207) が出土した。壺181は内面に羽状文を施し、183・184は口縁部が垂下し、内面に羽状文を施す。187は外方にひろく口縁部で端部が尖る。内外面に刷毛目調整をし、外面に櫛描文を施す。191・192は端部は方形状におわり、内面に刷毛目調整を施す。193・194は口縁部がS字状で頸部に工具による頸部調整をしている。198・201は小型器台の受部と思われる。202は頸部のみであるが、小型丸底壺と考えられる。203はくの字口縁の甕の脚台部であり、204～207はS字甕の脚台部である。193・194・198・201・202・204～207をみると古墳時代初頭という時期が考えられる。
- S B 0 9 壺 (208・209)、甕 (210・211)、高杯 (212・215)、底部 (213・214) がある。209は外面に凹線文を施し、内面に刺突文と扇形文を施す。210は口縁部上端を上方につまみ上げ方形状におわる。外面に刷毛目調整を施し、波状文するが磨滅のため全体はよくわからない。213・

- 214は壺の平底の底部である。210・212はS D03からの混入の可能性も考えられる。
- S B 1 0 甕(216)、高杯(218)、底部(217)が埋土より出土している。217は甕の平底と思われる。
- S B 1 2 甕(219)、高杯(221)、脚台(220)、底部(222)が埋土より出土した。219は内外面を刷毛目調整し、端部は丸くおわる。220は甕の脚台部で端部は尖りぎみにおわる。222は壺の平底である。
- S B 1 4 壺(223~226)、甕(227~229・232)、鉢(231)、脚台(230)がある。224は広口の壺で外面に凹線を施す。226は内弯する口縁部で端部が外反し、尖りぎみにおわる。外面を篋磨きし、一条の沈線を施す。227は端部は方形状におわり外面に刻みをもつ。231は口縁端部が内上方にのび方形状におわる。胴部下位がふくらんでいる。232は厚手で雑な仕上げで内面に粘土紐の接合が明瞭に残る。230はミニチュア土器であろう。225は壺としたが、高杯や器台の可能性も考えられる。
- S B 1 5 高杯(233)が埋土内より出土し、口縁部は外反し方形状におわる。内外面をていねいに篋磨きをし、丁寧な仕上げである。
- S B 1 6 甕(234)、脚台(235)、高杯(236)が埋土より出土し、いずれも磨滅している。
- S B 1 9 甕(237・238)、底部(239~241)、脚台(242~246)、器台(247)が埋土内より出土した。237はくの字状の口縁部で端部は上方につまみ上げておわる。238はS字状の口縁部で外面に工具による頸部調整をし、内面に粗い刷毛目を施す。239~241は壺の平底の底部で、242~245はくの字状口縁の甕の脚台部である。247は器台のくびれ部である。
- S B 1 8 底部(248)が埋土より出土し、上げ底の底部で壺のものと思われる。
- S B 2 0 壺(249~252)、甕(253~258)、高杯(259~260・272~275)、器台(261)、底部(262~265)、脚台部(266~271)が埋土より出土した。250は外上方にのびる口縁部で端部は丸くおわる。252は頸部に貼り付け突帯をもつ。253は口縁部が屈曲し受け口状をなす。256はくの字状の口縁部で外面に刺突文を施す。257は小型で鉢かもしれない。258はくの字状に外反する口縁部で方形状におわる。内外面を刷毛目調整し、内面下半を篋削りを施す。高杯259は椀状の杯部で外面に接合痕を残す。あるいは高杯でなくて椀か杯かもしれない。260は外上方にのびる口縁部で端部は尖りぎみにおわる。小型器台の可能性が考えられる。261は受部は浅く、口縁端部は方形状におわる。脚部は内弯ぎみに外方にのびる。262~265は平底で壺の底部と思われる。266・268はくの字状口縁の脚台部である。269・270は甕の脚台部であろう。267はミニチュア土器の脚台部であり、271はS字甕の底部である。
- S B 2 1 甕(276~279)、高杯(280・282~284)、器台(281・285)、脚台部(286)が出土した。278・279は小型で内外面を刷毛目調整し、278は内面に接合痕が残り板状具調整を施している。282・283は口径が大きく、浅い杯部で端部は丸くおわる。284は杯部が深く、脚部は外下方にのび端部は丸くおわる。外面を篋磨きし、内面を板状具調整をしている。286はくの字状口縁の甕の脚台部であろう。
- S B 2 3 底部(287)が出土し、外面に条痕文を施す。混入の可能性もある。
- S B 2 4 壺(288)、甕(289)、高杯(294~298)、器台(299)、脚台部(292・293)、底部(290・

291) が埋土より出土した。288は小型でくの字に外反する口縁部で内外面を丁寧に篋磨きしている。289は口縁端部が内傾し、方形状におわる。鉢かもしれない。294は外面に櫛描文を施している。299は脚部だけが残り、円孔はない。小型器台の可能性もある。292・293はくの字状口縁の甕の脚台部である。

第3節 SK・ピット出土の遺物 (図版29・30—301~350)

50点の遺物が図化できた。弥生土器 (301~306・309~312・315・316・334~338・342・343)、土師器 (341)、須恵器 (313・317・326・339・340・344・346~350)、灰釉陶器 (323)、灰釉系陶器 (307・308・319~322・325・330・332・345)、中世陶器 (333)、近世陶器 (314・318・324・327~329) である。

弥生土器は、甕 (301・302・305・306・309・311・315)、高杯 (335・336)、脚台 (303・342)、底部 (304・310・312・316・337)、有孔土器 (343)、小型土器 (338) がある。

301は内外面に刷毛目を施し、内面に接合痕を残している。306は内面に横方向の粗い刷毛目を施し、315は外面に刷毛目を施し、内面に板状具調整を施している。303は内外面に刷毛目を施し、342は小型土器の脚台と思われる。334は内湾する脚部で外面に篋磨きを施し、円孔は3方と思われる。304・310は外面に篋磨き内面に刷毛目を施し、316は内面まで仕上げしてある。343は底部に一孔をもち内面に刷毛目を施している。時期は甕ばかりであるが弥生時代終末頃に位置づけられる。

土師器に高杯 (341) がある。磨滅のため調整はよくわからないが脚部外面に篋磨きを施し円孔は4方にもっている。時期は古墳時代前期頃であろう。

須恵器は杯身 (339・347・348・313)、杯蓋 (317)、高杯 (340・344・349・350)、甑 (346)、円面硯 (326) である。杯身339はやや厚手で、端部は尖り気味におわる。313は高台付の杯で端部は肥厚している。317は端部が内傾しておわる。天井部が高く薄手である。344は脚部に透しをもたなく、349・350は4方に長形状の透しをもっている。340は脚端部に稜をもっている。347~350は同一遺構から出土して2個体の高杯の可能性もある。346は外面に縦方向の叩きを施し内面はなで仕上げである。326は円面硯の脚の一部と考えている。時期は339・349・344~350が6世紀で、313・317・346・326は8~9世紀と思われる。

灰釉陶器は椀 (323) がある。方形状の断面をもつ高台をもち、内面に灰釉が施釉されている。時期は10世紀後半と思われる。

灰釉系陶器は粗肌手の椀 (307・308・320・321・322・330・331・345) と皿 (332)、均質手の椀 (325) と皿 (319) がある。

粗肌手では、口縁部が直線的に外上方にのびるもの (307・330・345)、外反するも (320)、外面に稜をもつもの (321・331) があり、外反して方形状におわる皿がある。時期は12世紀後半~13世紀前半という年代が考えられる。

均質手の椀 (325) は底部であり高台にモミガラ痕をのこしている。319は薄手で端部は丸くおわる。時期は14世紀後半~15世紀初頭という年代が考えられる。

333は羽釜の口縁部で常滑焼であると思われる。羽釜の把手になるツバ状部分は貼りつけている。

近世陶器では皿 (314・324・328) 椀 (327・329)、すり鉢 (318) がある。314・324は瀬戸美濃系の

鉄絵皿であり、314は口縁部が屈曲し、324は内弯している。328は灰釉の皿である。327・329は鉄釉の碗であり、327は上下に2条の沈線と円弧を施している。318は瀬戸系の鉄釉のすり鉢で内面に条線はみられない。時期は314・324は17世紀で、318・327・328・329は19世紀という年代が考えられる。

第4節 水田跡出土の遺物（図版31～37—351～579）

調査区の各水田からコンテナ約70箱分の遺物が出土した。出土状況にかたよった傾向はなくどこも似た様子である。最も多く出土したものは弥生土器で、次いで灰釉系陶器・須恵器であり、灰釉陶器は若干であった。それらの遺物に混じって陶丸・土錘・瓦・緑釉陶器・石製品が出土し、特に埴輪片が約500点も出土したことには注目したい。また、輸入陶磁器である青磁や白磁も若干出土した。

その中で比較的良好なものを選んで須恵器351～365、灰釉陶器366～370、灰釉系陶器371～410、埴輪（411～481）弥生土器482～519、石製品520～527、土錘536～543、陶丸528～535、るつぼ545、金環544、ヘラ描土器546～563、墨書土器564～570、緑釉陶器571～579を図化（含遺構検出）した。

(1) 水田跡出土の土器（図版31—351～410）

351～354は杯蓋で、篋削りは天井部付近のみである。354は天井部に列点文を施文しているし、353はつまみをもつもので高杯の蓋と思われる。355は杯身で、篋削りは底部付近のみである。356は小型の蓋で、端部が下方にのび方形状におわる。357～359は蓋のつまみ部分で、357は中が凹むもの、358・359は宝珠形をしている。360は高盤で端部が外方へのび丸くおわっている。361・362は壺の口縁部である。361は口頸部が短くて端部のみ上方につまみあげて丸くおわる。362はフラスコ形の細頸瓶で、外面に自然釉が付着している。363は甕でゆるく頸部が外反している。364は脚付壺の底部であろう。内外面をナデによる仕上げをしているが、外面には叩きの痕跡がみられる。365は底部の一部で、外面下方に叩きを施す他は内面をなで仕上げしている。それらの須恵器の時期は一樣ではなくて351～355・361・363・364は6世紀、356～359・362・365は7世紀、360は9世紀に位置づけられるだろう。

366～370は灰釉陶器である。366は口縁部のみ灰釉が施釉され、底部外面に回転糸切り痕がみられる。367は内外面に灰釉を刷毛塗りしている。368・369は内面のみ灰釉が施釉されている。370は内外面に灰釉を刷毛塗りし、高台は断面が三ヶ月形になっている。それらの灰釉陶器の時期は檜崎彰一氏編年⁽¹⁾に照合してみると、368・369は黒笹14号窯式、367・370は黒笹90号窯式、366は折戸53号窯式ということができ、10世紀後半～12世紀という年代が考えられる。

灰釉系陶器には荒肌手のもの（372～380）と均質手のもの（381～410）がある。荒肌手のものは碗（371・372）と皿（373～380）がある。碗には内弯気味の体部で端部が方形状におわるもの（371）や直線的にのび尖り気味におわるもの（372）がある。皿には高台をもち、内弯気味の口縁部で器高の高いもの（373）・低いもの（372）、高台をもたないもの（375）があり、器高が2cm未満で端部が丸くおわるもの（377・378・380）や方形状におわるもの（376・379）がある。それらの灰釉系陶器の時期は藤澤良祐氏編年⁽²⁾の第Ⅲ段階第5～第7型式で、斎藤孝正氏編年⁽³⁾の猿投窯Ⅶ期第3型式～Ⅷ期第2型式の間であり、12世紀後半～13世紀前半という年代が考えられる。

均質手の灰釉系陶器（381～410）は皿（381～399）と碗（400～410）がある。皿には底部と口縁部に稜をもつもの（394）、やや厚手で口縁部に面をもつもの（385・393）がある。薄手で器高の低いも

ので口縁部が内弯するもの(384・386~388・391・392・395・397~399)、直線的なもの(381~383・389)、薄手で器高の高いもの(390・396)がある。椀では口縁部が外方へやや屈曲しているもの(403・405)、直線的なもの(400~402・404・406)、高台をもたず底部と口縁部の稜がしっかりしているもの(407・409・410)、ゆるやかなもの(408)がある。それらの灰釉系陶器の時期は田中昭二氏編年⁽⁴⁾に照合して白瓷系Ⅷ期~白瓷系Ⅹ期の間で、14世紀後半~15世紀初頭という年代が考えられる。

(2) その他の遺物(図版36・37—520~579)

石製品 石鏃7点・砥石3点・すり石3点・石錘1点が出土した。石鏃は2つに分けることができて(520~527) 3cm以上2g未満が2点、3cm・2g以上1点である。それらの石鏃は狩猟用か武器用のいずれかと思うが、526は佐原真氏の⁽⁵⁾いう武器用という可能性が考えられる。

612は扁平で大部分を欠損している。中央付近にたて方向の凹みがみられ、砥石として使用された痕跡であろう。527は表面に研磨された面が明瞭にのこり、613も研磨された面がみられる。613は粗砥であり527は細砥である。

すり石と思われる608~610は、いずれも球形をなしている。611は平たい円形状の石で一部欠けていて石錘の可能性も考えられるものである。

陶丸 8点出土し、533以外はSTより出土した。普通の土器片の出土と同様で特に注目するような出土状況はみられなかった。径2.5cm前後で535以外は窯で焼成されたものである。535(535)は土師質の素焼きである。534・535は約 $\frac{1}{2}$ でそれ以外は完形であった。

土錘 トンネル状に中空であり、542・543以外はSTより出土した。種々の形態があり、太くて両端がすぼまるもの(537・538)、短くて太いもの(539)、細くて短いもの(540)、細くて長いもの(541~543)がある。いずれも土師質の素焼きのものであり、かなり欠損している。

金環 径3cmほどの金環(544)がM区トレンチ第8層(第5図)より出土した。鉄地の表面に塗金したものであり、断面は楕円形をしている。中は中空であり、金の部分がかかり剥落している。古墳の副葬品の一部と考えられる。

るつぼ 1点(545)がST34より出土した。口径8.8cm、器高3.6cm、器壁1.6cmと小型で厚手である。土師質の素焼きのものであり、内面や口縁部外面にノロ(炭や鉄の酸化物、炭の灰のこと)が付着していて、一度使用したということがいえる。

他にSTより鉄製品が出土しているが刀子かナイフ形かサビが多くてわかりにくく、時期については何ともいいようがない。また鉄滓などの出土はなかった。

ヘラ 合わせて19点出土し須恵器546~559・561~563・601で陶器560である。フタの天井部や描土器 底部の裏に篋で描かれていて、いずれも記号のようである。

(546~563) 「∧」は546で、「×」は547・550・553~555・557・560で、「||」は556・561、「~~△~~」は563) 563でそれら以外は「ノ」であった。古墳時代から奈良時代までの須恵器で、560は中世陶器であろう。

墨書土器 7点出土し、いずれも底部の裏側に墨でかかっている。破片として出土し、全体の文字(564～ を読むことはできない。570以外は全部がS Tより出土したものである。564・565・566が570) 荒肌手の灰釉系陶器の椀で、567・568・569が均質手の灰釉系陶器の皿・570が椀であり、S T出土の灰釉系陶器の時期とそれぞれが対応している。

緑釉陶器 41点の緑釉陶器が出土した。ほとんどが小破片であり、表面の緑釉が剝離しているもの(571～ もみられた。それらのうち器形別にみていくと、蓋(577)、瓶(607)、段皿(578・579)、579) 椀の口縁部3点、底部15点・体部18点である。体部内面に印刻文をもつものや蓋の天井部外面に印刻文をもつもの(577)がある。底部は貼付高台で、高台の高いもの(572・576)、やや高いもの(574)、低いもの(573・575)で、断面はほぼ形状をしている。緑釉陶器の素地はすべて須恵質であり、素地の色をみると灰白色のもの(575)、灰黒色のもの(574)の他は淡灰白色である。黄橙色の素地のものもあり、素地の時の焼成が酸化炎になったためであろう。釉の色は濃緑釉から淡緑釉までいろいろとあり、内外面すべてに施釉されている。

緑釉陶器が生産された窯跡は愛知県の猿投古窯跡群、鳴海地区や篠岡古窯跡群、岐阜県の住吉1号窯や北丘15号窯など若干の調査報告例が⁽⁶⁾知られている。また、今回出土の緑釉陶器は素地や施釉の様子と町田遺跡の立地とを関連させて篠岡古窯跡出土のものであろう。時期については10世紀～11世紀と考えられる。

(3) 埴輪 (図版32～34—411～481)

62A・B両区の遺構検出時や条里制遺構耕作土内より約500点の多量の埴輪片が出土した。調査区では、この埴輪が樹立していたと考えられる古墳や遺構は確認されなかったが、西側に所在が推定されている勝川大塚古墳(前方後円墳)の埴輪の可能性が強いと考えられる。円筒埴輪の破片がほとんどであるが、朝顔型埴輪・形象埴輪(盾・蓋型?)も数点含まれていた。それらのうち、口縁部23点・底部9点・形象埴輪ならびにヘラ記号をもつもの3点・それら以外の大きな破片36点の計71点を図示し、各部位ごとに形成・調整の特色をまとめていくことにする。

口縁部 (図版32—411～433)

口縁部は口唇部の形態・調整により、大きく5種類に分けられる。1類(411～418)は、口唇部形態が丸みを帯びるもので口唇部全体にヨコナデを施すもの。2類(419～425)は、口唇部端部がナデにより面取りされるもので口唇部が外反せず直立するもの。3類(426・427)は、形態・調整とも2類に近いが口唇部がやや外反するもの。口縁内面端部のヨコナデは強く明瞭である。4類(428～431)は、口唇部形態は2類に近いが口唇部端面のヨコナデが強く凹痕が明瞭なもの。口縁端部は外反形態を示す。5類(432・433)は、口唇部端面のヨコナデが強く凹線が明瞭なもの。

1類は外面調整により、タテハケが施されるもの(411～415)、タテハケが施された後ヨコハケが施されるもの(416・417)、タテハケが施された後ナデが施されるもの(418)と3種類ある。内面調整においてはバリエーションがある。1類で外面調整タテハケをもつものの内面調整は、ヨコナデのみ(411・412)、ヨコハケ(413)、タテハケ(414)、ヨコハケのちヨコナデ(415)である。タテハケ後ヨコハケを持つものは、内面調整はヨコナデ(416・417)である。外面調整タテハケ後ヨコナデをも

つものは内面調整はヨコハケである。

2類は外面調整により、タテハケのみ施されるもの(419~421)、タテハケ後ヨコハケが施されるもの(422~425)の2種類ある。内面調整は、外面調整がタテハケのみのものはヨコナデのもの(419)、ヨコハケのもの(420)が存在する。421は磨減で内面調整不明。外面調整がタテハケ後ヨコハケのもの(422)、ヨコハケのもの(423~425)が存在する。

3類の外面調整はタテハケ後ヨコハケが施されるのみである。内面調整は、ヨコハケのもの(426)、ナナメヨコハケ後ナデのもの(427)が存在する。

4類は外面調整により、タテハケのみ施されるもの(428)、タテハケ後ヨコハケが施されるもの(429・430)、ナナメタテハケのみ施されるもの(431)の3種類ある。内面調整は、外面調整にタテハケのみ施されるものは、ヨコハケ(428)をもつ。タテハケ後ヨコハケのもの(429)の内面調整は、ヨコナデのもの(429)とヨコハケのもの(430)が存在する。ナナメタテハケのもの(431)の内面調整はナナメタテハケ(431)である。

5類は外面調整にタテハケ後ヨコハケを施すもの(432)、ナナメハケ後ヨコハケを施すもの(433)の2種類ある。内面調整は、432はヨコハケ、433はナナメハケ後ヨコハケである。

基底部(図版33—434~442)

基底部は、その断面形態及び、外面端部に見られる底部調整技法により、大きく3類に分けられる。

1類(434~437)は基壁の厚みはほとんど変化なく、形態がU状を示すもので底部調整技法は認められないもの。2類(438~440)は、基壁厚みが下へ向って肉厚内傾し、底部内面端部にケズリをもち外面端部に底部調整技法は認められないもの。3類(441・442)は、基壁厚みは下へ向って肉厚内傾し、断面形態がJ形を呈し底部調整技法が認められないもの。

1類は外面調整により、タテハケのみ施されるもの(434)、タテハケ後ヨコハケが施されるもの(435~437)の2種類ある。内面調整はいずれもヨコナデであるが、437は一部ヨコハケが認められる。2類・3類は、1類同様外面調整にタテハケのみ施されるもの(440・442)、タテハケ後ヨコハケが施されるもの(438・439・441)の2種類ある。内面調整は、438はヨコナデ以前に局部的にナナメハケを施す。440は左上方へ向けてのユビナデが認められる。439・441・442はいずれもヨコナデ。

透し孔をもつもの(図版33—443~446)

透し孔の形態はいずれも円形で、穿孔の製作段階は外面二次調整⁷⁾後行われている。穿孔は外面から穿孔されたもの(443・444・446)、内面から穿孔されたもの(445)の二者がある。透し孔の径が復元できたものは445であり、径約7cmであった。443~446は、いずれも外面調整はタテハケ後ヨコハケであり、内面調整で443・444はヨコナデ、445・446はタテナデである。

胴部(タガ無・図版33—447~452)

胴部は口縁・基底部同様外面調整に、タテハケのみのもの(447~449)、タテハケ後ヨコハケのもの(450~452)の二者がある。内面調整は447はヨコナデ、448はタテナデ、449はヨタナデ後ヨコハケである。450はタテナデ、451はヨコナデ、452はヨタナデ後ヨコハケである。

胴部は(凸帯有・図版33・34—453~474)

凸帯部はその形態により大きく5つに分類される。1類(453~457)は、凸帯部の形態はM字を呈し突帯の高さに対して、その側面幅が同じもしくは短く突出度の高いもの。2類(458)は、凸帯部の

形態はM字を呈し突帯の高さに対して、その側面幅が長く突出度が低く扁平なもの。3類(459~463)は、凸帯部の形態は台形状で突出高に対して、その側面幅が短く突出度の高いもの。4類が(464・465)は、凸帯部の形態は台形状で突帯高が側面幅よりも短く扁平で、突出度が低いもの。5類(466~474)は、凸帯の形態が、不整形なもの。

朝顔形埴輪 (図版34—475~478)

475・476・478は朝顔形埴輪の肩部の破片である。477は朝顔形埴輪の口縁部下部の破片である。475~477はいずれも突帯部を持ちしかも形態が台形状で、突帯部分類の4類よりは小ぶりなものである。475・476・477は外面調整にタテハケ後ヨコハケを施し、477はタテハケのみである。内面調整は475・476・477はいずれもナデ調整され、478のみヨコハケが施されている。

ヘラ記号・形象埴輪 (図版34—479~481)

479は、ヘラ記号を有する円筒埴輪の破片である。ヘラ記号は「ハ or ×」であり、一辺約5cmと考えられる。沈線幅約1.5mm、深さ1mmを測る。外面調整はタテハケで、内面調整はヨコナデ。480は、蓋形か朝顔形の口縁突帯周辺の破片である。481は、盾形埴輪のヒレ部の一部であると考えられる。調整は、内外面をハケメ調整し、内面にはナデも一部みられる。また色調は、他の破片が青灰、淡灰、灰色を呈するものに対し、この破片のみ黄橙色を呈する。

器壁調整は、外面一次調整にタテハケ・二次調整にヨコハケを施すものと、一時調整タテハケ後二次調整のヨコハケが省略されるものの二者が存在する。また内面調整では、基本的にはヨコナデ・ヨコハケが用いられているが、各部位により、ヨコナデ・ヨコハケの他に、タテナデ・ユビナデといった調整が使い分けられているものもある。町田遺跡出土の埴輪は、その調整からみて、赤塚次郎氏の「尾張II期・尾張志向A並びB」⁽⁸⁾に相当するものと考えられる。志向Bに関しては、志向Aのヨコハケの一部省略された部位の可能性があり、一概に志向Bとすべきでないかもしれない。

尾張特有の成形技法とされる輪積み痕が逆傾し、円筒埴輪成形途中に逆転・倒立させ、その上から再び粘土紐を巻き上げていることを示す「味美パターン」が一点(436)出土した。

今回の埴輪は、色調が青灰・淡灰・灰色を呈し焼成が堅緻で無黒斑である点、そして、胎土の多くが尾張特有として認識される白色縞状の胎土を示し、尾張の窖窯焼成である。また、調整方法では、外面調整に一次調整タテハケ・二次調整ヨコハケという「尾張A志向」と二次調整ヨコハケが省略される「尾張B志向」の2者が確認されたが、「尾張C志向」⁽⁹⁾のものは確認されなかった。

底部調整では、ケズリを有するものと未調整の2者を確認したが、尾張の底部調整を特徴付けるナデを用いるものは確認できなかった。底部がわずか9点という数の少なさのため、勝川大塚古墳に底部ヨコナデ調整品が使用されなかったとは言いきれない。また、周辺に所在する洲原山古墳⁽¹⁰⁾・大須二子塚古墳⁽¹¹⁾・断夫山古墳などで出土している外面調整にタタキを施す埴輪は見られなかった。最後に、外面調整が「尾張A・B志向」の範疇でありながら、口縁部・タガの形態等が幾種ものバラエティーに富むことに注目すれば、一古窯跡からの供給によるものというより、複数の窖窯から埴輪が供給された可能性が強いと考えられる。

(4) 弥生土器 (図版35・36—482~519)

条里制遺構の耕作土や遺構検出によって出土した弥生土器は莫大な量である。それらの中で残度の良いものの一部を図化し、壺(482~495)、甕(496~500・503~510)、鉢(501・502)、高杯(511~515)、ミニチュア土器(516・517)、有孔土器(518・519)がある。

482~484は口縁部内面に扇形文や羽状文をもち、483は瘤状浮文をもっている。482・484は端部を上方につまみ上げ、483は垂下している。485は端部が尖り気味であり、486は外面に縦方向の楕描波状文をほぼ等間隔に施している。487・488は口縁部が屈曲して端部は方形状である。外面に刺突文をもち、488は頸部に楕描直線文を施している。

489~492は「パレススタイル壺」とよばれる壺の口縁部で棒状乳文(491・492)や円形浮文(489)をもっている。489・490・492は内面に羽状文を施し、489・492は外面に刷毛目、内面に篋磨きをしている。493は小型の二重口縁の壺の口縁部と思うが、高杯かもしれない。494は、小型の平底の壺であり、495は脚付壺の脚台である。

496は、頸部からゆるやかに外反し、外面に4条の凹線・刺突文・刷毛目を施し、内面は、ナデ・刷毛目を施している。497の外面は縦後横の刷毛目を施し、内面は刷毛目を施している。498は、外面に刺突文を施し、内面は刷毛目である。499は口縁部に屈曲部をもち、端部は方形状にかわる。500は口縁部に屈曲部をもち、外面に刺突文・楕描文を施す。501は口縁部内面に刷毛状具と棒状具の刺突文を施している。502は内外面すべてに刷毛目を施す。口縁部や胴部の刷毛目に差異がみられ、異なる工具でない。503・504は平底の底部で、505は脚台部である。506は平底で外面に右上がりのラセン状の叩きを施している。内面はナデである。507・508・510は、S字甕の口縁部で、509はその底部である。511は外反する高杯の口縁部で外面に2条一組の山形状文が施されている。512は高杯の口縁部が底部の内から接合し、外側にはツバ状の突出がみられる。513は細くて長い高杯の脚柱部であり、514は小型の高杯で脚裾部が外側に屈曲し、脚柱部は中実である。あるいは壺の脚かもしれない。515は上・下に2個一組で3方に円孔をもち、いずれも外から内へ穿孔している。

516・517は手捏ねによる小型の土器である。518・519は底部に一孔をもつ土器で焼成前に外より内にむけて穿孔されている。518は平底で519は丸味をもつ平底である。

それらの時期は、弥生時代中期後半に壺(482~488・495)、甕(496~497・503~505)、有孔土器(518)で、後期に壺(489~492・494)、甕(498~500・506)、鉢(501・502)、高杯(511・513・514)、有孔土器(519)で、古墳時代初頭に、壺(493・494)、甕(507~510)、高杯(512・515)、ミニチュア土器(516・517)が位置づけられる。それらの中で、506の叩きをもつ甕の底部や512の外側にツバの突出をもつ高杯は県内ではあまり類例をみない稀な土器である。

(註)

- (1) 檜崎彰一「猿投窯の編年について」(『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983)
- (2) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」(『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982)
- (3) 斎藤孝正「中世猿投窯の研究」(『名古屋大学文学部研究論集 史学34』 1988)
- (4) 田口昭二「美濃窯における白瓷と山茶碗」(『館報Ⅱ』土岐市美濃陶磁歴史館 1983)
- (5) 田辺昭三・佐原真「近畿」(『日本の考古学Ⅲ』 1966)
- (6) 斎藤孝正「猿投窯とその周辺」(『日本やきもの集成3』 1980)
- (7) 川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」の中で定義された調整概念で、突帯をつけた後の調整を二次調整としている。

- (8) 赤塚次郎「尾張としてはにわ製作」(『考古学の広場』第1号考古学フォーラム1983)
- (9) 註(2)と同じ
- (10) 赤塚次郎氏の御教示を得、春日井市教育委員会の御配慮により、実見の機会を得た。洲原山古墳出土品は外面上ではタタキを確認できなかった。内面において青海波文を有するものが数点存在し、その存在を確認した。
- (11) 赤塚次郎氏御教示、大須二子山古墳の資料は南山大学に、断夫山古墳の資料は名古屋市見晴台資料館に保管されている。

第6表 埴輪出土地点別個体数(合計 443点)

		埴 輪											
遺 構	点数	口縁部	基底部	胴部 (タガ付) 大	胴部 (タガ付) 中	胴部 (タガ付) 小	胴部 (スカシ) 大	胴部 (スカシ) 中	胴部 (スカシ) 小	タガ のみ	胴部大 (タガ、 スカシ なし)	胴部中 (タガ、 スカシ なし)	胴部小 (タガ、 スカシ なく)
ST03	1												1
ST04	24	4	1			2						17	
ST05	24			1	1							17	5
ST06	29	2		1		1		1			1	16	7
ST07	28	1		1	1							21	4
ST08	32			1		1					3	13	14
ST09	35			1		1					5	17	11
ST10	15					1					2	4	8
ST11	1												1
ST12	1			1									
ST13	14	2		1		1		1				6	3
ST17	2											2	
ST18	7					1						3	3
ST19	4			1		1						2	
ST21	5										1	1	3
ST22	2												2
ST23	2											1	1
ST25	1												1
ST26	3											1	2
ST27	3											2	1
ST30	2											1	1
ST34	4					1					1		2
SK01	1											1	
SD06	1											1	
第5図第3層	27			3		2						18	4
第5図第10層	2					1						1	
検出 I	158	8	3	7	13	10					13	60	44
検出 II	1											1	
表土	14	1		3		1					1	7	1

※ 埴輪の出土状況について

調査は62A・62B区と分割して実施し、62A区は条里制遺構の畦畔の若干上部まで重機で掘削し、62B区は重機で畦畔の検出面まで掘削したため、全体の土量の差異がみられるため、62A区の方が多く出土している。

第4章 自然科学的分析

第1節 S字状口縁台付甕の胎土分析

今回の発掘調査に関連して、土器の胎土分析（重鉱物）をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。以下はその依頼報告であるが、一部組替・変更を行い、「5・S字甕の交流について」を加筆した。その責はすべて編者にある。

(1) 試料

試料は、名古屋市周辺の各地の遺跡及び三重県松阪市^{かいなべ}粥鍋遺跡より出土のS字状口縁台付甕（S字甕と略す）計60点である。試料が出土した遺跡名、器形、表面観察結果などは第7表に示す。

(2) 分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4mm—1/8mmの粒子をテトラプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレバラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。また、これまで不透明鉱物Bとしたものは「その他」に入れ、不透明鉱物Aのみを不透明鉱物とした。

(3) 分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたがこれに満たない試料がNo.2・No.19・No.40・No.59の4点あった。しかし、いずれも粒数は100個を超えておりデータとしては他の試料と同等に扱ってもよいと考える。各試料の重鉱物組成は、第8表、第13図に示す。

(4) 考察

ア. 試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合せ及びその量比などから以下のような試料のグループ分けをおこなった。

第Iグループ (No.2・4・6・7・16・18・23・25・27・28・30・32・34・38・48・54)

・黒雲母と角閃石が優占しザクロ石を少量伴う。

第IIグループ (No.1・5・22・52)

・Iに比べ角閃石またはザクロ石の量比が多い。

第IIIグループ (No.17・20・21・47)

・ザクロ石が優占する。

第IVグループ (No.46・57)

・角閃石が優占しザクロ石をほとんど含まない。

第Vグループ (No.35・49・50・53・58・59・60)

・ザクロ石または角閃石が優占し少量のジルコンをともなう。

第VIグループ (No.36・37・39・45)

・黒雲母または角閃石が優占し少量のジルコンをともなう。

第7表 町田遺跡関連試料土器胎土観察結果

試料番号	遺跡名(所在地)	遺構	部位	時期	法量 (cm)			色調(表-裏)	表面にみられる砂粒など
					口径	底径	脚台径		
1	下流遺跡	包含層	口縁部	B	12.6			明褐灰・同	黒雲母片少量・同、白色、灰色岩片少量含む
2	(一宮市北方町)	"	口縁部	B	13.6			灰褐・明褐灰	砂粒目立たず・黒雲母片、白色、灰色岩片少量含む
3	"	"	口縁部	B	12.2			灰褐・同	砂粒目立たず
4	"	"	胴部中位					黒褐・明褐灰	白色、灰色岩片少量含む
5	"	"	胴部上位					明褐灰・同	砂粒目立たず・灰色岩片少量含む
6	"	"	底部			5.6		灰白・褐灰	白色岩片多く含む
7	元聖敷遺跡	包含層	口縁部	B	14.2			浅黄橙～にぶい橙・浅黄橙	白色、灰色岩片少量、黒雲母片少量含む
8	(一宮市丹陽町)	"	口縁部	B	15.0			灰褐～にぶい橙・褐灰	白色岩片多く含む
9	"	"	胴部中位					にぶい褐・褐灰	砂粒目立たず・白色岩片、白色粒多く含む
10	"	"	胴部上位					暗灰褐・同	白色粒・黒色珪晶少量を含む
11	"	"	脚台部	B			8.2	橙・淡赤橙	灰色、白色岩片少量、黒色珪晶少量含む
12	"	"	底部			6.4		にぶい褐・にぶい褐	白色岩片少量、黒雲母片少量含む
13	南木戸遺跡	包含層	口縁部	B	15.8			黒～灰褐・灰黄褐	黒雲母片少量含む
14	(一宮市秋葉町)	"	口縁部	B	17.4			黒・明褐灰	黒雲母片、白色岩片少量含む
15	"	"	脚台部	A			9.6	明褐灰～褐灰・にぶい赤橙～にぶい褐	黒雲母片、白色岩片少量含む、植物繊維あり
16	"	"	底部			6.0		黒・明褐灰～褐灰	黒雲母片、白色岩片少量含む
17	"	"	胴部上位					黒・にぶい黄橙	砂粒目立たず
18	"	"	胴部下位					灰黄褐・灰褐	灰色、白色岩片少量、黒雲母片少量含む
19	定納遺跡	包含層	口縁部	B	13.6			にぶい橙・同(赤み強い)	赤色粒少量、黒雲母片、白色粒少量
20	(海部郡八開村)	"	口縁部	B	14.0			明褐灰・浅黄橙～灰褐	灰色、白色岩片少量含む
21	"	"	口縁部	C	17.0			明褐灰・同	白色岩片、白色粒少量、黒雲母片少量を含む
22	"	"	底部			5.6		灰褐・同	白色岩片少量・灰色岩片少量
23	"	"	胴部上位					暗褐・明褐灰～灰褐	白色粒少量・白色岩片・黒雲母片(1～2mm)少量含む
24	松の木遺跡	12号住居	口縁部	B	15.0			灰褐・灰白	砂粒目立たず・黒雲母片、灰色岩片少量含む
25	(西春日井郡清洲町)	"	胴部上位					にぶい橙～灰褐・灰褐	白色粒少量、白色岩片少量含む
26	"	"	胴部上位					褐灰～灰褐・灰褐	黒雲母片少量を含む
27	"	"	胴部下位					灰白～浅黄橙・浅黄橙	白色岩片少量含む
28	"	"	胴部下位					褐灰～浅黄橙・褐灰	砂粒目立たず・灰～白色岩片少量、黒雲母片少量含む
29	朝日遺跡	2号溝	口縁部	A	19.8			灰白・同	白色岩片多く含む
30	(西春日井郡清洲町)	"	口縁部	B	13.6			灰褐・にぶい黄橙	白色岩片少量、黒雲母片少量・黒色珪晶少量を含む
31	"	"	脚台部			5.0		にぶい橙・灰褐～にぶい橙	白色粒・白色岩片少量・黒雲母片少量含む
32	"	"	胴部中位					にぶい黄橙・灰	黒色珪晶少量、白色岩片1個(2mm)あり
33	"	"	胴部上位					浅黄橙・橙～にぶい橙	灰色、白色岩片多く含む
34	カイナベ遺跡	6 A25Ⅲ・Ⅳ-括	口縁部	A	13.8			灰白・同	砂粒目立たず・白色岩片少量、黒雲母少量を含む
35	(松阪市川井町)	7 A21Ⅲ・Ⅳ	口縁部	A	23.4			灰褐・明褐灰	白色、灰色岩片多く含む
36	"	6 A21	口縁部	B	12.4			黒褐～浅黄橙・灰褐～褐灰	白色岩片多く含む
37	"	4 B7	口縁部		13.6			灰白・同	白色、赤色岩片多く含む
38	"	包含層	口縁部		17.4			褐灰～灰褐・褐灰	白色岩片少量・白色岩片多く含む
39	"	6 B5 Ⅳ	口縁部		15.4			にぶい橙～灰白・明褐灰	灰色岩片少量、黒雲母片少量・白色、灰色岩片少量、黒雲母片少量を含む
40	"	6 B2	口縁部		11.8			にぶい黄橙・同	灰色、白色岩片少量、黒雲母片少量を含む
41	"	4 B2 下	口縁部	B	12.6			浅黄橙・同	白色岩片少量含む・白色岩片少量、赤色岩片少量、黒雲母片少量を含む
42	"	包含層	頸部	B				浅黄橙・同	灰色、白色岩片少量、黒色珪晶少量を含む
43	"	5 A14・15排水溝	口縁部	B	15.0			褐灰・同	砂粒目立たず・白色岩片少量含む
44	"	4 B7 上	口縁部	B	13.6			明褐灰・同	白色岩片少量・雲母片少量を含む
45	"	6 A17Ⅲ・Ⅳ	口縁部		11.6			にぶい橙～灰褐・にぶい橙	白色粒少量・白色粒、白色、灰色岩片少量、黒雲母片少量を含む
46	"	7 B3Ⅲ・Ⅳ	口縁部	C	(18.0)			褐灰～にぶい橙・灰白～明褐灰	砂粒目立たず・白色岩片少量含む
47	"	SB7	口縁部	C	13.0			淡橙・明褐灰	灰色岩片少量を含む
48	"	7 B1Ⅲ・Ⅳ	口縁部	A	16.0			灰褐・同	黒雲母片少量・白色粒、白色岩片少量、黒雲母片少量を含む
49	町田遺跡	M区第4層	口縁部		13.8			灰褐・同	白色粒少量含む
50	(春日井市町田町)	第5図第6層	口縁部	宇田	15.3			にぶい褐・同	白色粒少量・白色粒多く含む
51	"	第5図第6層	脚台部	B			9.2	灰褐・同	白色、灰色岩片、白色粒少量、黒雲母片少量を含む
52	"	第5図第5層	口縁部	B	11.7			"	白色粒・灰色岩片少量、黒雲母片少量を含む
53	"	第5図第6・10層	脚台部	宇田			10.7	"	白色岩片多く含む
54	"	第5図第6・10層	口縁部	B	11.4			灰白～明褐灰・同～同	白色、灰色岩片少量、赤色粒少量、黒雲母片少量を含む
55	"	第5図第6・10層	底部		5.3			淡赤橙・同	灰色、白色岩片多く含む
56	"	第5図第6・10層	口縁部	B	12.0			灰白・同	灰色、白色岩片多く含む
57	"	第5図第6・10層	胴部上位					褐灰・同	白色岩片少量、黒雲母片少量含む
58	"	第5図第6・10層	口縁部	宇田	16.2			にぶい橙～灰褐・同～同	白色岩片(最大径3mm)多く含む
59	"	SB19	胴部上位	B				灰白・同	灰色、白色岩片(最大径7mm)多く含む
60	"	第5図第5層	口縁部	宇田	17.7			にぶい褐・明褐灰	白色粒・白色岩片多く含む

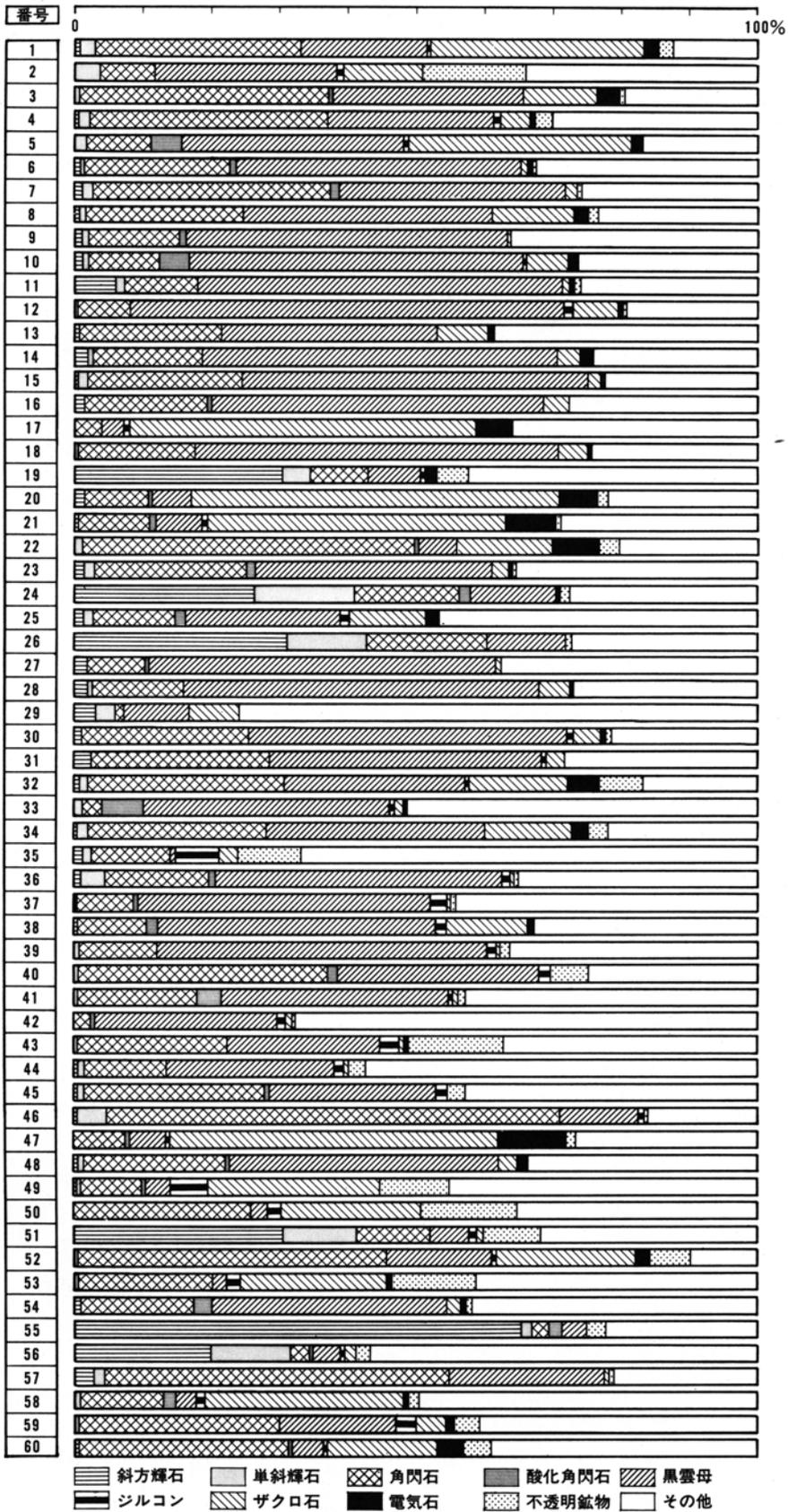
※ 岩片：粒径約0.5～2mm程度の角ばった砂粒

粒：粒径0.2mm程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

第8表 町田遺跡関連試料胎土重鉱物組成

試料番号	重 鉱 物 組 成														同定鉱物粒数	
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクロ石	リン灰石	電気石	不透明鉱物		その他
			緑色	褐色			緑色	赤褐色								
1	2	5	75				32	14		1	78	1	5	5	32	250
2		4	9				16	14		1	13			17	39	113
3		2	91		1		57	13			27		8	2	49	250
4	1	4	87				60	1		2	11		1	6	77	250
5		4	24		11		39	43		1	82		4		42	250
6	2	1	53		2		82	22			2		2	1	83	250
7	3	4	86	1	3		67	16			4			1	65	250
8	2	2	58				75	16			30		5	3	59	250
9	3	2	34		2		83	35			1	1			89	250
10	3	2	26		11		64	58		1	15		3		67	250
11	15	3	27				85	48			2		2	2	66	250
12		1	19				72	87		3	17		2	1	48	250
13	2		52				63	16			19		2		96	250
14	3	1	40				127	3			8		5		63	250
15	1	4	57				127				5		1		55	250
16	4		45		1		98	24			9				69	250
17			10				7	1		2	127		13		90	250
18		1	42	1			126	7			11		1		61	250
19	68	9	19				14	3		1			4	10	95	223
20	4		20	3	1		9	5			135		14	3	56	250
21	2		26		2		15	1		2	109		19	1	73	250
22		3	120	2	1		10	4			35		17	7	51	250
23	4	4	56		3		63	24			6		1	1	88	250
24	66	37	38		4		23	9					1	3	69	250
25	3	3	30		4		22	35		3	28		5		117	250
26	78	29	44				24	5						2	68	250
27	5		21		1		85	42			2				94	250
28	5	1	33				71	59			11		1		69	250
29	8	7	3				7	17			18	1			189	250
30	3		61				115	1		1	10		2	2	55	250
31	6		64	1			99	1		1	7	1			70	250
32	2	3	72				63	3		1	36		12	15	43	250
33		3	7		15		15	75		1	3		1		130	250
34	1	4	65				71	9			32		6	7	55	250
35	3	3	29				2		1	16	7			23	166	250
36	2	9	33	5	2		79	26		3	1			1	89	250
37		1	21		1		47	60		6	1			2	111	250
38	1		25		4		56	46		4	30		2		82	150
39		2	28				72	49		3	1			3	92	250
40		1	86		3		67	2		4				13	59	235
41		1	42	2	9		44	39		1	1			2	109	250
42			6		1		27	40		3	2			1	170	250
43		1	55				56			7	2		1	35	93	250
44	1	2	30				21	40		3	1			6	146	250
45	1	2	66		1		44	17		4				6	109	250
46	1	11	166				28			2				1	41	250
47			19		1		3	10		1	120		25	3	68	250
48	1	2	52		1		81	17			7		4		85	250
49	1	1	22		1	1	7	2		14	63			25	113	250
50			65			1	6			5	51			35	87	250
51	76	27	27				13	1		3	2			21	80	250
52		1	113				33	5		1	51		5	15	26	250
53		1	49				4	1		5	53		2	31	104	250
54	2		41		6		50	36			5		2	2	106	250
55	164	4	6		5		5	4						7	55	250
56	50	29	7		1		5	5		1	4			5	143	250
57	7	4	127				51	6			1			2	52	250
58		2	30		5		4	3		3	73		1	4	125	250
59		1	48				27	1		5	7		2	6	67	164
60	1		77		1		11			2	40		10	10	98	250

* 数値は粒数



第13図 町田遺跡関連試料胎土重鉱物組成

第VIIグループ (No.19・24・26・51・55・56)

- ・斜方輝石が優占する。このグループの組成はI～VIまでのグループの組成に比べて異質な地質的背景を示唆する。

その他

No.29 「その他」とした変質が多い。

No.33 変質物と黒雲母が多く、酸化角閃石を少量含む。

イ. 胎土の地域性について

前項のグループを構成する試料の出土した遺跡の所在地に着目したところ以下に示すような整合的な結果を見いだすことができた。

a. 一宮市下渡・元屋敷・南木戸遺跡の試料

全18点のうち15点までが第Iグループ、No.1・5の2点は第Iグループ、No.17の1点は第IIIグループにそれぞれ属する。

b. 八開村^{じょうのう}定納遺跡の試料

全5点のうちNo.20・21の2点は第IIIグループ、No.23・22・19の3点は各々第I・II・VIIグループに属する。

c. 清洲町松ノ木・朝日遺跡の試料

全10点のうち6点が第Iグループ、No.24・26の2点は第VIIグループ、No.29とNo.33の2点は単独である。

d. 松阪市粥鍋遺跡の試料

全15点のうち9点までが第VIグループ、No.34・38・48の3点は第Iグループ、No.47・No.46・No.35は各々第III・IV・Vグループに属する。

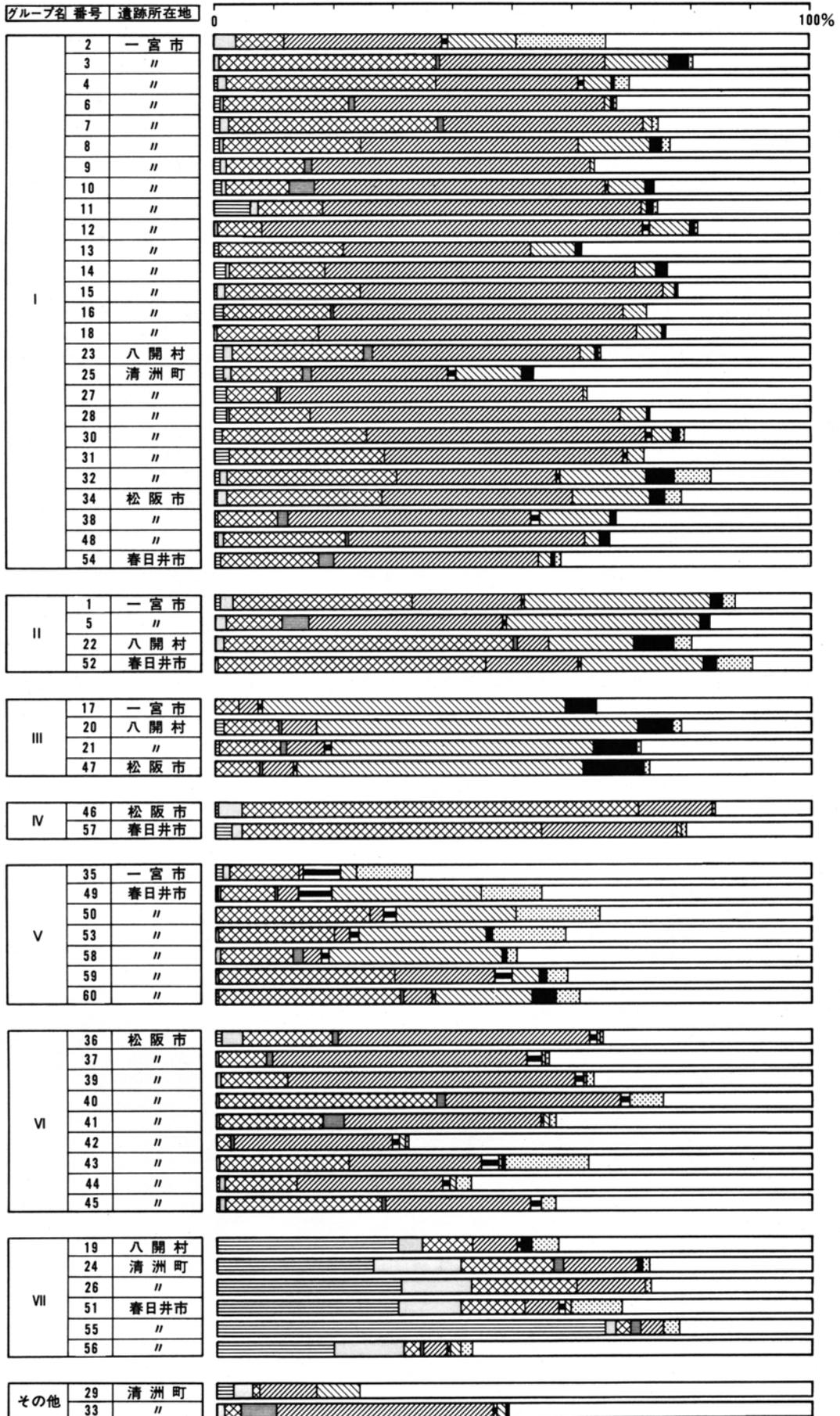
e. 春日井市町田遺跡の試料

全12点のうち6点は第Vグループ、No.51・56・55の3点は第VIIグループ、No.54・52・57は各々第I・II・IVグループに属する。

以上の結果より、第Iグループは一宮市・清洲町一帯の土器胎土の特徴としてとらえることができ、第Vグループは春日井市の土器、なかでも特に宇田形の特徴としてとらえられ、第VIグループは松阪市の土器の特徴としてとらえることができると考えられる。したがって第Iグループに属する八開村・松阪市・春日井市の試料 (No.23・34・38・48・54) は、一宮市または清洲町の土器との関係があると考えられる。また、同様に第Vグループの松阪市の試料 (No.35) は、春日井市の土器との関係を伺わせる。第II～IVグループは、グループを構成する試料が少ないので地域性は不明である。第VIIグループの試料 (No.19・24・26・51・55・56) は、他のグループの試料とは異質であることから、その地域性つまり第VIIグループのような組成を示す土器を多く産するところがわかれば、この時期の土器の流通を考えるうえで指標になると考えられる。

ウ. 今後の展開

今回の分析により胎土に地域性のある可能性がわかった。今後は、これまで同様分析例の蓄積と同時に鉱物の起源も探る必要がある。とくに第IIIグループのザクロ石と第VIIグループの両輝石は注目す



斜方輝石 単斜輝石 角閃石 酸化角閃石 黒雲母
 シルコン ザクロ石 電気石 不透明鉱物 その他

第14図 町田遺跡関連試料胎土重鉱物組成 (グループ別)

る必要がある。ザクロ石は一般に結晶片岩・片麻岩等の変成岩に多くふくまれる。愛知県では、東南部に帯状に分布する領家・三波川の両変成帯がある。土器中のザクロ石は、これらの変成岩が起源であると考えられるが第Ⅲグループのように砂の重鉱物組成の半分近くをザクロ石が占めるというのは自然堆積の砂では非常に希と考えられる。また、両輝石は日本では一般に玄武岩から安山岩質の岩石及び火山噴出物に多く含まれるが名古屋周辺ではそのような地質が広く分布する地域はない。したがって第Ⅲグループと第Ⅶグループの地域性がさらに明確になり、ザクロ石と両輝石の起源を調べることができれば名古屋周辺の土器の考古学的な考察は胎土分析によりさらに進展することが考えられる。

第9表 重鉱物組成と実体顕微鏡観察による分析結果

番号	重鉱物組成による分析								実体顕微鏡観察による分析					
	I	II	III	IV	V	VI	VII	その他	A	B	C	D	E	その他
1		○												
2	○								○					
3	○									○				
4	○											○		
5		○							○					
6	○									○				
7	○									○				
8	○									○				
9	○									○				
10	○									○				
11	○									○				
12	○									○				
13	○									○				
14	○									○				
15	○									○				
16	○									○				
17			○								○			
18	○											○		
19							○				○			
20			○								○			
21			○								○			
22		○									○			
23	○									○				
24							○					○		
25	○										○			
26							○			○				
27	○											○		
28	○											○		
29								○					○	
30	○											○		
31	○											○		
32	○											○		
33								○				○		
34	○											○		
35					○							○		
36						○				○				
37						○							○	
38	○									○		○		
39						○								
40						○								
41						○							○	
42						○							○	
43						○							○	
44						○							○	
45						○			○					
46				○										○
47			○										○	
48	○									○				
49					○							○		
50					○							○		
51							○		○					
52		○										○		
53					○							○		
54	○												○	
55							○		○					
56							○		○					
57			○							○				
58														○
59									○					
60												○		

(5) 「S字甕」の交流について

尾張平野、伊勢平野から60点のS字甕を用いて胎土分析を実施した。結果は第1・2節で述べられている。両者とも同一試料を使い分析方法のみが異なる。両方法による分析の互関性などについて述べていくことにしたい。

まず、全60点の土器を時期別にみていきたい。その編年基準を赤塚次郎氏^(註)のA～D類・宇田型という5期区分とする。A類には⑳・㉑・㉒・㉓がある。一宮・清洲地区1点・松阪地区3点である。いずれも口縁端部が外方へつまみ出し、外面に刺突文・頸部外面に櫛描文、内面に粗い刷毛目を施している。㉓はやや右下がりの刷毛目である。

B類は①～③・⑦・⑧・⑬・⑭・⑰・⑱・㉔・㉕・㉖～㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞がある。口縁端部は外上方へのび内面に担面をもっている。体部上位に櫛描文を施すもの(②・⑬・⑳・㉑)、少し下位に施すもの(①・⑧・㉖・㉚)がある。屈曲部下位に刺突文を施すもの(㉘・㉙)、頸部内面に刷毛目を施すもの(②・⑬・⑭・⑳・㉓)がある。②は指圧ナデの後左上がりの刷毛目を施している。

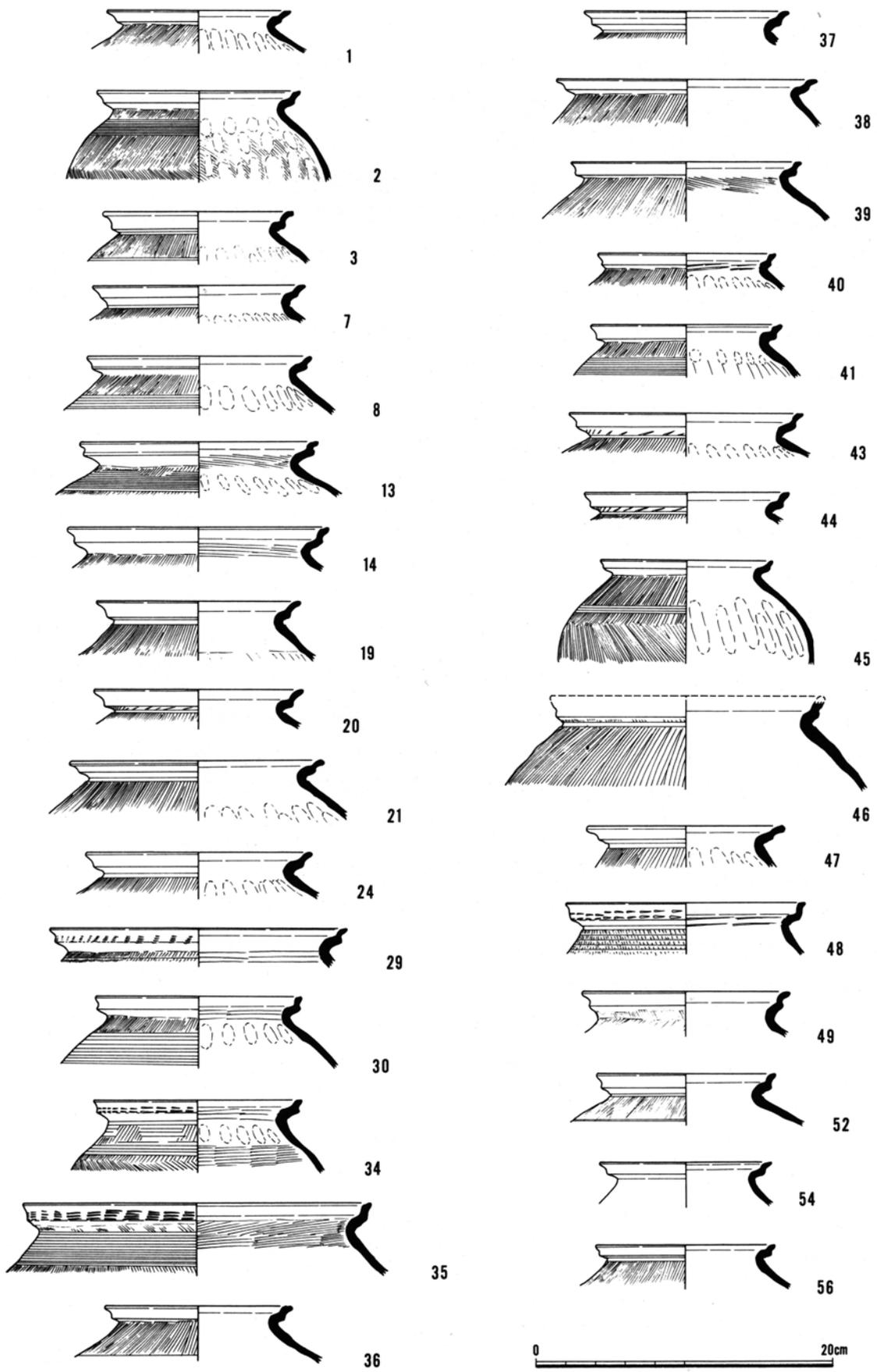
C類は㉟・㊱・㊲・㊳であり、口縁端部が外反気味に外上方へのびている。外面は刺突文が消失し、外面の櫛描文はさらに下位に施され、内面は平滑である。D類は含まれていない。

宇田型は㊴・㊵・㊶・㊷である。厚手の口縁部で途中で若干屈曲し、口縁部上・下端が膨んでいる。外面はたいへん粗い刷毛目で、一条の溝の幅・深さともA～C類とは異なる。㊵はその脚台部である。

二つの胎土分析方法の結果を比較・検討してみる。そこで、重鉱物組成による分類方法をA分類方法・実体顕微鏡による分類方法をB分類方法として呼び、両者が混同しないようにする。両者の結果を第9表に示し、両者の組合せを第10表に示してみる。I—Aの枠の②・⑪・⑬はA分類方法の第IグループとB分類方法のAグループに共有しているものを指している(以下I—A②⑪⑬と表記する)。同様の方法で、I—B、I—Dの前者が^{一宮}—^{一宮}、後者が^{一宮}—^{清洲}の組合せになる。I—Bは13点、I—Dは9点含まれている。I—B、I—Dを合わせてA類2点(㉑・㉓)であり、B類8点である。V—Aの^{春日井}—^{春日井}の組合せをみると、㉓の1点のみが含まれている。VI—Eの^{松阪}—^{松阪}の組合せをみると、6点ありそのうちB類が5点ある。それぞれの組合せの枠内をみると、地元出土土器が地元の土に強く関連していることがわかり、在地の土器という事がいえそうである。今回はB類の時期の土器を中心にして分析を実施しているが、B類の時期ではほとんど在地の粘土を使って土器製作していたといえそうである。III—C⑳・㉑は^{海部郡}—^{海部郡}であり、あるいは海部郡の在地土器ということが推測できるかもしれない。I—BとI—Dと隣接しあう地域でも差がみられるということから、さらに小地域差を読み取ることができるかもしれない。

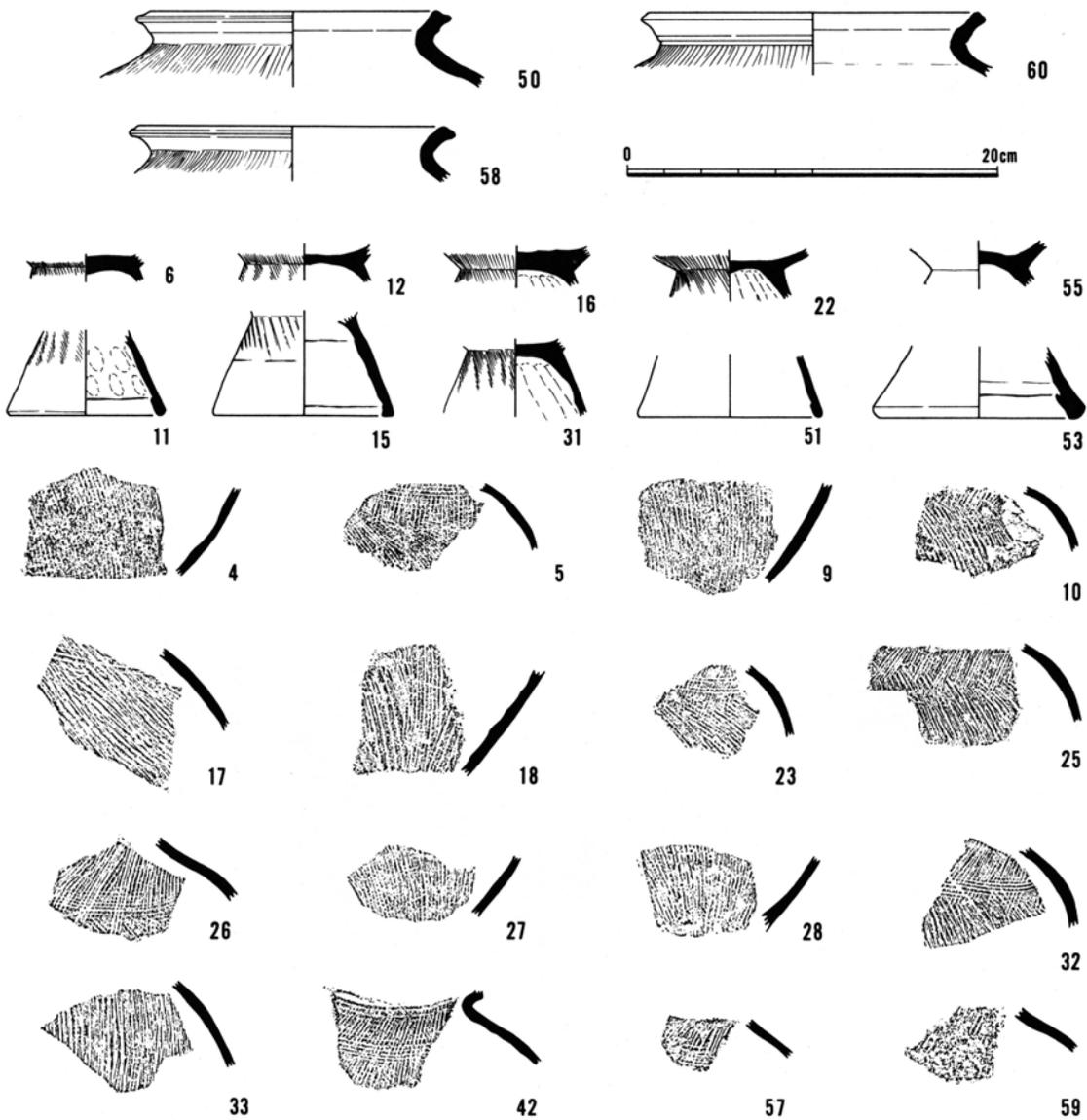
それぞれの地域別に試料をみる。一宮・清洲周辺で33点の試料があり、I—BやI—Dに19点が含まれている。A分類方法で、一宮・清洲・海部地区試料33点を見ると、19点がI—B・I—Dの枠に入り、その他の14点は第IV・第VIグループに含まれなく、在地性が高い。B分類方法でその14点をみると、A・C・Eグループに含まれて、胎土が製品が一宮・清洲地区に持ち運ばれたという結果になった。

松阪地区試料15点のうちVI—Eの枠に6点含まれ、在地のものということがいえる。それ以外の9点を見ると、A分類方法では第Iグループ3点、第Vグループ1点で、B分類方法ではB・Dグループ



第15図 S字状口縁台付堿実測図(1)

ブ6点、Aグループ1点でありB・Dグループ6点が目につく。さらに6点をみると、1-Bの枠に1点、I-Dの枠に2点があり、しかも、その3点は偶然にもA類2点(34・48) B類1点(38)ということであった。これだけの資料から判断できないけれども、S字甕の発生については十分に解明されてなくて、尾張平野部であるという傾向が強く、そういう点からみて、松阪ではS字甕の出現を一宮・清洲との交流の中から出現したのではないだろうかということが考えさせられる。そして、松阪ではA類が在地化してB・C・D・宇田型と定着・変化していくのではなかろうかと予想される。B分類方法のみの春日井地区3点を含め、尾張地区との接触・交流を示唆できよう。春日井地区12点のうちV-Aが1点のみということは興味深い結果である。A分類方法では一宮・清洲地区1点、B分類方法では一宮・清洲地区6点・松阪地区1点とバラつきが多い。さらに、宇田型の4点のうちA分類方法では春日井地区であるのに対して、B分類方法では清洲地区という結果である。春日井地区周辺は大河川の庄内川とその支流である矢田川の両水系の運搬物質によるためではなかろうか。両河



第16図 S字状口縁台付甕実測図(2)

川の合流地点より下流の清洲地区まで大きな支流はなく、粘土組成の変化が小さいだろう。逆に合流地点より上流では庄内川のみ運搬物であるということが考えられ、春日井地区の粘土を合流地点付近の粘土であるとする、両者の差異が生じてもおかしくないかもしれないといえそうである。

わずか60点の資料ではこれ以上考えることはできないが、表面の摩耗度、土器の出土状況の土壌のあり方などで若干の変化があるだろうし、第3節にある方法を用いた場合、三つの分類方法からはたしてどういふ結果になるかという今後の課題もいくつかあげられる。古墳時代前期に尾張平野部を核として西・東へ広く拡散しているS字甕の現状に対して、何らかのその歴史的解釈の一助となれば幸いである。

(註)

赤塚次郎「S字甕」覚書'85」(『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986)

赤塚次郎「S字甕について」(『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986)

第10表 重鉍物組成と実体顕微鏡観察による分析結果の関係

		重鉍物組成による分析(A分類方法)							
		I	II	III	IV	V	VI	VII	他
実 体 顕 微 鏡 観 察 に よ る 分 析 (B 分 類 方 法)	A	2 11 54	5			59	▽	51 55 56	
	B	3 6 7 8 9 10 12 13 14 15 16 ◇ ▽	1 ◇		57		▽ ▽	△	
	C	△		17 ◇ ◇				◇	
	D	4 8 △ △ △ △ △ ▽ ▽	52			▽ 49 50 53 60		△	△
	E			▽			▽ ▽ ▽ ▽ ▽ ▽		△
	他				▽	58			

試料出土地区の類別

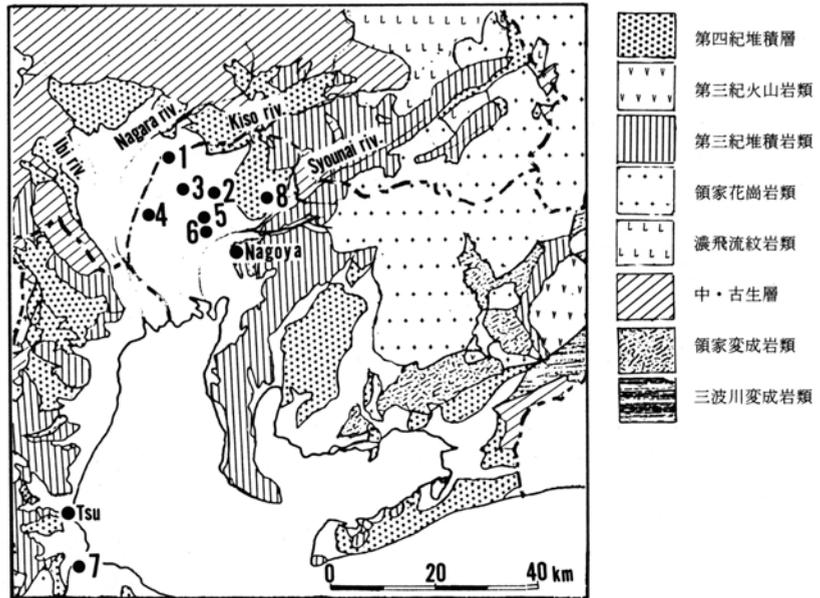
□：一宮地区 ◇：海部地区 △：清洲地区 ▽：松阪地区 ○：春日井地区

第2節 尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について

1. はじめに

春日井市町田遺跡をはじめとする尾張地区7遺跡および三重県松阪市^{かいなべ}粥鍋遺跡から出土した土器について、土器の地域色を胎土中に含まれる砂礫から明らかにすることを試みた。また、土器中の砂礫以外の混入物についての報告と、若干の考察も行った。

分析に用いた試料はS字状口縁台付甕（以下S字甕という）56点と宇田型甕4点の計60点である。これらは前節のバリノ・サーヴェイによる重鉍物分析で用いられた試料と同一のもので、試料番号も共通のものを使用した。それぞれの遺跡の位置と、その周辺の地質を第17図に示す。



2. 分析方法

第17図 各遺跡の位置とその周辺の地質（山田直利ほか：1972）を改変

洗浄・乾燥した土器片試料を実体顕微鏡を用いて30倍で表面観察し、視野中の砂礫を、粒径によってS（0.25～0.5mm）M（0.5～1mm）L（1mm以上）に分類し、砂礫の合計数が200を越える視野までのすべての砂礫を、鉍物の集合体である岩片と鉍物単体とに分け、同定を行った。（0.25mm以下のものについては同定不可能であると判断した。）このとき顕微鏡の視野が重ならないことおよび、できるだけ広い面積について観察することに十分に留意した。

3. 分析結果

岩片および鉍物の同定結果を第11表に示す。このうちどの試料にも普遍的に多く含まれる石英と長石を除き、岩片の種類と、白雲母・黒雲母・黒雲母以外の有色鉍物（以下有色鉍物という）の3種類の鉍物の個数比によって、試料のグループ分けを行った。ただし個数がほぼ同数で大きな差がない場合は、鉍物が結晶の形をよく残しているものや平均粒径が大きいものを多いと判断した。その結果、次のようにAからEの5つのグループと、どのグループにも属さないものとして分類できた。各グループの分類基準と特徴、およびそのグループに分類される試料の番号は、次の通りである（第18・19図）。

Aグループはチャート岩片を比較的多く含むグループで、同時に両雲母が比較的少ないものが多い。（試料番号2、5、11、45、51、55、56、59）

Bグループは黒雲母が白雲母および有色鉍物より多いグループで、花崗岩片を含むものの多くはこ

のグループに分類される。白雲母は比較的少ない。(試料番号1、3、6～10、12～16、22、23、26、36、39、48、57)

Cグループは白雲母が黒雲母より多いグループで、白雲母は結晶形をよく残しているものが多い。(試料番号17、19～21、25)

Dグループは有色鉱物が黒雲母より多いグループである。黒雲母の量にはばらつきがあるが、白雲母は少ないながら安定して含まれている。

(試料番号4、18、24、27、28、30～35、38、49、50、52、53、60)

Eグループは白雲母をほとんど含まないグループで、同時に黒雲母より有色鉱物をやや多く含む傾向がある。(試料番号29、37、40～44、47、54)

上のどのグループにも属さないものは、試料番号46と58で、46は有色鉱物を特徴的に多く含むもの、58は石英と長石がほとんどを占めているものである。

第11表 岩片および鉱物の同定結果

試料	石英	長石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	チャート	その他	合計
1	126	24	26	14	26	1	1	218
2	122	25	29	9	16	6	0	207
3	122	24	37	8	26	0	1	218
4	137	45	5	8	18	2	2	217
5	141	16	13	4	25	4	0	203
6	106	40	37	4	26	0	1	214
7	127	28	35	3	20	1	3	217
8	136	46	31	9	14	0	0	236
9	146	50	35	5	21	0	2	259
10	135	34	28	7	13	0	0	217
11	143	58	18	0	4	3	2	228
12	139	43	16	4	15	0	4	221
13	146	42	20	5	11	0	0	224
14	125	34	38	21	5	0	1	224
15	114	38	39	3	31	1	1	227
16	136	36	20	3	14	0	0	209
17	140	19	16	28	24	0	0	227
18	155	51	23	5	27	1	0	262
19	101	23	25	57	13	0	0	219
20	172	29	17	10	14	0	0	242
21	151	22	11	23	11	0	0	218
22	147	50	18	6	12	0	0	233
23	172	36	17	10	15	0	1	251
24	150	31	12	5	25	0	0	223
25	171	34	24	16	17	0	0	262
26	110	59	26	5	23	0	0	223
27	175	13	10	14	14	0	0	226
28	126	32	21	7	34	0	0	220
29	163	43	10	2	15	0	0	233
30	160	26	20	5	21	0	1	233
31	138	28	22	4	26	0	0	218
32	155	27	7	9	26	0	0	224
33	148	32	9	5	21	0	0	215
34	161	11	26	8	29	0	1	236
35	148	34	17	6	20	0	0	225
36	98	102	22	3	16	0	0	241
37	163	42	8	1	14	1	0	229
38	135	48	5	7	23	0	1	219
39	160	33	22	5	18	0	0	238
40	153	42	22	2	10	0	0	229
41	175	29	7	0	16	0	1	228
42	161	53	13	0	19	0	2	248
43	160	36	4	1	15	0	0	216
44	160	33	13	1	11	0	0	218
45	154	33	18	1	10	5	4	225
46	148	10	5	1	74	0	0	238
47	179	12	13	1	22	0	0	227
48	126	56	19	7	15	1	0	224
49	135	59	11	9	13	0	0	227
50	156	41	8	3	21	0	0	229
51	139	71	4	2	16	5	1	238
52	164	25	12	3	18	0	4	226
53	110	68	9	5	16	0	0	208
54	163	24	6	0	17	1	0	211
55	157	30	3	1	23	13	0	227
56	147	42	6	2	13	8	0	218
57	168	53	19	3	13	0	0	256
58	148	78	3	0	0	1	0	230
59	174	24	1	1	8	5	0	213
60	143	51	4	7	26	0	1	232

4. 考察

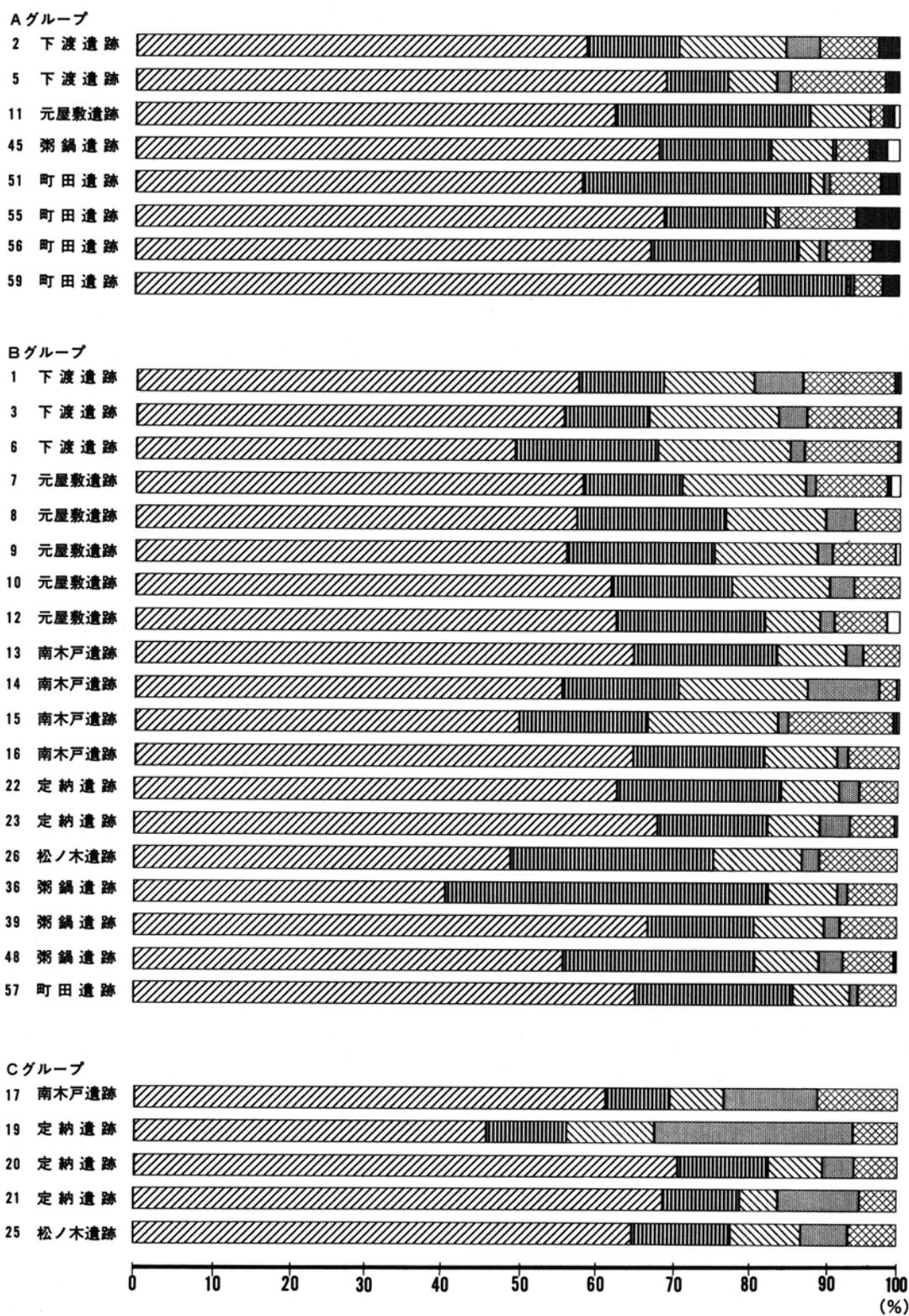
それぞれのグループの特徴と地質との関連について述べる。

(1) Aグループ

8点のうち4点を町田遺跡のものが占める。このグループはチャート岩片を比較的多く含むという特徴を持っている。これは町田遺跡の南東を流れる庄内川の流域の地質を反映していると考えられ、これが町田遺跡をはじめとする春日井市周辺地域産の土器の一つの特徴であると思われる。

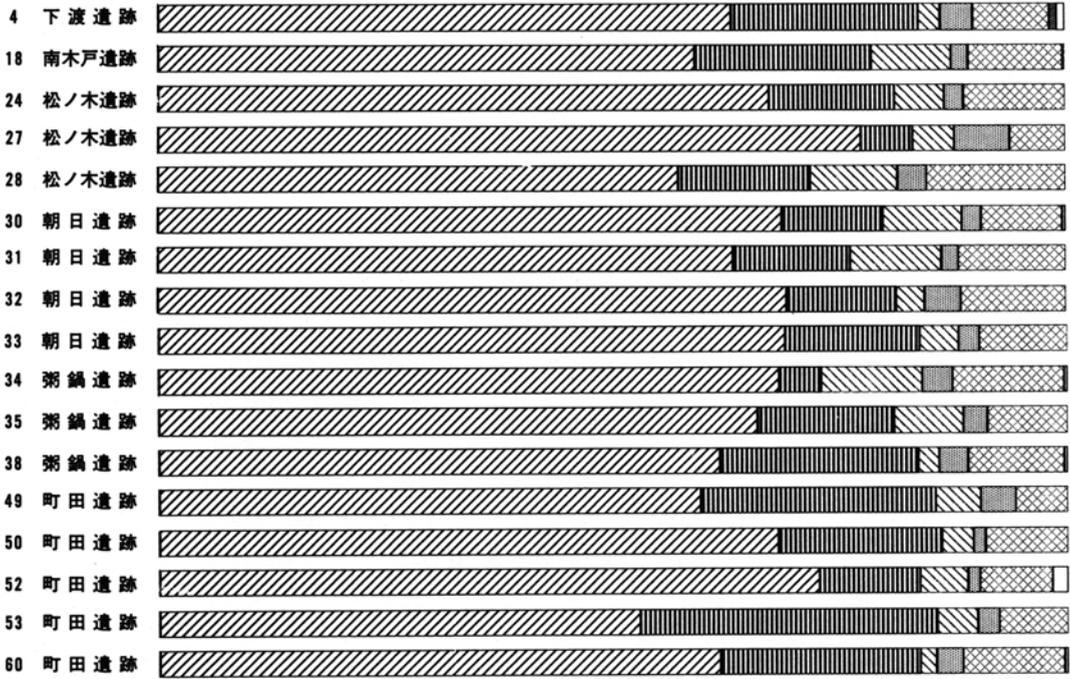
(2) Bグループ

19点のうち12点を一宮市の3遺跡のものが占める。また一宮市と同じ木曾川流域にあたる定納遺跡のものが2点含まれている。このグループの特徴からは花崗岩地帯の影響が考えられる。木曾川上流には黒雲母花崗岩が分布しており、このグループが一宮市を中心とする木曾川下流地域産の土器の特徴を示していると考えられる。



第18図 グループ別の岩片および鉞物組成(1)

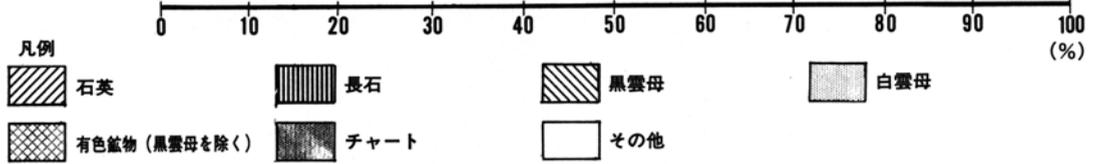
Dグループ



Eグループ



その他



第19図 グループ別の岩片および鉱物組成(2)

(3) Cグループ

5点のうち3点を定納遺跡のものが占める。このグループの特徴である白雲母を多く供給するような地質は、尾張地方周辺では揖斐川上流の伊吹山北方に分布する白雲母花崗岩か、岡崎市周辺の両雲母花崗岩が考えられる。

(4) Dグループ

17点のうち7点を清洲町の2遺跡ものものが占める。また町田遺跡のものが5点含まれる。清洲町の2遺跡は町田遺跡と同様に庄内川の影響を受ける地域に位置するが、このグループはAグループの土器とは異なり、チャート岩片は少なく、有色鉱物が多く含まれている。それは、この2遺跡が町田遺跡より下流であり、途中で合流する矢田川上流に分布する花崗閃緑岩の影響をうけているためと考えられる。ただしEグループの土器より白雲母が多く含まれるのは、この地域の花崗閃緑岩がやや優白質で、アプライト質の部分が多いことに起因するのであろう。

また宇田型甕4点のうち3点がこのグループに含まれている。宇田型甕は4点とも町田遺跡出土であるが、Aグループの土器の特徴とは異なり、清洲町の遺跡の土器に似た特徴を持っている。宇田型甕の残り1点も単独のグループに属する。このことから宇田型甕は町田遺跡出土だが、岩片および鉱物の特徴は清洲町の土器に似ており、町田遺跡より庄内川のやや下流の地域との関連がうかがわれる。

(5) Eグループ

9点のうち7点を粥鍋遺跡のものが占める。粥鍋遺跡周辺の堆積物を支配する阪内川上流には小規模な花崗岩と比較的規模の大きい花崗閃緑岩が分布している。しかし阪内川による花崗岩の侵食域は狭く、花崗閃緑岩源の堆積物が粥鍋遺跡周辺の土器を特徴付けていると考えられる。

(6) その他

試料番号46(粥鍋遺跡)に多く含まれる有色鉱物は、その立体的形状などから大半が角閃石であると思われ、他の粥鍋遺跡のものとはやや異なった特徴を持っている。角閃石は塩基性、つまり有色鉱物に富んだ深成岩類に含まれており、このような岩体は粥鍋遺跡周辺では領家花崗岩類が分布する三重県北部から奈良県北部、および愛知県三河地方の一部に分布を持っている。

試料番号58(町田遺跡)に含まれる岩片および鉱物は石英と長石がほとんどであり、地質的背景の推測は困難である。

5. まとめ

以上のことから、単独のグループを除いたそれぞれのグループの特徴は出土遺跡の周囲の地質に深く関わっており、大きく5つの地区に区分できる。それぞれを地区別にしてその特徴をまとめると次のようになる。

(1) 春日井地区(Aグループ)の傾向

庄内川上流の地質の影響を受け、チャート岩片を含んでいる。ただし宇田型甕ではDグループに分類されるものが多く、やや下流で合流する矢田川の影響を受ける地域との関連がうかがわれる。

(2) 一宮地区(Bグループ)の傾向

木曾川上流の花崗岩地帯の影響を受けており、花崗岩片や黒雲母を多く含む。

(3) 海部地区 (Cグループ) の傾向

比較的結晶形を残した白雲母を含んでいる。これは揖斐川上流の白雲母花崗岩の影響かも知れない。

(4) 清洲地区 (Dグループ) の傾向

やや優白的な花崗閃緑岩の影響を受け、有色鉱物が比較的多く、白雲母も少量含んでいる。

(5) 松阪地区 (Eグループ) の傾向

やや優黒質な花崗閃緑岩体に支配されており、白雲母をほとんど含まず有色鉱物を比較的多く含む。

6. 砂礫以外の混入物について

(1) 動物珪酸体

試料番号37 (粥鍋遺跡) にみられた。この動物珪酸体は四軸型で、この型は宇津川徹ほか (1979) によると海棲動物のものであるとされている。このことからこの土器には海成堆積物を含む胎土が用いられたと推測できる。

(2) 火山ガラス

試料番号26 (松ノ木遺跡)、55 (町田遺跡) の2試料に観察でき、特に試料番号26には多量に含まれていた。岩片および鉱物は2試料ともそれぞれ地元産の特徴を持っているが、これら2つの試料にみられた火山ガラスはどちらも偏平型であった。

(3) シャモット

試料番号5~7、9、12、18~22、24、25、27、28、31~34、37、39~43、47、52、54、55と、60試料中約半数の28試料に認められた。特に試料番号19 (定納遺跡) に多く含まれていた。シャモットは粘土の粘性を奪うと共に製品の耐火性をよくするので、S字甕の様に煮沸用の土器を薄手に仕上げられるために広く用いられていたとも推測できる。

7. 今後の課題

以上のように土器中の砂礫の特徴を遺跡上流の地質と比較検討し、それをその地区の地域色とした。出土遺跡の地区とグループ分けとが一致しない試料については、現在のところそれが土器そのものの移動によるものか不明で、より詳細な検討を待たなければならない。また今回の方法では、地区による分析点数のばらつきなど問題点も多い。より確実な分析方法の確立と、より多くのデータの収集に努めることが今後の課題である。

また砂礫以外の混入物のうち、特にシャモットは人為的に混入した混和材である可能性が高く、興味深い問題である。また火山ガラスについても供給源の火山灰の調査など研究の余地が残されている。

(森勇一・永草康次・楯真美子)

参考文献

宇津川徹・細野 衛・杉原重夫「テフラ中の動物珪酸体 "Opal Sponge Spicules" について」『ペトロジスト』23 (2) 1979 134-144.

山田直利・片田正人・坂本 亨・松田武雄・須田芳朗「20万分の1地質図幅・豊橋」1972 通産省地質調査所

第3節 町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴

1. はじめに

春日井市町田遺跡から出土した弥生土器の胎土中の砂礫を分析し、町田遺跡の土器が持つ特徴を明らかにすることを目的とした。また、時期・器種別に用いられた胎土が異なった特徴を持っているかどうかについても検討を行った。

分析に用いた試料は、町田遺跡出土の土器片のうち、5cm四方程度以上で時期や器種が判定できるものの中から選出した、弥生時代中期後半（高蔵期）の壺10点、甕11点、高杯4点、弥生時代後期後半（欠山期）の壺10点、甕10点、高杯11点の計56点である。それぞれ10点以上を目標としたが、このうち弥生中期後半の高杯が10点に満たないのは、出土点数が極端に少ないためである。

ただしこれらの試料は、その文様や技法から搬入品ではなく、すべて在地の土器であると思われる。

2. 分析の方法

胎土分析には様々な方法がある。なかでも肉眼や実体顕微鏡による表面観察、X線による化学成分の分析や鉱物分析、重鉱物分析などが広く行われており、これまでに多くの成果が報告されている。また、偏光顕微鏡による土器の観察も行われている。

ここでは同一試料について表面観察と偏光顕微鏡観察の二方法で分析を行った。これは表面観察では分析できる粒度に限界があるという欠点、偏光顕微鏡観察では観察面積が狭いという欠点があり、それらを補い合うためである。以下にそれぞれの方法について述べる。

(1) 表面観察

表面観察では実体顕微鏡または20倍単眼顕微鏡を用い、0.5mm以上の砂礫を、鉱物の集合体である岩片と鉱物単体とに分け同定するとともに、それぞれの量比を、「多い」・「普通」・「少ない」・「稀」の四段階に分類した。ただしこれらの分類は定量的ではなく観察者の判断によるもので、ここでいう「多い」とは全体の50%前後を、「普通」とは30%前後を、「少ない」とは10%前後を、「稀」とは5%未満程度を目安にした。しかし、含まれる岩片や鉱物の全体量が少ない場合、量比は問題にせず認められたもののみを「少ない」として記録した。また中でも極端に少ない場合は「稀」として記録した。

(2) 偏光顕微鏡観察

表面観察をした後、偏光顕微鏡観察のための薄片プレパラートを作製した。このとき研磨中の岩片および鉱物の抜け落ちを防ぐため、試料にエポキシ系樹脂を含浸させてからガラス板上で丁寧に研磨を行った。また土器内部の構造による岩片や鉱物のかたよりを避けるため、土器の表面に対して平行な面と垂直な面の二方向についてプレパラートを作製した。これらのプレパラート中の岩片および鉱物を偏光顕微鏡下で同定し、認められたものを記録した。ただし偏光顕微鏡下では、観察面積が限られるため量比は考慮しなかった。

3. 分析結果

二方法による同定結果とグループ分けの結果を第12表に示す。

表面観察によるグループ分けは、ほぼ普遍的に含まれる石英と長石を除いた、チャートと雲母の量比によって次のように行った。

- Iグループ……チャートと雲母がほぼ同量かチャートの方が多いもの。
- IIグループ……チャートより雲母の方が多いもの。
- IIIグループ……チャート・雲母ともほとんど含まれないもの。
- IVグループ……岩片や鉱物をほとんど含まないもの。

偏光顕微鏡観察では、観察面積が限られるため石英や長石などを除くいわゆる副成分鉱物の絶対数が少なく、はっきりとした傾向が現れなかった。そのため、おもに観察できた岩片のうち、チャート・花崗岩・濃飛流紋岩・火山岩の四種類の岩片の組合せによって次のようにグループ分けを行った。

- aグループ……チャートおよび濃飛流紋岩が含まれ、火山岩が含まれないもの。
- bグループ……濃飛流紋岩と花崗岩と火山岩が含まれるもの。

第12表 試料とその分析結果

No.	時期	器種	部位	表面観察結果					薄片観察結果					TYPE		
				砂礫の量	石英	長石	雲母	チャート	TYPE	花崗岩	濃飛流紋岩	チャート	火山岩		変成岩	
1	中期	壺	口縁部	ふつう	◎	○		△	I	○	○	○	○			b
2	中期	壺	口縁部	やや多	◎				II	○	○		○			b
3	中期	壺	口縁部	少ない	△	○		△	I	○	○	○				a
4	中期	壺	口縁部	少ない	△	○		△	I	○	○	○				a
5	中期	壺	口縁部	ふつう	◎			○	II	○	○	○				a
6	中期	壺	口縁部	やや多	◎			○	II	○	○	○				a
7	中期	壺	口縁部	ふつう	◎			△	I	○	○	○				a
8	中期	壺	口縁部	やや少	◎			○	II	○	○	○				a
9	中期	壺	胴部	少ない	△	○		△	II	○	○		○			d
10	中期	壺	頸部	少ない	△	△		△	II	○	○	○				c
11	中期	壺	胴部	やや少	◎			△	I	○	○	○				a
12	中期	壺	胴部	やや少	◎			△	II	○	○	○				a
13	中期	壺	胴部	ふつう	◎			△	I	○	○	○				a
14	中期	壺	胴部	やや少	◎			△	III	○	○	○				b
15	中期	壺	胴部	やや少	◎			△	II	○	○	○				b
16	中期	壺	底部	多い	◎			×	III	○	○	○				b
17	中期	壺	底部	多い	◎			×	III	○	○	○				b
18	中期	壺	底部	ふつう	◎			△	I	○	○	○				a
19	中期	壺	底部	やや多	◎			△	I	○	○	○				a
20	中期	壺	口縁部	やや多	◎			×	I	○	○	○				a
21	中期	壺	口縁部	少ない	△	△		△	II	○	○	○				b
22	中期	高杯	杯部(底部)	少ない	△	△		△	II	○	○	○				b
23	中期	高杯	杯部(口縁部)	やや少	◎			△	II	○	○	○				b
24	中期	高杯	杯部(口縁部)	やや多	◎			×	II	○	○	○				b
25	中期	高杯	脚部	やや少	◎			○	I	○	○	○				a
26	後期	壺	胴部	ふつう	◎			○	I	○	○	○				a
27	後期	壺	底部	やや少	◎			×	I	○	○	○				a
28	後期	壺	底部	少ない	△	△		△	I	○	○	○				a
29	後期	壺	底部	少ない	△	△		△	I	○	○	○				a
30	後期	壺	底部	やや少	◎			○	I	○	○	○				a
31	後期	壺	底部	少ない	△	△		△	I	○	○	○				a
32	後期	壺	口縁部(パレス型)	やや多	◎			△	I	○	○	○				d
33	後期	壺	口縁部	少ない	◎			△	I	○	○	○				a
34	後期	壺	口縁部	やや少	◎			△	III	○	○	○				c
35	後期	壺	口縁部	やや多	◎			◎	I	○	○	○				a
36	後期	壺	脚部	やや少	◎			×	II	○	○	○				d
37	後期	壺	脚部	やや多	◎			×	I	○	○	○				d
38	後期	壺	脚部	多い	◎			○	III	○	○	○				b
39	後期	壺	脚部	やや少	◎			○	I	○	○	○				b
40	後期	壺	脚部	やや多	◎			◎	I	○	○	○				b
41	後期	壺	胴部	少ない	△	△		△	I	○	○	○				a
42	後期	壺	胴部	ふつう	◎			△	I	○	○	○				a
43	後期	壺	底部	ふつう	◎			○	III	○	○	○				a
44	後期	壺	口縁部	まれ	◎			×	IV	○	○	○				a
45	後期	壺	口縁部	まれ	◎			×	IV	○	○	○				e
46	後期	高杯	脚部	やや多	◎			△	I	○	○	○				a
47	後期	高杯	脚部	ふつう	◎			△	II	○	○	○				c
48	後期	高杯	脚部	まれ	◎			△	IV	○	○	○				b
49	後期	高杯	脚部	やや多	◎			△	IV	○	○	○				a
50	後期	高杯	脚部	まれ	◎			△	IV	○	○	○				e
51	後期	高杯	脚部	ふつう	◎			○	I	○	○	○				a
52	後期	高杯	脚部	少ない	◎			△	I	○	○	○				a
53	後期	高杯	脚部	やや少	◎			△	I	○	○	○				a
54	後期	高杯	脚部	ふつう	◎			△	I	○	○	○				a
55	後期	高杯	脚部	やや少	◎			△	I	○	○	○				b
56	後期	高杯	杯部(底部)	やや少	◎			△	I	○	○	○				b

- c グループ……花崗岩とチャートが含まれ、濃飛流紋岩および火山岩が含まれないもの。
- d グループ……花崗岩と濃飛流紋岩が含まれ、チャートおよび火山岩が含まれないもの。
- e グループ……岩片をまったく含まないもの。

4. 考 察

表面観察によるグループ分けの結果では、Iグループに36点、IIグループに11点、IIIグループに5点、IVグループに4点含まれ、チャート岩片が含まれることを特徴とするIグループが、グループ分けを行った試料の三分の二以上を占めた。これは町田遺跡の南東を流れる庄内川が、町田遺跡のやや上流で美濃帯の古生層に属するチャートを侵食していることに影響されていると思われる。

顕微鏡観察によるグループ分けの結果ではaグループに34点、bグループ13点、cグループに3点、dグループに4点、eグループに2点含まれ、チャートと濃飛流紋岩の組合せを特徴とするaグループが、グループ分けを行った試料の三分の二近くを占めた。これは庄内川の流域にチャートと濃飛流紋岩が分布していることに影響されていると思われる。

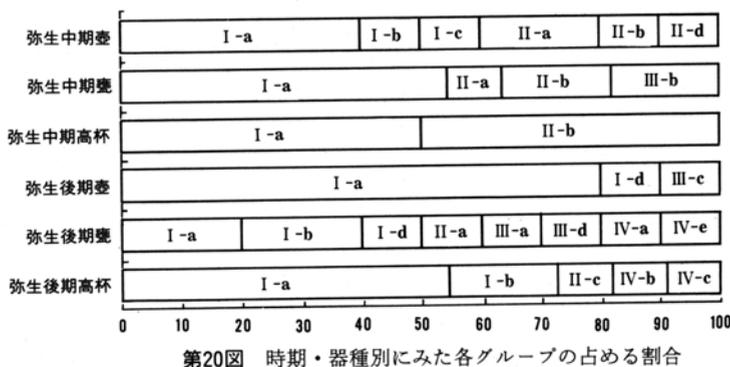
これらの結果より、表面観察ではIグループが、顕微鏡観察ではaグループが町田遺跡の土器を代表していると考えられる。すなわち町田遺跡を中心とする地域で作られた土器は、表面観察によってチャートが、偏光顕微鏡観察によってチャートおよび濃飛流紋岩が多く認められるという傾向を持っていると考えられる。

また、両方のグループ分けの結果を組み合わせ、I-aグループ、II-bグループなどのように分類した場合の、それぞれのグループに属する試料の個数を第13表に、またその割合をグラフにしたものを第20図に示す。このグループ分けの結果と、試料となった土器の時期および器種を照らし合わせてみると、弥生時代中期では後期に比べ比較的IIグループが多く、中でもII-bグループの比率が高い。II-bグループは表面観察で雲母が多く花崗岩などの影響が考えられることと、顕微鏡観察で濃飛流紋岩に加え火山岩が含まれることなどから、木曾川や長良川などの影響が考えられる。

同一器種同士で時期別に比較すると、表面観察と顕微鏡観察の両方で町田遺跡の土器の特徴を持っているI-aグループの占める割合が、中期に比べ後期に非常に高くなり、同時に中期では比較的多かったIIグループが、後期ではまったくみられなかった。また甕では逆に中期に多かったI-aグループが、後期に極端に減っている。これらのことから町田遺跡で作られた土器が、時期によって変化し

第13表 各グループに含まれる試料の個数

	中期			後期		
	壺	甕	高杯	壺	甕	高杯
I-a	4	6	2	8	2	6
I-b	1	0	0	0	2	2
I-c	1	0	0	0	0	0
I-d	0	0	0	1	1	0
I-e	0	0	0	0	0	0
II-a	2	1	0	0	1	0
II-b	1	2	2	0	0	0
II-c	0	0	0	0	0	1
II-d	1	0	0	0	0	0
II-e	0	0	0	0	0	0
III-a	0	0	0	0	1	0
III-b	0	2	0	0	0	0
III-c	0	0	0	1	0	0
III-d	0	0	0	0	1	0
III-e	0	0	0	0	0	0
IV-a	0	0	0	0	1	0
IV-b	0	0	0	0	0	1
IV-c	0	0	0	0	0	0
IV-d	0	0	0	0	0	0
IV-e	0	0	0	0	1	1
合計	10	11	4	10	10	11



ていることが考えられる。

5. 砂礫以外の混入物や土器の内部構造について

(1) 砂礫以外の混入物

a. モミガラ

全試料のうち2点(試料番号25、47)に認められた。2点とも土器表面ではなく新たにできた断面から発見された。試料は2点とも高杯であるが、意図的に混入したものかは不明である。

b. 動物珪酸体

全試料のうち6点(試料番号11、14、21、26、41、54)に計8個認められた。8個とも二軸型で、これは宇津川徹ほか(1979)によると本来的には海棲浮遊動物であるとされている。動物珪酸体が含まれていた6点の試料のうち4点が甕である。

(2) 土器の内部構造

a. 土器内部の方向性

内部に多くの気泡を含んでいる試料や、色調が明らかに異なる二種類の粘土を混ぜ合わせて作ったと思われる試料がいくつかみられた。これらのうち、割れ口で気泡が一定方向に配列して見える試料(試料番号50、55)や、色調の違いによって二種類の胎土が縞状に見える試料(試料番号52)では、土器を作る時にどの様な力を加えたかがわかり、土器の製作技術を知る上で興味深い。

b. サンドウィッチ構造

土器の内・外面の表面の色調と、それには含まれた部分の色調とが異なるもの(いわゆるサンドウィッチ構造)が、全試料のうち16点(試料番号9、14、15、18、20、21、25、28、29、31、41~43、48、55、56)に認められた。しかし色調以外には、顕微鏡下で鉱物組成などの違いは特に認められなかった。この色調の違いは焼成時の酸化等によって生じたもので、本来的には同一の胎土であったと思われる。

6. おわりに

今回の分析では、その方法について不十分な点が多かった。今後、分析方法の確立が急がれるところである。

なお、本研究を進めるにあたり、愛知教育大学仲井豊教授および三宅明助教授には同大学の施設を使用させて頂くと共に御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

(森勇一・永草康次・楯真美子)

参考文献

黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と岩石鉱物』 1983 343P.

宇津川徹・細野 衛・杉原重夫「テフラ中の動物珪酸体“Opal Sponge Spicules”について」『ペトロジスト』23 (2) 1979 134-144.

山田直利・片田正人・坂本 亨・松田武雄・須田芳朗『20万分の1地質図幅・豊橋』 1972 通産省地質調査所.

第4節 町田遺跡産の昆虫遺体と古環境

1. はじめに

町田遺跡の発掘において、昆虫遺体の検出・分析を行い、遺跡周辺の自然環境の復元を試みた。

昆虫遺体を検出した試料は第23図第4・5層の縄文時代中期の泥炭質シルト層および第10・11層の古墳時代～平安時代と推定される堆積物の2層準である。検出・分析の方法は森(1988)によった。

なお、研究を進めるにあたり、大阪市立自然史博物館の宮武頼夫氏には館所蔵のネクイハムシ現生標本の借用と、有益な助言をいただいた。また、岡崎国立共同研究機構生理学研究所の大平仁夫博士にはコメツキムシの同定をしていただいた。以上の方々に心よりお礼申し上げる。

2. 同定結果

同定結果は第14表に示す。

第14表 昆虫遺体分析結果

生態	和名	学名	古墳～平安時代	縄文時代中期
水生	ゲンゴロウ科	DYTISCIDAE		1
	コミズスマシ?	<i>Gyrinus curtus</i>		W-1
	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i>	W-1	
	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i>	W-2	
湿地性	ネクイハムシ亜科	DONACIINAE	10	7
	イネネクイハムシ	<i>Donacia provosti</i>	W-10 P-3	
	アシボソネクイハムシ	<i>Donacia gracilipes</i>		P-1
食糞性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	2	2
	ツヤマルエンマムシ	<i>Atholus pirithous</i>		W-1
食肉性	ゴミムシ科	HARPALIDAE	2	12
	オオトックリゴミムシ属	<i>Oodes</i> sp.		1
	ナガヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites terricola pacificus</i>	P-1	
陸生	コメツキムシ科	ELATERIDAE	1	6
	アカアシオオクシコメツキ	<i>Melanotus cete</i>		W-2
食植性	コガネムシ科	SCARABAEIDAE	1	19
	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.		2
	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i>		W-1
	ハナムグリ亜科	CETONIINAE		10
	コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i>		W-2 P-2 S-2 L-4 A-2 F-4
	アオハナムグリ	<i>Eucetonia roelofsi</i>		W-1 T-1
	シロテンハナムグリ	<i>Protaetia orientalis</i>		L-2
	カナブン属	<i>Rhomborrhina</i> sp.		1
カナブン	<i>Rhomborrhina japonica</i>		W-1	
	クワガタムシ科	LUCANIDAE		1
不明			74	243

※ 種まで同定できたものについては検出部位を示した。

W-鞘翅 P-前胸背板 H-頭部 S-小楯板 T-胸部 A-腹部 L-脚部 F-破片

科以上のレベルまで同定できたものは鞘翅目9科123点、そのうち属まで同定できたもの4属8点、種まで同定できたもの13種45点である。分類上および環境復元に重要な何点かについて述べる。

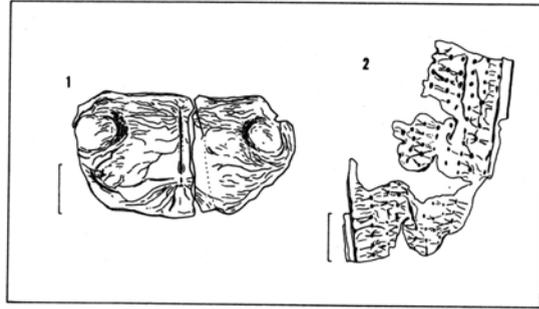
(1) アシボソネクイハムシ *Donacia gracilipes* Jacoby

前胸背板 1.1mm 縄文時代中期(第21図-1)

光沢のある青緑色を呈する。背面は起伏が大きく、前側隆起が見られるが、縦の長さ1.1mmに対し、横幅1.3mmと全体に横長であることからミズクサハムシとは区別される。さらに、点刻はなく、中央部をのぞいて全体に横しわを有すること、中央縦溝は強く深いことから、現在までの同定基準によれば

本種に同定される。

アシボソネクイハムシは、コウホネ、ヒルムシロ、ミクリなどを食草とする。現在は、北海道と本州の山地帯に分布し、長野県小谷村白馬岳が西・南限とされている（野尻湖昆虫グループ：1985）が、今回のように縄文時代中期の泥炭層から本種が見つかったことは、当時の気候との関連で興味深い。



第21図 町田遺跡産の昆虫遺体（スケールは0.5mm）

1. アシボソネクイハムシ *Donacia gracilipes* Jacoby 前胸背板

2. ネクイハムシ亜科 DONACIINAE 左鞘翅片

(2) ネクイハムシ亜科 DONACIINAE

左鞘翅片 最大幅1.8mm 縄文時代中期（第21図—2）

保存状態が非常に悪く、残っている部分は左鞘翅中央部より翅端に近い約3分の1程度であると思われる。青藍色で、中央部では金緑色を呈する。点刻は円形で大きく、点刻に伴うしわは横方向に強い。平圧されていることを考慮にいれても最大幅1.8mmと大型である。これらの特徴を持つ種は、いずれも冷温帯に分布する種である可能性が高く、アシボソネクイハムシの分布と矛盾しない。

この他にも6点のネクイハムシ亜科が見つかっており、うち2点は本標本と同じ特徴を持つが、どれも保存状態が悪く種の同定には至っていない。

(3) ツヤマルエンマムシ *Atholus pirithous* Marseul

右鞘翅 2.0mm 縄文時代中期（図版60—6）

黒色で光沢を有する。鞘翅の6条の背条のうち第1～第4背条は完全、第5背条は上半部を欠き、第6背条はそれより少し長い。外副肩条、内副肩条は不明瞭で破線状となる。鞘翅から推定される体長は約3.6mmと小型である。以上の特徴から本種と同定できる。

本種は腐敗した動植物や糞に集まりウジなどの小動物を捕食する。

(4) コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann

右鞘翅 6.8mm 縄文時代中期（図版60—3）

全体に緑色を呈し、光沢は弱い。かぎ状の点刻を規則的に並べる。アオハナムグリ、ハナムグリに似るが、大きさ、背面の光沢などの違いで区別できる。現生のものは鞘翅に黄白色の毛を疎布するが、本標本では脱落している。

本種は、春・秋に多く花を訪れ、花粉や花卉を食する。その他の部位として、前胸背板・小楯板・腿節なども見つまっている。

(5) イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire

左鞘翅 4.5mm 古墳時代～平安時代（図版60—10）

青藍色～青緑色で光沢を有する。翅端の切断方向は水平で、翅端内角が角ばること、点刻にはしわを伴わないことなどから本種と同定される。その名のとおり幼虫がイネの根を食害することで古くから知られている。成虫はヒクジグサ、コウホネ、ジュンサイ、ヒシなどの水生植物に集まる。

(6) イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire

前胸背板 幅1.1mm 古墳時代～平安時代 (図版60—12)

青緑色でやや光沢がある。全体に方形で背面に凹凸はなく、細かいしわを密に装う。ガガブタネクイハムシに似るが中央縦溝が連続しないことから本種と同定できる。遺跡周辺の湿地に多数生息していたと思われる。ガガブタネクイハムシに比べ自然度の低い湿地に生息するといわれており、低湿地の人工改変との関連において重要である。

(7) ナガヒョウタンゴミムシ *Scarites terricola pacificus* Bates

前胸背板 幅5.5mm 古墳時代～平安時代 (図版60—9)

黒色で弱い光沢を有する。その形から *Scarites* 属の一種であることは明らかである。前胸の幅は前方へやや広がり、前角があまり突出しないことから本種と同定できる。本種は、平地の野原や畑に住む。

3. 考 察

以上の結果から、環境復元に役立つ指標性昆虫をもとにそれぞれの時期について若干考察する。

(1) 縄文時代中期

アシボソネクイハムシなどネクイハムシ類が8点見つかったことから、湿地にはコウホネ、ヒルムシロ、ミクリなど水生植物が繁っていたことがうかがえる。その他に広葉樹の樹液に集まるカナブンやシロテンハナムグリ、訪花性のコアオハナムグリ、アオハナムグリが検出されたことから、湿地のまわりは、広葉樹の疎林が広がり草本植物の生育する環境であったと推定される。

考古学的にはこの時期の遺構は検出されていないが縄文中期の土器片が見ついている。

町田遺跡の泥炭層は¹⁴C年代測定法によりおよそ4500～5000 y.B.P. という年代が得られている。今回見つかったアシボソネクイハムシが冷温帯に分布する種であることから、当時の気候が現在よりもかなり冷涼であったと考えられる。

(2) 古墳時代～平安時代

ガムシ、セマルガムシは、腐った水草などを食べる水生昆虫で、数は減っているが現在でも水田などで見ることのできる種である。また、イネの害虫として知られるイネネクイハムシが多数見つかったことから水田が広がっていた可能性がある。イネネクイハムシの成虫はおもに浮葉植物を食草としており、近縁種のガガブタネクイハムシよりも人里近い湿地などにみられる。また、食葉性昆虫(コガネムシ科など)あるいは森林性の昆虫はほとんど見られなかった。

以上のことから町田遺跡及びその周辺には、人工改変の進んだ低湿地あるいは水田が広がっていたと推定される。縄文時代中期には自然度の高い低湿地が、その後時期は特定できないが、この時期に至るまでにかかなり人工改変が進んだことになる。 (森勇一・伊藤隆彦)

参考文献

- 春沢圭太郎 「堺にいる動物の見わけかた2 コガネムシ」青少年自然科学講座 (堺市科学教育振興会 1987 18P.)
- 日浦 勇・宮武頼夫・那須孝悌 「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和57年度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班 1983 467-479.
- 日浦 勇・宮武頼夫・那須孝悌 「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」『古文化財の自然科学的研究』 古文化財編集委員会編 同朋舎 1984 411-429.
- 森 勇一 「愛知県勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和62年度』 1988 118-137.
- 森本 桂ほか 『原色日本甲虫図鑑 (I)・(II)・(III)・(IV)』 保育社 1986
- 中根猛彦ほか 『学研中高生図鑑 昆虫II・甲虫』 学習研究社 1975
- 中根猛彦ほか 『原色日本昆虫図鑑 (上)・(下)』 保育社 1975
- 野尻湖昆虫グループ 「野尻湖発掘(1978~1982)で産出した昆虫化石」『地団研専報 27』 1984 137-156.
- 野尻湖昆虫グループ 『アトラス・日本のネクイハムシ』 1985 182P.
- 野尻湖昆虫グループ 「第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘で産出した昆虫化石」『地団研専報 32』 1987 117-136.
- 野尻湖昆虫グループ 『昆虫化石ハンドブック』 ニューサイエンス社 1988 126P.

第5節 町田遺跡産の大型植物遺体

町田遺跡において、昆虫遺体の検出と同時に大型植物遺体の検出を行ったので簡単に報告する。

植物遺体の検出は、主にトレンチ穴よりブロックサンプルを採取し、室内に持ち帰った後ブロック割りによって行った。試料は、第23図第4・5層縄文時代中期の泥炭質シルト層及び第10・11層の古墳時代～平安時代と推定される堆積物の2層準から採取した。

なお、大阪市立大学理学部教授・粉川昭平氏には、種の同定について御教示いただいたのでここに記してお礼申し上げます。

1. 縄文時代中期

(1) エゴノキ (エゴノキ科・エゴノキ属) *Styrax japonica* Seib. et Zucc. (図版61—F)

縄文時代中期から総数152個の種子が検出された。種子の大きさは長径約11mm、短径約7mm、先のややとがった卵円形をなす。

エゴノキは現在、北海道から九州までの山地～平地に普通に分布する。果皮に毒を含むことから、古くは川や池に投げ入れて魚を捕るのに使われていたといわれている。

(2) イチイガシ? (ブナ科・アカガシ亜属) *Quercus gilva* Blumex

山地に生える常緑高木。現在は本州 (関東以西)、四国、九州に分布する。

縄文時代中期から1点のみ検出された。堅果はなく、子葉が炭化したもので長さ13mm、幅12mmである。

(3) ノブドウ (ブドウ科・ノブドウ属) *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. (図版61—B)

山野に普通にみられるつる性多年草。北海道から九州まで分布する。種子は心円形で長さ4.0mmである。縄文中期から1点見つかった。

これらの他にサクラ類の材が数点見つかった。

2. 古墳時代～平安時代

(1) モモ (バラ科・サクラ属) *Prunus persica* Batsch (図版61—E)

モモの核が16点検出された。長径が25mm以上のもの4点、20～25mmのもの9点、20mm以下のもの3点と大小さまざまである。

(2) センダン (センダン科・センダン属) *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel

山地に生える落葉高木。種子は楕円形で縦に5稜をとまなう。長さ12mm、幅8mm。発掘の途中で1点のみ検出された。

(3) イネ (イネ科・イネ属) *Oryza sativa* L. (図版61—A)

砂質シルト層から3点見つかった。長さ4.5～4.8mm、幅3.0mm。

炭化しており、籾殻はついていない。

(4) カンガレイ (カヤツリグサ科・ホタルイ属) *Scirpus* sp. (図版61—D) 多数。

ホタルイ属の多くは湿地、沼沢地、溝などに生える多年草で、一部に一年草を含む。検出された種子は長さ1.5~2.3mm、黒色~黒褐色で数本の繊維状の花被片を有する。水田雑草として生えていたものと考えられる。

(伊藤隆彦・森勇一)

参考文献

- 北村四郎・村田 源 『原色日本植物図鑑 木本編(I)』 保育社 1971
北村四郎・村田 源 『原色日本植物図鑑 木本編(II)』 保育社 1979
北村四郎・村田 源 『原色日本植物図鑑 草本編(中)』 保育社 1961
北村四郎・村田 源・小山鐵夫 『原色日本植物図鑑 草本編(III)』 保育社 1964

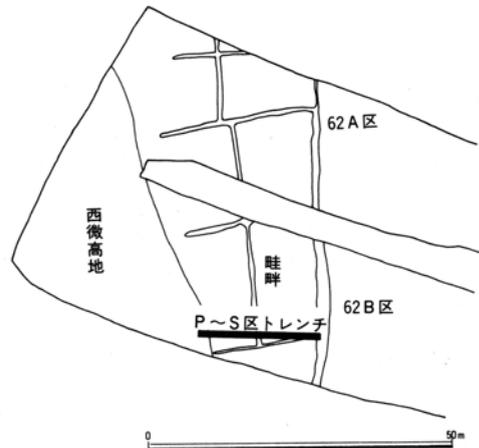
第6節 愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について

1. はじめに

日本は世界でも有数の火山国である。そのため、火山噴火に伴う火山灰降灰の記録が地層中に記録されていることも少なくない。なかでも、広域テフラは離れた地域間の地層対比や文化層の比較・検討にあたって、等時間面としての指標を与えるのできわめて重要である。今やテフクロノロジー（火山灰編年学）は地質学はもとより、考古学の編年作業を進める上においても、大変重要な研究分野の一つである。

広域テフラとしては、古くから始良Tn（AT）火山灰および鬼界アカホヤ（K-Ah）火山灰などが知られている。前者の噴出年代は旧石器時代（約21,000～22,000年前）、後者は縄文時代早期末（約6,300年前）にあたり、両テフラともこれまでに西日本を中心に日本各地で発見され、第四紀更新世以降の編年作業に多大な貢献をしてきた。

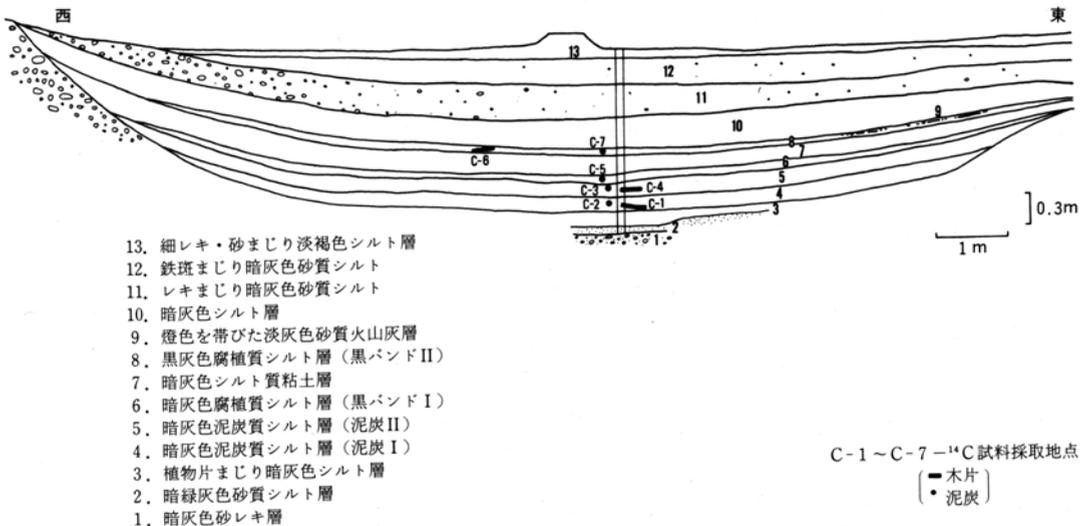
近畿・東海地方では、鬼界アカホヤ火山灰層より新しい年代値を示すテフラについては、これまでに地層として確認された報告例は知られていなかった。このたび、愛知県春日井市町田遺跡の泥炭層中から、縄文時代後・晩期の火山灰層を検出することができたので、その概要を報告する。



第22図 分析試料採取トレンチ位置図

2. 火山灰の層位と産状

町田遺跡は、春日井市南部の町田町地内に所在し、庄内川水系地蔵川の沖積面上に立地する主に弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺跡である（第22



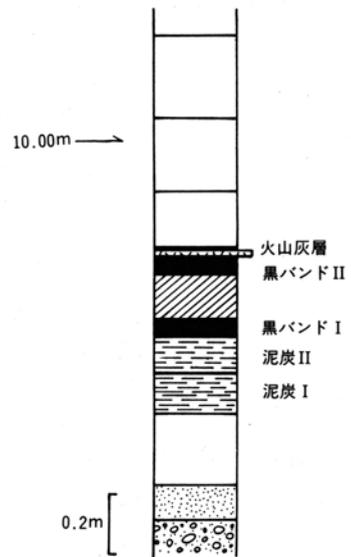
第23図 62B区P~S区トレンチ北壁断面図

図)。

基盤層を構成する砂礫層の上に、砂質シルト及びシルト層、その上位に二層の未分解の泥炭層（泥炭Ⅰ・泥炭Ⅱ）の堆積が見られる。泥炭Ⅰの絶対年代は 5260 ± 100 y.B.P.（木片：Gak-13806）、 5000 ± 100 y.B.P.（泥炭：Gak-13805）、泥炭Ⅱでは 4640 ± 130 y.B.P.（泥炭：Gak-13807）、 4470 ± 130 y.B.P.（木片：Gak-13808）の測定値が得られている。さらに上位にはシルト質粘土をはさんで、分解の進んだ二層の黒色泥炭（黒バンドⅠ・黒バンドⅡ）が堆積しており、黒バンドⅡ最上部及びその上限より1～1.3 cm下位の層準から火山灰層が検出された。黒バンドⅠの年代は 4400 ± 100 y.B.P.（泥炭：Gak-13809）、黒バンドⅡでは 3770 ± 120 y.B.P.（木片：Gak-13811）、また黒バンドⅡ中の火山灰層直下では 3120 ± 120 y.B.P.（泥炭：Gak-13810）の測定結果が得られている（第23図）。

火山灰層の上部には、縄文時代晩期以降、古墳、奈良～平安時代などに堆積した地層がのっている。なお、標高約11mの微高地上ではこれらの地層は観察されず、砂礫の上に直接弥生時代中期から古墳時代初頭の住居跡や方形周溝墓が検出された。また、この砂礫層が高度を減じて旧河道（埋積浅谷の可能性が高い）に至る微高地斜面より縄文時代中期の土器片が多数発見された。

火山灰層の分布高度は標高9.50～9.80mである。やや赤味を帯びた淡灰褐色の細粒ガラス質火山灰層である。層厚は3～15mm（平均4mm）、泥炭層最上部にレンズ状ないし塊状に堆積していて、層厚は所によって変化する。野外では、火山灰が上下の地層中に分散し、火山灰層としての認定が困難な産状を呈することもある（第24図）。



第24図 試料採取地点柱状図

3. 火山灰の鉱物学的性質

火山灰の岩石記載的性質の検討にあたっては、吉川（1976）の火山灰試料の処理・記載の方法に従い実施した。採取した試料は水洗・篩別し、50℃以下の温度で乾燥させ、プロモホルムにて重液分離した。この処理後の細～極細粒砂（1/4～1/16mm）の粒度について、鉱物組成、重鉱物組成、ガラスの色・形状・屈折率、斜方輝石の屈折率や各種鉱物の特徴などを検討した。

鉱物組成及び重鉱物組成については、偏光顕微鏡下でそれぞれ総計200粒以上同定してその個数比を求めた。ガラスの色は実体顕微鏡下で観察し、形状については、吉川（1976）にもとづいて偏平型（Ha型＋Hb型）、中間型（Ca型＋Cb型）、多孔質型（Ta型＋Tb型）、その他の型に分類し、200個以上同定して各個数比を求めた。ガラスの屈折率（ n ）及び斜方輝石の屈折率（ γ ）の測定方法は、Yoshikawa（1984）によった。この方法による測定誤差は $\pm 0.001 \sim 0.002$ 以下と見積られる。以下にその結果について記す。

鉱物組成は、ガラス90%、長石類4%、石英2%、重鉱物4%の細～中粒ガラス質火山灰層である。ガラスは白色～無色透明であり、その形状は中間型56%（Ca：50%、Cb：6%）、多孔質型33%（Ta：9%、Tb：24%）、偏平型11%（Ha：3%、Hb：8%）で、屈折率（ n ）は1.499～1.504（モード値：

1.501-1.502) であった。

重鉱物組成は、角閃石31%、斜方輝石30%、単斜輝石5%、黒雲母12%、燐灰石1%、不透明鉱物21%であった。角閃石は細～中粒で緑色ないし緑褐色、長柱状である。斜方輝石は細粒、淡緑色ないし淡褐色、長柱状で針状に近いものも含まれる。

4. 考 察 (対 比)

火山灰の絶対年代は、火山灰層直下の年代測定値が得られている。その値は 3120 ± 120 y.B.P. であるので、火山灰の降灰は3120年前か、それよりいくぶん新しいものと推定される。相対年代では、縄文時代後期と晩期の境界付近に位置する。

吉川ほか(1986)は、近畿地方を中心に多数のボーリング試料を利用して火山灰層の抽出を行い、その分析結果を報告している。本火山灰層をこれらの結果と対比してみると、大阪府港区天保山におけるボーリング試料から見いだされた難波累層最上位火山灰層(約2000～3000 y.B.P.)及び琵琶湖底ボーリング中の深度6 mより発見されたBB7火山灰層(Yoshikawa:1982)と層位及びガラスの形状・屈折率、鉱物組成の諸性質において、対比される可能性が高い。

一方、縄文後・晩期の頃の層準に位置する広域テフラについては、新井・町田(1980)及び町田ほか(1984)のカタログの中に、池田湖(約4000年前)、三瓶・大平山テフラ(3680 ± 90 y.B.P.)、霧島御池(約3000年前)、天城カワゴ平パミス(約3000年前)が記載されているが、いずれも対比可能な鉱物及びガラスの諸性質などについては記されていない。

現在各広域テフラと比較・検討中であるが、カワゴ平パミスについては、静岡県清水市長崎遺跡から産した試料について分析し検討した結果、その産状・ガラスの屈折率・鉱物組成など、対比できる材料を見いだし得なかった。角閃石・斜方輝石・黒雲母等の重鉱物組成は、正岡(1972)の三瓶・大平山降下火山灰層の重鉱物分析結果、三浦・林(1987)の同火山灰層の鉱物特性によく調和しており、火山ガラスの形状においても山陰系テフラの特性と矛盾しないことより、現在までのところ本火山灰層は三瓶・大平山テフラをはじめ、山陰に起源を持つテフラに同定される可能性がきわめて高いと考える。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、大阪市立大学理学部吉川周作氏には火山灰同定について指導・助言をいただき、また同研究室内の分析機器の使用を許可していただいた。群馬大学の新井房夫氏には、火山灰分析とその結果に基づく対比の可能性について指導及び有益な助言をいただいた。川崎地質株式会社居川信之・大阪市立大学宮田英嗣両氏には火山灰分析にあたって協力いただき、静岡県埋蔵文化財調査研究所の矢田勝・伊藤豪の両氏にはカワゴ平パミスの採取・調査、島根大学理学部鬼頭剛・原田久也両氏には、三瓶・大山系火山灰の現地調査にあたって便宜を図っていただいた。これらの方々
に心よりお礼申し上げます。
(森勇一・伊藤隆彦)

参考文献

- 新井房夫・町田 洋 「日本のテフラ・カタログ I—西日本～東北地方の第四紀後期示標テフラの岩石記載的性質—」『軽石学雑誌』6、1980 65—76.
- 石田志朗・笹嶋貞雄・横山卓雄・竹村恵二 「近畿・中国地方の遺跡に関連する火山灰層」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎、1984 940—951.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎、1984 865—928.
- 正岡栄治 「重鉱物組成からみた中海・宍道湖・湖底下の火山灰」『第四紀研究』11、61—69.
- 松井整司・井上多津男 「三瓶火山噴出物の¹⁴C年代。—日本の第四紀層の¹⁴C年代(56)」『地球科学』24、1970 112—114.
- 三浦 清・林 正久 「火山活動史からみた三瓶火山の鉱物特性」『山陰地域研究(自然環境)』3、1987 67—94.
- 森 勇一 「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『愛知県埋蔵文化財センター年報(昭和62年度版)』1988 118—137.
- 日本第四紀学会編 『日本第四紀地図』東京大学出版会、1987 117P.
- 大西郁夫 「出雲海岸平野の第四系」『島根大理紀要』13、1979 131—144.
- 大西郁夫・松井整司 「島根県東部の第四系」『日本地質学会第87年総会見学案内書(第1班)』1980 1—32.
- 竹村恵二・壇原 徹 「土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年—温度変化型屈折率測定装置を使用して—」『考古学と自然科学』20、1988 35—49.
- 吉川周作 「大阪層群の火山灰層について」『地質学雑誌』82、1976 497—515.
- 吉川周作 「堆積物中の火山ガラスの研究—大阪平野の更新～完新統について—」『第四紀研究』20、1981 75—87.
- Yoshikawa, S. Volcanic Glass in the 200m Core Sample from Lake Biwa. *Paleolim. Lake Biwa Japan. Pleist.* 9, 1982 35-49.
- Yoshikawa, S. Volcanic Ash Layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki District, Japan. *Jour. Geosci., Osaka City Univ.* 27, 1984 1—40.
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和 「近畿地方中部に分布する後期更新世の火山灰層について」『地球科学』40、1986 18—38.

第7節 町田遺跡における珪藻遺骸群集

1. はじめに

珪藻は10~100 μ m程度の単細胞の植物プランクトンである。珪酸質の被殻を有するため、堆積物中によく保存される。また、珪藻は地球上のあらゆる水域に広く分布し、種によって明瞭な住み分けがみられる。こうした特性から、遺跡の立地環境をはじめ、遺跡周辺の水域環境復元にあって、珪藻化石は示相化石として重要な役割を果たす。

筆者は、昭和62年度に行われた愛知県春日井市町田遺跡の発掘調査に際して、その深掘りトレンチより採取した試料の珪藻分析を実施したので、ここにその解析結果の概要を報告する。

2. 試料の採取と処理

町田遺跡は、標高約10m、庄内川水系地藏川の沖積地に立地する弥生時代を中心とした遺跡である。地藏川右岸には、最低位段丘に属する鳥居松段丘が分布し、左岸段丘下のやや微高地化した部分には、弥生時代中期から古墳時代初頭の集落跡や方形周溝墓などが検出され、その下層から縄文時代中期の土器片が出土している。

分析を行った試料は、町田遺跡62B区P~S区トレンチの縄文時代中期並びにその基盤層から、中世に至る土層中の34試料である。分析試料は、あらかじめ縦20cm、横10cmの8個のブロックサンプルとして採取し、それを単層ごとに2cmずつ計78個の連続試料に分割して使用した。層準と柱状図は第25図に示すとおりである。

試料の分析にあたって、乾燥重量1gをトールピーカーにとり、過酸化水素水(35%)を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。岩片除去ののち、水洗を4~5回くり返しながらか、同時に比重選別を行った。分離した試料を希釈し、マウントメディア(和光純薬製)にて封入した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定した。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。

また、珪藻殻と植物珪酸体数の算定は、400倍で複数枚のプレパラート中の8走査線以上を検鏡し、鏡下に出現した個数と試料の希釈率から珪藻殻数及び植物珪酸体数を算出した。

3. 群集組成解析の方法

Hustedt (1930, 1937—1938, 1927—1966)、Cholnoky (1968)、Foged (1954, 1959, 1966, 1974, 1980)、小林(1960, 1962, 1964)、Kobayasi(1968)、Patrick and Reimer(1966, 1975)、Schoeman (1973)らは、湖沼や河川における珪藻の生態及び分類学的研究を行い、水素イオン濃度(pH)、止水域と流水域との違い、珪藻の生態性、塩分濃度などの生態値を求めて、珪藻と水質との関係を報告している。筆者の属する野尻湖珪藻グループ及び多度団研珪藻グループもまた、各地の現生珪藻や化石珪藻の分析を行い、その結果をまとめている(1980, 1984, 1987, 1988)。

本論では、これらの研究成果をもとに珪藻遺骸の群集組成の解析と古環境の推定を試みた。

4. 層序と絶対年代

珪藻遺骸の分析試料採取と並行して、放射性年代測定用のサンプルを採取し、絶対年代の測定を実施した。年代測定は学習院大学理学部に依頼し、 ^{14}C 法によって求められた値である。次にその測定結果を列記する。ただし、ここでの年代値はすべて1950年より起算したものを使用している。

試料採取地点の地層断面図は第23図のとおりである。第4層（泥炭Ⅰ）及び第5層（泥炭Ⅱ）は未分解の植物質を多く含む泥炭層であり、第6層（黒バンドⅠ）及び第8層（黒バンドⅡ）は分解が進んだ黒色の泥炭層、第9層は縄文時代後・晩期の火山灰層（別稿参照）である。また、第10層は縄文晩期～古墳時代、第11層は奈良～平安時代、第12層は鎌倉～室町時代の堆積物である。

	〈絶対年代〉	〈分析試料〉	〈相対年代〉
C-7	3120±120 y.B.P. (Gak-13810)	腐植質シルト	テフラ降灰層準
C-6	3770±120 y.B.P. (Gak-13811)	木片	
C-5	4400±100 y.B.P. (Gak-13809)	腐植質シルト	
C-4	4470±130 y.B.P. (Gak-13808)	木片	縄文時代中期（泥炭Ⅱ）
C-3	4640±130 y.B.P. (Gak-13807)	泥炭	縄文時代中期（泥炭Ⅱ）
C-2	5000±100 y.B.P. (Gak-13805)	泥炭	縄文時代中期（泥炭Ⅰ）
C-1	5260±100 y.B.P. (Gak-13806)	木片	縄文時代中期（泥炭Ⅰ）

5. 珪藻遺骸群集

同定した珪藻遺骸29属105種（変種を含む）のリストを第15表に、その生態値の百分率と出現頻度等を第25図に示した。

群集組成と出現頻度等の分析結果から第25図に示したように町田遺跡の試料は下位よりA、B、C、D、E、Fの6帯に区分され、B及びC帯はさらにB1～B3亜帯、C1～C3亜帯に細分される。以下に各帯の特徴を示す。

A帯 (No.1～No.2)

含有殻数は平均 5.3×10^4 個/g、出現種数は同じく平均で13種であった。珪藻殻の保存が悪く、出現した珪藻はいずれも殻の破損したものが多かった。

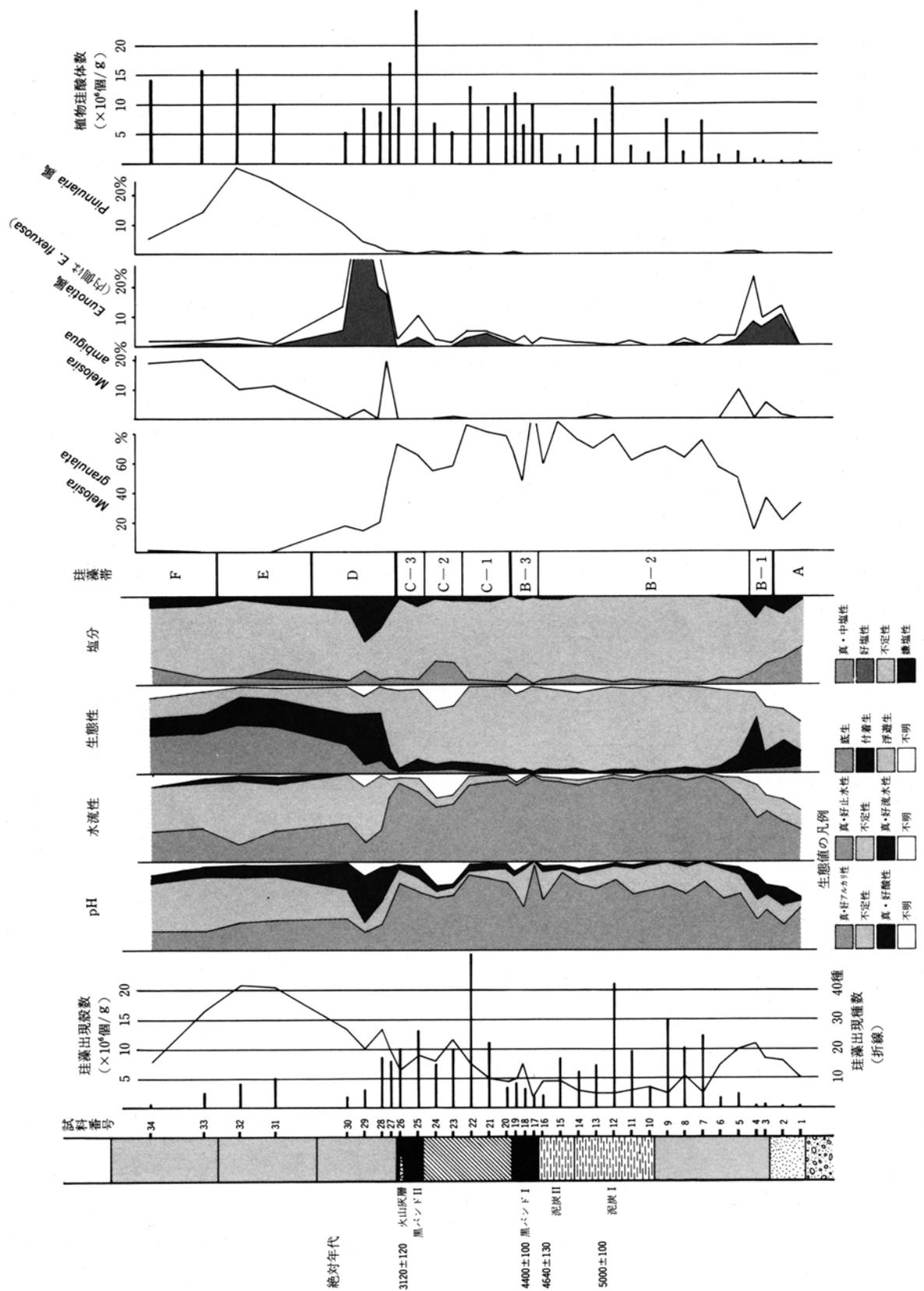
とくに優占する種は見られないが、次のような種が比較的多く出現した。好止水性・浮遊生種の *Melosira granulata* (27%) 及び海生種の *Thalassionema nitzschioides* (26%)、ほかに河川や池沼に普通に見られる *Synedra ulna* や、酸性水域を好む *Eunotia flexuosa* などである。

群集組成の特徴は、真～好アルカリ性種が29% (No.1) 及び47% (No.2)、上流や下位の海成層から洗い出されて流入したと考えられる海生種（図中では、「その他」で示した）が平均で23%と高率を示したことが特筆される。

水流に対する生態値の割合では、大部分が不定性種と不明種で占められ、好止水性種は40%前後出現したに過ぎなかった。

第15表 町田遺跡から産した珪藻遺骸のリスト

Species	Ecological value				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	TOTAL		
	pH	CURR	ECOL	CI																																					
1 <i>Achnanthes coarctata</i>	Alph	Liph	Epip	Ind	.	1	1
2 <i>Achnanthes crenulata</i>	?	?	Epip	?	.	1	1	.	1	3
3 <i>Actinella brasiliensis</i>	?	?	Epip	?	1	1	2
4 <i>Actinoptychus serarius</i>				Euha	2	4	.	.	1	.	1	.	1	9	
5 <i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	5	6	8	15	3	37	
6 <i>Caloneis bacillum</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	1	3	1	.	.	5	
7 <i>Caloneis silicula</i>	Acph	Ind	Bent	Ind	1	3	1	.	.	5	
8 <i>Cocconeis diminuta</i>	Albi	Ind	Epip	Ind	1	1	
9 <i>Cocconeis disculus</i>	Alph	Liph	Epip	Ind	1	1	
10 <i>Cocconeis placentula</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	.	.	.	1	1	2	
11 <i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	1	.	1	
12 <i>Cyclotella meneghiniana</i>	Alph	Ind	Plan	Haph	2	.	2	4	
13 <i>Cymbella affinis</i>	Acbi	Ind	Epip	Ind	.	.	.	1	1	1	.	3	
14 <i>Cymbella aspera</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	1	3	3	7	6	1	1	3	2	1	2	3	.	7	.	5	.	.	1	5	5	5	2	3	3	.	1	22	.	.	1	.	.	93			
15 <i>Cymbella cuspidata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	2	7	1	10
16 <i>Cymbella gracilis</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	.	.	.	1	4	2	1	.	8
17 <i>Cymbella lacustris</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	1	.	1	2	
18 <i>Cymbella lanceolata</i>	Acph	Libi	Epip	Ind	1	.	.	.	1	
19 <i>Cymbella leptoceros</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	.	.	.	5	.	1	6	
20 <i>Cymbella minuta</i>	Ind	R-ph	Epip	Ind	1	3	5	3	.	12	
21 <i>Cymbella naviculiformis</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	1	1	.	2	
22 <i>Cymbella norvegica</i>	?	Liph	Epip	Hpho	1	1	
23 <i>Cymbella sinuata</i>	Ind	Libi	Epip	Ind	1	.	.	1	
24 <i>Cymbella tumida</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	4	12	.	.	.	17	
25 <i>Denticulopsis lauta</i>				Euha	6	5	5	9	3	3	.	.	1	2	3	.	4	2	3	.	3	9	25	5	4	1	2	14	.	3	.	2	5	119			
26 <i>Diatoma hiemale</i>	Alph	R-ph	Epip	Hpho	1	
27 <i>Diatoma vulgare</i>	Alph	Ind	...	Ind	.	.	.	1	1	2	
28 <i>Diploneis ovalis</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	1	.	.	3	1	1	.	1	.	.	.	1	.	2	2	.	1	1	8	10	2	7	3	.	44		
29 <i>Epithemia zebra</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	2	.	.	1	3	
30 <i>Eunotia arcus</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	.	1	1	.	.	3	
31 <i>Eunotia diodon</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	.	1	.	.	3	1	1	7	
32 <i>Eunotia fleuosa</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	8	9	16	3	.	1	.	.	3	.	.	1	2	.	.	1	3	8	5	.	.	5	.	34	41	96	10	.	1	2	.	.	249			
33 <i>Eunotia formica</i>	?	?	Epip	?	.	.	1	2	.	.	3		
34 <i>Eunotia gracilis</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	1	.	1	3	
35 <i>Eunotia lunaris</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	.	.	1	1	.	2	1	6	
36 <i>Eunotia monodon</i>	Acph	Liph	Epip	Hpho	.	.	1	24	2	1	.	1	2	.	1	2	7	.	.	.	41	
37 <i>Eunotia pectinalis</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	1	.	1	1	1	1	2	.	.	2	.	.	.	2	1	12		
38 <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	1	1	1	.	.	1	1	1	.	.	1	2	6	1	1	15		
39 <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	1	1	.	1	.	1	1	1	1	.	.	1	.	2	5	.	10	24			
40 <i>Eunotia praerupta</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	1	1	1	.	1	1	1	1	.	2	.	1	1	.	1	1	12	
41 <i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i>	Acbi	Ind	Epip	Hpho	1	1	3	1	1	7		
42 <i>Eunotia robusta</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	.	3	.	2	1	.	1	8	.	3	18		
43 <i>Eunotia tenella</i>	Acph	?	Epip	Hpho	1	.	1	2	
44 <i>Eunotia veneris</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	.	.	2	3	
45 <i>Fragilaria bicapitata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	.	1	1	
46 <i>Fragilaria brevistriata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	1	.	.	1	
47 <i>Fragilaria construens</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	.	.	.	1	15	28	8	.	52	
48 <i>Fragilaria construens</i> var. <i>subsalina</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	3	.	.	3	
49 <i>Fragilaria pinnata</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	2	.	3	.	5	
50 <i>Gomphonema acuminatum</i> var. <i>coronata</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	.	3	6	17	2	1	1	.	1	.	.	31	
51 <i>Gomphonema acuminatum</i> var. <i>turris</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	.	.	1	.	.	1	1	3	
52 <i>Gomphonema clevei</i>	Alph	Liph	Epip	Ind	1	.	.	1		
53 <i>Gomphonema constrictum</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	.	.	.	2	2	
54 <i>Gomphonema gracile</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	1	1	.	.	1	1	.	4	
55 <i>Gomphonema intricatum</i>	Alph	Libi	Epip	Ind	1	.	2	.	4



第25図 町田遺跡産珪藻遺骸分析結果

B帯 (No.3 ~No.19)

B帯は含有殻数平均 6.3×10^6 個/g、B1亜帯では少なく 3.3×10^5 個/g、B2亜帯では 8.2×10^6 個/g、B3亜帯では再び減少し 2.7×10^6 個/gになる。出現種数は、B1亜帯で20種に達するものの、他の亜帯ではいずれも10種以下できわめて少ない(被殻の弱い珪藻は溶食されている可能性がある)。含有殻数はA帯に比べて増加する。

全体に *M. granulata* が優占種として出現し、特にB2亜帯では81%もの高率を示した。随伴種として pH 不定性・好止水性種の *Melosira distans* が約20%出現した。B1亜帯ではとくに優占種が見られず、*M. granulata* (25%) のほかに、*S. ulna* (11%) や *Gomphonema acuminatum* var. *coronata* (7%) などが出現した。これらの2種は、日本各地の池沼や河川に付着生種としてごく普通に見られるものである。その他にB1亜帯では、*T. nitzschioides* などの海生の種群が15%前後出現した。

群集組成の特徴は真~好アルカリ性種が全体の約65%を占め、B1~B3亜帯へむかうにつれ増加し、B3亜帯では72%に達する。水流に対する生態値の割合では好止水性種が約87%を占め、浮遊生種もB帯全体を通じて87%もの高率を示した。この結果、この間きわめて安定した水域が存在したことが推定される。

また、B帯全体を通じて多くの植物珪酸体と淡水海綿の骨針が検出された。とくにB3亜帯では、平均で 9.5×10^6 個/gの植物珪酸体が発見され、おそらく珪藻の休眠胞子と推定される非常に多くの珪酸質の微化石がプレパラート中に見い出された。植物珪酸体は、佐瀬ほか(1987)の分類にしたがえば、大型珪酸体では棒状珪酸体、小型珪酸体ではタケI型(ササ亜型)珪酸体でほとんどが占められた。

C帯 (No.20~No.26)

C帯は含有殻数平均 8.2×10^6 個/g、C1~C3亜帯にむかうにつれて次第に減少する。種数は平均15種で、B帯より増加する傾向がある。

依然として *M. granulata* が優占するものの、B帯にくらべてその出現率はいくぶん減少する。B帯同様、*M. distans* が随伴し、7~8%程度の出現率を示す。C2亜帯では、B1亜帯で見られたように25%程度の海生の種群が出現した。

群集組成の特徴は、真~好アルカリ性種が73%前後を占める。水流性では好止水性種が約81%、珪藻の生態性については浮遊生種が約80%の出現率を示した。

植物珪酸体の出現率も高く、C3亜帯の 1.8×10^7 個/gをはじめ、C帯全体でも 1.1×10^7 個/g検出された。植物珪酸体はB帯同様、大型珪酸体では棒状珪酸体、小型珪酸体ではタケI型(ササ亜型)珪酸体であった。

D帯 (No.27~No.30)

D帯は、含有殻数平均 5.2×10^6 個/g、種数平均23種であった。

これまで優占していた *M. granulata* が急減し、かわって酸性水域や湿原などを好む *Eunotia* 属とくに *E. flexuosa* (平均23%) や、pH 不定性・好止水性で浮遊生種の *Melosira ambigua* (同6%) が増加する。

群集組成では、真~好アルカリ性種がC帯全体の73%から35%に減ったかわりに、好酸性種が35%出現するようになる。また、水流性についても好止水性種が43%に減ずる。一方、珪藻の生態性では、

浮遊生種がC帯の80%から38%に減少し、大部分が底生及び付着生の種群で占められた。

E帯 (No.31~No.32)

分析試料が少なく、まだはっきりしたことがいえる段階ではないが、含有殻数は平均 4.3×10^6 個/g、種数は41種 (No.31) 及び42種 (No.32) であった。

出現種数が多く、とくに優占する種は見られない。比較的多く出現した種に、好アルカリ性・水流不定性種の *Fragilaria construens* (平均23%)、*M. ambigua* (同11%)、小川や池沼などのやや酸性に傾いた水域を好むとされる *Pinnularia* 属が27%もの高い出現率を示した。

群集組成では、真~好アルカリ性種が31%、真~好酸性種が17%、水流性についても真~好止水性種が28%に減じ、かわって不定性および真~好流水性の種群でそのほとんどが占められた。珪藻の生態性では、底生の種群 (38%) 及び付着生の種群 (38%) が浮遊生種を大きく上回った。

F帯 (No.33~No.34)

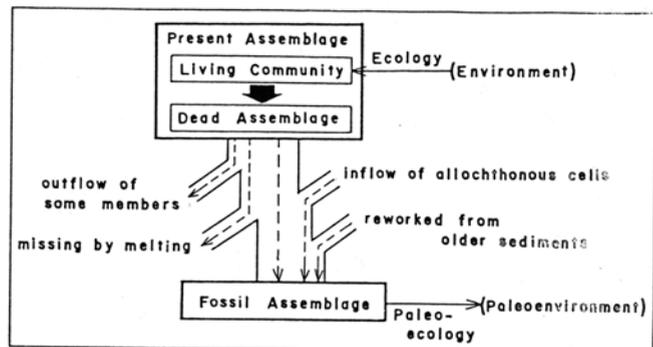
E帯と同じく、分析試料が少ない。含有殻数は平均 1.6×10^6 個/g、種数は13種 (No.33) 及び16種 (No.34) であった。

とくに優占する種は見られない。比較的多く出現した種には、*M. ambigua* (15%)、pH・水流ともに不定性の *Stauroneis phoenicenteron* (12%) などがあげられる。

群集組成では、真~好アルカリ性種が22%、真~好酸性種が10%、水流性については真~好止水性種が36%、また、珪藻の生態性では、底生の種群45%及び付着生の種群21%で、E帯同様浮遊生種を上回った。

6. 考 察

珪藻遺骸群集から古環境を推定するにあたって、小杉(1986)は、「生体群集が死後遺骸群集となり、最終的に化石群集になる過程で、群集の構成員の一部が流出したり、溶解により消失する一方、他の場所からの異地性遺骸や古い地層からの誘導化石の混入を受け、群集が変質していく」ことについて指摘し(第26図)、古生態学に現生群集の生態的情報を安易に適用することはできないと述べた。また、辻(1986)はこうした問題を論ずるなかで、「誘導化石を取り除いて議論するのではなく、それらを含めた総体として植物遺体群集の性格を明らかにし、地域システムの中でその意味を理解することが重要な課題である」と述べている。本論では、これらを受け、現生珪藻の流出や溶解、及び異地性遺骸や誘導化石の混入の可能性を含めて、それらの総体としての珪藻遺骸群集について考察する。



第26図 化石珪藻群集形成のプロセス (小杉:1988による)

(1) 縄文時代中期以前

珪藻遺骸群集のA帯を構成する縄文時代中期以前の砂質シルトには、誘導化石や異地性遺骸が多く、その当時の堆積環境を直接復元することは困難である。しかし、これらの誘導化石や異地性遺骸を含

めて論ずるならば、その環境は、生細胞や現地性の死骸群集が流出しやすく、かつ異地性の流入珪藻や誘導化石がきわめて混入しやすい環境であったことが考えられる。水域としては、堆積の場というより、むしろ堆積と運搬が繰り返されるような不安定な環境が推定され、それは層相や珪藻殻の少なさからも裏付けられる。

(2) 縄文時代中期

今から約5000年前の縄文時代中期になると水域は安定し、泥炭が発達するような環境に移り変わった。地層中に含まれる珪藻殻は、1gあたり約 6.0×10^6 個に達し、浮遊生(ときに付着生)の *Melosira granulata* が高い頻度で検出された。淡水海綿の含有率も高いことから、周辺部から清流が注ぎ込むような池沼的環境が想定される(長谷川康雄氏の御教示による)。

同じく縄文時代中期の頃、安藤(1986)は、埼玉県見沼低地を調査して、*M. granulata* をはじめとした *Melosira* 属の種群が高い頻度で発見されることを報告している。

珪藻の群集組成が大変貧弱なのに加え、同層準から発見された昆虫化石のなかに、現在は北海道と本州の山地帯に生息するアシボソネクイハムシ (*Donacia gracilipes*) が何点か含まれること(別稿参照)、及び並行して計数・分析した植物珪酸体中にササ属に由来すると推定されるタケI型(ササ亜型)珪酸体が多数含有され、これは佐瀬ほか(1987)によれば、亜寒帯～冷温帯に分帯されていることなどから、この当時の環境は、少なくともやや冷涼であったことが推定される。また、発掘時のトレンチ断面の観察結果から、こうした泥炭層は比較的傾斜角の大きな谷を埋積したものである可能性があり、縄文時代中期の気候の寒冷化を考えるうえで興味深い。

(3) 縄文時代中期から後期にかけて

縄文時代中期から後期(木片の年代で 3770 ± 120 y.B.P.)にかけての頃になると、珪藻の種数がやや増加し、それに伴って *M. granulata* の出現率がやや低下するようになる。植物珪酸体や、珪藻群集及び珪藻殻数などからは依然として縄文時代中期同様、冷涼な気候が継続したことが推定されるが、一時期、流入珪藻が増える層準(C2亜帯)が認められる。また、この時期に見られる泥炭層が黒色で、分解が進んだものであることから、この時期の堆積環境としては酸素の供給を受けやすい比較的浅い湿原域であったことが考えられる(地下水位の低下)。

(4) 縄文時代後・晩期から弥生時代

縄文時代後期末から晩期初頭にかけての頃(3120 ± 120 y.B.P.)、この地域一帯に山陰起源と考えられるテフラの降灰があった。火山灰層の層厚は最大22mm、平均3～4mmで2遺跡8調査区の泥炭層中から発見された。

珪藻遺骸群集は、この時期を境に大きく変化する。真～好アルカリ性種の減少に伴い好酸性種が増加し、また水流性についても好止水性種の急減があり、かわって水流不定性種や好流水性種が卓越するようになる。種組成では、それまで優占種として出現していた浮遊生の *M. granulata* が減少して、付着生の *Eunotia flexuosa* が優占するようになる。その結果、水域が池沼的な環境から湿地的な環境に大きく変化したことが考えられる。こうした珪藻遺骸の群集組成の急変に見られる古環境の変化は、火山灰の降灰によるところが大きいと思われる。

鹿島(1988)は、静岡県浜名湖底のボーリングコア中の珪藻遺骸分析結果から、ほぼ同層準(約3000

y.B.P.: カワゴ平パミスの編年による)において、海生～汽水生種が減少し淡水生種が増加する事実を報告して、この時期に海退があったことを示唆している。また、安藤(1986)は埼玉県見沼低地の調査結果から、縄文時代後期から古墳時代前期にかけて、*E. flexuosa* などの *Eunotia* 属の増加する層準があったことを報告している。そのため、今回明らかになった珪藻遺骸群集の変化は、町田遺跡周辺における火山灰降灰の影響のみならず、広く日本列島全体で起こった環境の変化に対応したものであるかもしれない。

(5) 古墳・奈良～平安時代及びそれ以降

その後、底生種で、池沼や水たまり・小川などに生活する *Pinnularia* 属がふえる。そして、この層準以降、再び植物珪酸体が急増する。珪酸体は、そのほとんどがおそらくイネ属の機動細胞と推定されるファン型で占められることから、この頃より水田耕作が営まれたことが考えられるが、その時期は定かでない。また、浮遊生の *Melosira ambigua* や、底生の *Amphora ovalis* var. *libyca*, *Stauroneis phoenicenteron* をはじめ、多様な珪藻の種群が見られるようになり、栄養塩類に富んだ浅くて停滞した水域が存在したことが珪藻遺骸の群集組成から伺い知ることができる。

謝 辞

珪藻遺骸や淡水海綿の同定、及び古環境推定の方法論については、長谷川康雄博士をはじめ野尻湖珪藻グループの皆さんに種々御教示いただいた。また、海生珪藻の同定及び泥炭層の堆積環境の考察にあたり、東京大学理学部鹿島薫、名城大学理工学部吉野道彦の両博士には、有益な助言をいただいた。これらの方々に、心より御礼申し上げる。(森勇一)

参考文献

- 安藤一男 珪藻群集からみた埼玉県見沼低地の古環境の変遷と完新世最高海水準. 第四紀研究, 25, 1986 165-176.
- Cholnoky, B.J. Die Ökologie der Diatomeen Binnengewässern. Cramer, Germany. 1968 699 p.
- Foged, N. On the Diatom flora of some Funen lakes. *Fol. Limnol. Scandinavica*, 6, 1954 76 p.
- Diatoms from Afghanistan. *Biol. Skr. K. Dansk Vid. Selsk. Skr.* 11, 1959 95 p.
- Freshwater Diatoms from Ghana. *Biol. Skr. K. Dansk Vid. Selsk. Skr.* 45, 1966 169 p.
- Freshwater Diatoms in Iceland. *Bibliotheca Phycologica*, 34, 1974 118 p.
- Diatoms in Öland, Sweden. *Bibliotheca Phycologica*, 49, 1980 193 p.
- Hustedt, F. Bacillariophyta, *Die Süßwasser Flora Mitteleuropas*. 10, G. Fischer. Jena. 1930 466 p.
- Systematische und Ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol. Suppl.* 15, 1937-1938 131-177.
- Die Kieselalgen Deutschland, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der an grenzenden Meeresgebiete. *Kryptogamen-Flora von Deutschland*, Teil 1-3, Leipzig, W. Deutschland. 1927-1966 920p., 845p., 816p.
- 市原壽文・井関弘太郎・加藤芳朗・大西青二・金子浩昌・那須孝悌・山内 文・日浦 勇・宮武頼夫・長谷川康雄 縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性に関する研究. 古文化財の自然科学的研究, 同朋舎, 1984 657-672.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, *Pascher A. Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 1986・1988 876p. 596p.
- 鹿島 薫 沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷. 地理学評論, 59, 1986 383-403.

- 鹿島 薫 珪藻分析から復原された浜名湖の完新世における古環境変遷. *Clastic Sediments (Jour. Res. Gr. Clas. Sed. Japan)* No.5, 1988 95-107.
- 小林 弘 長瀬自然岩石園の珪藻類. 秩父自然科学博物館研究報告、10、1960 67-76.
- 荒川産珪藻類(1). 同上、11、1962 33-40.
- 荒川産珪藻類(2). 同上、12、1964 65-77.
- Kobayasi, H. A Survey of Fresh Water Diatoms in the Vicinity of Tokyo. *Journ. Bot. Japan*, 20, 1968 93-122.
- 近藤錬三・佐瀬 隆 植物珪酸体. その特性と応用. 第四紀研究、25、1986 31-63.
- 小杉正人 珪藻の古生態学上の基礎的問題. *Diatom*, 2、1986 169-174.
- 小杉正人 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究、27、1988 1-20.
- 森 勇一 勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境. 愛知県埋蔵文化財センター年報(昭和62年度版)、1988 118-137.
- 森 勇一 昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境. 考古学と自然科学、21、1989 57-81.
- 野尻湖珪藻グループ 野尻湖層の珪藻遺骸群集. 地質学論集、19、1980 75-100.
- 第8次野尻湖発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集. 地団研専報、27、1984 63-82.
- 第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集. 地団研専報、32、1987 57-71.
- Patrick, R. and C.W.Reimer The Diatoms of the United States. *Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia*, No.13, Philadelphia. 1966・1975 688p., 213p.
- Schoeman, F.R. A Systematical and Ecological Study of the Diatom Flora of Lesotho with special Reference to the water quality. Pretoria, South Africa. 1973 355p.
- 佐瀬 隆・加藤芳朗 現世ならびに埋没火山灰土腐植層中の植物起源粒子—とくに植物珪酸体に関する研究(第I・II報). 第四紀研究、15、1976 21-32、66-74.
- 佐瀬 隆・細野 衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治 武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体分析. 第四紀研究、26、1987 1-11.
- 多度団研珪藻グループ 三重県北勢地域の奄芸層群上部から産した珪藻化石と古環境. 瑞浪市化石博物館研究報告、No.15、1988 39-56.
- 辻誠一郎 日本の第四紀植生史研究の諸問題. 植生史研究、1、1986 3-18.

第5章 考 察

第1節 町田遺跡火山灰下層出土の縄文土器の編年的位置づけ

1. はじめに

本稿は、第3章第1節でとりあげた縄文土器のうち、同時性の高い資料とした火山灰下層出土の土器を他遺跡出土の縄文土器と比較検討し、その編年的位置づけを試みるものである。先述したように、この資料は縄文中期中葉の北屋敷式土器を主体とし、瀬戸内系の船元式土器、関東・中部系の勝坂式土器を客体的に含む土器組成を示し、当該期の縄文土器の併向関係を示す重要な資料となり得るものである。

なお、船元式土器、勝坂式土器の分類・編年については、特にことわりのないかぎり、第3章第1節の註に掲げた文献に依拠する。

2. 北屋敷式土器の研究の現状

北屋敷式土器は、渥美郡渥美町の北屋敷貝塚出土の縄文土器を基準資料とする⁽¹⁾。しかしながら、その資料は公開されず、久永春男氏は口縁部に施文された三角形の連続刺突文を特徴とする土器群を中期中葉に属する土器として、北屋敷式土器を設定した。その後、紅村弘氏は北屋敷貝塚出土土器（南山大学資料）に中期初頭の土器が混在することを指適した⁽²⁾。この「南山大学資料」により、増子康真氏は梨久保式、鷹島式を組成の主体とする一群を北屋敷Ⅰ式として分離し⁽³⁾、中期中葉の土器を北屋敷Ⅱ式とし、その細分案も提示している⁽⁴⁾。

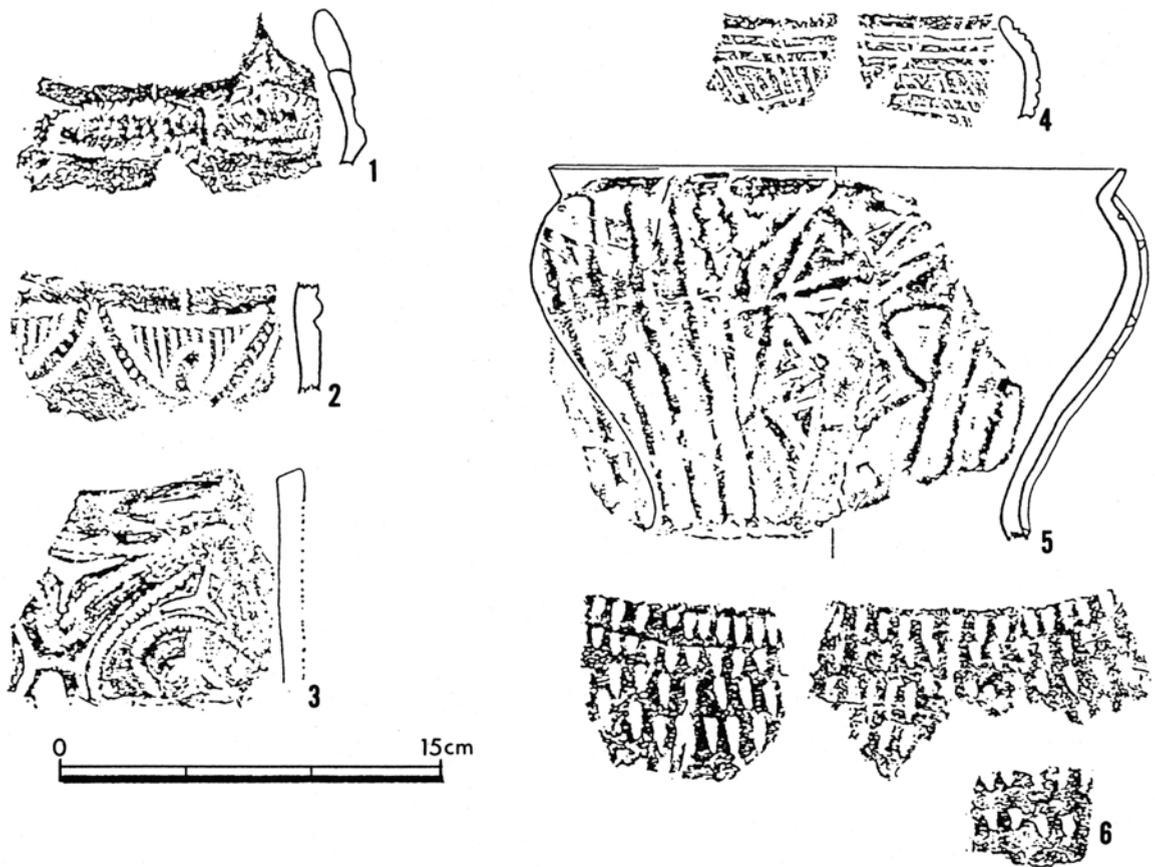
しかし、現在に至るまで、層位的に、または一括資料として北屋敷式土器を捉え得る資料は極めて少なく⁽⁵⁾、組成・器種構成に不明な点が多い。

3. 一括資料の検討

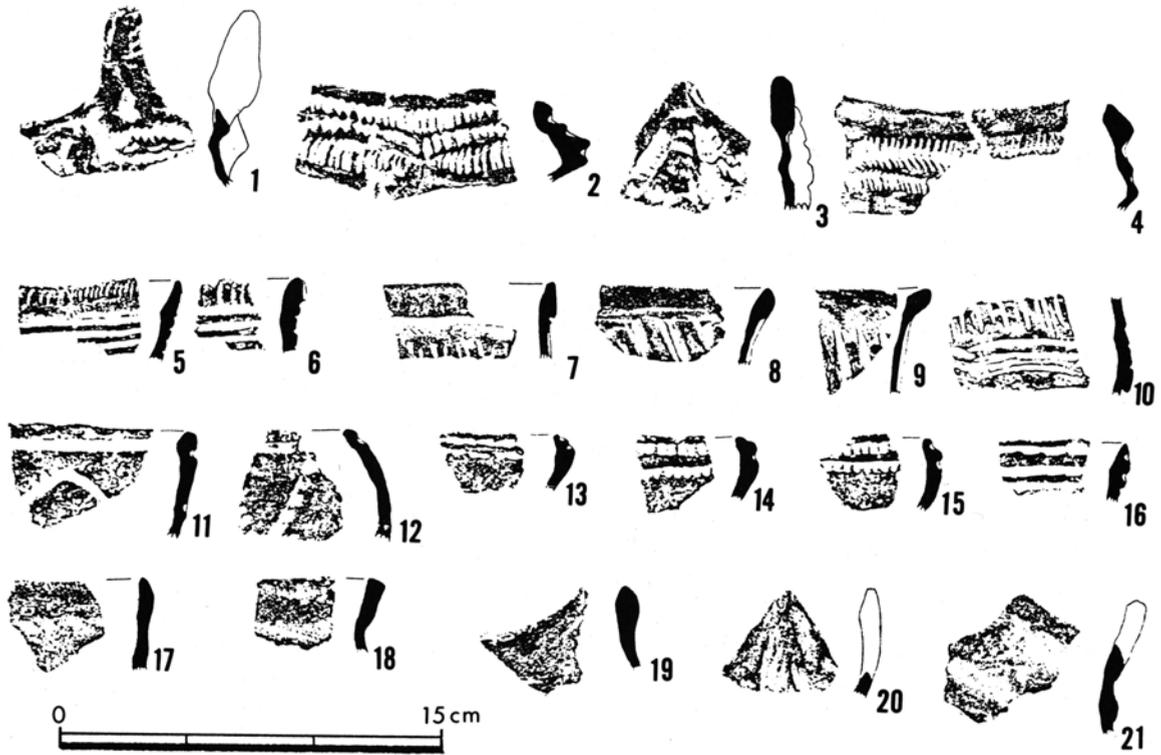
上述した資料の少なさにより、町田遺跡出土の縄文土器と同時期の良好な土器組成を示す資料が愛知県内にはない。ここでは、岐阜県益田郡萩原町に所在する沖田遺跡⁽⁶⁾住居跡出土土器を検討することにする（第27図）。

沖田遺跡住居跡出土の土器は、北屋敷式土器を客体的に伴ない、船元Ⅲ式A類(5)、B類(4)、E類(6)と、「勝坂3式新相」土器⁽⁷⁾（2・3）、北陸系の上山田式土器を組成する。北屋敷式土器は、波状口縁をなす口縁部に楕円区画文を隆帯によって構成する(1)。その楕円区画文内は「く」の字形を呈する連続爪形文を充填しており、町田遺跡1類aに類似した特徴を有する。

以上、沖田遺跡住居内一括資料の北屋敷式土器の特徴、および船元Ⅲ式、「勝坂3式（新相）」共伴は町田遺跡火山灰下層の土器組成と矛盾しない。このことより、町田遺跡火山灰下層の縄文土器は同時性の高い資料と考えられ、当該期の北屋敷式土器の組成を示す基準資料といえる。



第27図 沖田遺跡竪穴住居跡出土の縄文土器 (註6)文献より転載)



第28図 清水の上貝塚C層出土の縄文土器 (註5)文献より転載)

4. 北屋敷式における編年的位置

北屋敷式土器の良好な土器組成を示す清水の上貝塚C層出土の縄文土器（第28図）と型式学的に比較検討をおこなう。

報告者の山下氏によって、次の4類に分類されている⁽⁸⁾。

第三群第2類A 口縁部に文様が集約され、「く」の字形を呈する爪形文によって隆線を作り出す。

（1～4）（以下、第三群は省略）

第2類B（11～16）棒状施文具などで、器面に押し沈線を引いたり、連続爪形文を施文する。

第2類C（5～10）半載竹管状施文具で文様を構成する。口縁部は、同施文具による連続爪形文を施文するもの（5、6）と、肥厚させるもの（7～9）とがある。

第2類D（17～21）無文土器。

ここでは、清水の上第2類A・第2類Cと町田遺跡出土の北屋敷式土器を比較検討する。

清水の上第2類Aは町田1類aと文様構成上、系統を同じくする。町田1類aとの相違点は、文様を構成する爪形文が細かく、より緻密であることがあげられる。また、隆線の成形技法が町田1類aと異なる。

清水の上第2類Cは、町田3類と系統を同じくする。町田3類との相違点を次に列挙する。①口縁部に連続爪形文を施文する例が認められる（5、6）。②半載竹管状施文具による施文が、町田3類より深く、鋭い。

以上の相違点を中期初頭からの爪形文系列の型式学的序列⁽⁹⁾から考えるならば、町田遺跡の北屋敷式土器は、清水の上貝塚より新しい様相を示す⁽¹⁰⁾。

5. おわりに

他遺跡出土の縄文土器とを比較検討した結果、町田遺跡火山灰下層の縄文土器は、北屋敷式土器の基準資料となりえ、清水の上貝塚C層出土の縄文土器より後出することが明らかとなった。今後、沖積地の縄文遺跡の調査が進めば、北屋敷式土器の資料が増加すると考えられ⁽¹¹⁾、その細分は今後に期待するところが大きい。

〔追記〕

尾張平野部の北屋敷土器としては佐野遺跡出土例⁽¹²⁾以外に、瀬戸市針原遺跡⁽¹³⁾、小牧市織田井戸遺跡⁽¹⁴⁾にみられるが、いずれもまとまった資料ではない。

資料収集にあたっては、多くの方々に御高配を賜わり、あわせて有益なる御教示をいただいた。末筆ながら、心より感謝申し上げます。

安達厚三 磯部幸男 伊藤正人 大熊厚志 鈴木茂夫 鈴木昭彦 野口哲也 松井直樹 山下勝年
名古屋市博物館 西尾市教育委員会 足助資料館 瀬戸市歴史民俗資料館 豊田市郷土資料館（敬称略）

(註)

- (1) 北屋敷貝塚出土の縄文土器のうち、豊橋市美術博物館所蔵の資料については、岩瀬氏の報告がある。北屋敷式土器の研究史は、この文献が詳しい。

岩瀬彰利「東三河における縄文中期中葉の土器について—北屋敷式土器の実体を探る—」『三河考古』創刊号 1988
1～8頁

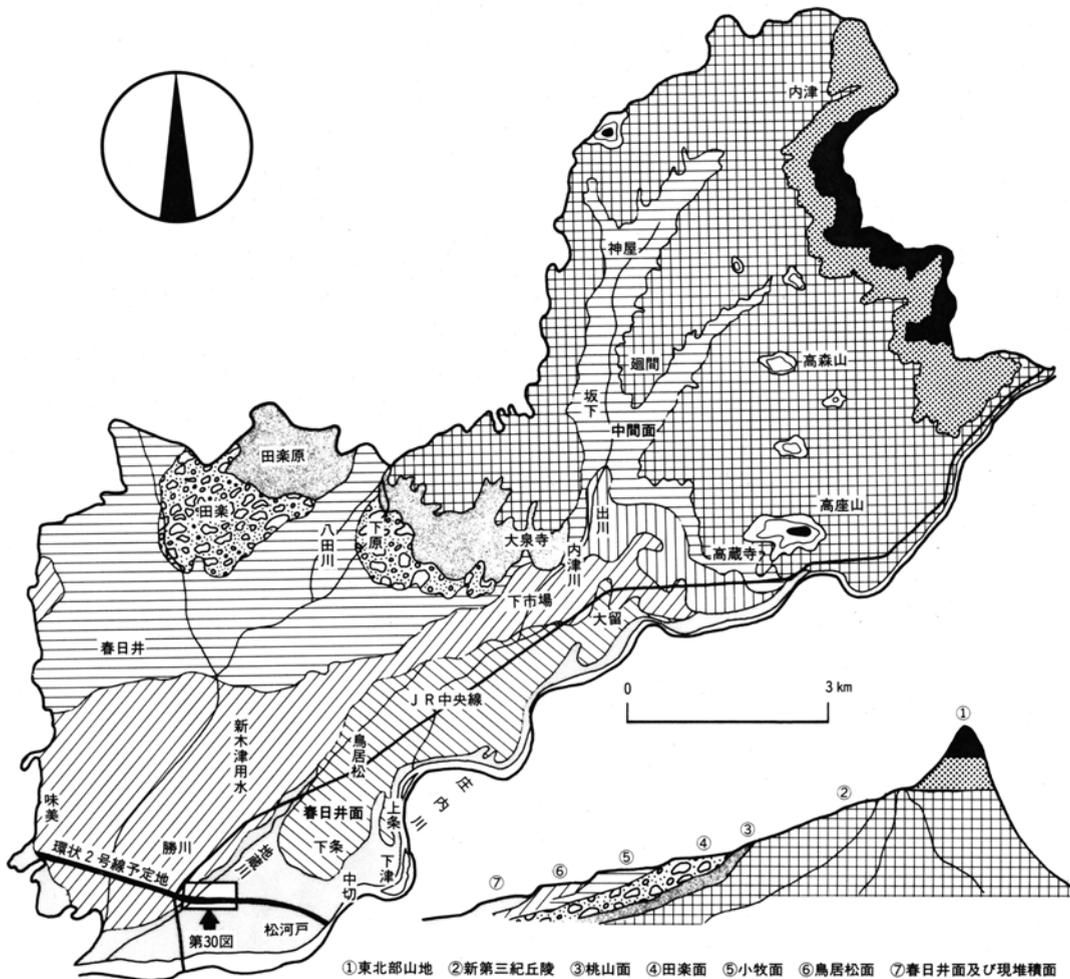
- (2) 紅村弘『東海の先史遺跡』綜括編 名古屋鉄道株式会社 1963 270頁
- (3) 増子康眞「東海西部の縄文前半型式編年試論—南森遺跡縄文式土器の考察に代えて—」『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』八百津町教育委員会 1980 16～23頁
- (4) 増子康眞「東海西部沿岸地域縄文中期前半土器型式の検討—北屋敷式の細別と咲畑式の再検討」『知多古文化研究』2 知多古文化研究会 1986 69～84頁
増子氏の細分案は「恣意的な資料操作による型式学的序列」である（佐原眞「遺物変遷の順を追う—型式学的方法の原理—」『古代史発掘』5 講談社 1974 133～136頁）。後述するように、一括資料で検討をくわえると、69頁の「縄文中期編年表」は、他地域との併行関係より破綻をきたす。
- (5) 県内の報告書で見ると、層位的に北屋敷式土器が捉えられ、かつ組成の解る例は、清水の上C層出土の縄文土器だけである（山下勝年・磯部幸男・杉崎章『清水の上貝塚』南知多町教育委員会 1976）。なお、未発表資料ながら北屋敷式土器を細分する可能性のある土器群としては、南知多町山田平遺跡出土土器がある。磯部幸男、山下勝年氏の御高配により実見する機会を得た。
- (6) 紅村弘・増子康眞他「沖田遺跡」『飛驒桜洞、沖田』萩原町教育委員会 1973 51～76頁
- (7) 『勝坂式土器の研究』にV式の勝坂式土器として紹介してある（第3章第1節註(6)文献94頁）。
- (8) 註(5)文献34頁
- (9) 註(3)文献に同じ。
- (10) 北屋敷貝塚、桜遺跡出土の北屋敷式土器（註(1)文献）は清水の上貝塚と同時期と考えられ、北屋敷貝塚出土の勝坂式土器は、IV式の資料として紹介されている（註(7)文献94頁）。
- (11) 標式遺跡となっている北屋敷貝塚（標高2m）を初め、低地に立地する遺跡がこの時期に多い。「縄文中期小海退」が指摘されており（前田保夫・山下勝年・松島義章・渡辺誠「愛知県先苅貝塚と縄文海進」『第四紀研究』第22巻第3号 1983 213～222頁）、資料の少なさは、このことと無関係ではないと考える。
- (12) 澄田正一・大参義一・岩野見司「佐野遺跡」『新編 一宮市史資料編一』一宮市役所 1970 10～36頁
- (13) 安達厚三氏の御教示による。瀬戸市歴史民俗資料館の御厚意により実見する機会を得た。
- (14) 中島隆『織田井戸遺跡発掘調査報告書』小牧市教育委員会 1983 62頁

第2節 勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について

1. はじめに

勝川遺跡苗田地区を初め、町田・松河戸遺跡は、当初、条里制遺構の形成過程の究明を目的の一つとして発掘調査が実施された。ところが、調査を進めるにつれ、15世紀代にさかのぼり得る水田下、弥生時代の遺構の下より、少なからずの縄文土器が発見され、ついには松河戸遺跡62E・F・G区の微高地上に縄文時代の遺構が発見されるに至っている。

ところで、このような沖積地の埋没地形に立地する縄文遺跡の重要性について言及したのは渡辺誠氏が嚆矢である。京都府舞鶴市の由良川の自然堤防上に立地する桑飼下遺跡の発掘調査を実施した渡辺氏は、その報告書の「立地条件をめぐる諸問題」の中で、西南日本の地形の特質にふれ、西南日本に縄文遺跡が見かけ上少ない理由として、平野の扇状地や自然堤防上に遺跡が立地している例が少なくないことをあげている⁽¹⁾。その後、泉拓良・亀井節夫氏らによって扇状地末端に立地する京都市北白河追分町縄文遺跡が、考古学・自然科学的に発掘調査され、渡辺氏のあげた地形的要因だけではなく、



第29図 春日井の地形及び断面図 (註3)文献より一部加筆して作製)

「扇状地末端の植生が集落の占地と深くかかわっていた」ことを指摘するに至った⁽²⁾。

本稿ではこれらの先駆的業績に導かれつつ、勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について考えていくこととする。なお、自然科学の分野では、井関弘太郎・海津正倫・森勇一の各氏より有益な御助言ならびに御協力をいただいた。心より感謝申し上げます。

2. 自然地形の概要と古地形の復元

春日井市の地形 春日井市は日本有数の犬山扇状地の南東部に位置し、西南に向って低下する地盤傾斜をなす⁽³⁾。地形は東北部山地、新第三紀丘陵、その西南に広がる段丘面および沖積面（現堆積面）の4区に大別される（第29図）。丘陵地域は西は濃尾平野に面し、南は西流する庄内川に開析され、また丘陵中を北から南に流れる庄内川の支流、内津川などによって南北の谷がぎざまれる。これらの丘陵地域の開析谷に沿って、順次新しい段丘面が形成される。

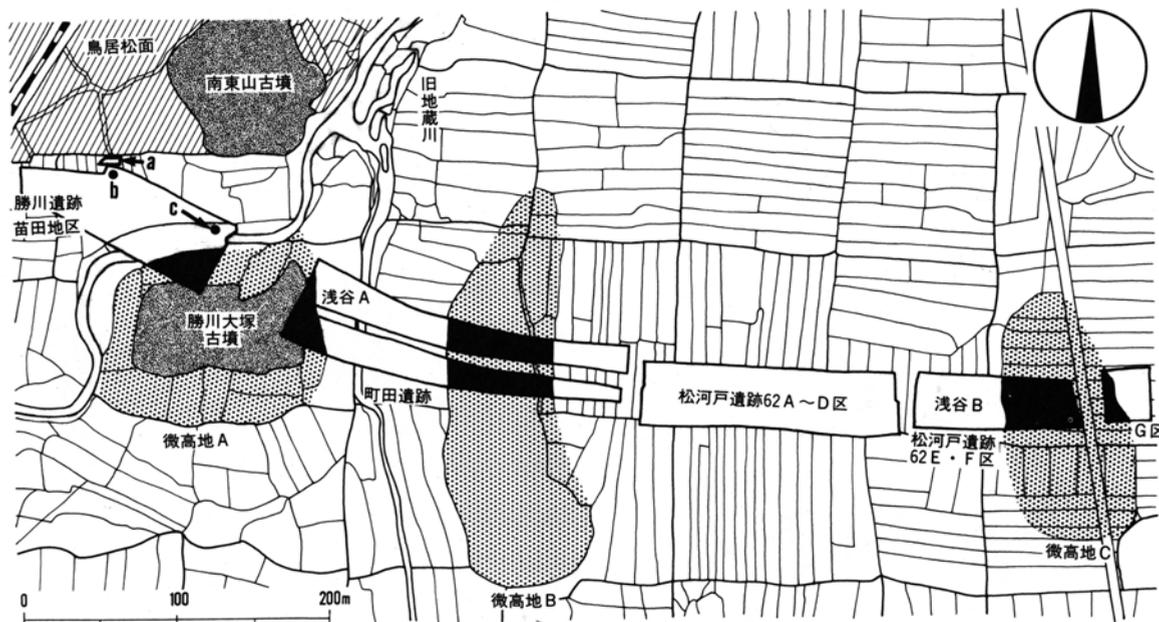
古地形の復元 鳥居松段丘は南東山古墳の南に比高差約4mの段丘崖を形成し、沖積面下へ埋没する⁽⁴⁾。縄文土器や遺構は、その段丘の形成する埋没微地形より発見・確認されている。旧地蔵川以東には縄文土器・遺構が発見された南北に細長い三列の微高地が、水田の地割の乱れより推定できる。その形状より、基本的には庄内川水系の下刻作用により残丘状に形成された微高地と考えられる⁽⁵⁾。

微高地A（町田遺跡西微高地）の東端に南北に走る浅谷A、微高地Cの西側に南北に走る浅谷Bは、それぞれ、G～Jトレンチ（第5図）、第33図のセクションにより確認されたものであり、いずれも土層の観察により「浅谷状の落ち込み」が見られる。また、両浅谷とも火山灰層を挟在し、その層以下は下記のように類似した層序をなす（以下、浅谷Aは町田、浅谷Bは松河戸として説明）。

町田第11層——松河戸第3層（火山灰層を上位に挟在）

町田第12層——松河戸第5層

町田第15層——松河戸第9層（黒バンドI）



第30図 古地形の復元（推定、昭和14年地籍図より一部改変して作製）

町田第16層——松河戸第11層（松河戸第11層より中期末の縄文土器）

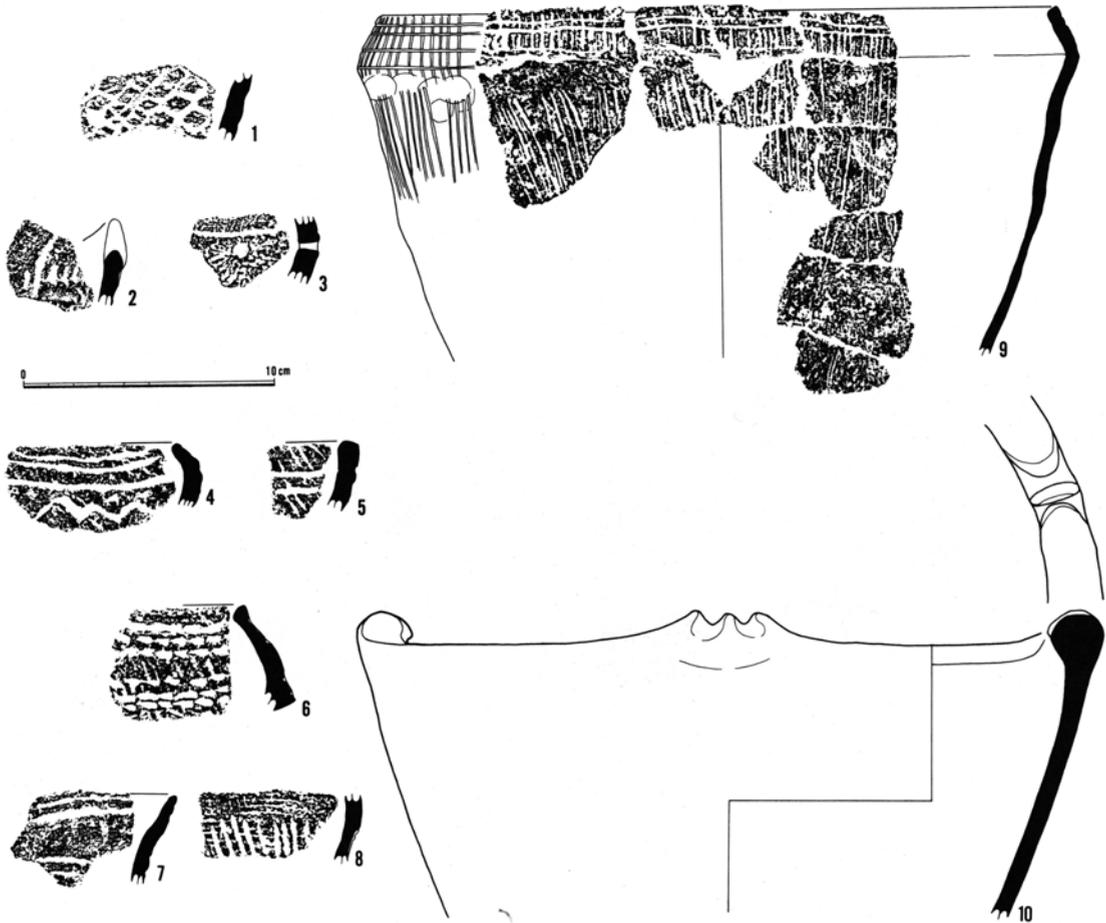
町田第19層——松河戸第13層（町田第19層より中期中葉の縄文土器）

このことより、この「浅谷状の落ち込み」はほぼ同時に形成され、その後埋積していったことが類推される。また、町田第19層下部礫層上面より中期中葉の縄文土器がまとまって出土したことより、その浅谷が形成された時期は、その土器が堆積する直前の時期と考えられる。同様の浅谷例は、辻誠一郎氏により縄文中期小海退に伴う埋積浅谷が報告されており⁽⁶⁾、それとの関連性が高いと考えられる。なお、珪藻・昆虫遺体の分析では、縄文中期に冷涼な気候を示しているのもその傍証かと思われる。

以上の諸点より、勝川遺跡苗田地区以東の遺跡が立地する地形の基盤は埋没する鳥居松段丘面に該当し、地藏川以東の微高地は、時期は特定しえないが、庄内川水系の下刻作用により形成されたものと考えられる。また、微高地縁辺の浅谷は縄文中期に形成された埋積浅谷の可能性が高いと考えられる。なお、埋積浅谷周辺はハンノキや広葉樹が茂る池沼的環境が推定されており⁽⁷⁾（縄文中期）、現在とは異なる自然景観が想定される。

3. 遺跡（縄文土器出土地）概要

旧地藏川以西と以東に分けて記述する。なお、微高地A（町田遺跡西微高地）、微高地B（町田遺跡東微高地）は、第3章第1節の記述をもって替えることとする。



第31図 勝川・松河戸遺跡出土の縄文土器（1：3）

旧地藏川以西の縄文土器(第31図 1～3)

1は勝川遺跡63B区より中・近世陶器類と混在して出土(第30図a)⁽⁸⁾。二次堆積の資料であるが、勝川遺跡苗田地区の水田跡の遺物を含むことより、この近辺の資料と考えたい。菱形を呈する楕円押型文で、一部文様が重複する(縄文早期)。

2は勝川遺跡62F区のSX01下部より出土⁽⁹⁾(第30図b)。波状をなす口縁部に爪形文を横位に施文する。町田遺跡の北屋敷式より新しい様相を示す。

3は勝川遺跡62F区のSD01(旧地藏川)最下層より出土(第30図c)。磨消縄文で、沈線下は巻貝による擬縄文を施し、意図的に穿孔されている(後期中葉)。

他に昭和57年度の調査で晩期後葉の土器が出土している⁽¹⁰⁾。

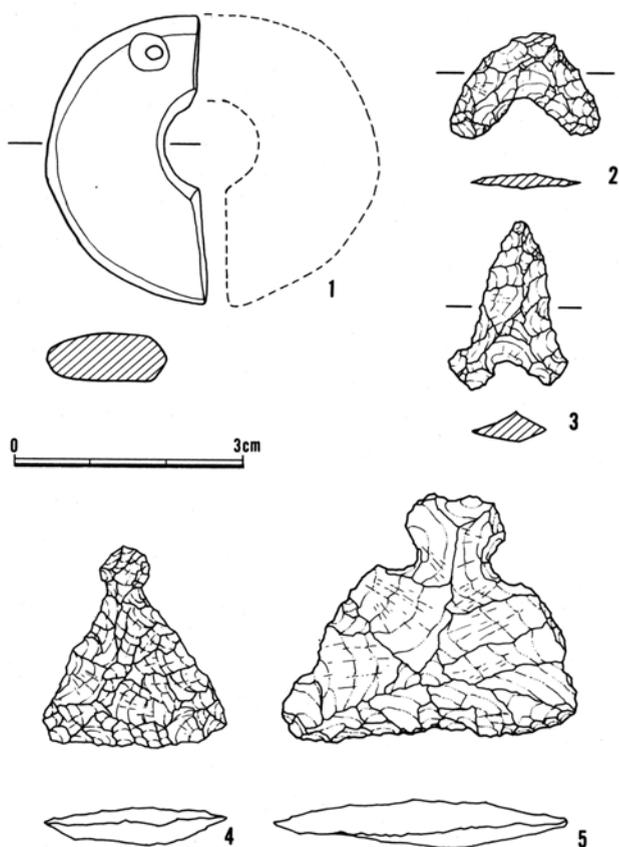
旧地藏川以東の縄文土器(第31図 4～10)

4～9は松河戸遺跡62E区の浅谷Bより出土した中期末の土器群。4・5は第10層南壁断面(第33図)にかかっていたもの。4・5とも口縁部に沈線文を施す。6～9は10・11層の上位より出土した縄文土器。6は地文に縄文を施し、口縁部に平行して連続刺突文を施す。7・8は横位または縦位に沈線を施す。9は縦位の条痕を地文とし、内傾する口縁部に上・下二段の半截竹管文を施す。器面全体に指頭痕が認められる。

微高地Cの遺構検出面は暗褐色粘質土であるため土器の残りが悪く、時期を特定できるものはほとんどない。10は波状口縁をなす深鉢で、口縁部は「く」の字状を呈し、肥厚した口縁部に、長方形の区画文を配す(後期前半)。

松河戸遺跡62E・F・G区の遺構 集落の中心は微高地Cの東半にあり、そのなかでも集石⁽¹¹⁾を伴う堅穴状遺構・集石炉のあたりに主要遺構が集中している(第34図)。また、2,000点余りの剥片・チップや石器の大半はその範囲に集中して出土した⁽¹²⁾。前述したように土器の残りが悪いため、個々の遺構が形成された正確な時期は解らないが、玦状耳飾(第32図1)、抉りの深い無茎凹基の石鏃(同2)、縦型の石ヒ(同4)の存在から前期にさかのぼる遺構もあったものと思われる(石質は1ヒスイ、2～4チャート、5下呂石)。

微高地Cから浅谷Bまではテラスとなっており、土坑・ピット群が形成されている。土坑、ピット群は遺構の集中度よりI～III群に分けられ、自然地形に合わせ形成されていることが推測される(第34図)。また、微高地とテラスが接するあたりは「流水」の形跡が認められた。町田遺跡浅谷Aの自然科学分析では、湿地・池沼の環境が想定されており、テラスに形成された土坑群はドングリなどのア



第32図 松河戸遺跡62E・F区出土の石器(1:1)

ク抜き、水さらしの機能を有するものもあったことが類推できる⁽¹⁴⁾。微高地Cより、磨石・石皿・打製石斧等の植物性食糧と関連した石器が出土しているのもそのことを窮わせる。

集落の中心である微高地Cと土坑群のあるテラスは一体のものであり、そこには自然地形を巧みに利用した縄文人の知恵が看取されるのである。

4. まとめ

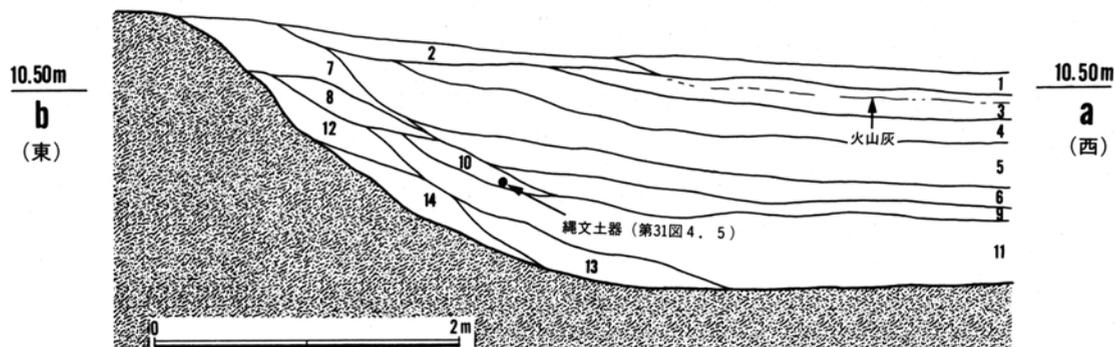
庄内川以西の尾張平野部の遺跡立地のあり方を比較検討してまとめとする。

尾張平野部の縄文文化は押型文期を初源とし、鳥居松段丘面に立地する当該期の遺跡は多い⁽¹⁵⁾。後背湿地をひかえた舌状微高地（北替地遺跡・織田井戸遺跡・総濠遺跡）、自然堤防（地藏堂遺跡・下林遺跡）、木曾川南岸（上野遺跡）に遺跡が立地している。このうち、織田井戸遺跡では堅穴住居を含む遺構が発掘されている⁽¹⁶⁾。当遺跡の石器組成より狩猟活動を中心としつつも、植物採取、魚撈等の生産活動も行われていたことが類推できる。鳥居松段丘に立地する遺跡および勝川遺跡出土の押型文土器も立地のあり方より、そのような生産活動を示すものと考えられる⁽¹⁷⁾。

前期～中期前半の遺跡は現在のところ極めて少ない（前期は佐野遺跡のみ）。佐野遺跡（標高約10m）は、扇状地に近接した自然堤防上に立地しており⁽¹⁸⁾、町田・松河戸遺跡と共通する地形面に立地している。

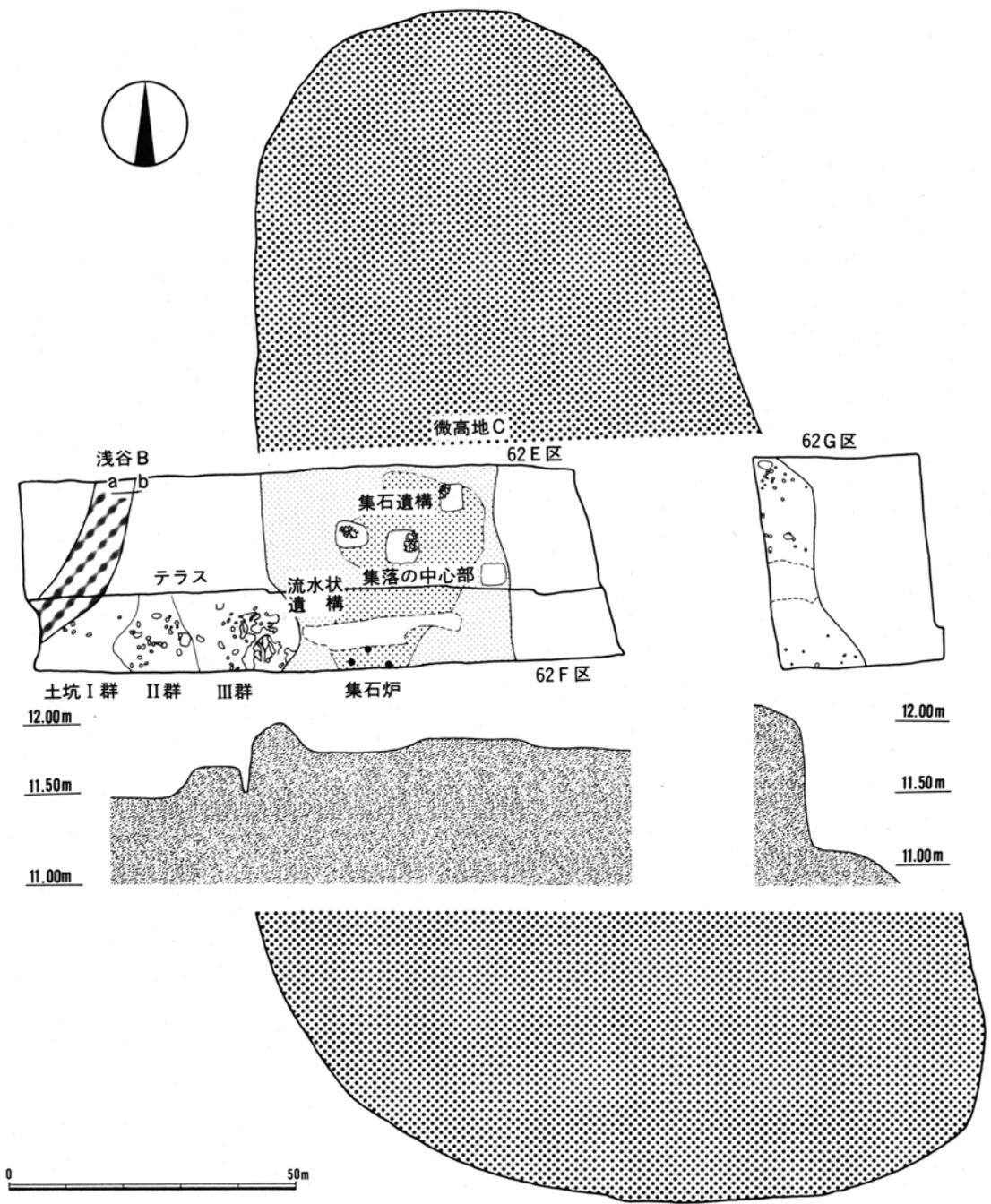
中期後半～晩期にかけては比較的多くの遺跡がみられる。特に、中期後半～末葉の時期に前出の佐野遺跡・ノンベ遺跡等⁽¹⁹⁾低地に立地する遺跡が多くなる。三角洲前置層に立地する朝日遺跡（標高約1m）でも中期末～後期前半にかけて遺跡が形成され⁽²⁰⁾、昭和63年度の調査では谷B⁽²¹⁾の南肩より貯蔵穴が発掘されている⁽²²⁾。杓子状木製品も61年度の調査で出土しており⁽²³⁾、植物性食糧に立脚した生活の一端が類推できる。なお、自然堤防上に立地する後期中葉の西北出遺跡でも貯蔵穴が発掘されており、マテバシイとアラカシの実が出土している⁽²⁴⁾。

以上、概観するかぎり、尾張平野部の遺跡立地のあり方は近畿地方と共通した点が多く、西日本的な遺跡立地を示している⁽²⁵⁾。勝川・町田・松河戸遺跡はその典型例の一つと考えられる。また、扇状地から低地部へ移行する地形面に立地する佐野遺跡とはほぼ同時期に遺跡が形成され、その後同様の推移がみられることは、縄文期の自然環境・植生との関わりで興味深い。



1. 黒色・灰色粘質土の互層 2. 黒褐色粘質土 3. 黒色・灰色粘質土互層（炭化物混在） 4. 黒色粘質土 5. 淡灰褐色粘質土 6. 黒色・灰褐色粘質土互層 7. 淡黒褐色粘質土 8. 灰褐色粘質土 9. 暗褐色粘質土 10. 灰色砂質土 11. 灰褐色泥炭 12. 暗青灰色砂質シルト 13. 暗褐色粘質土 14. 暗青灰色粘質土

第33図 松河戸遺跡 62E区 埋積浅谷南壁断面図（1：50）



第34図 松河戸遺跡 62E・F・G区の縄文集落 (1:1000)

※地形断面図は62F区南壁断面図と62G区北壁断面図を基にして作製した。

遺物の実測は、服部信博・野口哲也・五藤そのみの諸氏の協力を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

(註)

- (1) 渡辺誠「立地条件をめぐる諸問題」『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館 1975 309～312頁
- (2) 亀井節夫・泉拓良「北白河追分町縄文遺跡調査の成果と意義」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白河追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985 207～208頁
- (3) 春日井市の地形の記述は、下記の文献を参考にした。なお、第29図は『春日井市史』2頁の図1—1を基に、一部加筆修正して作製したものである。
井村重弘他「地形」『春日井市史』春日井市 1963 2～4頁
春日井団研グループ「春日井市付近の地形面」『中部地方の鮮新統および最新統』竹原平一教授記念論文集 1971 153～161頁
また、春日井市域を含む濃尾平野の地形は下記の文献を参考にした。
多田文男・井関弘太郎「濃尾平野の地形構造と地盤沈下」『駒澤地理』第25号 1989 1～36頁
- (4) このような埋没段丘面は、井関氏により「広義の沖積層基底礫層」と定義されているものにあたり、最終氷期の寒冷期に形成されたものと考えられている(井関弘太郎『沖積平野』東京大学出版会 1983)。
- (5) 調査により確認されたのは微高地の東西方向の範囲だけであり、南北方向に関しては地籍図による類推のみである。その意味ではあくまでも現時点での可能性というまでであり、その詳細は今後の自然科学の研究に委ねる必要がある。
- (6) 辻誠一郎「自然環境」『季刊考古学』第23号 雄山閣 1988 35～38頁
- (7) 森勇一「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『年報 昭和62年度』(勲愛知県埋蔵文化財センター 1988 118～137頁および本報告書。
- (8) 神谷友和・野口哲也「勝川遺跡」『年報昭和63年度』(勲愛知県埋蔵文化財センター 1989 40～43頁
- (9) 神谷友和・樋上昇・赤塚次郎「勝川遺跡」『年報 昭和62年度』(勲愛知県埋蔵文化財センター 1988 34～53頁
- (10) 石黒立人氏の御教示による。
石黒立人「弥生土器」『勝川』(勲愛知県教育サービスセンター 1984 34頁の第28図16
- (11) 集石はチャート・ホルンフェルス等の自然礫であり、石器製作等に用いられた礫と考えられる(阿部祥人・小葉一夫・小島正裕「縄文遺跡における『礫』の考古学的位置づけ—多摩丘陵出土の資料を中心として—」『古代文化』36—12 1984 521～536頁)。
- (12) 後藤浩一「松河戸遺跡」『年報 昭和62年度』(勲愛知県埋蔵文化財センター 1988 61頁
- (13) 西口氏の分類によると③式にあたる(西口陽一「耳飾からみた性別」『季刊考古学』第5号 雄山閣 1983 52～56頁)。
- (14) 潮見浩「縄文時代の食用植物—堅果類の貯蔵庫群を中心として—」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会 1977 121～144頁
- (15) 宮川芳照「尾張平野北部における縄文早期の文化」『知多古文化研究』2 知多古文化研究会 1986 35～41頁
- (16) 中島隆『織田井戸遺跡』小牧市教育委員会 1983
- (17) 斉藤幸恵「押型文系土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会 1987 137～152頁
- (18) 澄田正一・大参義一・岩野見司「佐野遺跡」『新編一宮市史 資料編一』一宮市役所 1970 10～36頁
- (19) 浅野清晴「ノンベ遺跡と縄文中期の文化」『岩倉市史 上巻』岩倉市史編集委員会 1985 139～147頁
- (20) 中川真文「縄文土器」『朝日遺跡Ⅰ』愛知県教育委員会 1982 115～117頁
- (21) 谷Bとは、井関氏によって解明された縄文後・晩期から弥生時代初頭にかけて形成された埋積浅谷の一つである(井

関弘太郎「朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察」〔註⑳文献〕 217～227頁。

- (2) 飴谷一「朝日遺跡の縄文時代貯蔵穴」『埋蔵文化財愛知』No.15 (愛知県埋蔵文化財センター 1989) 4頁
- (23) 酒井俊彦「朝日遺跡」『年報 昭和61年度』(愛知県埋蔵文化財センター 1987) 7頁
- (24) 浅野清晴「西北出遺跡と縄文後期の文化」〔註⑲文献〕 147～152頁
- (25) 泉拓良「縄文集落の地域的特質 近畿地方の事例研究」『講座 考古地理学』4 学生社 1985) 45～64頁

〔参考文献〕

市原壽文「考古学的立地論」『岩波講座日本考古学』2 岩波書店 1985) 248～288頁

泉拓良「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 1982) 75～99頁。

町田洋・新井房夫・森脇広『地層の知識 第四紀をさぐる』東京美術 1986

渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣 1975。

第3節 庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態

1. 「勝川遺跡町田地区」設定について

町田遺跡と地蔵川対岸の段丘上に勝川遺跡があり、まずその両者の関連について考えていく。町田遺跡については、第1章～第3章で述べてきたように、東・西微高地上に竪穴住居跡と方形周溝墓が確認でき、弥生時代にムラが存在したことが判明している。勝川遺跡との距離は、わずか数百m程であり、両者の関わりについて2つの遺跡とするのか1つの遺跡群として把えていくのか二つの解釈が成り立つ。

勝川遺跡は、昭和56～63年度にかけて多数の小調査区を設けて発掘調査を実施している。小字名を引用して南東山地区・上屋敷地区・苗田地区の3区分して全体を把えることができる。南東山地区は春日井市教育会が昭和44・45年に調査した南東山遺跡である。南東山地区では約1,500㎡に7軒の竪穴住居跡が確認でき、弥生時代中期が3軒・後期が4軒で、そのうち最も古いものはS B 02の西志賀II b期(朝日期⁽¹⁾)という。勝川遺跡63B区S D 01⁽²⁾や62J区S D 22⁽³⁾は、上層がかなり削平された幅2～3m・深さ0.5m程の溝が確認できた。63B区S D 01は長さ10m程、鳥居松段丘上縁辺に沿って東西に延びる溝で、62J区S D 22は長さ5m程の南北に延びる溝であり、両方とも溝底より弥生土器が多く出土した。土器の時期はどちらも高蔵期であり、その頃に埋没されたのであろう。S D 01とS D 22の溝の北東側に南東山地区の竪穴住居跡が位置し、この2条の溝が環濠になるだろうと推測できる。環濠に囲まれた居住域の西側に方形周溝墓が48基確認されている。主体部はほとんど無く、周溝のみを一部確認したのが多数で、周溝内より遺物があまり出土しないため、時期や規模に関しては不十分である。しかし現在、弥生中期のもの13基、後期18基、古墳時代初頭2基、古墳時代(須恵器出土)6基の計39基が確認されており、これらによって墓域を形成している。

鳥居松段丘下に立地する苗田地区は、昭和56・62両年度で発掘調査をした結果、掘立柱建物29棟・溝1条、棺材埋納土坑2基が確認された。62F区S D 01では、溝底の大きな凹み(S X 01)から木器の未製品が大量に出土している。掘立柱建物やその木器の出土状況からみて、木器加工の場所という解釈もなされている。棺材埋納土坑(S X 01・S X 02)はその板の材質がコウヤマキであり、しかも190×50cm、厚さ7cmを測る板材は、長辺を下にして立った状態で5枚並列になって出土した。材質や上屋敷地区で墓域を形成していることを考えると、これらの板材は主体部の棺に使用されたであろうと推測される。

以上のことから勝川遺跡は、この周辺地域にあって中心的な拠点集落であろうということは否定できない。再び町田遺跡に転じれば、そこでは弥生時代中期後半と弥生時代終末期頃の2時期に、人々が生活したということがいえる。母村と分村という大阪府安満遺跡周辺でみられるようなムラの形態がいえるのかどうか、愛知県朝日遺跡の南・北集落と東・西墓域が一体となって一つの遺跡を構成する形態をみると、町田遺跡のみで一つのムラを構成していくのは無理があるように感じられる。むしろ勝川遺跡群として含めて考えていく方が全体の様子がより詳しく解明できると考え、町田遺跡の弥生時代の遺構を「勝川遺跡町田地区」という把え方で今後進めていくことにしたい。

2. 勝川遺跡「町田地区」の遺構の時期

竪穴住居跡や方形周溝墓・溝など多数の弥生時代の遺構が確認できた。限られた調査区のため遺構の一部しか調査できないもののがかなりあり、現状の様子から判断して考えていく。

(1) S D03 (溝)

大量の土器が出土し、一括資料として十分の内容をもっている。壺A・Bの口縁部の凹線文の手法の採用や、甕A(106・107)の胴部の叩き手法の採用など畿内で普通にみられる内容をもっている。高杯では畿内地域出土の形態(129・130)と近似しているが、甕では台付甕が登場してくるなど煮沸用の土器は在地のものがみられる。甕A・Bでは、口縁部に刻みを施文したり、縦方向後横方向の刷毛目を施したり、東海地方固有の技法といえる。甕Bなど口縁部を折り返しするもの、甕Cは口縁端部を上方につまみあげるものなど形態差がみられる。壺の胴部破片の中には、格子文・扇形文・流水文など畿内的様相のものやへら描きの文様など三河地域の古井式・獅子懸式土器と近似するものが含まれており、周辺の諸要素をもつ土器が混在して出土するという興味深い内容である。それらの内容からみて、中期後半の高蔵期という時期に相当する良好な資料といえる。

(2) 方形周溝墓

町田地区で4基確認でき、全体の平面形態が解ったのはS Z01のみであった。4基のうち3基が4隅の切れるものであり、もう一基はL字状をなす周溝で、いずれも主体部など棺と思われるものは確認できず既に削平されてしまったのだろうと考えられる。周溝内より若干の遺物が出土したが、時期が確定できる程の内容ではなく平面形態から判断するしかない。S Z01・S Z02は1つの周溝を共有する2基の方形周溝墓であり、S Z01を先に造り、次いでS Z02を造ったことが窺える。S Z03はL字状の周溝を検出し深さも大変浅いものである。S Z04は1辺の周溝を検出し、底面より壺(300)が出土した。その土器はゆるやかに外反する口縁部で端部は方形状におわる。頸部に列点文が2帯施文された他は磨滅で十分に解らない。それらの内容から時期を決めるのは困難であるが、およそ中期後半～後期初頭に位置づけることができるだろう。

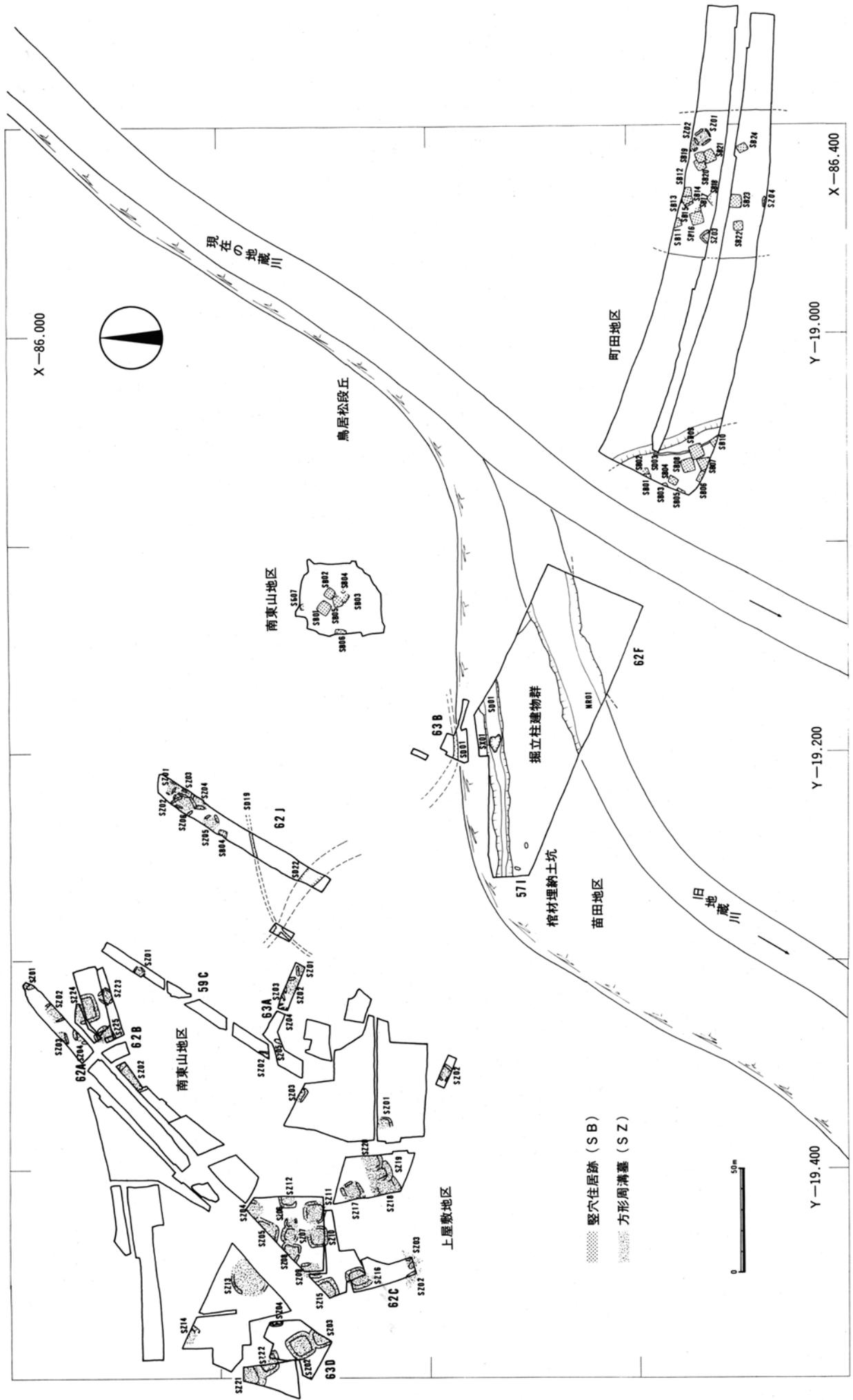
(3) 竪穴住居跡

東微高地14軒・西微高地10軒を検出し、いずれも方形状の平面形態である。しかしそれらの中でも個々をみていくと、多少の時間差を把握することができる。

中期後半の竪穴住居跡は2軒ある。S B05は東側の1部を調査し、壺165・甕166が出土し、S D03出土土器と類似する。S B23は南側の大半を調査し、外面に条痕文を施す壺287が出土する。

後期前半はS B02・S B10がある。S B02は壺153・甕154～156が出土し、S B01によって切られているのでそれより古いといえる。S B10は甕216・217、高杯218が出土し、S D03埋没後につくられたものである。

後期後半は10軒みられた。S B01は鉢152が床面で倒立の状態出土し、尖底気味の平底である。S B03は台付甕157や中位がくびれる器台159が出土している。S B04は高杯163が出土し、直線的に外下方へのび脚端部が内側にのびている。高杯161は混入であろう。S B07は台付甕175・高杯167・177・179が出土し、177は脚部が屈曲するかもしれない。S B12は甕219・220・高杯221が出土し、219は口縁部が外反気味で端部は丸くおわる。S B15は杯底部より口縁部が外反し、端部は方形状におわる。



第35図 勝川遺跡遺構配置図 (調査区名は関係分のみ記す。1 : 2500)

第16表 勝川遺跡主要遺構計測値

遺構名	方位	規模 (m)			時期
		長さ	幅	深さ	
勝川'84 S Z01	N-5°-W	(7)	0.8~1.0	0.2~0.4	
" S Z02	N-49°-W	8	0.8~1.2	0.3~0.5	
" S Z03	N-54°-W	(7)	0.4	0.15	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z04	N-6°-E	—	1.0~1.2	0.1	
" S Z05	N-26°-E	—	1.0~1.4	0.2	古墳時代初頭
" S Z06	N-4°-E	6	0.7	0.1	
" S Z07	N-71°-W	8	1.4~1.6	0.15	
" S Z08	N-10°-E	9	1.0~1.2	0.2~0.4	
" S Z09	N-14°-W	(10×8)	1.2	0.15	古墳時代初頭
" S Z10	N-8°-W	10	1.0~1.6	0.1~0.5	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z11	N-8°-W	11	1.3~1.4	0.15~0.3	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z12	N-6°-E	9	1~1.4	0.15~0.4	
" S Z13	円径	径16m	1.2	0.2	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z14	N-59°-W	—	1.5~2	0.2	中期前半
" S Z15	N-26°-W	12	1.5~2	0.6~0.7	後期
" S Z16	N-23°-W	10	1.0~1.8	0.15~0.3	後期
" S Z17	N-17°-W	9	1.0~1.5	0.2~0.3	後期
" S Z18	N-26°-W	(12)以上	2.0~2.2	0.5~0.6	後期
" S Z19	N-22°-W	9	1.8~2.0	0.3~0.4	後期
" S Z20	N-12°-W	7	1.5~1.8	0.5~0.6	後期
" S Z21	N-31°-W	(15)	3~3.5	1	
" S Z22	N-25°-W	9	1.8	0.8~0.9	後期
勝川'88 S Z23	N-52°-W	8.4×7	0.35~0.5	0.63	中期後半
" S Z24	N-17°-W	14	0.6~1.2	0.65	後期
" S Z25	N-21°-W	7.5	0.8	0.85	後期
59C S Z01	N-50°-W	5.6	0.8	0.5	中期後半
" S Z02	N-7°-E	—	0.9	0.1	古墳時代(須恵器出現後)
62A S Z01	N-30°-W	—	2.5	0.2	後期
" S Z02	N-27°-W	9.5	0.5	0.2	後期
" S Z03	N-14°-W	(8)	1.0~1.2	0.3	後期
" S Z04	N-1°-W	—	0.2	0.2	後期
62B S Z02	N-36°-W	17.5	1.5~2.5	0.53	中期後半
62D S Z02	—	—	(2.5)	0.3	後期
" S Z03	—	—	2.8	0.2	後期
62J S Z01	N-50°-W	6.0	0.7	0.14	中期後半
" S Z02	N-72°-W	6.8	0.7~1	0.44	中期後半
" S Z03	N-65°-W	(6)	1.0	0.2	中期後半
" S Z04	N-75°-W	(9)	1.6	0.6	中期後半
" S Z05	N-28°-W	(7)	1.0~1.4	0.3	中期後半
" S Z06	N-31°-W	(10.5)	1.2~1.5	0.34~0.4	中期後半
63A S Z01	N-6°-W	(7)	1.2	0.6	中期前半
" S Z02	N-7°-W	(9)	1.0~1.3	0.35	中期後半
" S Z03	N-17°-W	(7)	0.7	0.25	中期後半
" S Z04	—	—	0.8~1	0.25	中期後半
" S Z05	N-18°-E	—	1.5	0.5	古墳時代(須恵器出現後)
63D S Z02	N-34°-W	—	1	0.3	後期
" S Z03	N-22°-W	8	1.0~2.2	0.2	後期
" S Z04	N-16°-W	7	1.5	0.2	後期

※南東山、勝川'84や勝川'88は発掘調査報告書による遺構名であり、その他は調査時の遺構名を用いた。

遺構名	方位	規模 (m)		時期
		長さ	深さ	
南東山 S B01	N-59.3°-E	5	0.15	後期
" S B02	N-6.7°-W	4.5×3.9	—	中期後半
" S B03	N-26.7°-W	4	—	後期
" S B04	—	—	—	中期後半
" S B05	N-4.3°-E	4.5×5	—	後期
" S B06	N-18.3°-E	4.5	—	後期
" S B07	N-9.3°-E	2.5	—	中期前半
62J S B04	N-23.3°-E	4.2×3.2	0.2	中期後半

S B16は甕234、高杯236が出土し、236は脚部が外反している。S B17は壺248が出土し、上げ底の底部であり、瓢型壺であろう。S B21は壺276・277や高杯が出土し、276・277は口縁部が外反している。S B24は壺288・小型器台が出土し、299は受部中央が貫通する脚部である。それらの堅穴住居跡出土の土器は完成品がなく、時期の決め手に欠けるものであり、全体では壺は文様が消失し、甕は台付で外方へのびている。そこで宮腰健司・赤塚次郎両氏⁽⁴⁾の編年案にあてはめると、宮腰氏の4～6期、赤塚氏の元屋敷様式前半期に相当する。

古墳時代前期は6軒見られる。S B06は小型器台の受部180が出土している。S B08はS字甕193・194・205～207、小型器台198・199・201・小型丸底壺202が出土している。そのうち193はS字甕C類である。S B09は高杯215が出土し、杯部は外方へのび、脚部は外反しながら外方へのびる。S B14は鉢231が出土し、胴部低位が膨らみ、パレススタイル壺の胴部に近似する。S B19はS字甕が出土し、C類に相当する。S B20は小型器台259・260・高杯274・275が出土し、259・260は杯部が碗状であり、274・275は脚部が外反しながら外方へのびる。それらの堅穴住居跡の時期は、新しい土器の内容を重視して、前述の両氏の編年案と対比して古墳時代前半期としたい。S B19とS B20は調査時と報告時とで遺構の切り合い関係が逆となってしまう。若干の問題点をかかえている。町田地区以外の南東山・上屋敷・苗田地区の各遺構については、『報告書』や『年報』で紹介されているので個々についてはふれず、第16・17表という形で載せておくことにする。上屋敷地区の方形周溝墓の中には、須恵器をもつものも5基あるが、町田地区では確認できていない。調査区外の微高地についても、おそらくみられないだろうと思われる。

3. 勝川ムラの復元

勝川ムラ全体の様子を概観すると、中期前半に南東山地区S B07に人が住み始めた。この時期の墓には63A区S Z01がある。その頃の環濠の有無については言及できない。しばらく安定した生活を営んでいたが、中期後半になって大きな変化が見られる。遺構の数が増え、それに付随して遺跡が大きく拡がり、環濠が作られたのである。南東山地区S B02・S B04、上屋敷地区62J区S B04の堅穴住居跡が作られ、62J区S Z01～S Z06、63A区S Z02～S Z04、59C区S Z01、62B区S Z02、S Z23が作られ、明確な居住域と墓域が形成された。その両者の間に62J区S D22、63B区S D01の環濠が作られた。両者とも上部はかなり削平され、S D22は幅3m・S D01は幅1～2mで、深さは両方とも30cm程である。その比高差は1mあり、北から南へ水が流れるようになっていて、それが苗田地区62F区NR01に注いだようだ。しかしその2つの確認した溝の底面より大量に土器が出土し、中期後半から後期初頭までの短い期間に埋まってしまったようである。そして町田地区にもS Z01～S Z04やS D03のように人々が住み始めた様子が見られた。人口増加に伴う居住域の拡散であろうし、その頃尾張平野一帯で微高地が出現するという北野信彦氏⁽⁵⁾の考えがあり、参考としたい論考である。62F区S D01内のS X01という深溜りの場所では木器の製作途中のものが大量に出土したり、S X01とNR01の間の平地では、掘立柱建物が約30棟確認できたりして、木器製作の空間であろうと解釈されている。57I区では、棺材埋納土坑が2基検出した。上屋敷地区の墓域と強い関連性をもっている。後期前半～後半にかけて南東山地区ではS B01・S B03・S B05・S B06が中期と同じ所へ堅穴住居跡が

作られているのに対して、方形周溝墓では62A区S Z 01、S Z 02、S Z 03、勝川'84 S Z 18~20、S Z 15~17、S Z 08、S Z 22、S Z 23、S Z 24、S Z 25がある。居住域はほぼ一定の場所であるが、墓域は中期の墓域より北へのびる一群と西へのびる一群と2つに分かれる。古墳時代前半にはS Z 04、S Z 05、S Z 09があり、古墳時代中期、5世紀末~6世紀初頭はS Z 11、10、13、59C区S Z 02で、S Z 13は円墳であり、2群の墓域の西側のみが存続していたのがわかる。もう一方については何とも言えない。墓域をみていくと、数多くあるうちでS Z 15のみに主体部が確認できた。その大きさは長さ2.3×4 m（木棺：1×3 m推定）、深さ28cmであり、おそらく木棺直葬であろう。周溝から内外面をへら磨きした壺と、外面を丹彩した壺の胴部下半部のみが出土し、後期終末頃と思われる。そしてS Z 18~20や、S Z 06~08、S Z 21、22、63D区S Z 02・03など一つの周溝を共有しているものが存在したり、62J区S Z 06は、他の周溝墓と重複していたりして、色々な様子が見られる。おそらく血縁的な結びつきによるものであろう。62B区S Z 02は一辺16mと大きく、他のものとは異なり、周溝の底より壺が3個体分出土している。一つの墓域の中に作られながらも大小の差があり、死者の階層差があったのだらうと思われる。中期から後期になるにつれて社会的変化が生じ、町田地区へも人々が生活し始めたのであろう。町田地区の東・西微高地と南東山地区との間に、内容的な差はみられないが、ある種の階層や社会的な役割があったのであろうか。その頃になって居住域が広がったり、墓域が2つに分かれ、片方は古墳時代までお互いを切り合うことなく続いていくところに勝川ムラの人々の特質があったことがわかる。そして勝川遺跡は庄内川中流域右岸の弥生時代の拠点集落という位置付けができる。

4. 弥生集落の動向

愛知県内の弥生時代の遺跡は数多く、学史的にみても有名なものが多い。ところが発掘調査の成果により遺跡の内容が明らかになっているものは、朝日遺跡⁽⁶⁾・阿弥陀寺遺跡⁽⁷⁾・見晴台遺跡⁽⁸⁾・高蔵遺跡⁽⁹⁾・瑞穂遺跡⁽¹⁰⁾などと少ないのが現状である。それらの遺跡と勝川遺跡とを対比しながら動向をみていくことにする。

阿弥陀寺遺跡は海部郡甚目寺町に所在し、中期中葉~後葉にかけての環濠集落である。見晴台遺跡は名古屋市南区に所在し、笠寺台地上に立地し、後期初頭~終末にかけての短い期間の環濠集落である。瑞穂遺跡は名古屋市瑞穂区に所在し、瑞穂台地に立地し、竪穴住居跡の存在が知られている。高蔵遺跡は名古屋市熱田区に所在し、熱田台地上に立地する前期~終末期まで存続する拠点集落であり、前期の環濠が知られている。朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の低湿地に相当する所であり、見晴台遺跡や瑞穂遺跡・高蔵遺跡は台地上にあり、いずれもかなり近接して存在する。それらの中で居住域・墓域・水田などの生活の様子を知るには断片的なものが多く、従って比較的よく解っている朝日遺跡をとりあげて考えていきたい。

朝日遺跡は西春日井郡清洲町に所在し、沖積地の微高地上に立地する著名な遺跡であり、高蔵遺跡より若干遅れてムラが成立し、終末期まで存続する拠点集落であり、しかも東海地方を代表する遺跡である。昭和44年以来発掘調査が実施され、環濠や竪穴住居跡・方形周溝墓が確認でき80万㎡の遺跡範囲が推定され、時期ごとにその変化が把握されている。前期~中期初頭では、小貝塚群（貝殻山貝

塚など)を形成し、海の幸を多く食料としていた稲作農耕民であっただろう。中期初頭までには、「谷C」を挟んで南微高地と北微高地の2ヶ所に居住域が形成される。中期前葉～中期後葉では北微高地のみに環濠が設定され、「谷Bと谷C」の反対の東微高地や北微高地の西側に2つの墓域(東墓域・西墓域という)が形成されて、ここで朝日遺跡の成立期となる。両墓域をさらにみていくと、東墓域では方形周溝墓群で構成され、規模の大きさの較差が大きい。西墓域では方形周溝墓・土壙墓・土器棺で構成され、方形周溝墓の較差が小さい。その両者の差異を石黒立人氏⁽¹⁾は集団差として扱っている。中期末葉～後期では東墓域で造墓活動が停止され、西墓域では重複し合う程に方形周溝墓が造営されている。また南集落の西側に新しく方形周溝墓が出現したり、埋葬主体が単葬から多葬になったり、供献土器の増加がみられたりする。堅穴住居跡では方形・円形の2つの平面形態から円形が消失し、すべて隅円方形堅穴住居跡になる。北・南集落に環濠がつくられ、2つの居住域が濠で囲まれてしまう。後期終末頃をもって集落が途絶えてしまい、朝日ムラの役割りが他の遺跡へ移動したためであろうと石黒氏は考えている。

朝日ムラと勝川ムラをみていこう。両者とも庄内川流域右岸であって勝川ムラは中流の標高14mの台地上で、朝日ムラは下流の標高2mの低湿地に立地している。遺跡の出現は朝日ムラが前期で勝川ムラは中期である。両者とも中期後半頃と後期終末に大きな変化がみられる。2つの墓域の形成が朝日ムラにみられ、勝川ムラでも62J区・63A区周辺一帯と町田地区と墓域が分かれている。居住域は南・北集落の「谷C」を挟んで共存していて、勝川ムラでも南東山地区と町田地区と拮がっている。朝日ムラでは、西墓域では後期初頭頃から方形周溝墓が重複し始めることや、南集落の西に墓域が出現してくる。勝川ムラでは、62J区SZ06の重複するものや、63A区や63D区の2方向に墓域が形成されていく。勝川ムラでも中期までの方形周溝墓は供献土器がほとんどみられないが、後期になると壺・高杯を中心とする供献土器が増加する。朝日ムラでは弥生時代をもって廃絶されるようであるが、勝川ムラではSZ10・SZ11のように古墳時代の方形周溝墓やSZ13の円墳が造営され、墓域としての役割がしばらく存続していく。居住域では町田地区にしばらく住むが、須恵器出現期頃までには廃絶してしまう。弥生時代から古墳時代にかけて新しい社会体制が畿内より導入され、海岸部に近い朝日ムラでは、新天地にそのまま移動したのであろうし、内陸部の勝川ムラは若干遅れたのであろう。

愛知県内の弥生時代の遺跡の動向は、朝日遺跡や勝川遺跡のような実態を示しながらも海岸部や内陸部、沖積地や台地などの立地によって多少の差異が生じているのであろう。そういう差をみていくと、1つの遺跡ではよく解らないことでも全体としてみると究明できることがある。そういう事実の積み重ねを検討しながら今後、東海地方における弥生時代を考えていきたい。今後の弥生時代研究の一助となれば幸いである。

(註)

- (1) 編年基準としては、加藤安信編『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982年を骨組として考えていく。その中の第三～V形式を弥生時代中期、第VI～VII形式を後期とここでは取り扱った。
- (2) 野口哲也・他「勝川遺跡」『年報一昭和63年度一』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1989
- (3) 赤塚次郎・樋上昇他「勝川遺跡」『年報一昭和62年度一』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988

- (4) 宮腰健司「尾張における“欠山式土器”とその前後」『欠山式土器とその前後—研究・報告編—』愛知考古学談話会 1987
赤塚次郎「逍遙する土器」『欠山式土器とその前後—研究・報告編—』愛知考古学談話会 1987
- (5) 北野信彦「濃尾平野における弥生遺跡の立地について」『古代文化』36—11 1984
- (6) 註(1)に同じ。柴垣勇夫監修『朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会 1975
- (7) 石黒立人他「阿弥陀寺遺跡」、石黒立人他「阿弥陀寺遺跡Ⅱ」、石黒立人他「阿弥陀寺遺跡Ⅲ」『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ～Ⅲ』(財)愛知県教育サービスセンター 1983～1985
- (8) 水野裕之・野口泰子『見晴台遺跡第25次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館 1988 など多数あり。
- (9) 重松和男編『高蔵貝塚Ⅲ—1985年度夜寒地区発掘調査—』南山大学人類学博物館 1988 及び、高蔵遺跡出土の資料を重松和男氏の御厚意により実見・実測させて頂いた。他に文献多数あり。
- (10) 服部哲也編『瑞穂遺跡—第4次調査の概要—』名古屋市教育委員会 1987
- (11) 石黒立人「弥生社会の成立と解体の理解に向けて—伊勢湾沿岸における〈囲郭集落〉の出現と終末—」『考古学の広場』第3号 考古学フォーラム 1986
石黒立人「弥生時代尾張地方の〈囲郭集落〉について」『年報—昭和60年度—』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986
石黒立人「朝日遺跡の変遷と特質」『埋蔵文化財 愛知』No.8 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987

(参考文献)

- ・『春日井市史—本文編—』春日井市教育委員会 1963
- ・『春日井市史—資料編 (3)—』春日井市教育委員会 1973
- ・『南東山古墳・南東山遺跡』春日井市遺跡発掘調査報告第4集 春日井市教育委員会 1970
- ・『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集 (財)愛知県教育サービスセンター 1984
- ・『勝川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第3集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1988
- ・『特集 愛知県地方における初期弥生文化の様相』マージナル5号 愛知考古学談話会 1985
- ・『特集 弥生集落』マージナル8号 愛知考古学談話会 1988
- ・『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- ・『東日本における中期後半の弥生土器』第7回三県シンポジウム 1986
- ・『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』第23回埋蔵文化財研究会・第4回東海埋蔵文化財研究会 1988

第4節 条里制遺構の考古地理学的考察

—町田遺跡を中心として—

1. はじめに

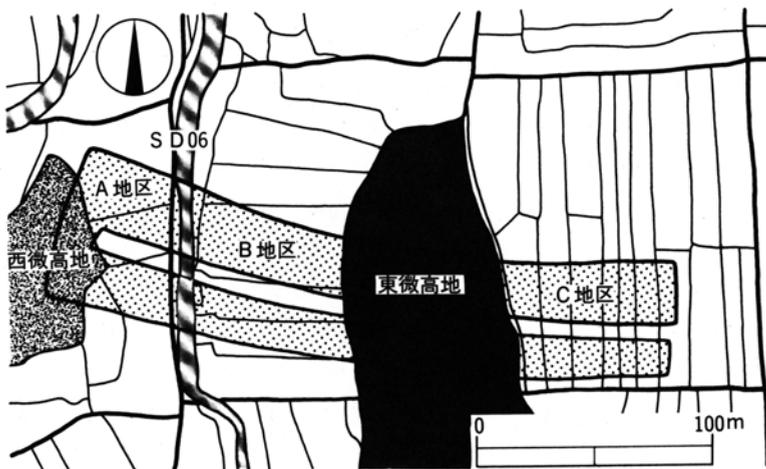
春日井市の南東、JR中央線以東の勝川・町田・松河戸遺跡は庄内川・地蔵川両水系に属する沖積地に立地する。この一帯は近年に至るまで条里制遺構が現存し、文献、歴史地理学的側面から、醍醐寺領安食荘と関連づける研究⁽¹⁾がなされてきた地域である。こうしたことから、条里制遺構の形成過程の究明を調査の重要課題の一つとしてきた。

調査は現在も継続中であるが、現水田面下に複数の水田面を検出し、最下層の条里制遺構は少なくとも15世紀代にさかのぼり得ることが明らかとなってきた。ここでは、こうした発掘調査の成果を踏まえ、町田遺跡を中心として、条里制遺構の検討をおこない、あわせて、それに派生する問題に関して若干言及したい。なお、歴史地理学等の研究成果の援用は必要最低限とし、主として考古学的視点からの検討にとどめておくこととする⁽²⁾。

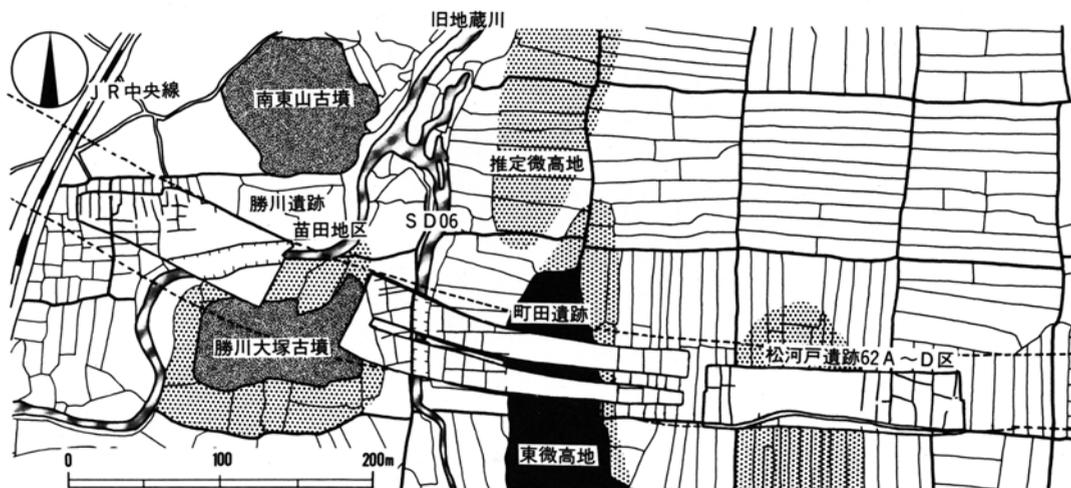
2. 条里景觀の復元

現在、町田遺跡の周辺は、かつての水田が埋め立てられて工場、住宅が密集し、往時の条里景觀は跡形もない。そこで、昭和14年地籍図と発掘された水田跡を重ね合わせることで、周辺の条里景觀の復元を試みたい。

第36・37図にみられるように町田遺跡の周辺は、ほぼ一



第36図 町田遺跡周辺の水田地割（昭和14年地籍図より一部改変）



第37図 水田跡と地籍図の地割

町(約109m) 四方の方格地割を示し長地型の条里制遺構が展開している。町田遺跡A・B・C地区はそれぞれ大畦畔(坪界)で区切られ、坪を異にする。A地区では先述したように微高地の地形に合わせた地割がみられ、B地区においても、発掘区外の北側は用水路(SD06)に合わせた地割が認められる。また、A・B両地区の発掘され水田跡の地割と地籍図のそれとを比較すると、地割の原則は基本的に合致している⁽³⁾。ところが、C地区では両者の地割にはズレがみられ、C地区とは坪を同じくする松河戸遺跡62A～D区西端においても、同様のズレがみられる。ところで、松河戸遺跡62A～D区において南の大畦畔の大きなゆがみがみられる箇所は、調査によって微高地が存在し、最下層の水田面では水田化されていないことが判明している⁽⁴⁾。同様に、町田遺跡東微高地東端付近は、地籍図では水田化されているのに対し、調査された水田跡は水田化されていない。(このことは、「ある時期」に東微高地が開発され同じ坪にある町田遺跡C地区、松河戸遺跡62A～D区西端は大幅な地割換えが行なわれたことを想定させる。町田遺跡、松河戸遺跡62A～D区の知見⁽⁵⁾により、その時期を17世紀半ば前後に考えておきたい⁽⁶⁾。)

このように、15世紀代にさかのぼり得る水田跡には、水田化されていない微高地がかなり存在することは注目する必要がある。なお「地割の乱れ」によって、このような微高地は第37図に示したような範囲に存在することが推測され、最下層の水田面は水田化されていない可能性がある。

3. 方格地割内部の尺度

ここでは、方格地割内部の尺度について検討する。なお、畦畔の中軸線を基準とし、基本畦畔の場合は、大畦畔と基本畦畔との交点(アルファベットの大文字)間の距離、区画畦畔の場合は、基本畦畔と区画畦畔との交点(アルファベットの小文字)から大畦畔との交点までの距離を基準値とする(第38・39図)。

A地区 まず、基本畦畔についてみていく。14頁で指摘しておいたように、「5mを中心とした単位」が基準となって畦が築かれた点に注目したい。第17表のA、C-B、D-Cの計測値は、それぞれ5.7・5.6・5.7mを示し、3歩の尺度を想定し得る(第18表)。すなわち、A地区の基本畦畔は3歩を基準とし、A・B・C・Dの計測値は、それぞれ3・6・9・12歩の尺度をあてはめることができる。

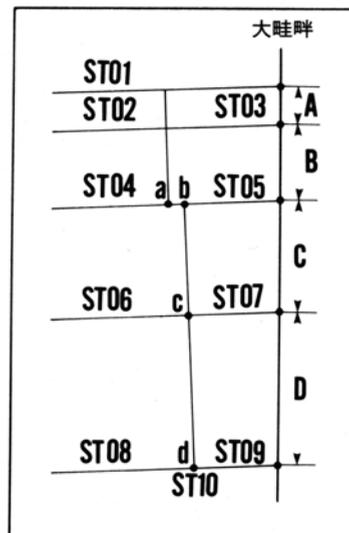
区画畦畔は第18表を参考にし、尺度をあてはめていくと、aは9歩、dは6歩にそれぞれ該当する。b・cの計測値はばらつきが認められ、尺度にあてはめることができない。このことは、ST10北畦畔を基準に区画畦畔の地割がおこなわれたと考えられ、b・cは基本的に6歩を志向したもの

と考えたい。

B地区 まず、区画畦畔についてみていく。a・b・cは12歩、fは21歩、g・hは27歩とそれぞれ3歩の倍数にほ

第17表 A地区畦畔計測値

	基本畦畔		区画畦畔	
	計測値(m)	差(m)	計測値(m)	
A	(5.7)	B-A (4.4)	a	16.2
B	10.1	C-B 5.6	b	14.3
C	15.7	D-C 5.7	c	11.5
D	21.2		d	10.8



第38図 A地区尺度算出模式図

ほ該当する（第18・19表）。d・eは18歩と21歩のほぼ中間の尺度（19歩3尺）、iは30歩と33歩のほぼ中間の尺度（31歩3尺）に該当する。

基本畦畔は、計測値が少なく、数値にもばらつきがみられる。そこで、第3表を参考に考えていく。ST12～15の計測値は7歩3尺（13.7m）ST16～19は7歩（12.7m）、ST20～23は6歩3尺（11.8m）、ST24は6歩（10.9m）に該当し、北にいくに従がい3尺ずつ長くなっている。第36・37図を見てわかるように、B地区の基本畦畔は地割を用水路（SD06）に合わせるため、北にいくに従がい畦畔間の幅が広がっていく。3尺ずつ長くなっていくのはそのためであり、本来は6歩を基調としたものと考えられる。

C地区 基本畦畔と区画畦畔の中軸線上の交点間の計測値は、Dでは6歩、Eで9歩に当てはまる。

以上のことにより、条里地割には、3歩（3歩の倍数）、1歩3尺（3歩の半数）といった尺度が基本となっていることが認められそうである。長地型の基本尺度は6歩であり、町田遺跡で認められた尺度はそれを半折する形で生じた尺度である。したがって、基本的には「条里制的尺度」が使用されたものと考えられる。ここではそうした尺度がA地区のような、一見、条里地割とは無関係に思われる地割にも貫徹され、区画畦畔においても適用されていた可能性がある。また、区画畦畔の地割は、大畦畔からの尺度を基準にしていた可能性もある。なお、このような推定のもとに算出した個々の水田跡の尺度は、第20表に示しておいた。

第18表 「3歩」を単位とした尺度

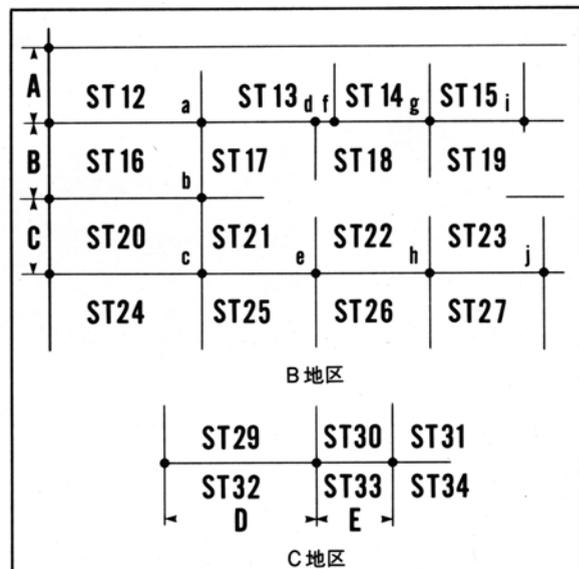
尺度	長さ(m)	尺度	長さ(m)
3歩	5.45	24歩	43.60
6歩	10.90	27歩	49.05
9歩	16.35	30歩	54.50
12歩	21.80	33歩	59.95
15歩	27.25	36歩	65.40
18歩	32.70	39歩	70.85
21歩	38.15	60歩	109.00

4. 水利および条里制遺構の形成手順について

SD06およびその水系 東西両微高地に挟まれたA・B地区の水利関係を用水路（SD06）との関係でみていく（第41図）。A・B両地区とも微高地の緩斜面を利用し、A地区では東流、B地区では西流させ、SD06へ排出させる。したがって、SD06は排出溝の役割を果たし、下流で地藏川へ合流されたものと考えられる⁽⁷⁾。水田へ水を

第19表 B・C地区畦畔計測値

基本畦畔		区画畦畔	
	計測値(m)		計測値(m)
A	(13.9)	a	21.7
B	12.7	b	21.4
C	12.3	c	21.6
D	11.0	d	35.9
E	16.6	e	34.4
		f	39.0
		g	48.2
		h	49.3
		i	56.9
		j	64.2

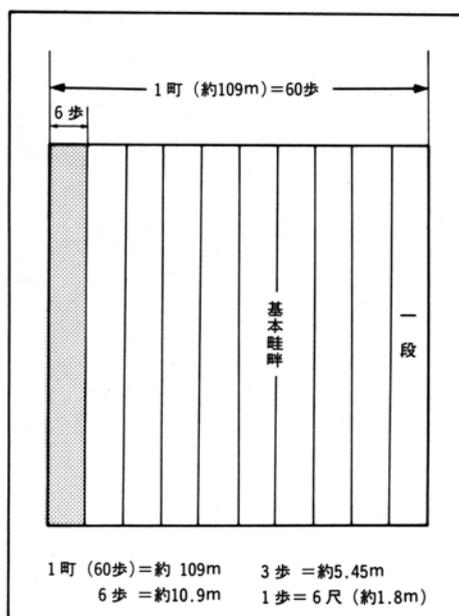


第39図 B、C地区尺度算出模式図

流入させる用水路は検出されなかったが、微高地上にあったものと推測される。なお、水口はA地区で1ヶ所、B地区では3ヶ所検出されたが、多くはオーバーフローさせて水を落としたものと考えられる。

条里制遺構の形成手順 町田遺跡B地区をモデルに、前節までの条里地割、尺度のあり方から、条里制遺構の形成手順を考えていくと、次のような流れを想定できる。

①大畦畔の設置、②大畦畔に沿わせ地蔵川より用水路(SD06)を設置、③用水路(SD06)に合わせて基本畦畔を設置、④最後に区画畦畔の設置を行う。このことより、方格地割を基準に条里制遺構は形成されており、基本畦畔は水利関係に規制されている⁽⁸⁾ことが理解できる。



第40図 長地型地割の尺度

5. 条里制の施行年次をめぐる問題

松河戸町一帯の中世の条里制遺構の形成前の奈良時代に条里制に基づく「地番付」がなされていたかどうかは、今後、これらの水田跡の歴史的な位置づけを考えるうえで重要な問題をはらんでくる。この問題に関しては、既に北村和宏氏が阿弥陀寺遺跡および周辺の条里制遺構を分析した結果、「『遺構の年代』即『条里制の施行年次』とは考えず、奈良時代に条里制が施行(地番付)され、それに沿った形での開墾が14、15世紀代になされ、条里制遺構(地割)が形成された」と結論づける論考が出されている⁽⁹⁾。さらに、松河戸遺跡においても同様の観点から、条里制に基づく「地番付」を、勝川廃寺の東西大溝掘削時期(岩崎17号窯式新相期)にさかのぼらせる可能性を論じている⁽¹⁰⁾。しかしながら、昭和62、63年度の調査では、それを裏付ける考古学的証拠は見出されていない。ここでは奈良時代に「地番付」がなされていた論拠として北村氏があげた3点の理由⁽¹¹⁾を、町田、松河戸遺跡の条里制遺構に即して検討していきたい。

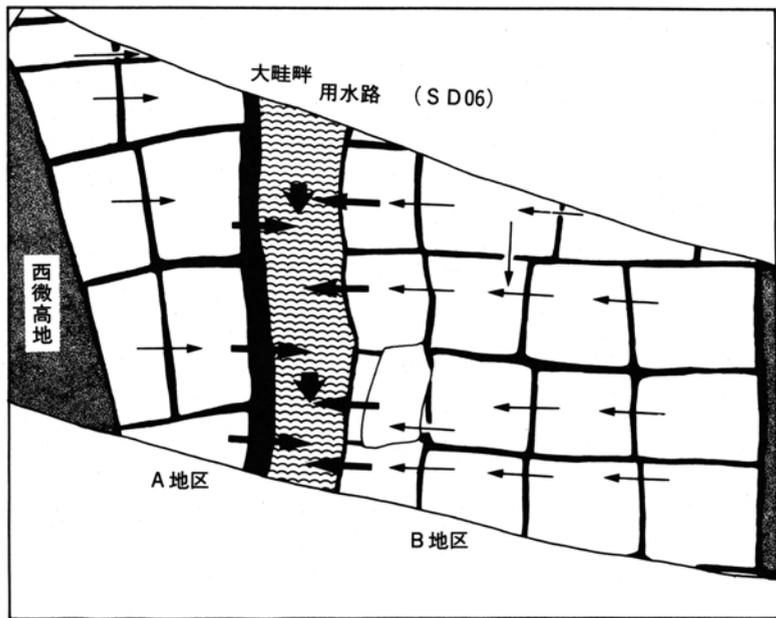
第1点の文献史料の問題。松河戸町一帯は康治二(1143)年の「尾張国安食郷内田畠等検注帳」⁽¹²⁾の記載により、「安食荘」の地に比定されているが、当該期の水田は未だ発見されていない⁽¹³⁾。この意味で、北村氏のあげた文献史料に信憑性があると仮定しても、それが阿弥陀寺遺跡の条里制遺構に即、結びつくかどうかは疑問である。

第2点の13世紀代の森南遺跡が「条里制遺構にもかかわらず微

第20表 水田跡尺度一覧表

	A 地区		
	南北	東西	面積
ST02	3歩	9歩	27歩
03	3歩	9歩	27歩
04	6歩	9歩	54歩
05	6歩	9歩	54歩
06	9歩	6歩	54歩
07	9歩	6歩	54歩
08	12歩	6歩	72歩
09	12歩	6歩	72歩
B 地区			
ST12	7歩3尺	12歩	90歩
13	7歩3尺	9歩	67.5歩
14	7歩3尺	9歩	67.5歩
15	7歩3尺	6歩	45歩
16	7歩	12歩	84歩
17	7歩	7歩3尺	52.5歩
18	7歩	7歩3尺	52.5歩
19	7歩	10歩3尺	73.5歩
20	6歩3尺	12歩	78歩
21	6歩3尺	7歩3尺	48.75歩
22	6歩3尺	7歩3尺	48.75歩
23	6歩3尺	9歩	58.5歩
24	6歩	12歩	72歩
25	6歩	7歩3尺	45歩
26	6歩	7歩3尺	45歩
27	6歩	9歩	54歩

高地上では、地形に合わせた開発がみられ、「当該期には、開墾に際し、『条里制』のもつ規制力が失なわれていた」と考えている点。町田遺跡でも地形に合わせた開発が認められるが、その地割には「条里制的尺度」が用いられており、「条里制」のもつ規制力が失なわれたとするには疑問が残る。むしろ、地形に合わせた開発がおこなわれても、町田遺跡A地区にみられるようにその「地割尺度」には、「条里制」のもつ規制力は貫徹され



第41図 A・B地区水利模式図

ているのである。よって阿弥陀寺遺跡と森南遺跡の差異は立地上の違いである可能性が高いと考えられる⁽¹⁴⁾。

第3点の古代寺院と条里制遺構との関連の問題。「勝川廃寺」の地割と松河戸遺跡の条里地割とが関連する可能性が高いとしても、松河戸遺跡を安食荘との関連でみるならば、安食荘の地割基準⁽¹⁵⁾と、「勝川廃寺」の地割との関係を立証する必要がある。阿弥陀寺遺跡にしても然りである。

以上の点から、奈良時代の「地番付」については、可能性はあるにしても、現状では否定的にならざるを得ない⁽¹⁶⁾。むしろ、「条里地割に基づく中世の水田跡」と考えた方が、より妥当なものと思われる。中世期の五条川水系の動向を考えるならば⁽¹⁷⁾、町田遺跡の「計画的な水田跡」は庄内川水系における「中世後半期の開発」として位置づけられよう。

小稿を作製するにあたり、神谷友和、赤塚次郎両氏には種々の御教示をいただいた。また、条里制関係の文献は北村和宏氏より提供していただいた。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

(註)

(1) 「安食荘」は康治二(1143)年の醍醐寺文書の記載を初出とする。名古屋市北区、春日井市西南部、西春日井郡東南辺りの一帯の地域が想定されており、現地比定についての主な文献は次のものがある。

水野時二『条里制の歴史地理学的研究』大明堂 1971、金田章裕『条里地割内部とその縁辺の土地利用』『条里と村落の歴史地理学的研究』古今書院 1985 282~306頁、弥永貞三・須磨千頰『醍醐寺領尾張国安食荘について—新発見の相論絵図をめぐる—』『研究紀要』第5号 醍醐寺文化財研究所 1983。

(2) 分析の視点は、次の文献を参考にした。

桑原公徳・金田章裕・伊達宗泰他『講座 考古地理学』4 学生社 1985。

なお、文献等を援用して勝川遺跡の条里制遺構に検討を加えた論考に次のものがある。

遠藤才文・永金千佳「勝川遺跡水田跡の成立時期について」『勝川』(勸愛知県教育サービスセンター 1984 128~139 頁)

- (3) 勝川遺跡57 I 区においても同様の指摘がある(註(2)遠藤・永金論文 134~135頁)。なお、昭和63年度発掘調査した松河戸遺跡は現水田の地割と直接比較ができ、発掘された水田跡の地割とはほぼ重なることが確認されている(「松河戸遺跡」『年報 昭和63年度』(勸愛知県埋蔵文化財センター 1989)。
- (4) 北村和宏「松河戸遺跡」『年報 昭和62年度』(勸愛知県埋蔵文化財センター 1988 62頁)
- (5) 註(4)文献に同じ。
- (6) 「尾張徇行記」によると春日井市域の新田開発の最盛期は寛文年間(1661~1672)にあるという(安藤慶一郎「新田開発」『春日井市史』春日井市教育委員会 1963 195~208頁)。
- (7) 町田遺跡の東微高地南端付近で、弥永氏が用水系路の調査をしており、S D06に該当する用水路は排水溝の役割を果たし、地蔵川へ合流させていたことが確認されている(弥永貞三「半折考」『日本古代社会経済史研究』岩波書店 1980 196頁の図V 3および203頁の注(30))。
- (8) 町田遺跡A・B両地区の基本畦畔は、S D06を中心とした水利に合わせて、東西方向に主軸をもつ。
- (9) 北村(旧姓浅井)和宏「尾張国の『条里制』小考—阿弥陀寺遺跡の調査から—」『年報 昭和60年度』(勸愛知県埋蔵文化財センター 1986 104頁)
- (10) 註(4)文献 64頁
- (11) 註(9)文献 103~105頁
- (12) 『大日本古文書』家わけ第19 醍醐寺文書之三561号、『平安遺文』6巻2517号
- (13) ただし、安食荘の現地比定と関連づけることが可能な「加知」と墨書のある須恵器の杯身が微高地より出土している(註(4)文献 64頁)。
- (14) 北村氏の作製した第3図を見ると、阿弥陀寺遺跡、森南遺跡はともに連続する条里制遺構であり(註(9)文献 99頁)、両遺跡の差異を時期差、地番付の有無に結びつけること自体、不自然と思われる。なお、同じ甚目寺町内に所在する大淵遺跡では、平安時代の建物群を否定する形で13世紀代に方格地割が設定されている(池本正明「大淵遺跡に見る中世集落の一形態」『年報 昭和60年度』(勸愛知県埋蔵文化財センター 1986 85~88頁)。
- (15) 註(1)文献では、おおむね、名古屋市北区の庄内川、矢田川合流点付近を条里プランの基準に考えている。
- (16) 奈良盆地の条里制遺構を分析した伊達氏は、条里地割を奈良時代にさかのぼらせることに対しては慎重な態度をとっている(伊達宗泰「低平地の開発についての問題点—奈良盆地中央部の場合—」『高地性集落と倭国大乱』小野忠熙博士退官記念出版事業会 1984 67~84頁)。
また、同じ奈良盆地の水田を検討した伊藤氏は「大和盆地全体に整然とした条里地割が現われるのは、中世も終頃であり」、「用水確保ができた地域に、次第次第に条里地割にあった水田が拡ってきた」という見解を示している(伊藤勇輔「考古学的アプローチによる大和盆地の水田の様相」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1988 343頁)。
- (17) 赤塚次郎「湿原の再開発」『土田遺跡』(勸愛知県埋蔵文化財センター 1987 109頁)

付 表

1. 遺 構

S B 01 (登録番号 S B 15)			S B 06 (登録番号 S B 20)			S B 09 (登録番号 S B 22)		
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
ピット 1	25	10	ピット 1	33	20	S K 01	100×100	29
〃 2	50	8	〃 2	36	20	S B 10 (登録番号 S B 23)		
〃 3	26	7	〃 3	19	10	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
S B 02 (登録番号 S B 14)			〃 4	28	15	S K 01	95×85	4
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 5	18	9	S B 11 (登録番号 S B 09)		
ピット 1	41	17	S B 07 (登録番号 S B 21)			遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
〃 2	42	19	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	S K 01	90×48	15
〃 3	21	13	ピット 1	19	6	S B 12 (登録番号 S B 10)		
〃 4	28	16	〃 2	43	6	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
〃 5	32	13	〃 3	20	4	ピット 1	39	11
S B 03 (登録番号 S B 17)			〃 4	28	13	〃 2	38	20
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 5	44	14	〃 3	37	21
ピット 1	33	10	〃 7	28	18	〃 4	40	24
〃 2	16	4	〃 8	26	4	〃 5	32	23
S B 04 (登録番号 S B 16)			〃 9	40	14	〃 6	30	23
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	S B 08 (登録番号 S B 19)			S B 13 (登録番号 S B 12)		
ピット 1	30	8	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
〃 2	34	11	ピット 1	30	13	ピット 1	22	24
〃 3	12	5	〃 2	18	4	〃 2	24	25
〃 4	17	11	〃 3	38	4	S B 14 (登録番号 S B 11)		
〃 5	23	21	〃 4	23	5	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
〃 6	19	4	〃 5	37	17	ピット 1	32	18
〃 7	35	8	〃 6	20	10	〃 2	41	12
S K 01	60×90	3	〃 7	26	10	〃 3	29	11
〃 02	70×54	6	〃 8	30	11	〃 4	30	19
〃 03	46	10	〃 9	20	5	〃 5	32	9
S B 05 (登録番号 S B 18)			〃 10	32	15	〃 6	25	11
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	S K 01	70×27	5	〃 7	32	20
ピット 1	40	12	S B 09 (登録番号 S B 22)			〃 8	24	10
〃 2	33	15	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 9	32	9
〃 3	40	16	ピット 1	26	5	〃 10	38	11
〃 4	25	20	〃 2	26	5	〃 11	60	20
〃 5	22	16	〃 3	32	4	〃 12	42	16
〃 6	22	11	〃 4	30	4	〃 13	20	17
〃 7	23	3	〃 5	26	4	〃 14	34	
〃 8	30	10	〃 6	32	12	〃 15	22	20

SB14 (登録番号 SB11)			遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	SB22 (登録番号 SB24)		
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	ピット1	36	16	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
ピット16	45	24	〃 2			ピット6	23	33
〃 17	40	32	〃 3			〃 7	15	3
〃 18	51	16	〃 4			〃 8	17	10
〃 19	20	17	〃 5			〃 9	24	17
〃 20	27	42	〃 6	30	38	〃 10	26	10
〃 21	10	11	〃 7	25	7	SB23 (登録番号 SB25)		
S K 01	90×80	20	〃 8	26	4	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
SB15 (登録番号 SB13)			〃 9	33	9	ピット1	34	20
SB16 (登録番号 SB05)			S K 01	47×56	9	〃 2	34	17
遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 02	81×82	15	〃 3	26	12
ピット1	31	23	S D 01	112×168	27	〃 4	41	6
〃 2	37	28	〃 02	130×110	15	〃 5	21	9
〃 3	26	6	SB20 (登録番号 SB02)			〃 6	25	15
〃 4	21	9	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	S K 01	237×136	9
〃 5	22	6	ピット1	40.0	34.0	〃 02	74×58	8
〃 6	41	22	〃 2	39.0	36.0	〃 03	111×121	39
〃 7	39	10	〃 3	19.0	15.0	SB24 (登録番号 SB27)		
〃 8	33	19	〃 4	26.0	26.0	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)
〃 9	40	11	〃 5	37.0×40.0	27.0	ピット1	25	25
〃 10	30	14	S K 01	62.0×68.0	31.0	〃 2	23	21
〃 11	46	14	SB21 (登録番号 SB03)			〃 3	17	20
〃 12	48	9	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 4	22	29
〃 13	39	9	ピット1	20	16.0	〃 5	17	29
〃 14	30	8	〃 2	40	8.0	〃 6	20	10
〃 15	34	10	〃 3	28	15.0	〃 7	20	14
〃 16	34	12	〃 4	41	23.0	〃 8	10	6
〃 17	32	11	〃 5	48	27.0	〃 9	15	8
〃 18	33	12	〃 6	32	14	〃 10	13	8
〃 19	32	11	〃 7	30	23	〃 11	16	13
〃 20	36	8	〃 8	43	9	〃 12	15	8
〃 21	16	8	〃 10	50	8	〃 13	21	15
〃 22	25	8	〃 11	33	9	〃 14	22	8
〃 23	20	7	〃 12	20	7	〃 15		
〃 24	27	8	SB22 (登録番号 SB24)			〃 16	23	21
〃 25	16	7	遺 構	大きさ(cm)	深さ(cm)	〃 17	32	20
〃 26	20	15	ピット1	23	23	〃 18	31	17
〃 27	27	8	〃 2	22	22	〃 19	17	13
SB17 (登録番号 SB08)			〃 3	28	28	〃 20	26	11
SB18 (登録番号 SB05)			〃 4	20	15	S K 01	164×109	25
SB19 (登録番号 SB04)			〃 5	24	7	S K 35 (登録番号 S K 35)		

遺構	大きさ(cm)	深さ(cm)	法量 (cm)				法量 (cm)				
ピット 1	16	5	番号	長	短	深さ	番号	長	短	深さ	
" 2	26	14	28	23	25	5	72	121	108	22	
" 3	30	6	29	155	119 (63)	11	73	測定不可	—	—	
" 4	20	3	30	73	50	3	74	50	36	20	
" 5	14	5	31	135	100	13	ピット				
" 6	47	8	32	減	—	—					
" 7	20	5	33	80	—	6	番号	法量 (cm)			
" 8	20	9	34	240	183	9	掘り方(柱あたり)		深さ		
" 9	34	6	35 (別)45	43	43	7	1	42	10		
" 10	11	4	36	130	50	14	2	28	22		
" 11	40	3	37	160	44	5	3	21	12		
" 12	20	7	38	57	69	7	4	25	10		
S K			39	50		20	5	25	27		
			40	78	73	23	6	17	8		
番号	法量 (cm)			41	65	57	7	7	20	9	
	長	短	深さ	42	115	83	13	8	22	12	
1	100	154	17	43	95	—	34	9	20	33	
2	72	57	39	44	45	39	20	10	10	12	
3	98	72	25	45	418	233	10	11	20	20	
4	43	48	20	46	168	140	4	12	20	19	
5	148	118	24	47	215	—	34	13	22	44	
6	56	49	4	48	101	127	14	14	70	30	
7	33	43	4	49	53	28	6.5	15	16	25	
8	41	56	7	50	43	54	12	16	16	29	
9	51	50	16	51	309	165	3	17	22	25	
12	66	70	30	52	45	67	10	18	26	20	
13	82	67	25	53	51	53	12	19	10	6	
14	160	63	?	54	56	52	99	20	18	18	
15	68	42	30	55	139	—	15	21	13	8	
16	61	53	27	56	209	—	4	22	20	42	
17	46	40	22	57	70	106	14	23	16	16	
18	51	48	39	58	44	56	8	24	20	8	
19	124	94	17	59	60	52	16	25	20	12	
20	65 25	53 23	31	60	278	268	17	26	40	12	
21	134	118	39	61	48	44	9	27	24	13	
22	50	44	12	62	73	54	21	28	33	13	
23	98	86	11	63	101	124	52	29	14	16	
24	61	61	13	64	80	73	36	30	24	10	
25	138	75	15	65	85	89	12	31	20	8	
26	減	—	—	66	78	—	9	32	15	12	
27	58	50	20	71	174	134	4	33	16	12	

番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)	
	掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ
34	28	13	74	18	28	117	22	17
35	50	16	75	28	20	118	21	32
36	40	16	76	17	17	119	22	14
37	56	12	77	16	18	120	20	16
38	40	18	78	14	16	121	20	21
39	26	14	79	25	15	122	20	22
40	20	15	80			123	23	32
41	15	14	81	22	28	124	32	26
42	22	18	82	18	25	125	20	28
43	34	26	83	23	21	126	20	40
44	30	14	84	22		127	18	20
45	29		85	16	12	128	25	22
46	25	8	86	10	7	129	20	16
47	48	24	87	22	16	131	20	15
48	20	18	88			132	34	20
49	30	16	89	18	25	133	22	19
50	25	22	90	26	16	134	26	15
51	33	21	91	26	21	135	20	16
52	20	12	92	22	18	136	28	32
53	20	25	93	20	18	137	39	20
54	24	20	94	34	23	138	57	23
55	20	50	95	25	20	139	24	23
56	17	24	97	25	18	140	22	20
57	22	22	99	16	14	141	16	25
58	22	22	100	42	32	142	34	21
59	15	12	101	22	16	143	10	7
60	24	25	102	32	8	144	28	29
61	20	14	103	14	20	145	25	14
62	30	18	104	25	22	146	22	14
63	20	14	105	26	30	147	30	13
64	16	12	106	27	21	148	20	22
65	25	13	107	20	14	150	42	14
66	27	15	108	16	18	151	38	14
67	18	7	109	20	14	152	16	10
68	13	6	110	21	16	153	90	13
69	20	17	111	24	18	154	14	14
70	12	32	112	12	-17	203	18	18
71	24	20	113	20	21	204	21	23
72	18	10	114	18	24	205	34	26
73	43	34	115	22	15	206	22	10

番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)	
	掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ
207	23	16	328	15	10	368	28	10
208	22	8	329	18	10	369	22	7
209	30	19	330	18	14	370	28	8
212	33	21	331	22	5	371	20	8
213	28	35	332	34	11	372	40	15
214	22	25	333	20	15	373	33	18
215	26	21	334	23	20	374	20	8
216	22	23	335	30	7	375	19	9
220	26	10	336	45	18	376	33	9
221	44	16	337	28	20	377	24	4
222	50	18	338	28	15	378	36	13
223	23	21	339	19	12	379	19	4
224	31	22	340	26	20	380	18	7
301	55	18	341	25	12	381	25	5
302	43	22	342	60	6	382	12	5
303	27	18	343	22	19	383	13	8
304	30	9	344	27	14	384	24	7
305	17	10	345	20	4	385	16	5
306	22	14	346	32	5	386	20	5
307	25	12	347	26	14	387	33	4
308	41	15	348	36	11	388	26	5
309	24	16	349	28	12	389	36	21
310	21	8	350	28	6	390	20	6
311	26	27	351	40	13	391	21	3
312	30	6	352	30	13	392	34	7
313	28	10	353	44	5	393	23	5
314	23	18	354	24	9	394	18	15
315	23	5	355	20	5	395	40	25
316	30	17	356	24	10	501	35	20
317	18	15	357	32	4	502	16	13
318	20	36	358	27	9	503	40	22.5
319	31	20	359	24	8	504	25	9.0
320	27	16	360	30	8	505	25	10.5
321	24	11	361	30	7	506	18	15.0
322	22	14	362	25	6	507	27	19.0
323	21	21	363	33	8	508	30	7.5
324	35	18	364	30	8	509	32	10.5
325	44	5	365	16	2	510	24	10.0
326	14	9	366	22	12	511	21.5	7.5
327	25	13	367	20	7	512	24.0	5.0

番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)		番号	法 量 (cm)	
	掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ		掘り方(柱あたり)	深さ
513	36.0	7.5	553	21.0	9.5	593	18.0	19.5
514	17.5	12.0	554	28.0	29.5	594	22.0	16.5
515	19.5	9.5	555	28.0	15.5	595	38.0	11.0
516	21.0	11.0	556	17.0	14.5	596	25.5	18.5
517	19.5	12.5	557	24.5	20.0	597	35.0	17.0
518	21.5	6.5	558	18.5	18.5	598	31.0	12.0
519	18.5	12.0	559	29.0	22.5	599	22.0	20.0
520	38.0	10.5	560	23.0	15.0	600	24.5	15.5
521	19.5	13.0	561	40.0	41.0	601	19.5	31.5
522	16.5	9.5	562	34.0	28.0	602	66.0	41.5
523	20.0	8.5	563	49.0	18.0	603	21.5	13.0
524	23.5	10.5	564	39.0	13.5	604	21.0	27.0
525	18.5	24.5	565	35.5	21.0	605	43.0	10.0
526	18.5	10.0	566	31.0	20.0	606	16.0	4.5
527	14.0	10.0	567	44.0	9.5	607	30.0	
528	22.0	24.0	568	18.0	8.5	608	減	
529	9.0	8.5	569	46.0	20.0	609	22.0	13.0
530	16.0	9.5	570	44.0	14.0	610	22.0	11.0
531	24.0	12.5	571	27.0	15.0	611	25.0	12.0
532	31.5	12.0	572	30.0	16.0	612	30.0	21.0
533	33.0	11.0	573	30.0	22.0	613	42.0	17.0
534	24.0	18.0	574	30.0	24.0	614	18.0	25.0
535	43.0	11.0	575	26.0	14.5	615	32.0	24.0
536	70.0	14.5	576	14.5	9.5	616	30.0	10.5
537	23.0	18.5	577	40.0	19.5	617	33.0	17.0
538	32.0	25.5	578	23.0	24.0	618	32.0	18.5
539	27.0	10.0	579	26.0	16.0	619	30.0	?
540	17.0	3.5	580	19.0	13.0	620	29.0	24.5
541	17.0	3.5	581	29.5	25.5	621	26.0	23.0
542	34.0	7.5	582	33.0	28.5	622	15.0	10.0
543	20.5	20.0	583	22.0	18.5	623	27.0	12.5
544	25.0	23.0	584	23.5	13.0	624	17.5	18.5
545	37.0	9.0	585	26.0	24.5	625	29.0	36.5
546	37.5	20.5	586	19.0	16.0	626	18.5	10.5
547	32.5	20.5	587	35.0	10.0	627	38.0	11.5
548	46.0	14.5	588	30.0	13.5	628	25.0	9.5
549	17.0	7.5	589	36.0	14.0	629	27.0	27.0
550	21.5	7.0	590	38.0	11.0	630	22.5	20.0
551	27.0	7.0	591	40.0	17.0	631	18.0	18.0
552	27.0	33.5	592	23.0	21.5	632	18.0	18.0

番号	法 量 (cm)		ST	大きさ (m)		登録番号	ST	大きさ (m)		登録番号
	掘り方(柱あたり)	深さ		東か西の畦	南か北の畦			東か西の畦	南か北の畦	
633	23.0	13.0	ST01	—	—	ST01	18	(12.5)	11.2	15
634	28.0	17.5	02	5.1	17.2	02	19	13.5	19.1	16
635	19.0	20.0	03	(5.3)	(16.0)	05	20	(10.8)	(9.2)	26
636	22.0	13.0	04	10.2	17.8	03	21	(11.6)	12.0	28
637	27.0	17.5	05	10.2	15.3	06	22	(11.7)	12.2	30
638	31.0	31.0	06	15.6	10.9	04	23	11.5	16.4	32
639	28.0	14.0	07	(15.2)	12.0	07	24	(12.6)	(10.2)	25
640	32.0	8.0	08	19.4	10.2	22	25	(10.0)	12.0	27
641	49.0	?	09	19.6	10.0	24	26	(12.2)	13.9	29
642	40.0	?	10	—	20.2	23	27	13.0	14.8	33
643	42.0	7.0	11	—	(9.5)	08	28	—	(14.8)	34
644	46.0	?	12	13.2	9.5	09	29	—	—	19
			13	(12.9)	16.9	12	30	—	—	20
			14	(13.9)	17.3	14	31	—	—	21
			15	(13.5)	(10.0)	17	32	—	16.0	38
			16	(12.4)	(10.2)	10	33	—	11.0	40
			17	12.5	12.2	13	34	—	—	41

2. 遺 物

番号	土 器	器 形	法 量 (mm)				残 度	出 土 地 点	実測番号
			口 径	器 高	底 径	脚 径			
1	弥生土器	壺	19.2				1/8	第5図第11層	61
2	弥生土器	壺	29				1/10	" "	67
3	弥生土器	壺	16.9				1/8	" "	53
4	弥生土器	瓢 壺	8				1/4	" 第8・9層	32
5	弥生土器	壺	14				1/4	" "	35
6	土 師 器	壺	13				1/4	第5図第11層	29
7	弥生土器	甕	22.6				1/8	" "	62
8	弥生土器	甕	16.4				1/4	" "	63
9	弥生土器	甕	16.8				1/7	" "	69
10	弥生土器	鉢	14				1/6	" "	66
11	弥生土器	有孔土器			3.6		1/2	" "	51
12	弥生土器	甌			4.80		1/2	" "	78
13	弥生土器	甌			1.60		完存	" "	79
14	土 師 器	叩き甕			4.6		1/8	" "	55
15	弥生土器	器 台					1/5	" "	68
16	土 師 器	壺			4		完存	" "	60
17	土 師 器	S 字 甕	11.4				1/8	" "	70
18	土 師 器	宇田型甕	14.4				1/6	" 第8・9層	19
19	土 師 器	S 字 甕				8.0	1/10	" "	33

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	実測番号
			口径	器高	底径	脚径			
20	弥生土器	手捏ね土器	3.7	3.8	4.1		完存	第5区第11層	54
21	土師器	高杯				14.6	$\frac{2}{3}$	" 第11層	64
22	土師器	高杯				8.0	$\frac{1}{2}$	" 第8・9層	31
23	弥生土器	台付甕				8.4	$\frac{1}{2}$	" 第11層	52
24	須惠器	杯蓋					$\frac{1}{2}$	" 第8・9層	38
25	須惠器	器台	18.3				$\frac{1}{4}$	" 第3・8層	8
26	須惠器	杯	15.8				$\frac{1}{10}$	" 第8・9層	34
27	緑釉陶器	皿					$\frac{1}{6}$	第5区第3・8層	9
28	須惠器	蓋	16.2				$\frac{1}{10}$	" "	42
29	須惠器	甕	21.4				$\frac{1}{2}$	" "	1
30	須惠器	甕			12.8		$\frac{1}{4}$	" 第8・9層	25
31	灰釉陶器	椀	15.5				$\frac{1}{6}$	" 第2・3層	15
32	灰釉陶器	椀	11.0	2.8	5.8		$\frac{1}{8}$	" "	23
33	灰釉系陶器	皿	7.6	1.2	5.2		$\frac{1}{4}$	" "	43
34	灰釉系陶器	椀	13.8				$\frac{1}{4}$	" "	17
35	灰釉系陶器	椀	11.8	3.4	2.9		$\frac{1}{6}$	" "	46
78	弥生土器	壺	20.6				$\frac{1}{8}$	S D03	201
79	弥生土器	壺	18.7				$\frac{1}{10}$	"	156
80	弥生土器	壺	26.2				$\frac{1}{15}$	"	140
81	弥生土器	壺	20.2				$\frac{1}{10}$	"	145
82	弥生土器	壺	24.7				$\frac{1}{20}$	"	137
83	弥生土器	壺	25.6				$\frac{1}{12}$	"	199
84	弥生土器	壺	29.8				$\frac{1}{20}$	"	133
85	弥生土器	壺			8.8		$\frac{1}{6}$	"	213
86	弥生土器	壺	17.2				$\frac{1}{8}$	"	207
87	弥生土器	壺	18.0				$\frac{2}{3}$	"	111
88	弥生土器	壺	11.6				$\frac{1}{5}$	"	204
89	弥生土器	壺	14.0				$\frac{1}{10}$	"	151
90	弥生土器	壺	7.6				$\frac{1}{8}$	"	212
91	弥生土器	壺	14.8				$\frac{1}{10}$	"	159
92	弥生土器	壺	16.8				$\frac{1}{10}$	"	143
93	弥生土器	壺	8.4				$\frac{1}{9}$	"	130
94	弥生土器	壺	9.6				$\frac{1}{8}$	"	124
95	弥生土器	壺	10.4				$\frac{1}{9}$	"	131
96	弥生土器	壺	10.4				$\frac{1}{5}$	"	127
97	弥生土器	壺	8.4				$\frac{1}{3}$	"	101
98	弥生土器	壺	12.0				$\frac{1}{4}$	"	206
99	弥生土器	甕	16.8				$\frac{1}{4}$	"	126
100	弥生土器	甕	17.8				$\frac{1}{5}$	"	103
101	弥生土器	甕	15.8				$\frac{1}{10}$	"	139

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	実測番号
			口径	器高	底径	脚径			
102	弥生土器	甗	21.0				1/6	SD03	125
103	弥生土器	甗	20.2				1/6	"	167
104	弥生土器	小型甗	17.8				1/6	"	121
105	弥生土器	甗	18.6				1/6	"	138
106	弥生土器	甗	29.6				1/6	"	105
107	弥生土器	甗	21.4				1/6	"	106
108	弥生土器	甗	31.4				1/6	"	134
109	弥生土器	甗	28.6				1/6	"	104
110	弥生土器	甗	29.6				1/6	"	160
111	弥生土器	甗	31.2				1/6	"	109
112	弥生土器	甗	24.0				1/6	"	147
113	弥生土器	甗	25.6				1/6	"	152
114	弥生土器	甗	25.0				1/6	"	164
115	弥生土器	甗	29.0				1/6	"	108
116	弥生土器	甗	29.7				1/6	"	116
117	弥生土器	甗	23.6				1/6	"	136
118	弥生土器	甗	24				1/6	"	141
119	弥生土器	甗	18.4				1/6	"	200
120	弥生土器	甗	18.0				1/6	"	202
121	弥生土器	甗	(16.3)				1/6	"	198
122	弥生土器	鉢	16.4				1/6	"	162
123	弥生土器	鉢	14.0				1/6	"	170
124	条痕文土器	甗	30.8				1/6	"	205
125	弥生土器	小型鉢	18.4				1/6	"	120
126	弥生土器	小型鉢	23.0				1/6	"	117
127	弥生土器	甗又は鉢	27.4				1/6	"	209
128	弥生土器	小型甗	13.0				1/4	"	129
129	弥生土器	高杯				14.0	1/2	"	115
130	弥生土器	高杯	25.6				1/6	"	158
131	弥生土器	高杯						"	208
132	弥生土器	脚台				5.6	1/4	"	183
133	弥生土器	脚台				7.0	1/4	"	172
134	弥生土器	脚台				11.6	1/2	"	174
135	弥生土器	脚台				5.2	1/2	"	178
136	弥生土器	壺			4.3		1/6	"	184
137	弥生土器	壺			5.0		1/4	"	210
138	弥生土器	壺			6.2		1/4	"	192
139	弥生土器	壺			8.0		1/6	"	191
140	弥生土器	壺			6.6		2/3	"	211
141	弥生土器	壺			12.0		1/6	"	193

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	实测番号
			口径	器高	底径	脚径			
142	弥生土器	甕			8.2		¼	SD03	187
143	弥生土器	甕			5.3		¼	"	194
144	弥生土器	甕			5.8		⅔	"	112
145	弥生土器	甕			6.6		¼	"	186
146	弥生土器	甕			6.4		½	"	189
147	弥生土器	甕			5.7		¼	"	195
148	弥生针器	甕			6.0		⅓	"	114
149	条痕文土器	甕			6.4		½	"	185
150	条痕文土器	甕			8.2		½	"	102
151	弥生土器	甕			7.6		¼	"	179
152	弥生土器	鉢	16.6	13.6	4.9		⅔	SB01	390
153	弥生土器	壺	16.2				⅓	SB02	384
154	弥生土器	甕	18.0				⅓	"	385
155	弥生土器	脚台				7.0	⅔	"	388
156	弥生土器	脚台				7.6	⅔	"	386
157 158	弥生土器	台付甕	17.8			9.6	½	SB03	403
159	弥生土器	器台					⅔	"	404
160	弥生土器	高杯					⅓	"	464
161	弥生土器	高杯					½	SB04	506
162	弥生土器	壺	12.2				¼	"	393
163	弥生土器	高杯				10.2	⅔	"	391
164	弥生土器	壺			8.0		⅓	"	392
165	弥生土器	壺	10.8				⅓	SB05	394
166	弥生土器	甕	20.4				⅓	"	395
167	弥生土器	高杯	27.0				⅓	SB07	447
168	弥生土器	壺			6.4			"	480
169	弥生土器	甕	19.0				⅓	"	438
170	弥生土器	甕	13.0				⅓	"	448
171	弥生土器	甕	13.6				⅓	"	508
172	弥生土器	壺			5・6		⅓	"	497
173	弥生土器	脚台				9.0	¼	"	441
174	弥生土器	脚台				9.6	¼	"	443
175	弥生土器	台付甕				8.6	⅔	"	484
176	弥生土器	高杯					⅓	"	483
177	弥生土器	高杯					½	"	440
178	弥生土器	高杯						"	442
179	弥生土器	高杯					⅔	"	446
180	土師器	小型器台	8.2				⅓	SB06	494
181	弥生土器	壺	16.0				½	SB08	421
182	弥生土器	壺					⅓	"	419

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	实测番号
			口径	器高	底径	脚径			
183	弥生土器	壺	16.3				1/10	S B08	422
184	弥生土器	壺	33.8				1/10	"	429
185	弥生土器	壺	14.6				1/8	"	417
186	弥生土器	壺	14.4				1/4	"	411
187	弥生土器	壺	15.8				1/5	"	418
188	弥生土器	壺	14.8				1/2	"	410
189	弥生土器	壺	11.6				1/3	"	412
190	弥生土器	壺	16.4				1/10	"	409
191	弥生土器	甕	17.8				1/10	"	415
192	弥生土器	甕	21.9				1/10	"	414
193	土師器	S字甕	14.0				1/10	"	406
194	土師器	S字甕					1/8	"	430
195	弥生土器	壺	10.4				1/4	"	420
196	弥生土器	壺			3.4		2/3	"	413
197	弥生土器	壺			5.0		2/3	"	433
198	土師器	小型高杯					2/3	"	432
199	弥生土器	器台					1/3	"	400
200	弥生土器	高杯					1/3	"	425
201	土師器	小型器台	8.4				1/3	"	431
202	土師器	小型丸底壺					1/5	"	416
203	弥生土器	脚台					1/3	"	405
204	土師器	S字甕				9.2	1/4	"	434
205	土師器	S字甕					1/4	"	407
206	土師器	S字甕					1/2	"	408
207	土師器	S字甕					1/3	"	427
208	弥生土器	壺	13.1				1/6	S B09	471
209	弥生土器	壺	22.0				2/5	"	451
210	弥生土器	甕	21.4				1/10	"	454
211	弥生土器	甕	17.4				1/4	"	450
212	弥生土器	高杯	18.0				1/4	"	455
213	弥生土器	壺			7.0		1/4	"	515
214	弥生土器	壺			7.2		1/4	"	449
215	弥生土器	高杯					2/5	"	514
216	弥生土器	甕	12.8				1/8	S B10	481
217	弥生土器	甕			8.2		1/4	"	482
218	弥生土器	高杯				14.8	1/8	"	516
219	弥生土器	壺	15.2				1/10	S B12	370
220	弥生土器	脚台				8.0	1/3	"	435
221	弥生土器	高杯					2/3	"	372
222	弥生土器	壺			7.2		1/2	"	371

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	实测番号
			口径	器高	底径	脚径			
223	弥生土器	壺	12.8				1/6	S B14	373
224	弥生土器	壺	23.2				1/7	"	383
225	弥生土器	高杯					1/8	"	374
226	弥生土器	壺	13.8				1/4	"	380
227	弥生土器	甕	20.2				1/10	"	375
228	弥生土器	甕	25.4				1/12	"	376
229	弥生土器	甕	12.6				1/3	"	377
230	弥生土器	脚台				3.2	2/3	"	397
231	土師器	壺	12.2	12.8	4.6		1/2	"	772
232	弥生土器	台付甕				6.0	1/2	"	382
233	弥生土器	高杯	26.0				1/2	S B15	389
234	弥生土器	甕	19.4				1/10	S B16	366
235	弥生土器	脚台				7.6	1/5	"	365
236	弥生土器	高杯					2/3	"	362
237	弥生土器	甕	12.6				1/4	S B19	351
238	土師器	S字甕	21.8				1/4	"	357
239	弥生土器	壺			6.0		2/3	"	359
240	弥生土器	壺			8.2		1/4	"	358
241	弥生土器	壺			4.8		1/2	"	360
242	弥生土器	脚台				8.2	1/4	"	353
243	弥生土器	脚台					1/3	"	355
244	弥生土器	脚台				8.2	3/5	"	356
245	弥生土器	脚台				8.8	1/2	"	350
246	弥生土器	高杯					1/2	"	354
247	弥生土器	器台					2/3	"	352
248	弥生土器	壺			3.4		1/3	"	396
249	弥生土器	壺	16.7				1/4	S B20	322
250	弥生土器	壺	12.8				1/3	"	320
251	弥生土器	壺	14.8				1/6	"	312
252	弥生土器	壺					1/2	"	315
253	弥生土器	甕	15.0				1/10	"	331
254	弥生土器	甕	11.8				1/4	"	319
255	弥生土器	甕	14.4				1/10	"	317
256	弥生土器	甕	19.6				1/10	"	329
257	弥生土器	甕	13.8				1/5	"	311
258	弥生土器	甕	29.8				1/4	"	347
259	土師器	高杯	11.6				1/3	"	326
260	土師器	小型高杯	9.0				1/6	"	310
261	弥生土器	器台	18.8				2/3	"	318
262	弥生土器	壺			5.2		1/3	"	332

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	实测番号
			口径	器高	底径	脚径			
263	弥生土器	壺			3.6		$\frac{1}{3}$	SB20	321
264	弥生土器	壺底			4.8		$\frac{1}{2}$	"	313
265	弥生土器	壺底			6.8		$\frac{2}{3}$	"	314
266	弥生土器	脚台				8.6	$\frac{1}{3}$	"	327
267	弥生土器	脚台				4.8	$\frac{1}{2}$	"	309
268	弥生土器	脚台					$\frac{2}{3}$	"	306
269	弥生土器	脚台					$\frac{1}{3}$	"	324
270	弥生土器	脚台				6.8	$\frac{2}{3}$	"	303
271	土師器	S字甕					$\frac{1}{3}$	"	316
272	弥生土器	高杯					$\frac{2}{3}$	"	302
273	弥生土器	高杯					$\frac{2}{3}$	"	305
274	弥生土器	高杯					$\frac{1}{4}$	"	308
275	弥生土器	高杯					$\frac{1}{4}$	"	304
276	弥生土器	甕	20.6				$\frac{1}{10}$	SB21	339
277	弥生土器	甕	22.4				$\frac{1}{10}$	"	345
278	弥生土器	甕	12.4				$\frac{1}{4}$	"	343
279	弥生土器	甕	13.8				$\frac{1}{8}$	"	337
280	弥生土器	高杯					$\frac{1}{2}$	"	336
281	弥生土器	器台					$\frac{1}{2}$	"	513
282	弥生土器	高杯	24.0				$\frac{1}{8}$	"	348
283	弥生土器	高杯	20.8				$\frac{1}{4}$	"	344
284	弥生土器	高杯				10.6	$\frac{1}{2}$	"	334
285	弥生土器	器台					$\frac{1}{4}$	"	341
286	弥生土器	脚台				5.8	$\frac{2}{3}$	"	338
287	条痕文土器	壺			6.0		$\frac{1}{3}$	SB23	475
288	弥生土器	壺	9.2				$\frac{1}{2}$	SB24	468
289	弥生土器	鉢	11.0				$\frac{1}{8}$	"	462
290	弥生土器	壺			3.4		$\frac{1}{2}$	"	461
291	弥生土器	壺			6.0		$\frac{1}{2}$	"	477
292	弥生土器	台付甕				9.0	$\frac{1}{3}$	"	466
293	弥生土器	台付甕				8.6	$\frac{2}{3}$	"	465
294	弥生土器	高杯					$\frac{2}{3}$	"	458
295	弥生土器	高杯				13.6		"	460
296	弥生土器	高杯					$\frac{1}{3}$	"	473
297	弥生土器	高杯					$\frac{1}{8}$	"	467
298	弥生土器	高杯					$\frac{1}{2}$	"	470
299	土師器	小型器台				7.8		"	469
300	弥生土器	壺	13.4	31.3	4.0		$\frac{2}{3}$	SZ04	850
301	弥生土器	甕	11.0				$\frac{1}{4}$	SK56	802
302	弥生土器	甕	12.5	19.5	3.2		完形	SK05	751

番号	土器	器形	法量 (mm)				残度	出土地点	実測番号
			口径	器高	底径	脚径			
303	弥生土器	脚台				7.6	1/2	S K64	807
304	弥生土器	壺			3.0		完存	S K07	839
305	弥生土器	甕	19.0				1/10	S K33	818
306	弥生土器	甕	17.8				1/8	S K25	819
307	灰釉系陶器	椀	14.6				1/6	S K22	827
308	灰釉系陶器	椀			8.4		3/4	S K40	837
309	弥生土器	甕	21.4				1/5	S K47	817
310	弥生土器	壺			3.4		完存	S K47	839
311	弥生土器	甕	17.5					S K60	808
312	弥生土器	壺			5.2		1/2	S K60	809
313	須恵器	杯			14.8		1/8	S K71	846
314	近世陶器	皿	11.0	2.3	5.6		1/4	S K71	847
315	弥生土器	甕	29.0				2/3	S K35	816
316	弥生土器	壺			3.2			S K35	810
317	須恵器	蓋	14.4				1/5	S K38	634
318	近世陶器	すり鉢	32.6				1/3	S K72	835
319	灰釉系陶器	皿	8.0	1.1	3.0		1/6	S K72	824
320	灰釉陶器	椀	14.4				1/6	S K21	821
321	灰釉系陶器	椀	14.0				1/5	S K21	845
322	灰釉系陶器	椀			8.0		1/2	"	833
323	灰釉陶器	椀			8.8		1/5	"	831
324	近世陶器	皿	12.0	2.0	7.0		1/6	"	836
325	灰釉系陶器	椀			5.8		1/3	"	844
326	須恵器	円面硯(小片)						"	838
327	近世陶器	椀	10.6				1/4	"	826
328	近世陶器	椀			6.8		1/4	"	830
329	近世陶器	椀			5.6		完存	"	834
330	灰釉系陶器	椀	16.0				1/6	S K63	823
331	灰釉系陶器	椀	17.8				1/6	"	822
332	灰釉系陶器	皿	7.6				1/5	"	828
333	陶器	羽釜	32.0					"	820
334	弥生土器	高杯				14.4	1/3	"	801
335	弥生土器	高杯					1/3	S D06	813
336	弥生土器	高杯					2/3	"	805
337	弥生土器	壺			2.8			"	812
338	弥生土器	小型土器			3.8		1/3	"	811
339	須恵器	杯身	13.4	4.2	5.8		1/3	"	604
340	須恵器	高杯				10.4	1/4	S D06	612
341	土師器	高杯	20.8	12.7		13.6	2/3	ピット567	849
342	弥生土器	脚台				5.6	1/3	ピット336	814

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	実測番号
			口径	器高	底径	脚径			
343	弥生土器	有孔土器			2.2		1/8	ビット551	848
344	須恵器	高杯	9.4	9.5		8.6	3/8	ビット17	754
345	灰釉系陶器	椀	14.5				1/8	ビット336	825
346	須恵器	甌	26.2				1/8	ビット332	803
347	須恵器	杯身	12.4				1/8	ビット501	841
348	須恵器	杯身	12.4				1/8	ビット501	840
349	須恵器	高杯				10.4	1/2	ビット501	842
350	須恵器	高杯				11.4	1/8	ビット501	843
351	須恵器	杯蓋	14.8				1/2	ST29	601
352	須恵器	杯蓋	7.3	5.1			3/8	ST29	757
353	須恵器	杯蓋	8.0	5.9			1/2	ST29	756
354	須恵器	杯蓋					1/8	ST34	606
355	須恵器	杯身	10.9				1/4	ST34	603
356	須恵器	蓋	10.4				1/2	ST14	635
357	須恵器	蓋					3/4	ST27	615
358	須恵器	蓋					3/8	ST06	621
359	須恵器	蓋					完存	ST13	620
360	須恵器	高盤	20.8	2.4	14.0		1/8	ST18	627
361	須恵器	壺	12				1/8	ST33	614
362	須恵器	壺	8					ST32	613
363	須恵器	甕	17.2				1/8	ST29	753
364	須恵器	台付壺脚台				20.8	1/8	ST32	637
365	須恵器	鉢			16.6		1/8	ST39	619
366	灰釉陶器	椀	17.2	5.5	7.8		3/8	ST17	657
367	灰釉陶器	椀	17.2				1/8	ST27	642
368	灰釉陶器	椀			7.2		1/2	ST24	656
369	灰釉陶器	皿	12.8	2.4	4.4		1/4	ST07	641
370	灰釉陶器	椀			8.0		1/4	ST06	650
371	灰釉系陶器	椀	16.8	5.7	5.8		1/8	ST18	658
372	灰釉系陶器	椀	14.4	5.8	7.2		1/2	ST19	659
373	灰釉系陶器	皿	9.2	2.8	4.4		1/4	ST18	670
374	灰釉系陶器	皿	8.2	2	3.2		完形	ST07	652
375	灰釉系陶器	皿	8.2	2.3	4.2		1/4	ST18	662
376	灰釉系陶器	皿	7.8	1.5	5.4		1/2	ST30	654
377	灰釉系陶器	皿	7.6	1.4	5.8		1/8	ST21	661
378	灰釉系陶器	皿	8.0	1.5	5.2		1/4	ST07	663
379	灰釉系陶器	皿	8.2	1.9	5.5		1/2	ST20	656
380	灰釉系陶器	皿	9.6	1.7	5.0		1/8	ST19	660
381	灰釉系陶器	皿	7.8	0.9	4.4		1/4	ST13	679
382	灰釉系陶器	皿	8.2	1.0	4.8		1/8	ST04	689

番号	土器	器形	法量(mm)				残度	出土地点	实测番号
			口径	器高	底径	脚径			
383	灰釉系陶器	皿	8.5	0.7	5.4		1/2	ST25	687
384	灰釉系陶器	皿	8.0	1.15	4.5		1/2	ST27	680
385	灰釉系陶器	皿	8.0	1.2	4.8		1/4	ST34	682
386	灰釉系陶器	皿	8.0	0.8	6.6		1/4	ST26	681
387	灰釉系陶器	皿	7.8	1.1	4.6		完存	ST14	685
388	灰釉系陶器	皿	8.6	1.2	5.0		1/4	ST29	688
389	灰釉系陶器	皿	8.4	1.1	5.6		1/4	ST01	678
390	灰釉系陶器	皿	8.8	1.6	4.6		1/4	ST24	674
391	灰釉系陶器	皿	7.6	1.1	5.6		1/4	ST07	683
392	灰釉系陶器	皿	8.4	1.2	5.1		1/2	ST07	691
393	灰釉系陶器	皿	8.8	1.3	5.4		1/4	ST18	676
394	灰釉系陶器	皿	7.4	0.9	5.8		1/4	ST18	675
395	灰釉系陶器	皿	8.8	1.1	5.4		1/4	ST14	673
396	灰釉系陶器	皿	7.6	1.5	4.2		3/4	ST19	690
397	灰釉系陶器	皿	4.2	1.1	2.4		1/4	ST21	760
398	灰釉系陶器	皿	8.2	6.0	5.5		1/2	ST21	684
399	灰釉系陶器	皿	8.4	0.9	6.6		1/4	ST19	672
400	灰釉系陶器	碗	13.2	4.1	4.0		1/3	ST26	664
401	灰釉系陶器	碗	15.2	3.7	3.9		1/4	ST21	666
402	灰釉系陶器	碗	15.0	3.4	4.3		1/4	ST23	667
403	灰釉系陶器	碗	12.2	3.0	2.8		1/4	ST21	761
404	灰釉系陶器	碗	12.2	3.0	4.2		1/2	ST26	665
405	灰釉系陶器	碗	13.2				1/4	ST26	758
406	灰釉系陶器	碗	13.0				1/4	ST26	759
407	灰釉系陶器	碗	12.4	2.8	5.2		1/4	ST13	668
408	灰釉系陶器	碗	12.2				1/4	ST06	763
409	灰釉系陶器	碗	11.6	2.3	4.8		3/4	ST26	755
410	灰釉系陶器	碗	10.0	2.8	3.6		1/4	ST19	669
482	弥生土器	壺	13.8				1/4	表土	710
483	弥生土器	壺	19.8				1/4	検出I	708
484	弥生土器	壺	24.8				1/4	検出II	721
485	弥生土器	壺	17.2				1/4	検出I	709
486	弥生土器	壺					1/3	表土	766
487	弥生土器	壺	14.0				1/4	検出II	712
488	弥生土器	壺	18.0				1/4	検出I	707
489	弥生土器	壺	23.8				1/20	検出I	728
490	弥生土器	壺	21.0				1/4	検出I	714
491	弥生土器	壺	19.0				3/4	検出I	732
492	弥生土器	壺	20.6				1/4	検出I	727
493	弥生土器	壺	13.6				1/4	検出II	715

番号	土器	器形	法量 (mm)				残度	出土地点	実測番号
			口径	器高	底径	脚径			
494	弥生土器	壺			1.9		完存	検出II	725
495	弥生土器	壺				9.6	1/4	検出I	723
496	弥生土器	鉢	19.2				1/8	検出II	740
497	弥生土器	甕	15.4				1/8	検出I	749
498	弥生土器	甕	16.0				1/4	検出I	737
499	弥生土器	甕	13.8				1/8	検出I	742
500	弥生土器	甕	19.8				1/10	検出I	741
501	弥生土器	鉢	19.4				1/8	検出I	747
502	弥生土器	鉢	16.4				1/8	検出I	718
503	条痕文土器	甕			6.8			検出I	769
504	弥生土器	甕			8.0		1/4	検出I	729
505	弥生土器	台付甕				7.8	1/4	検出II	716
506	弥生土器	甕			5.8		1/2	検出I	764
507	弥生土器	S字甕	16.6				1/8	検出I	743
508	弥生土器	S字甕					1/4	検出I	736
509	弥生土器	S字甕					完存	S B20	325
510	弥生土器	S字甕					1/8	検出I	724
511	弥生土器	高杯	28.4				1/8	検出II	713
512	弥生土器	高杯			13.0		1/4	検出I	743
513	弥生土器	高杯					完存	検出I	752
514	弥生土器	脚台				5.0	完存	検出I	720
515	弥生土器	器台				8.2		検出I	711
516	弥生土器	小型土器			2.6		1/8	検出I	730
517	弥生土器	小型土器			3.4		完存	検出II	750
518	弥生土器	有孔土器			5.4		完存	検出I	719
519	弥生土器	有孔土器			3.0		1/8	検出I	744

縄文土器

番号	器形	出土地点	実測番号	番号	器形	出土地点	実測番号	番号	器形	出土地点	実測番号
36	深鉢	東微高地上	909	48	深鉢	第5図第19層	1305	59	深鉢	第5図第19層	1316
37	浅鉢	東微高地上	733	49	深鉢	"	1306	60	深鉢	"	1317
38	壺	西微高地上	912	50	深鉢	"	1307	61	深鉢	"	1318
39	壺	西微高地上	911	51	深鉢	"	1308	62	深鉢	"	1319
41	壺	第5図第9層	908	52	深鉢	"	1309	63	深鉢	"	1320
42	深鉢	東微高地上	906	53	深鉢	"	1310	64	深鉢	"	1321
43	深鉢	西微高地上	901	54	深鉢	"	1311	65	深鉢	"	1322
44	深鉢	第5図第19層	1301	55	深鉢	"	1312	66	深鉢	"	1323
45	深鉢	"	1302	56	深鉢	"	1313	67	深鉢	"	1324
46	深鉢	"	1303	57	深鉢	"	1314	68	深鉢	"	1325
47	深鉢	"	1304	58	深鉢	"	1315	69	深鉢	"	1326

番号	器形	出土地点	実測番号	番号	器形	出土地点	実測番号	番号	器形	出土地点	実測番号
70	深鉢	第5図第19層	1327	77	深鉢	第5図第19層	1334	586			1340
71	深鉢	"	1328	580			1335	587			1341
72	深鉢	"	1329	581			1336	588			1342
73	深鉢	"	1330	582	壺	東微高地上	903	589			1343
74	深鉢	"	1331	583			1337	590			1344
75	深鉢	"	1332	584			1338	591			1345
76	深鉢	"	1333	585			1339	592			1346

円筒埴輪（窖窯焼成）

番号	部 位	出土地点	実測番号	番号	部 位	出土地点	実測番号	番号	部 位	出土地点	実測番号
411	口 縁 部	ST13	1401	435	基 底 部	ST04	1425	459	胴部(タガ有)	表土	1449
412	"	表 土	1402	436	"	ST10	1426	460	"	ST14	1450
413	"	ST06	1403	437	"	検出 I	1427	461	"	ST09	1451
414	"	検出 I	1404	438	"	検出 I	1428	462	"	検出 I	1452
415	"	SK21	1405	439	"	ST08	1429	463	"	表土	1453
416	"	検出 I	1406	440	"	表土	1430	464	"	ST07	1454
417	"	ST27	1407	441	"	検出 I	1431	465	"	検出 I	1455
418	"	検出 I	1408	442	"	検出 I	1432	466	"	ST18	1456
419	"	ST02	1409	443	胴部(透し有)	ST06	1433	467	"	検出 I	1457
420	"	ST06	1410	444	"	検出 I	1434	468	"	検出 I	1458
421	"	検出 I	1411	445	"	ST19	1435	469	"	ST12	1459
422	"	ST07	1412	446	"	ST13	1436	470	"	検出 I	1460
423	"	検出 I	1413	447	胴部(タガ無)	検出 I	1437	471	"	検出 I	1461
424	"	検出 I	1414	448	"	検出 I	1438	472	"	検出 I	1462
425	"	ST23	1415	449	"	検出 I	1439	473	"	検出 I	1463
426	"	検出 I	1416	450	"	ST08	1440	474	"	検出 I	1464
427	"	ST23	1417	451	"	検出 I	1441	475	口縁部(朝顔形)	検出 I	1465
428	"	ST02	1418	452	"	ST06	1442	476	"	検出 I	1466
429	"	ST13	1419	453	胴部(タガ有)	検出 I	1443	477	"	第5図 第3層	1467
430	"	ST02	1420	454	"	表土	1444	478	"	ST09	1468
431	"	検出 I	1421	455	"	ST08	1445	479	胴 部	ST02	1469
432	"	検出 I	1422	456	"	ST19	1446	480	"	検出 I	1470
433	"	ST02	1423	457	"	ST05	1447	481	"	ST09	1471
434	基 底 部	検出 I	1424	458	"	ST06	1448	602	"	検出 I	1472

石 製 品

番号	名 称	大 き さ (cm)			重量(g)	出土地点	石 質	実測番号
		長 さ	幅	厚 さ				
520	石 鏃	2.5	1.6	0.2	1.6	ST03	チャート	S-1
521	"	2.7	1.2	0.15	0.9	ST07	安山岩	S-2
522	"	2.3	1.8	0.3	1.6	SB09	チャート	S-3

番号	名 称	大 き さ (cm)			重量(g)	出土地点	石 質	実測番号
		長 さ	幅	厚 さ				
523	石 鏃	2.6	1.4	0.2	1.2	ST06	チャート	S-4
524	〃	3.3	1.6	0.25	1.8	SK21	チャート	S-5
525	〃	3.2	1.4	0.2	1.7	検出 I	チャート	S-6
526	〃	3.7	1.4	0.2	2.1	SB09	チャート	S-7
527	砥 石	7.2	5.1	1.8	105.9	SB21	砂 岩	S-8
608	磨 石	3.5	3.4	2.6	42.6	検出 I	砂 岩	S-9
609	磨 石	3.5	3.2	2.5	29.9	検出 I	濃飛流紋岩	S-10
610	磨 石	5.5	5.1	5.1	222.8	ST19	砂 岩	S-11
611	石 錘	8.2	8.0	2.8	264.6	SB02	砂 岩	S-12
612	砥 石	5.4	8.7	2.4	245.9	検出 I	砂 岩	S-13
613	砥 石	4.2	5.0	5.1	177.3	検出 I	砂 岩	S-14

その他の遺物

番号	名 称	大 き さ (cm)			重量(g)	出土地点	実測番号
		長 さ	幅	厚 さ			
528	陶 丸	2.1	2.0	2.1	11.7	ST18	1065
529	〃	2.3	2.2	2.2	9.3	ST19	1068
530	〃	2.3	2.1	2.0	11.3	ST26	1066
531	〃	2.5	2.3	2.6	15.3	ST07	1064
532	〃	2.3	2.3	2.0	14.1	ST21	1069
533	〃	2.4	2.2	2.3	10.1	検出 I	1067
534	〃 (1/2残)	2.6	2.4	1.4	7.8	ST26	1127
535	〃 (1/2残)	2.2	2.0	0.9	3.8	ST07	1063
536	土 錘	6.2	2.1	—	22.6	ST04	1057
537	〃	6.3	2.0	—	17.3	ST22	1060
538	〃	5.2	1.9	—	14.9	ST34	1061
539	〃	3.7	2.5	—	16.1	ST13	1058
540	〃	3.2	1.0	—	2.3	ST25	1062
541	〃	3.0	1.1	—	2.7	ST22	1059
542	〃	5.0	1.2	—	5.2	第5図第3層	39
543	〃	5.2	1.2	—	6.1	第5図第3層	18
544	金 環	3.1	3.2	0.7	—	第5図第8層	1126
545	る つ ぼ	8.8	3.6	1.6	37.7	ST34	1110

ヘラ記号をもつ遺物

墨書陶器

緑釉陶器

番号	種類	出土地点	実測番号
546	須恵器	ST30	1078
547	〃	ST39	1076
548	〃	ST33	1075
549	〃	検出 I	1081
550	〃	ST30	1074
551	〃	検出 I	1080
552	〃	SK31	1070
553	〃	ST19	1082
554	〃	ST33	1073
555	〃	ST17	1072
556	〃	SK21	1071
557	〃	ST27	615
558	灰釉陶器	ST34	628
559	須恵器	ST18	1077
560	陶器	検出 I	616
561	須恵器	検出 I	629
562	〃	ST16	623
563	〃	表土	1079
601	〃	検出 I	1128

番号	種類	出土地点	実測番号
564	灰釉系陶器	ST07	1088
565	〃	ST34	1084
566	須恵器	ST18	611
567	灰釉系陶器	ST12	1087
568	〃	ST02	1083
569	〃	ST27	1085
570	〃	検出 I	1086

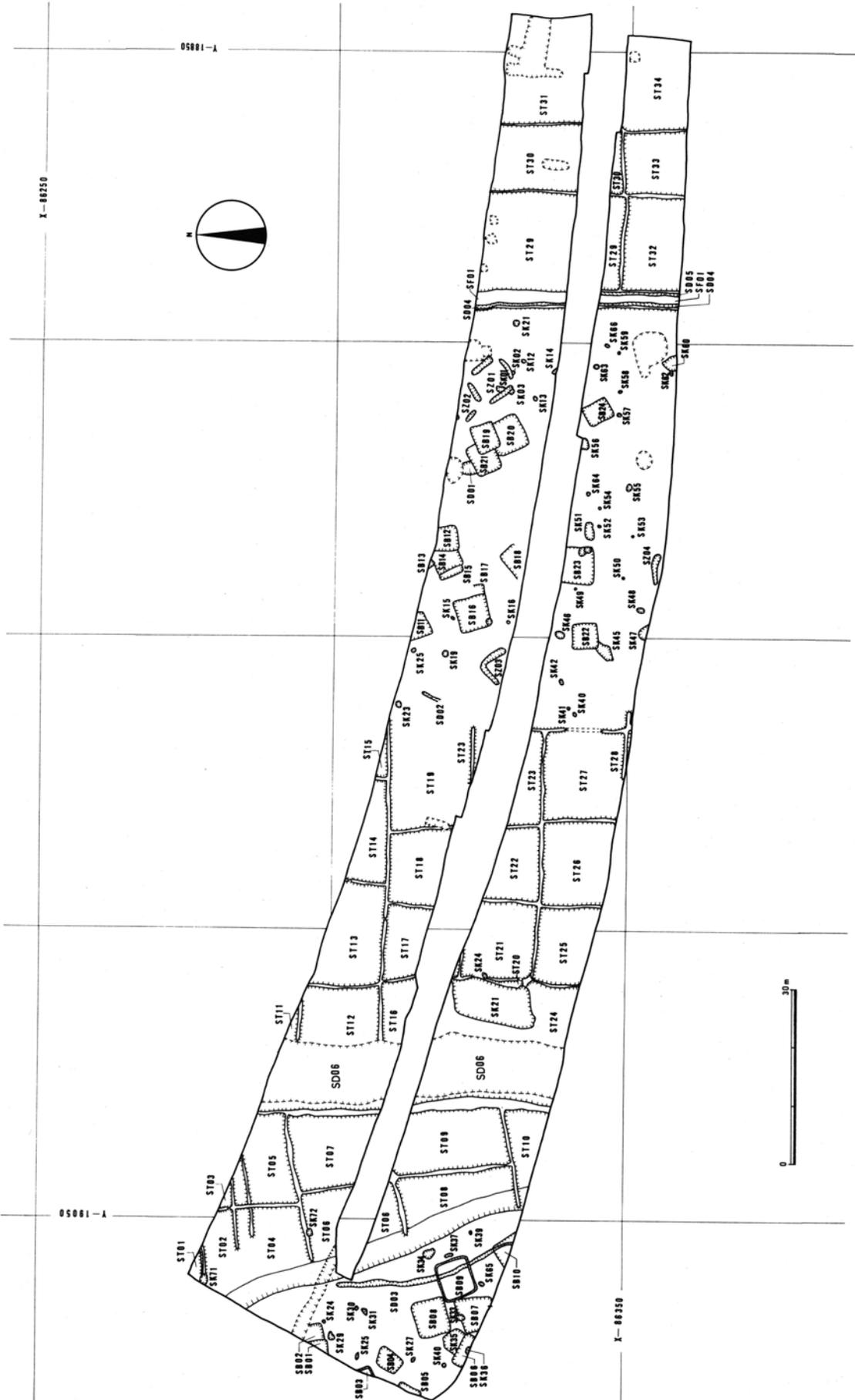
番号	器形	出土地点	実測番号
571	碗	ST06	1004
572	〃	ST33	1029
573	〃	第5図 第6層	1001
574	〃	ST06	1032
575	〃	ST24	1028
576	〃	ST19	1013
577	〃	ST17	1011
578	〃	検出 I	1020
579	〃	検出 I	1002
603	〃	検出 I	1005
604	〃	検出 I	1024
605	〃	検出 I	1008
606	〃	ST20	1033
607	〃	ST04	1016

図 版

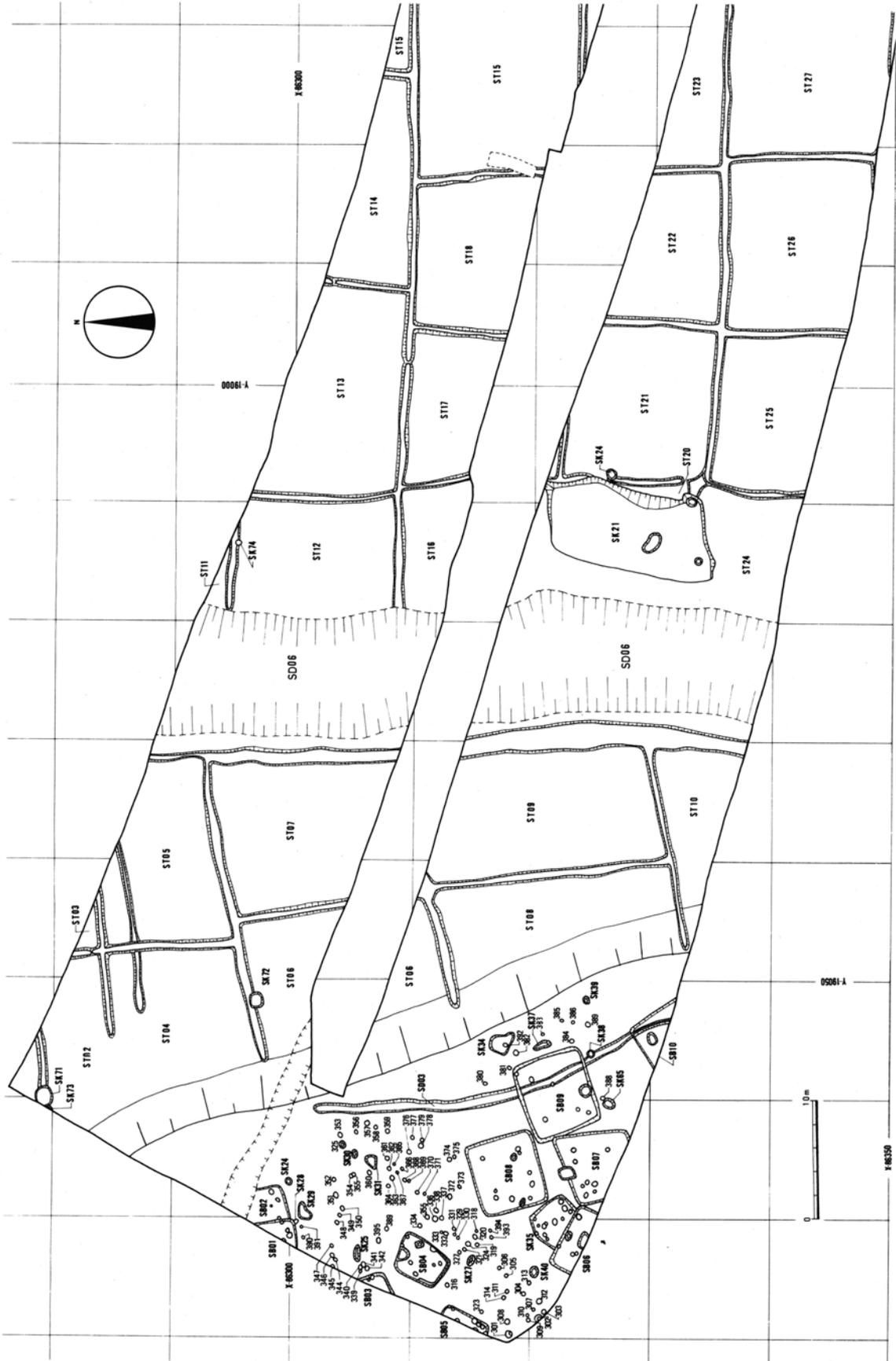
スケール

図版 1	遺構図	1 : 1000
〃 2 ~ 4	遺構図	1 : 500
〃 5 ~ 18	遺構図	1 : 50
〃 19 ~ 36	実測図	1 : 4
〃 36 下半	実測図	1 : 2
〃 37	実測図	1 : 3

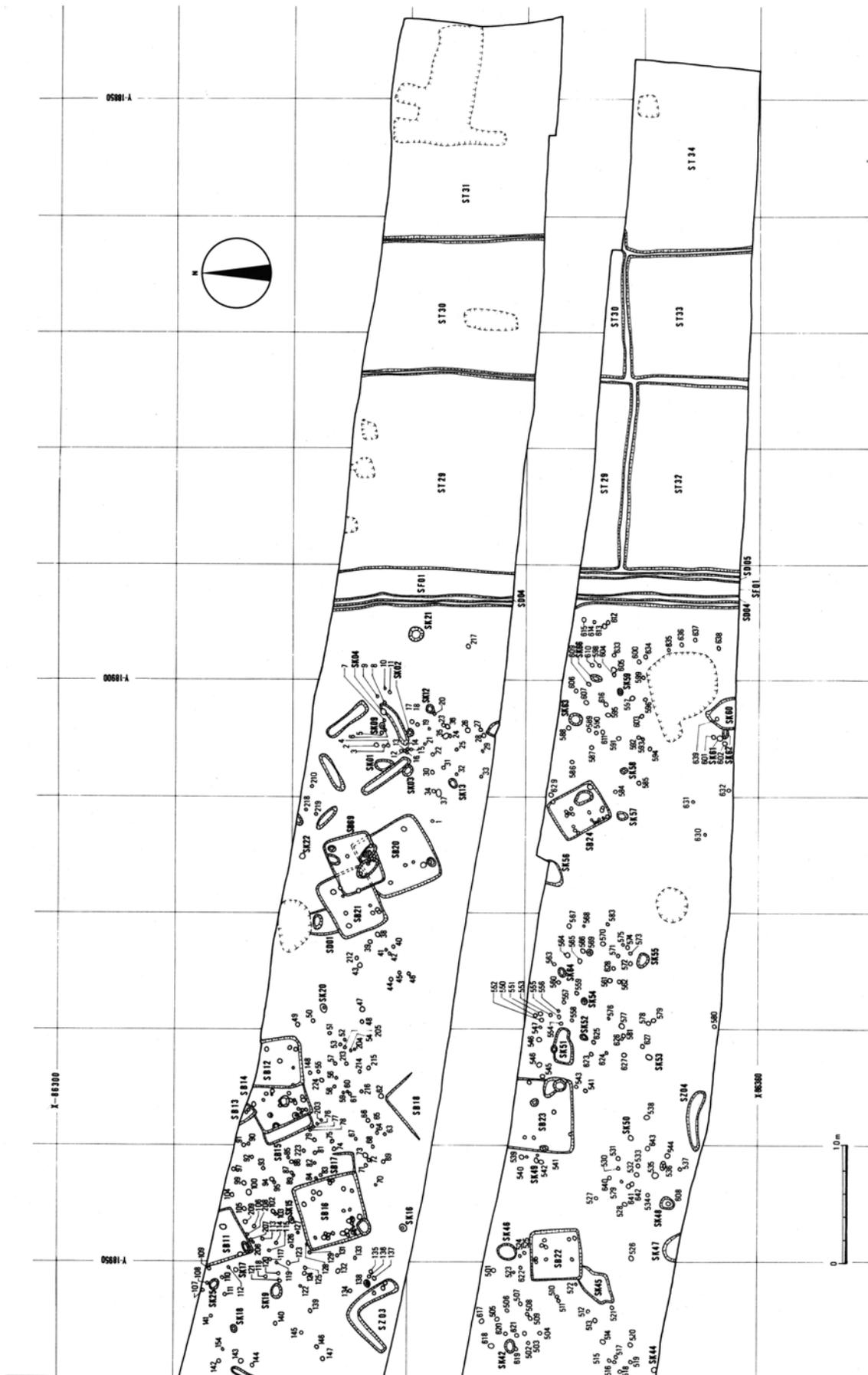
図版1 遺構図 (1)

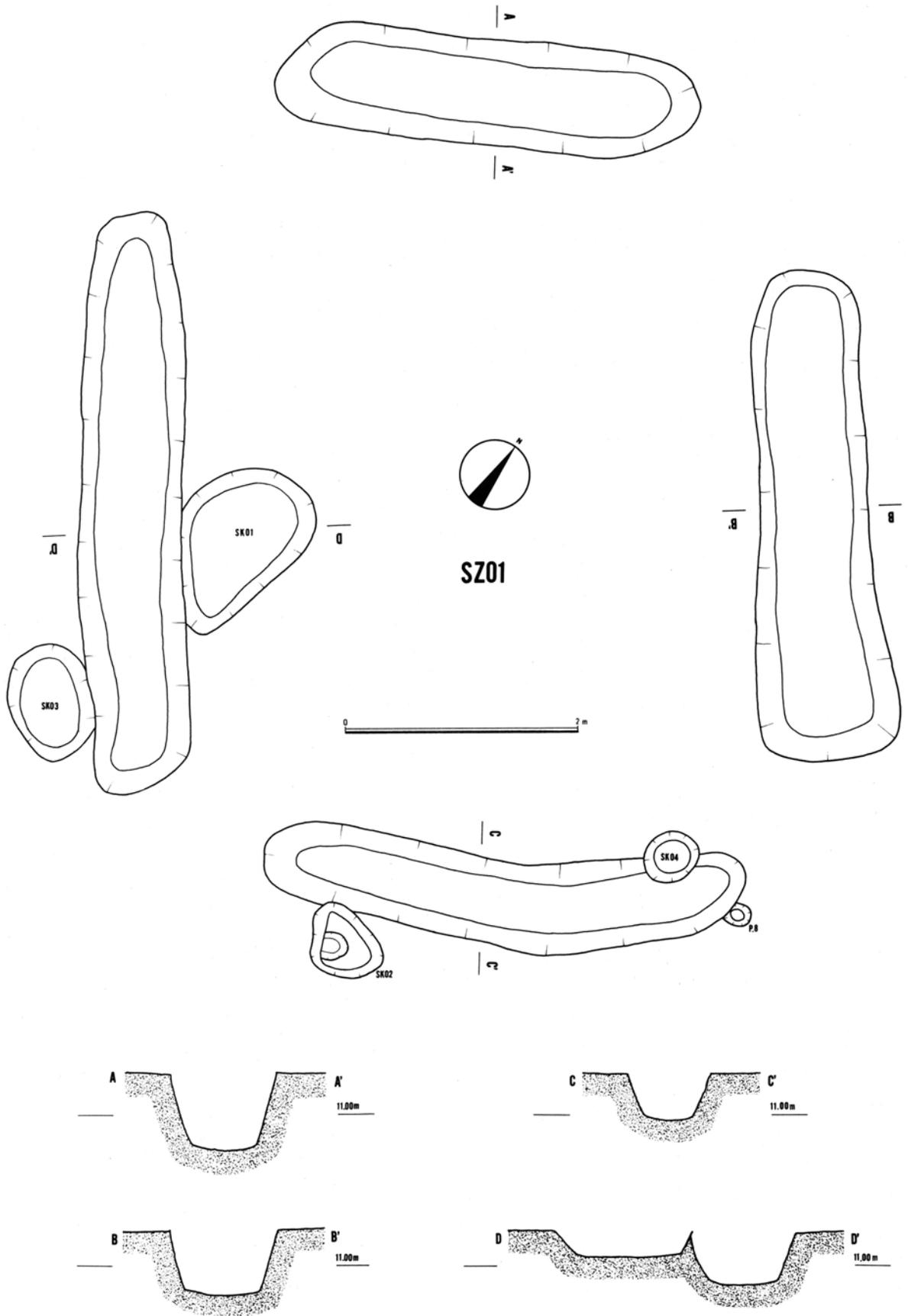


図版2 遺構図(2)

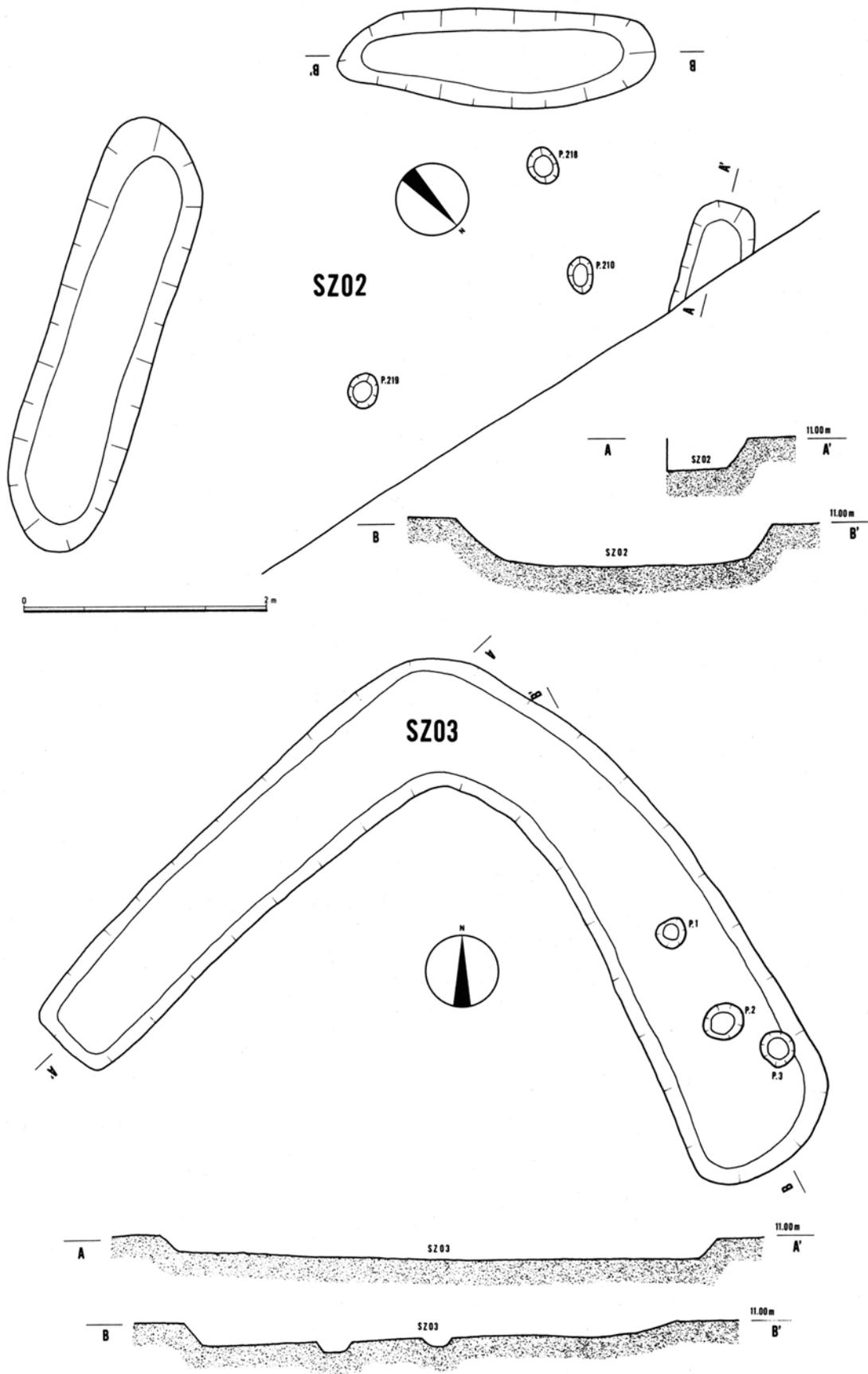


図版4 遺構図 (4)

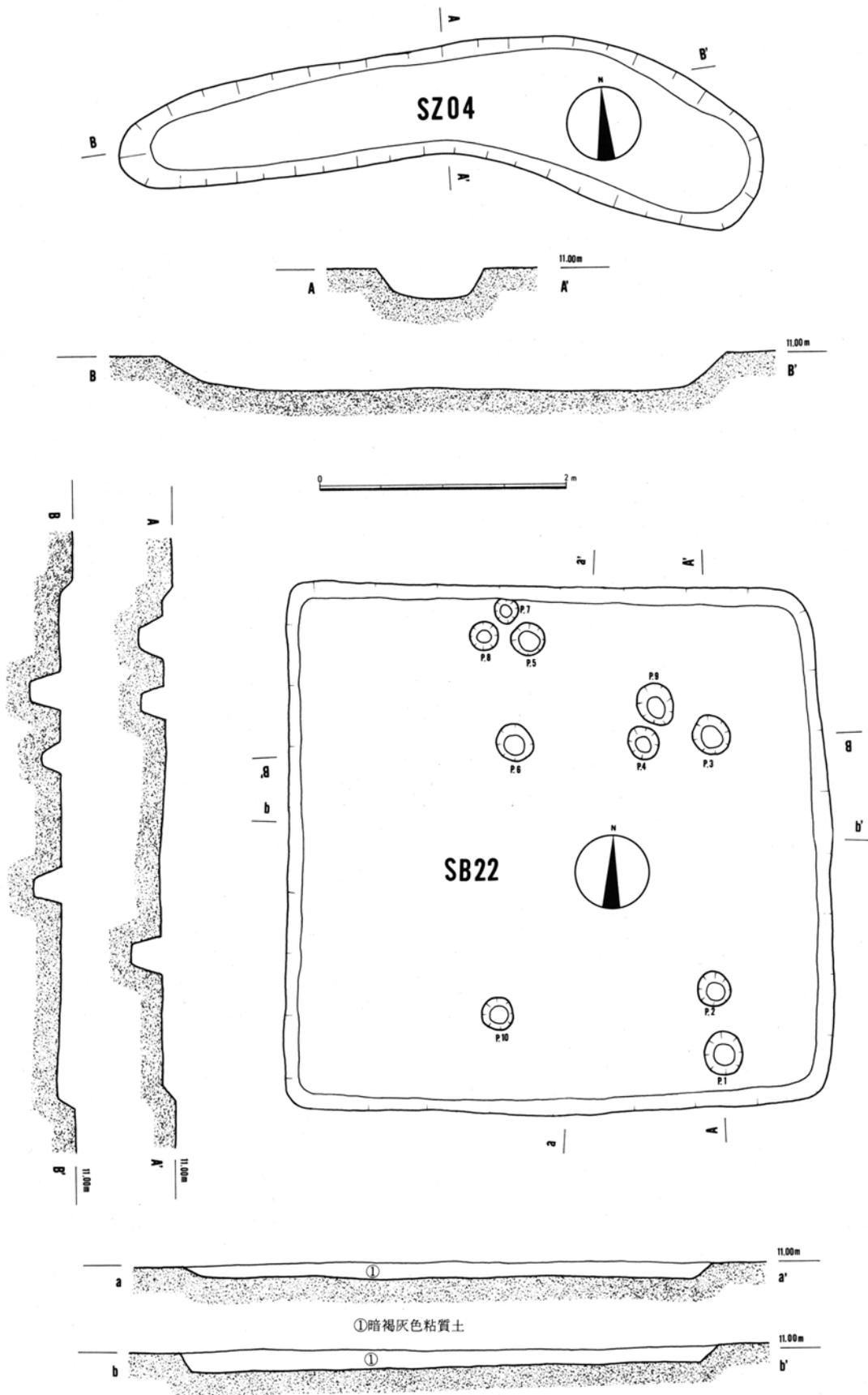




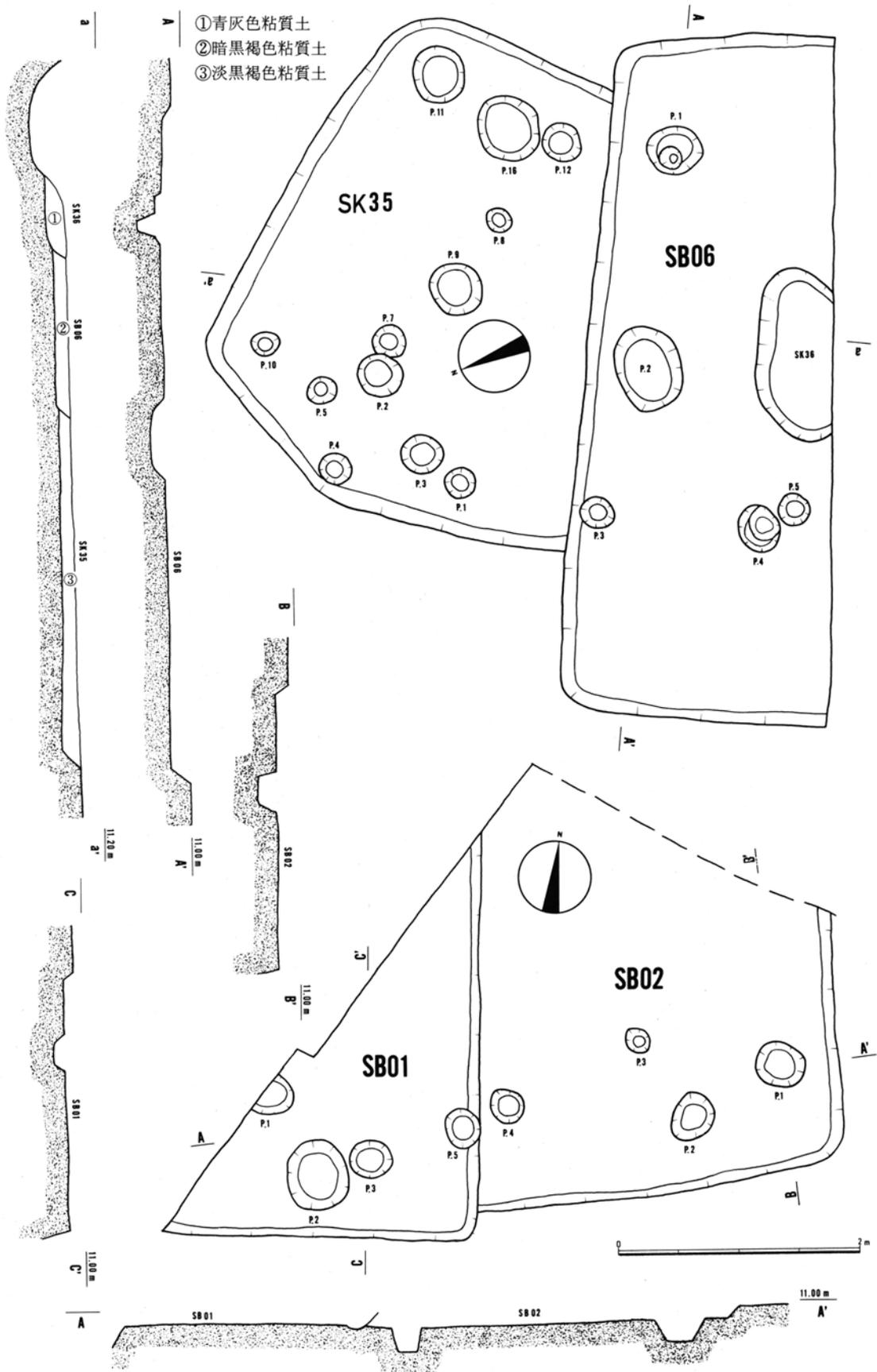
图版6 遺構図(6)

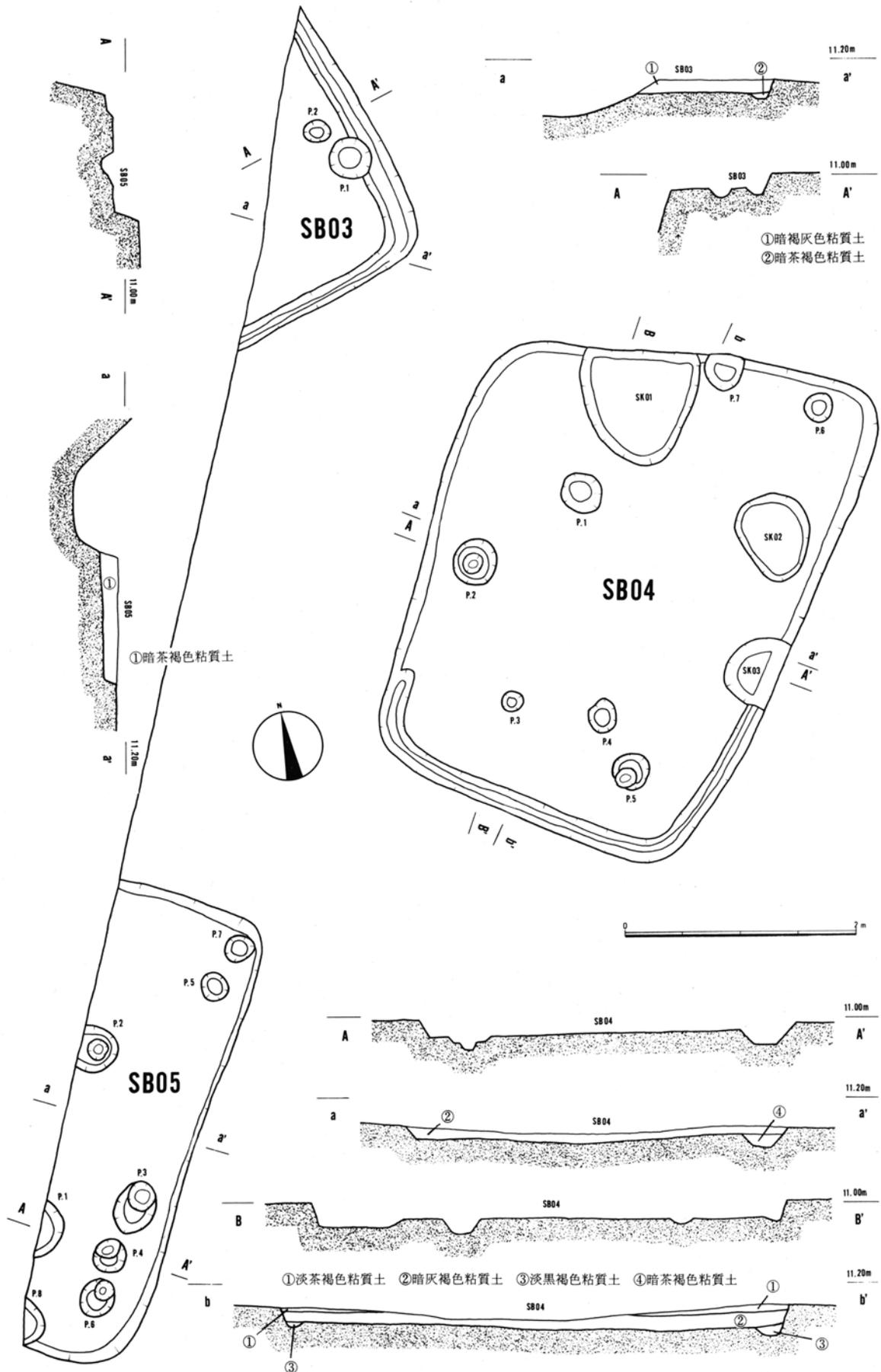


図版7 遺構図 (7)

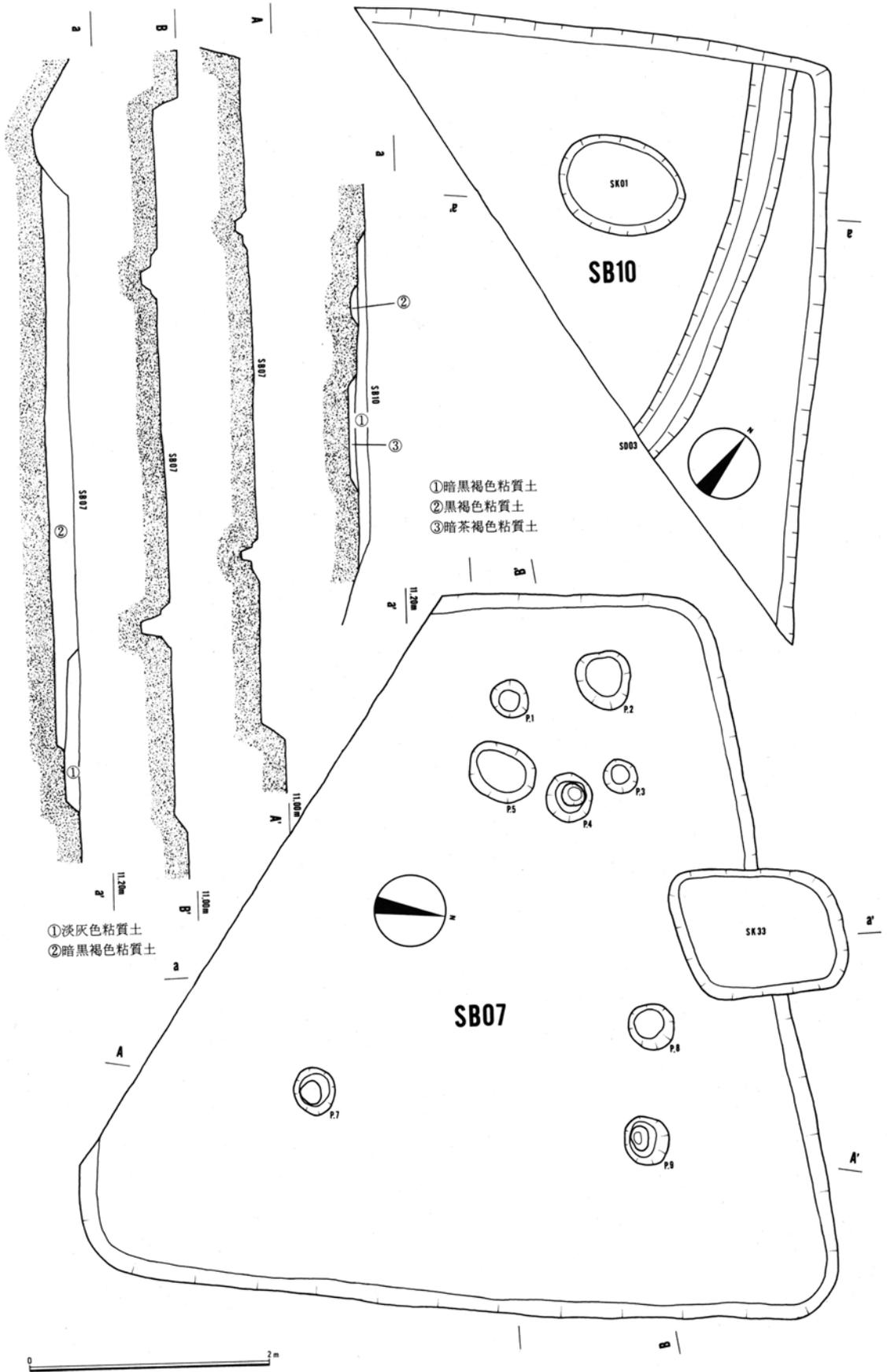


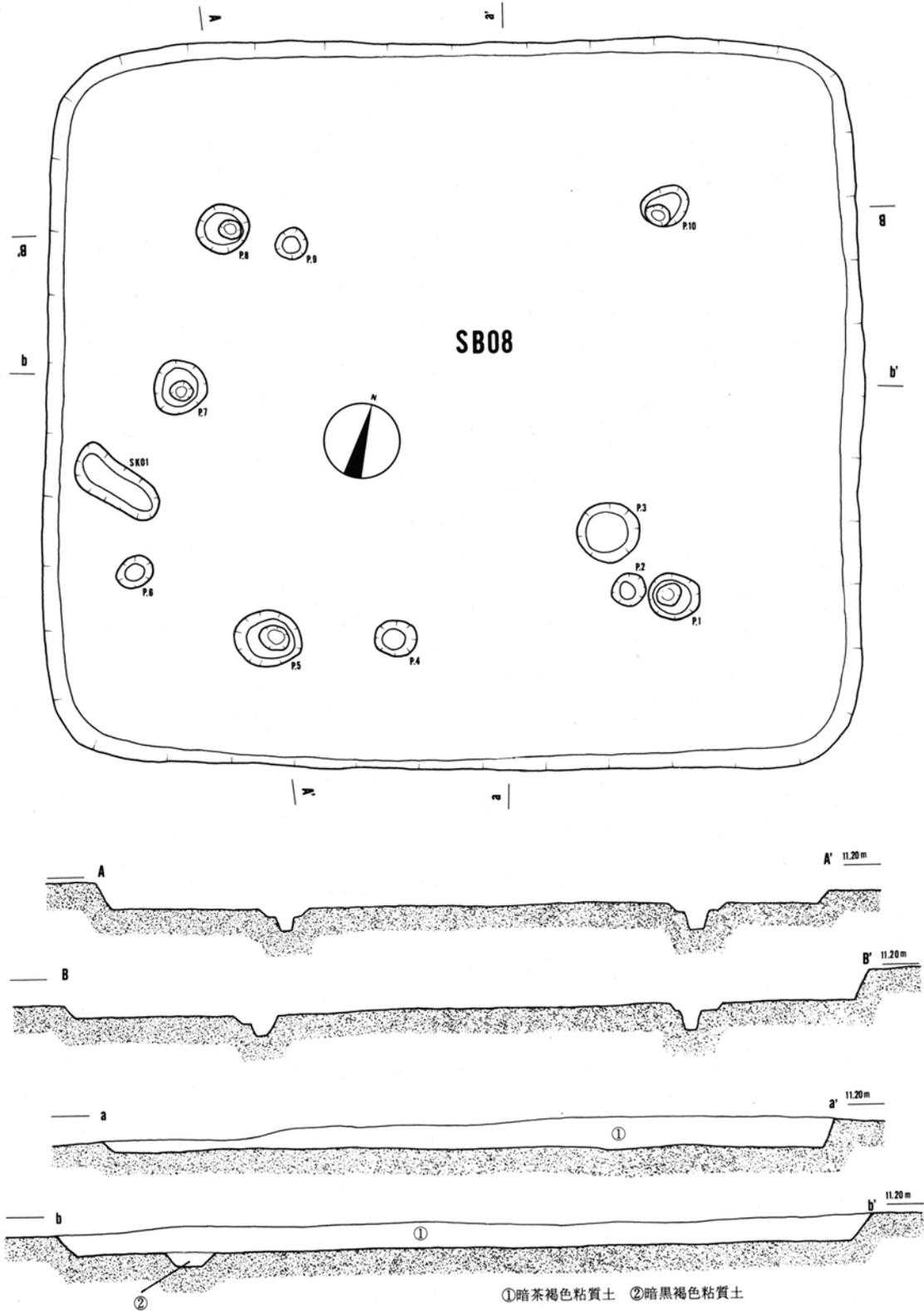
図版8 遺構図 (8)



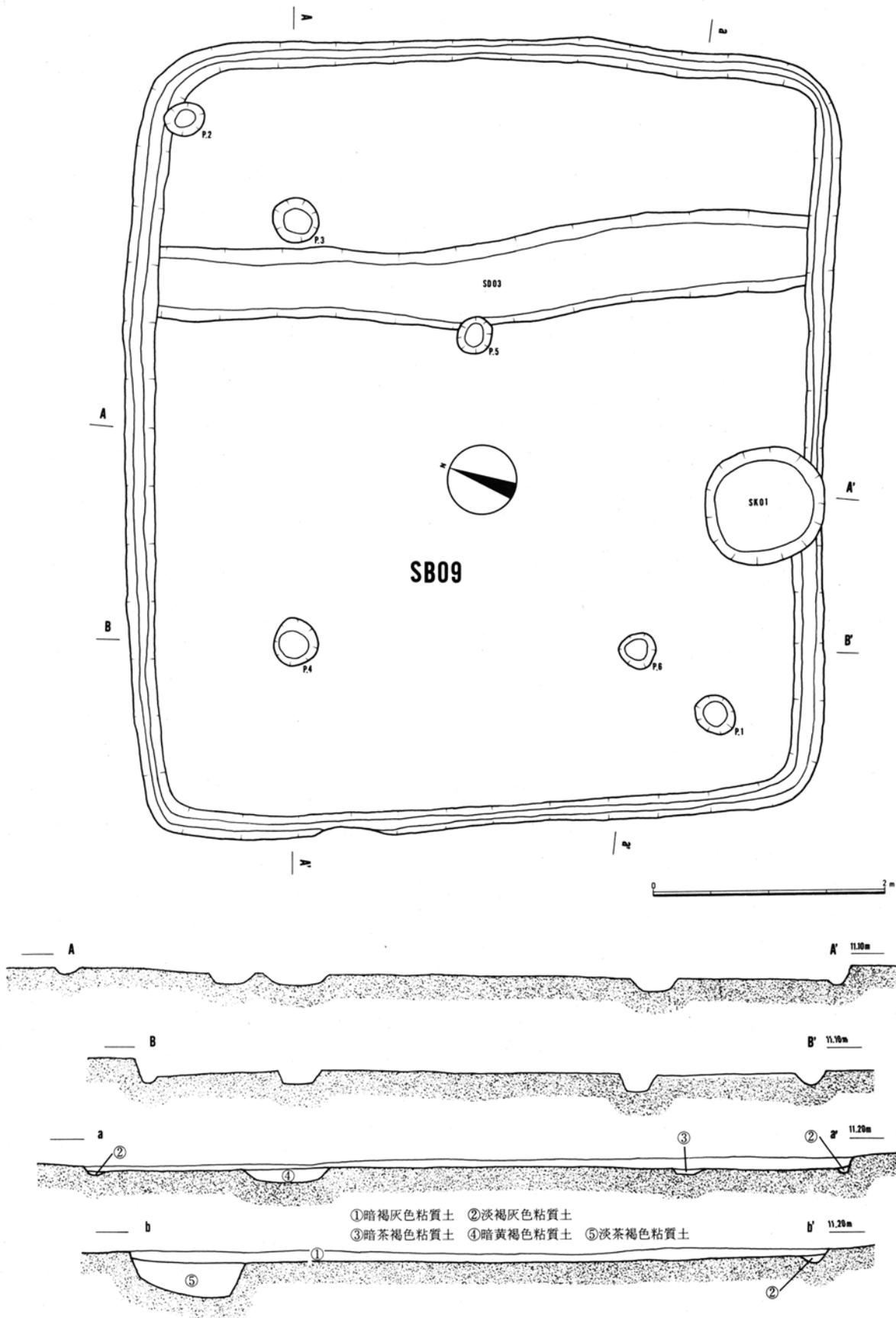


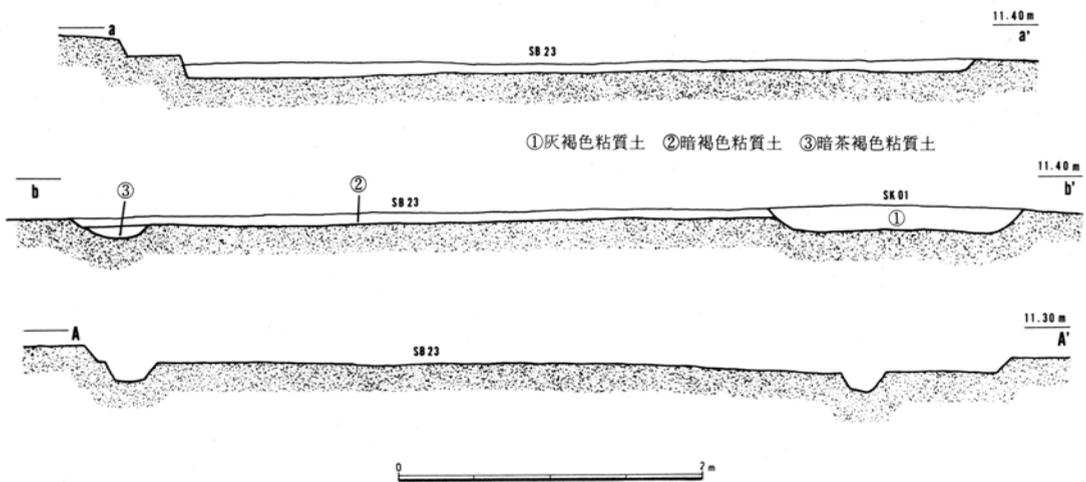
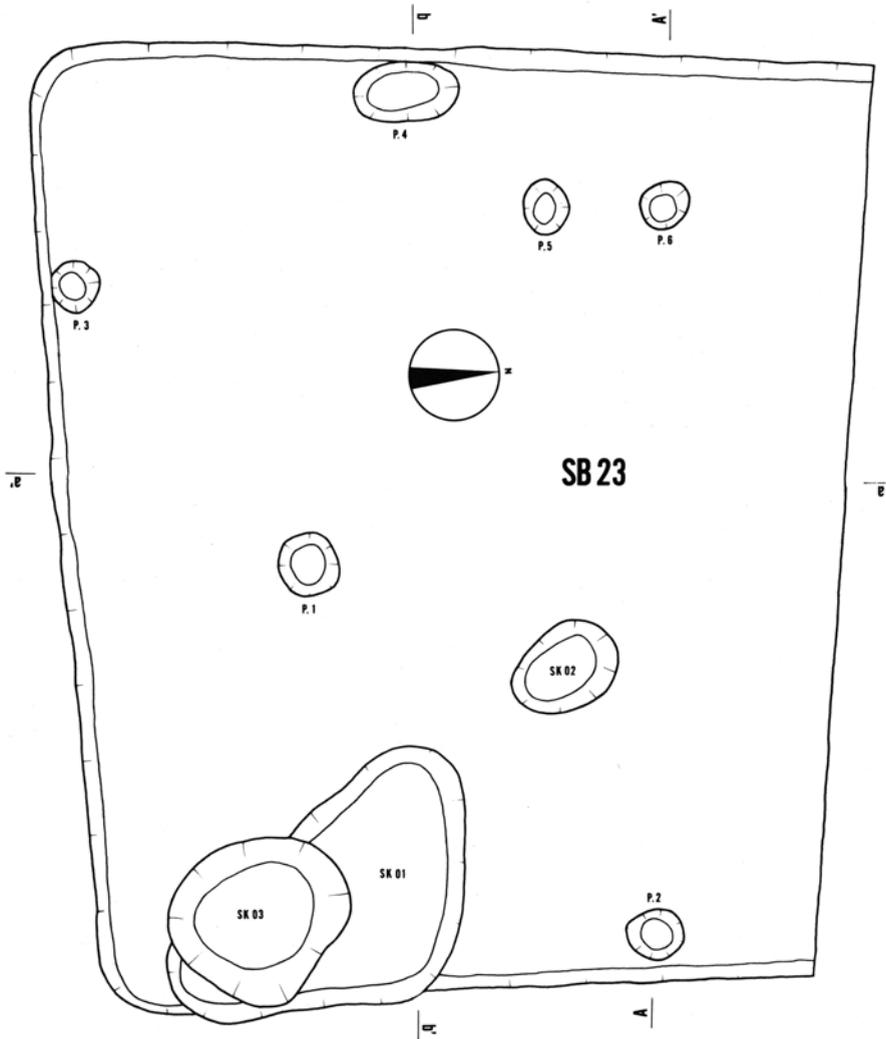
图版10 遺構図 (10)



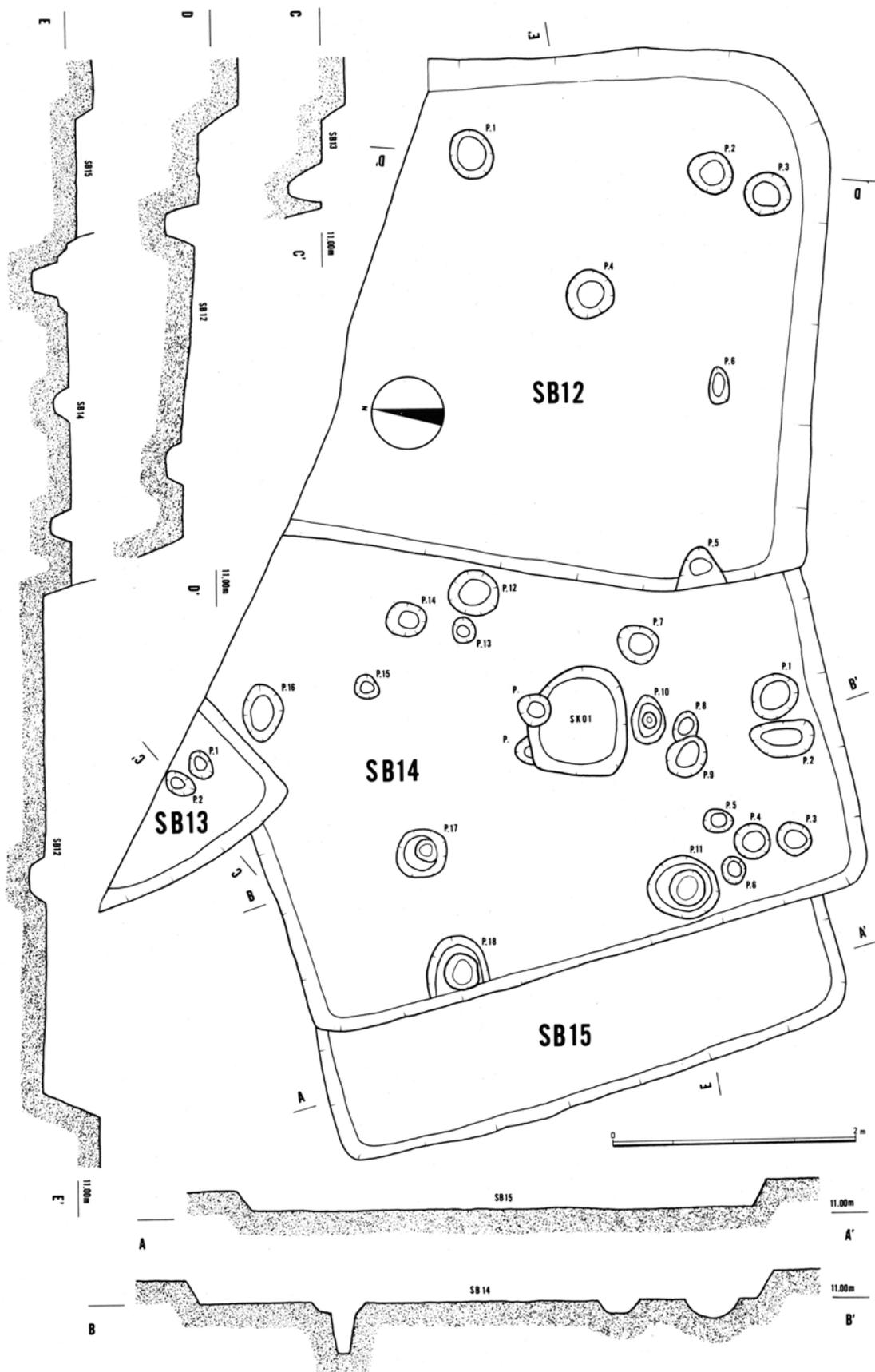


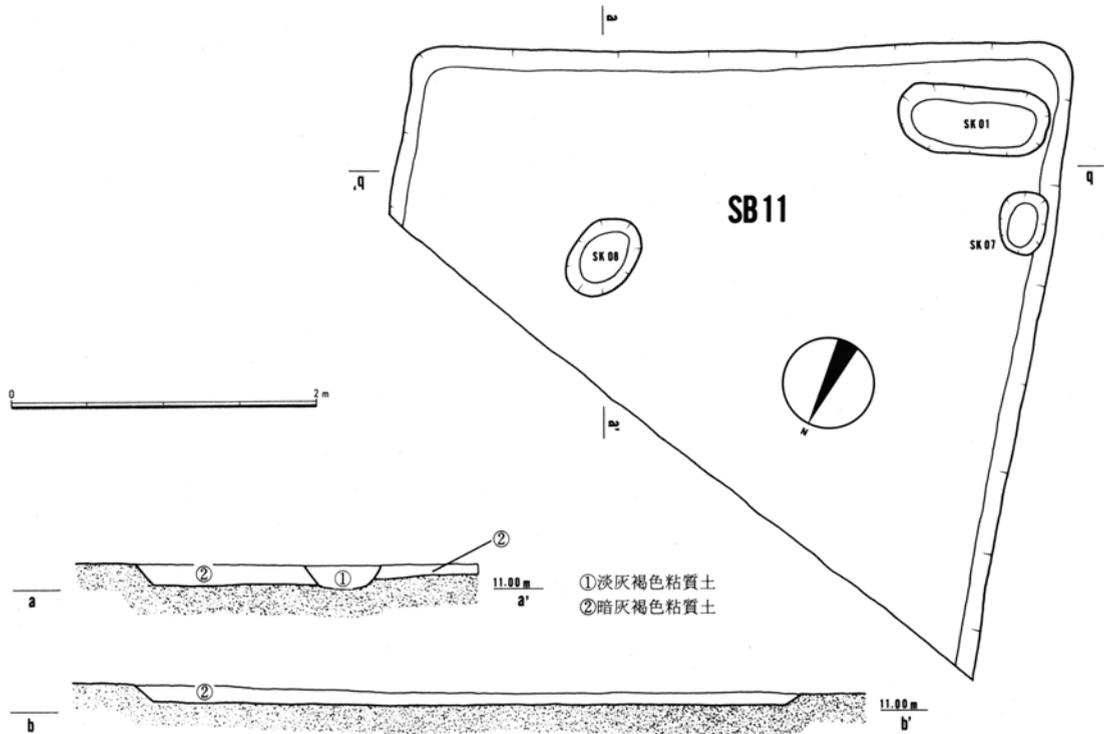
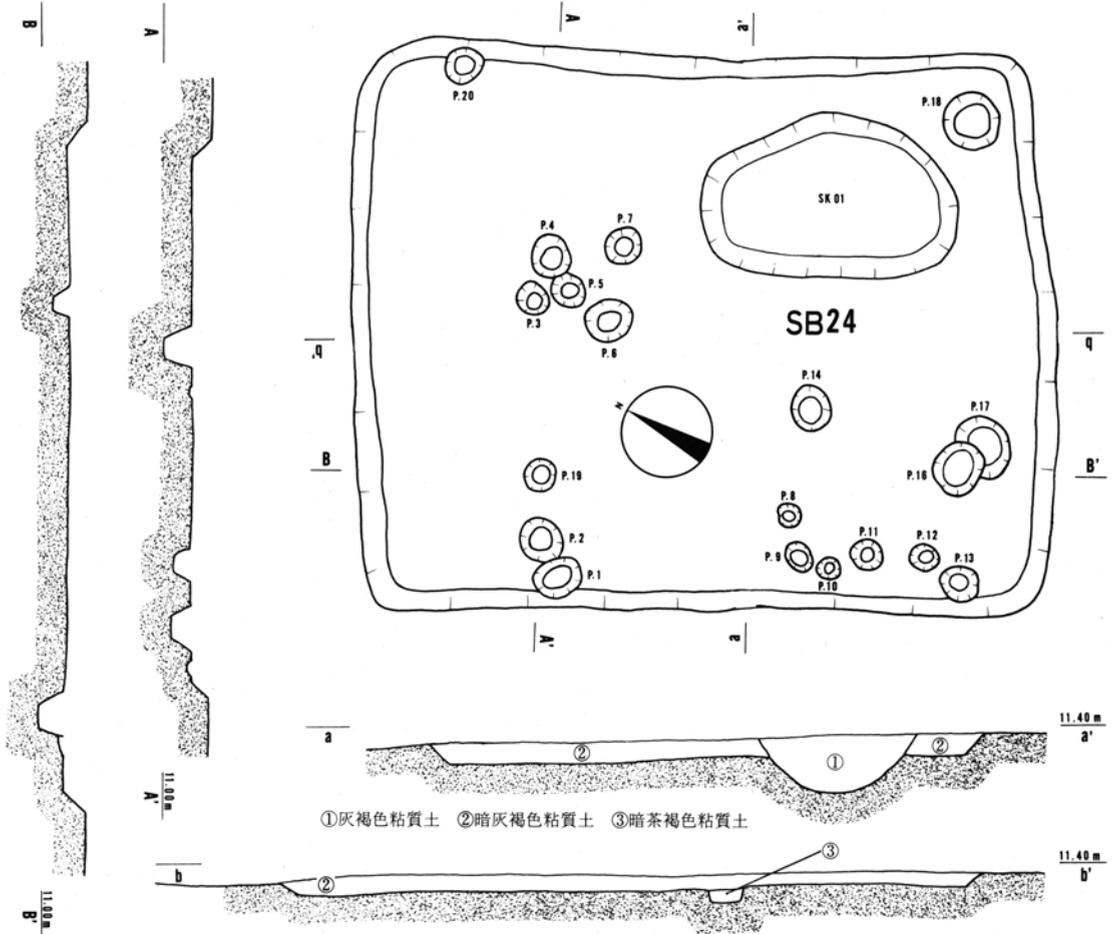
图版12 遺構図 (12)



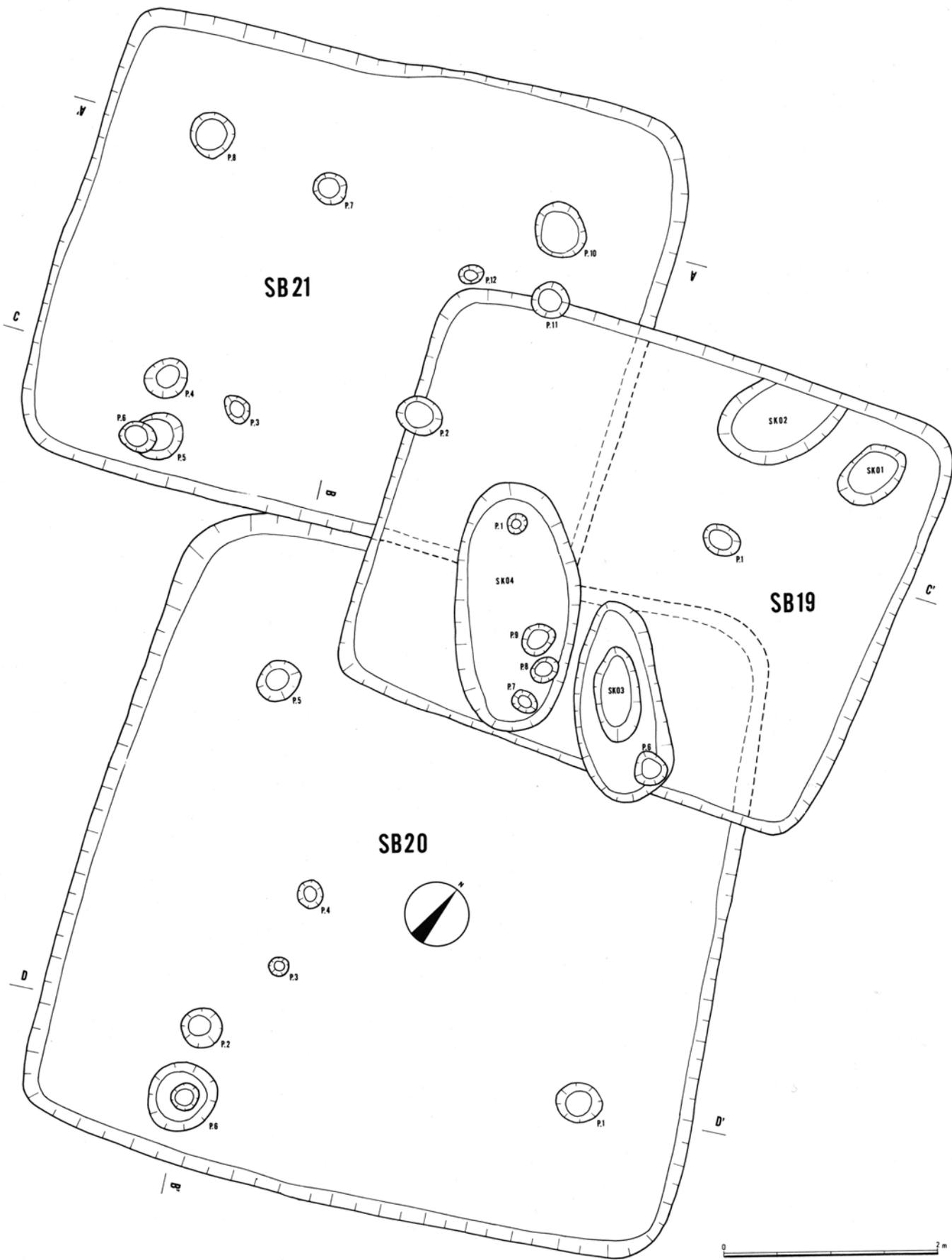


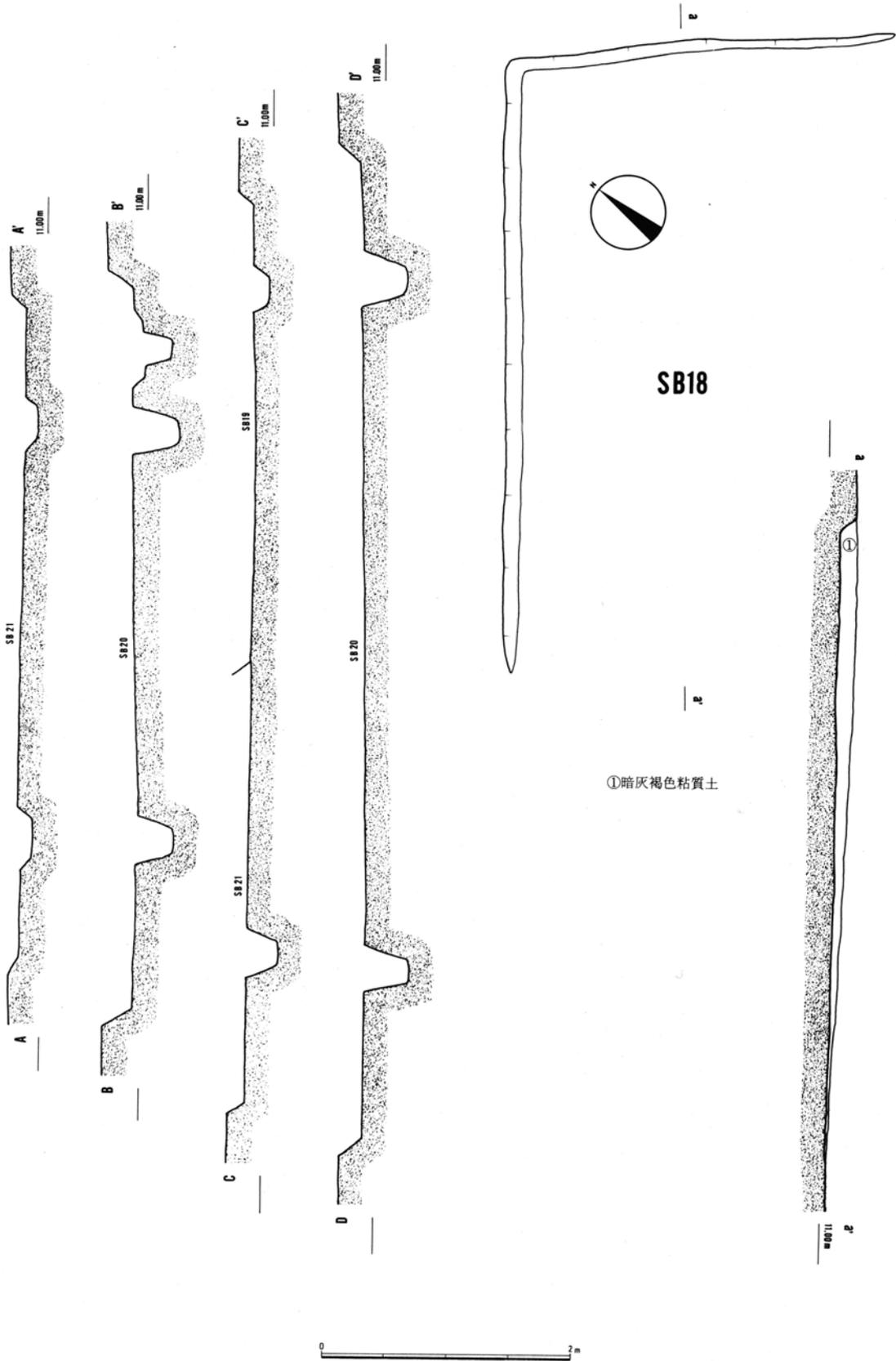
図版14 遺構図 (14)



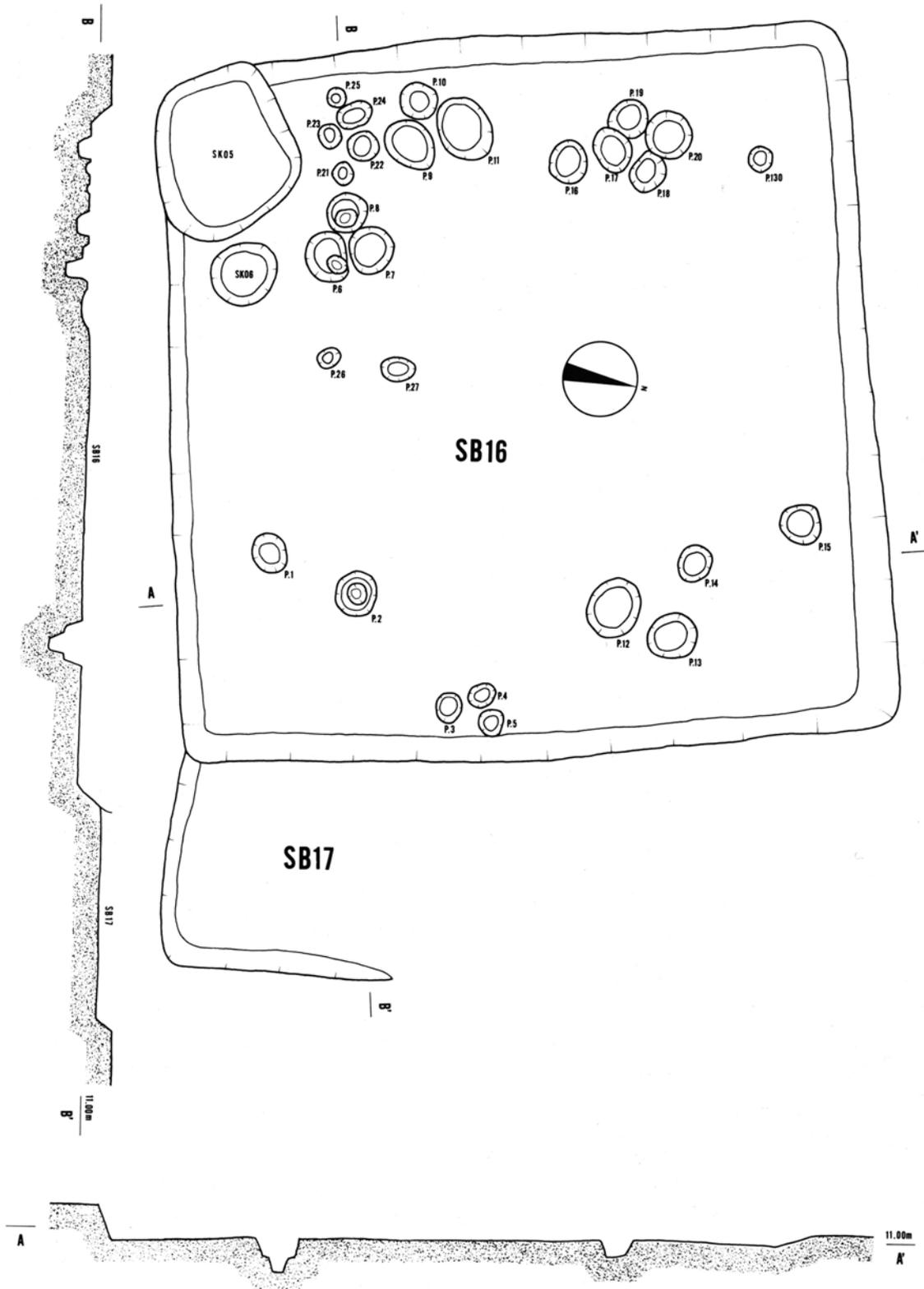


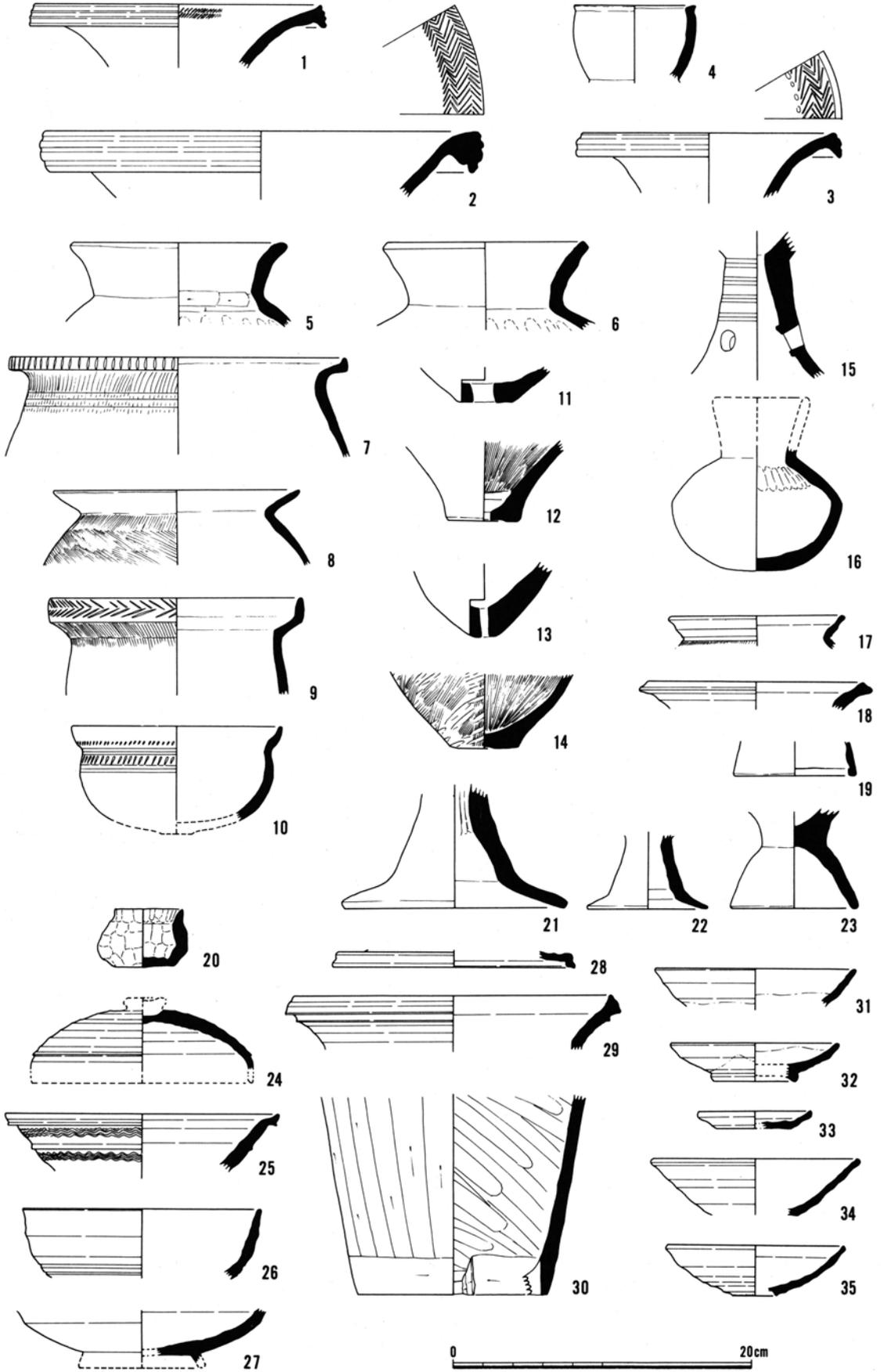
图版16 遺構図 (16)

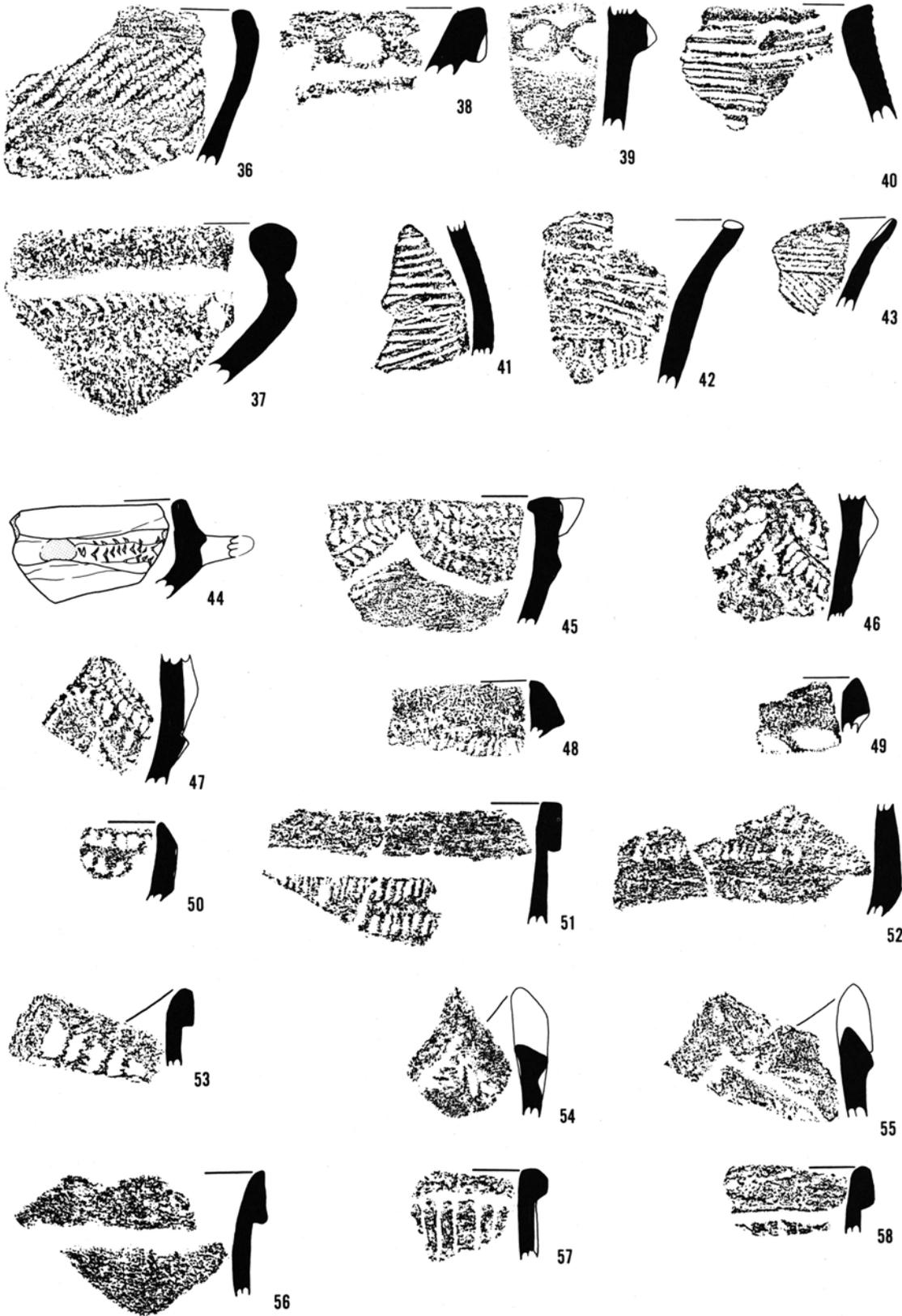




図版18 遺構図 (18)



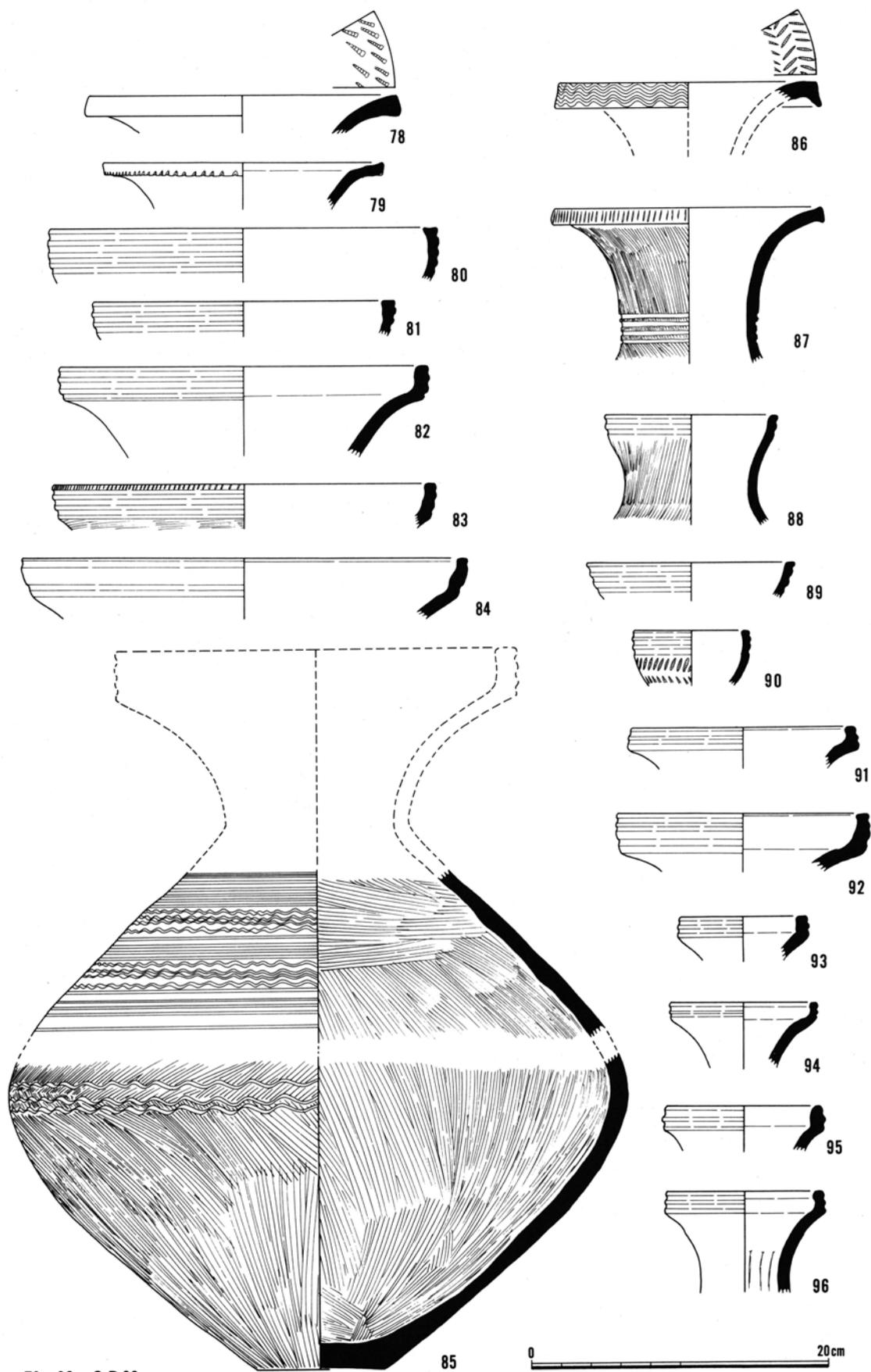


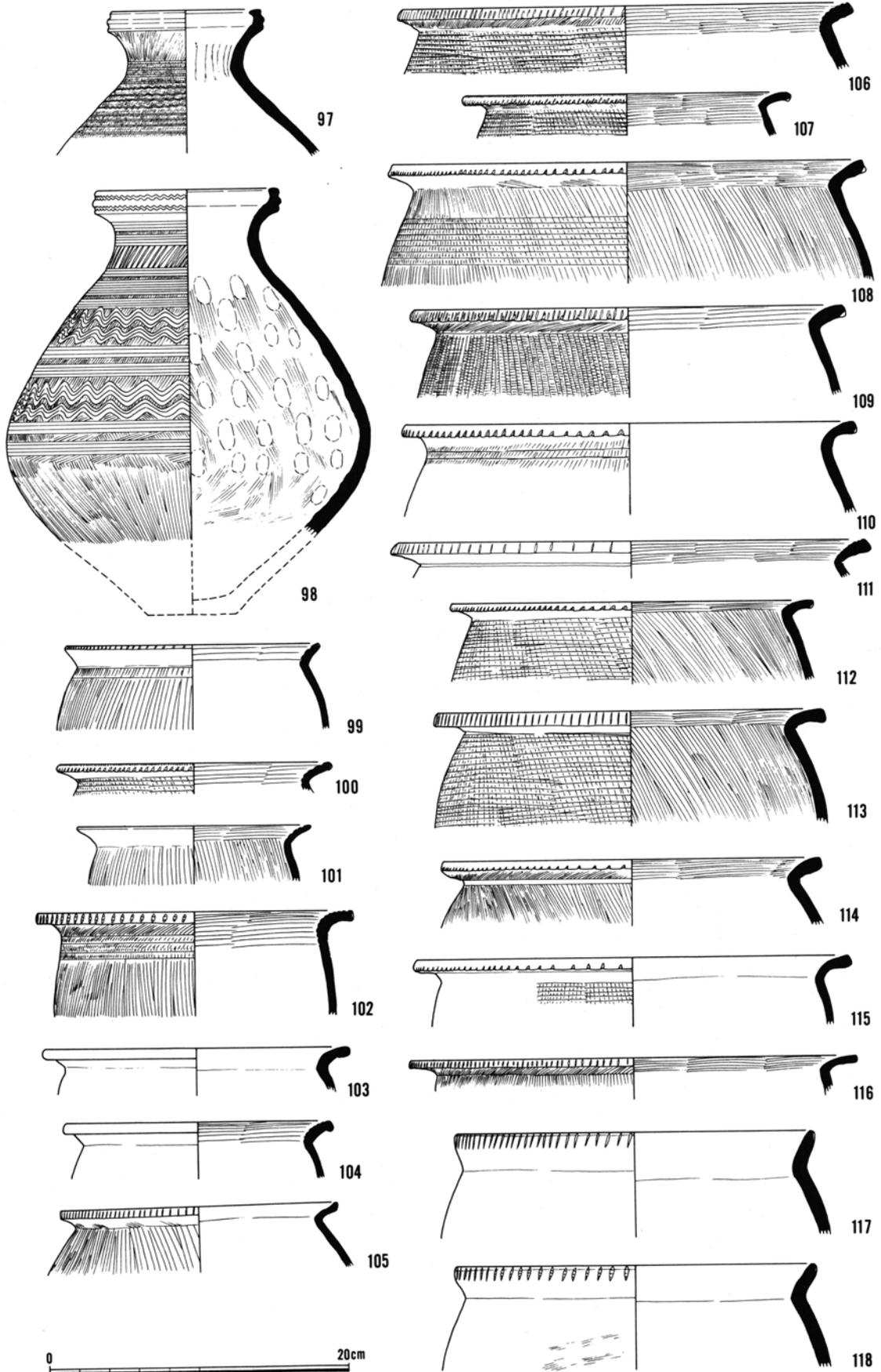


0 10cm

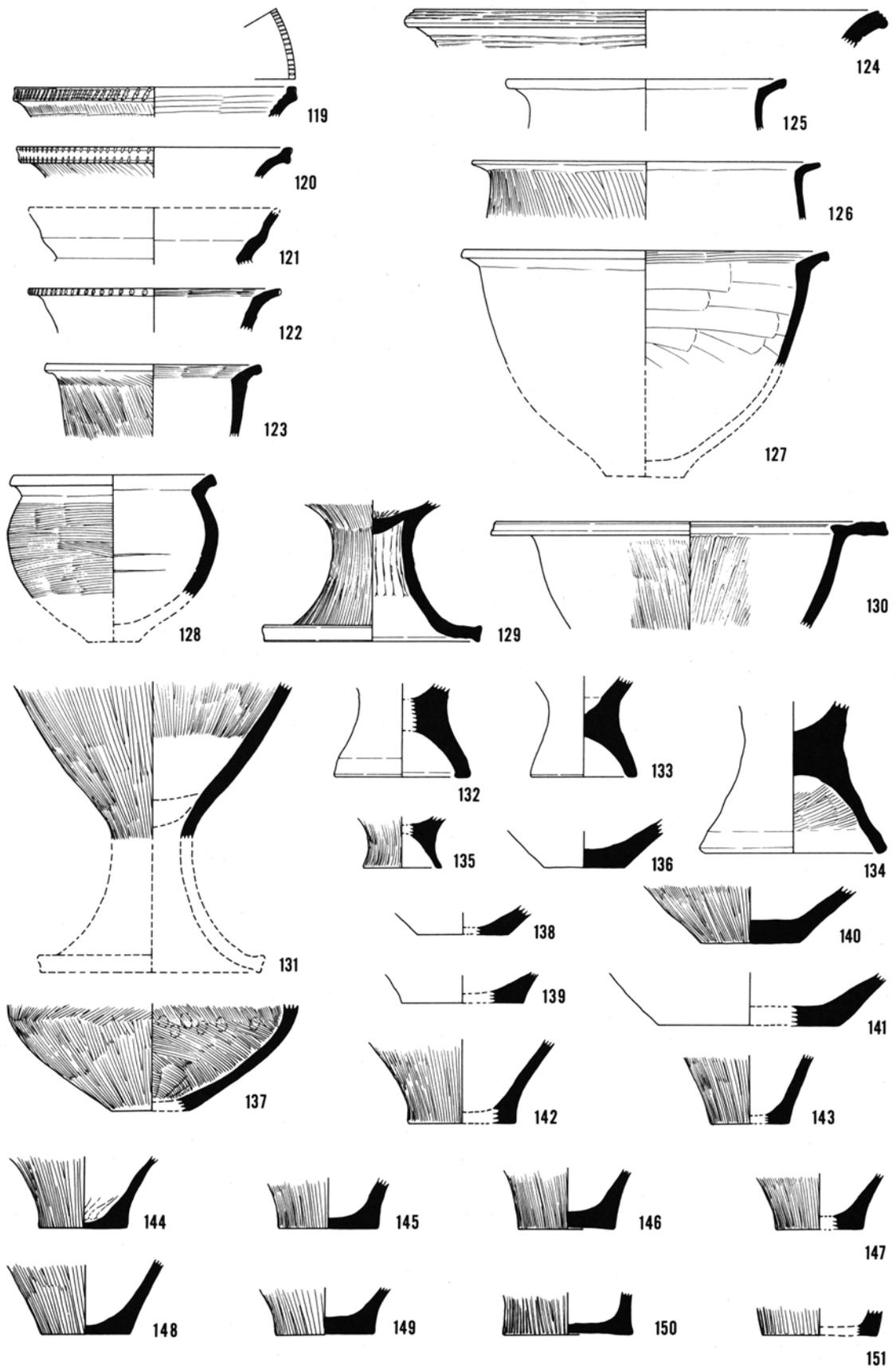


图版22 实测图 (4)



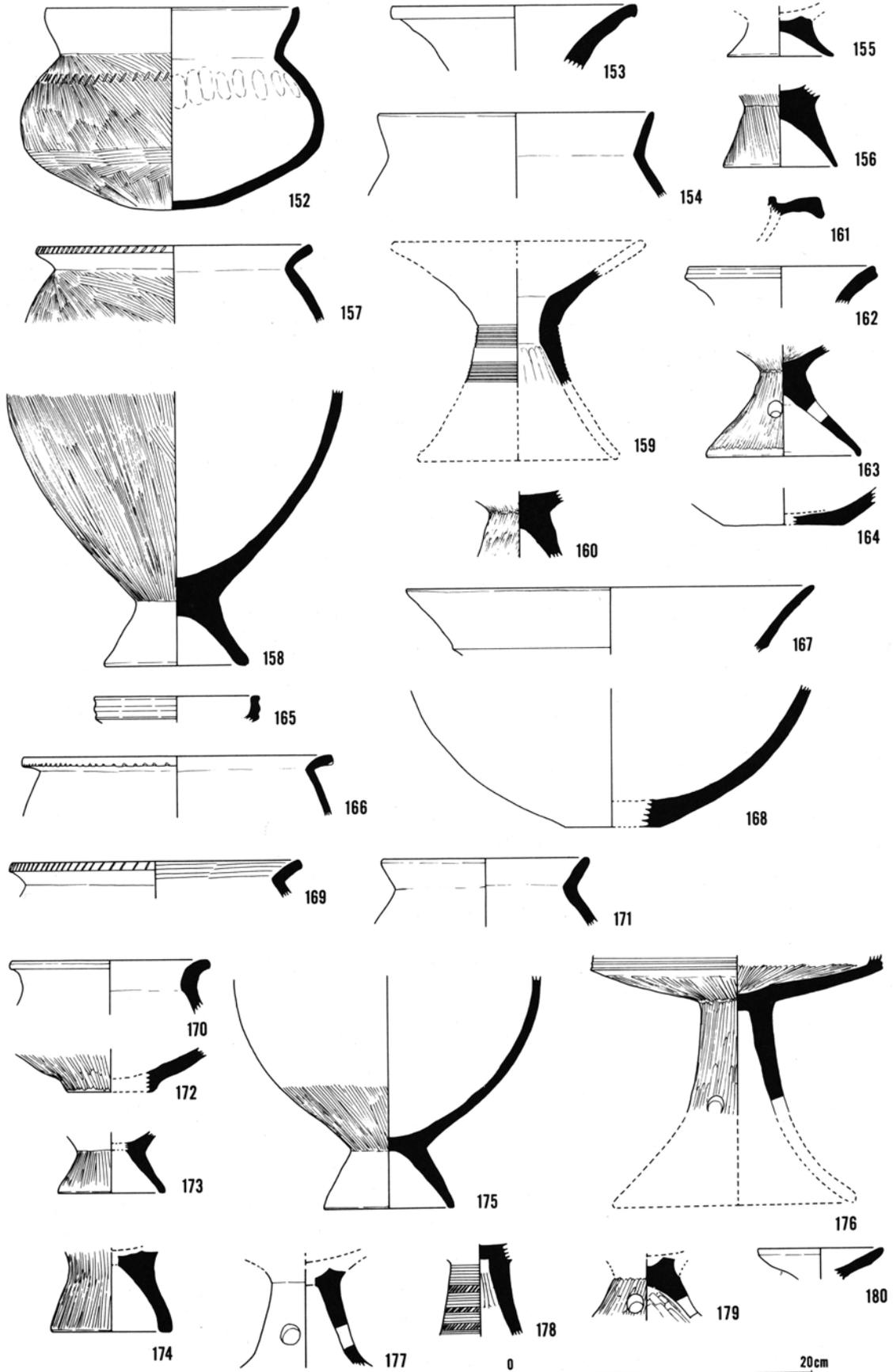


图版24 实测图 (6)



0 20cm

119~151, S D 03



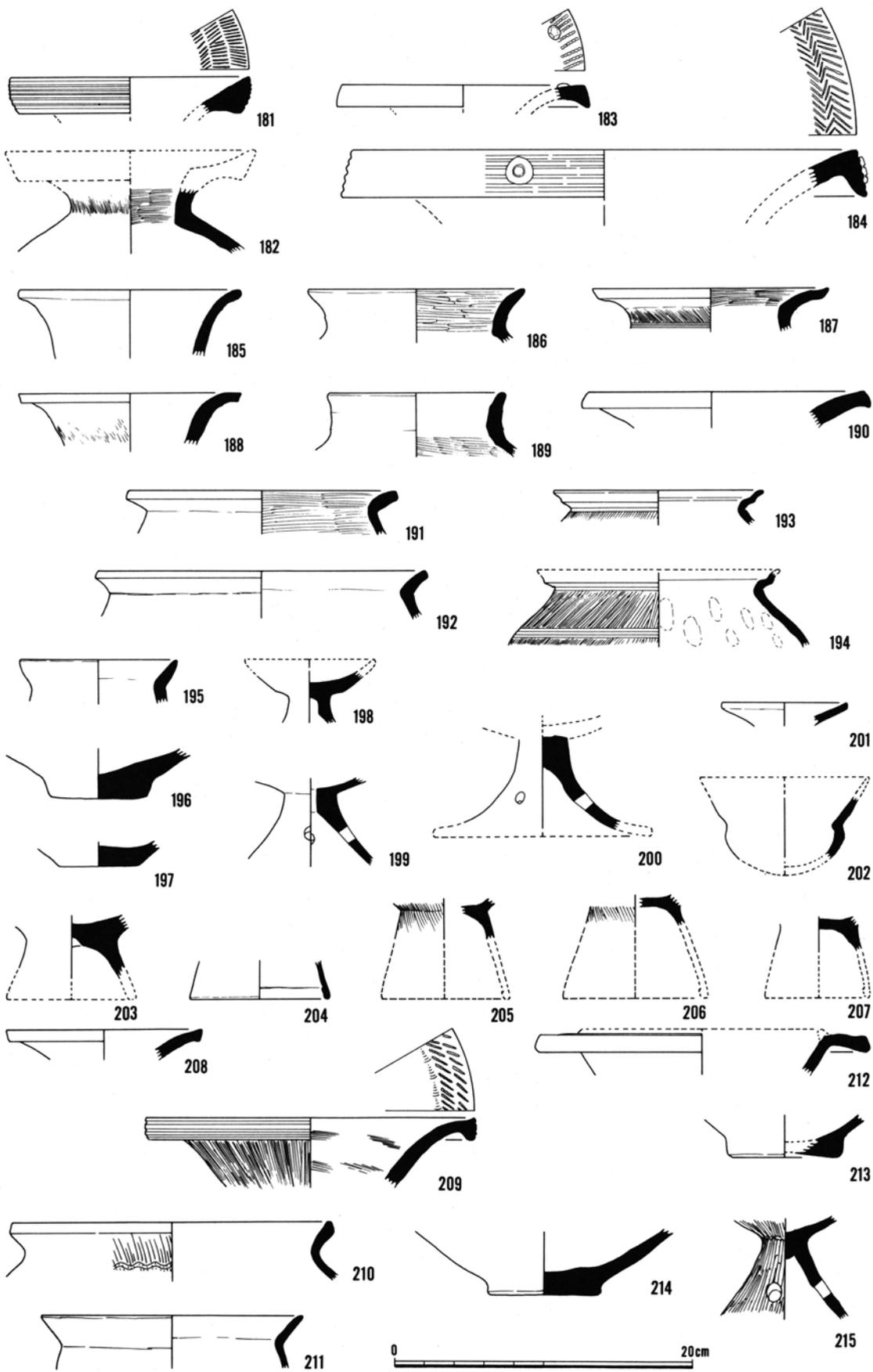
152、S B 01 153~156、S B 02
167~179、S B 07 180、S B 06

157~160、S B 03

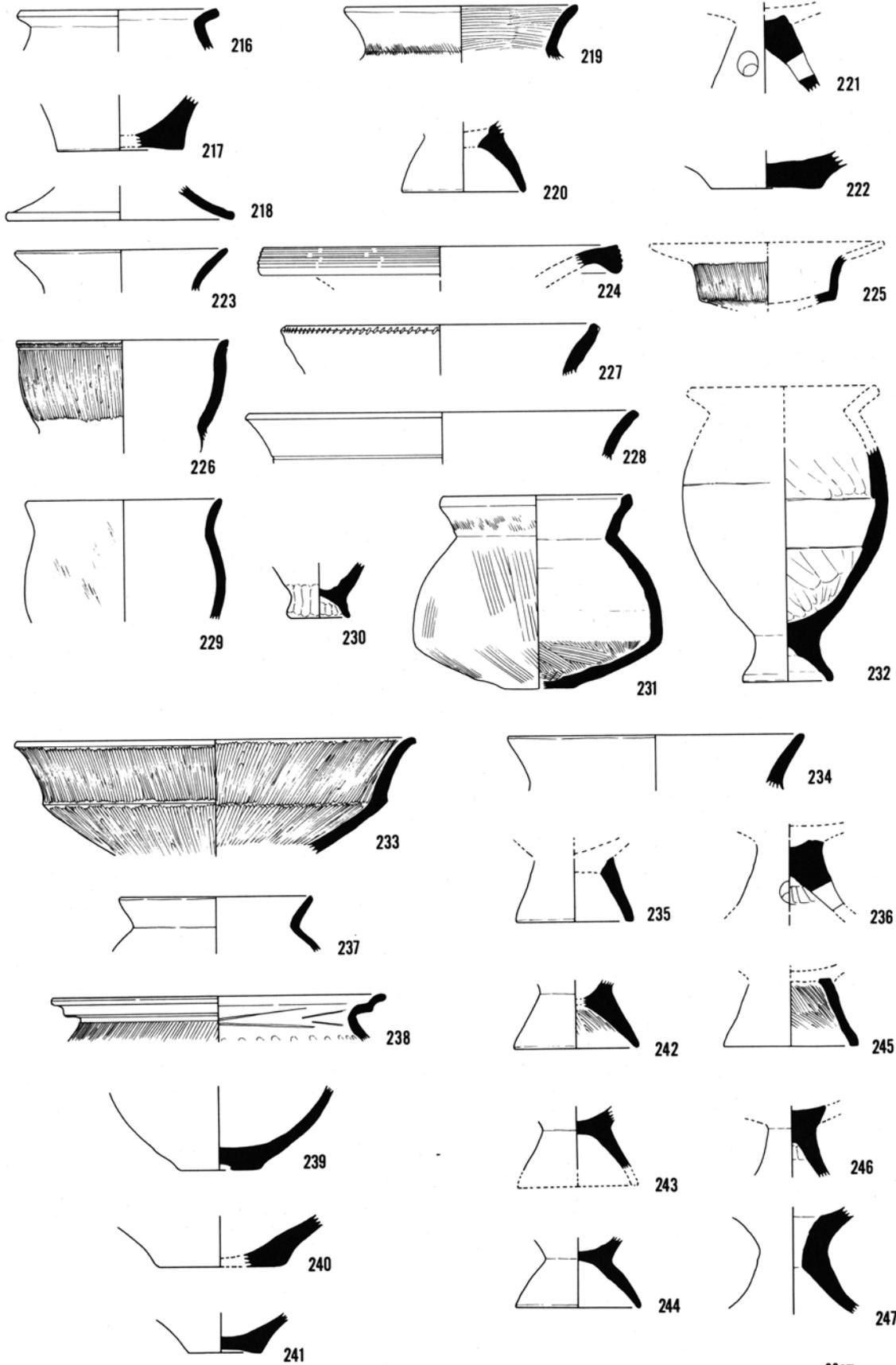
161~164、S B 04 165·166、S B 05

0 20cm

图版26 实测图 (8)



181~207, S B 08 208~215, S B 09



216~218, S B 10
237~247, S B 19

219~222, S B 12

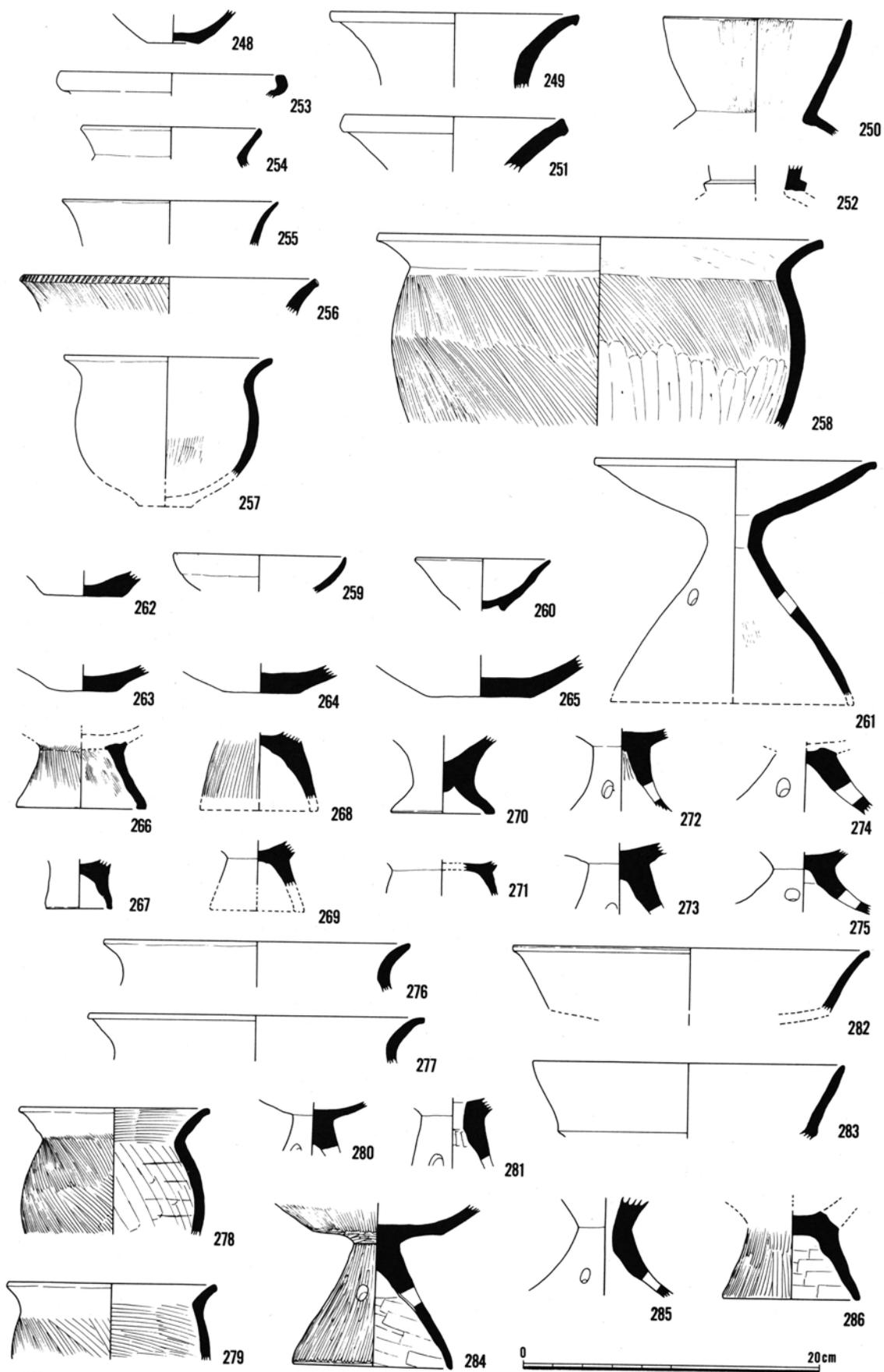
223~232, S B 14

233, S B 15

234~236, S B 16

0 20cm

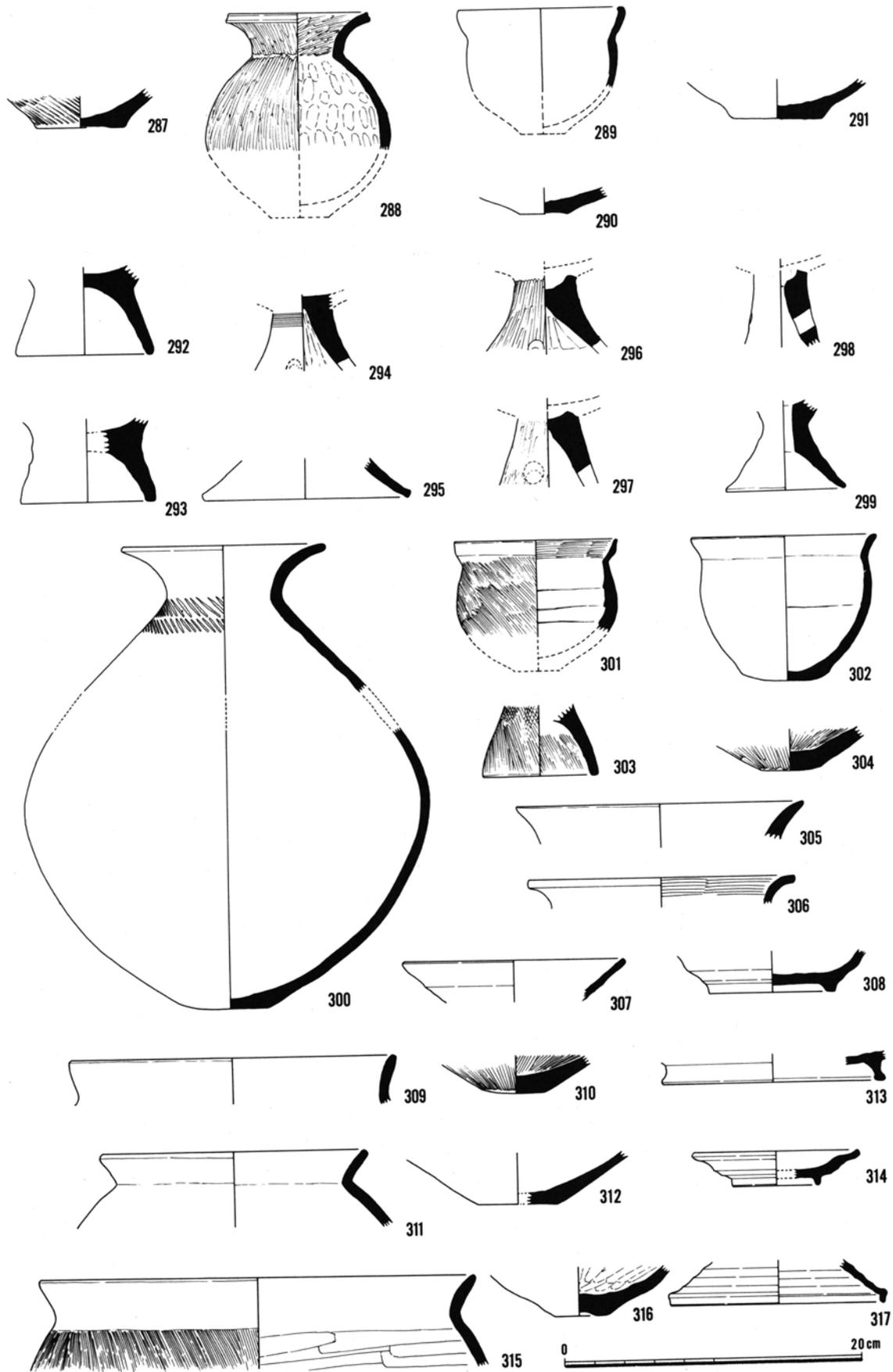
图版28 实测图 (10)



248、S B 17

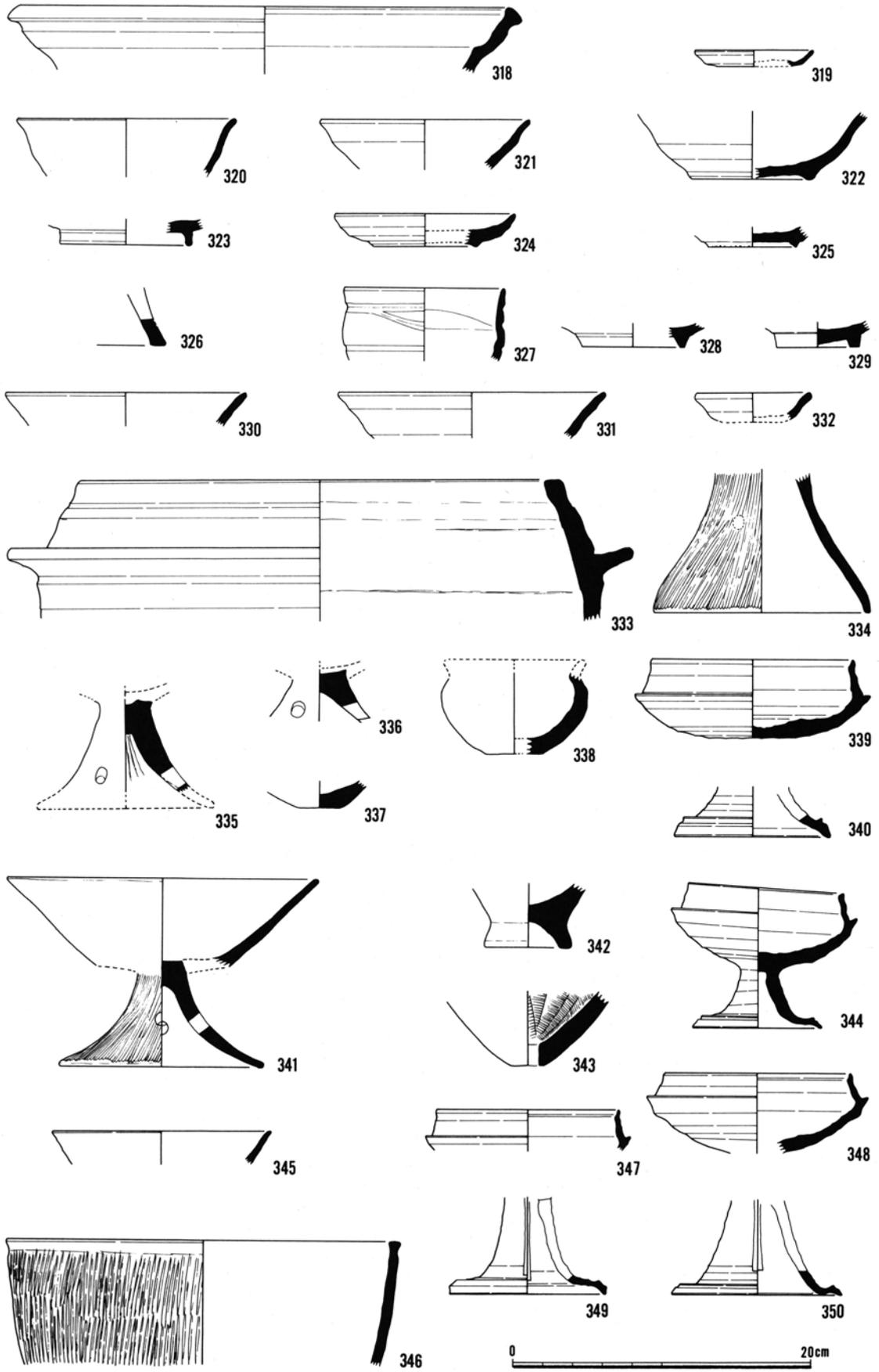
249~275、S B 20

276~286、S B 21

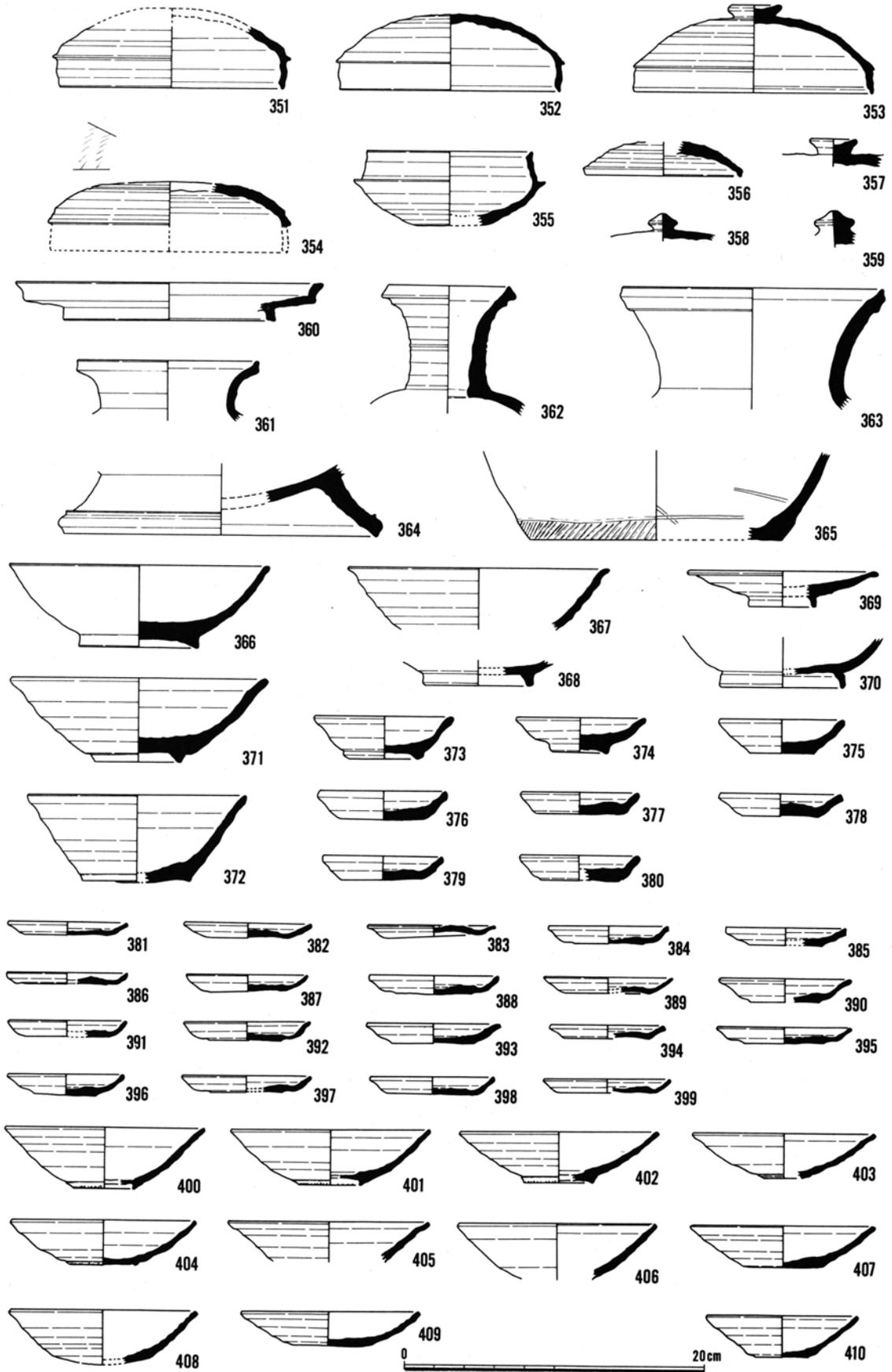


287, S B 23 288~299, S B 24 300, S Z 04 301, S K 56 302, S K 05 303, S K 64 304, S K 07
 305, S K 33 306, S K 25 307, S K 22 308, S K 40 309·310, S K 47 311·312, S K 60
 313·314, S K 71 315·316, S K 35 317, S K 38

図版30 実測図 (12)



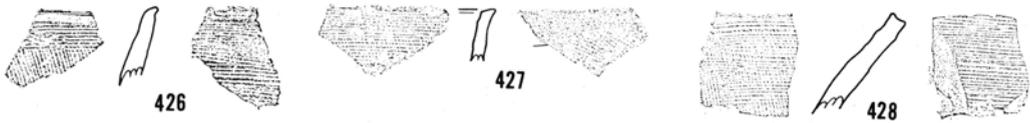
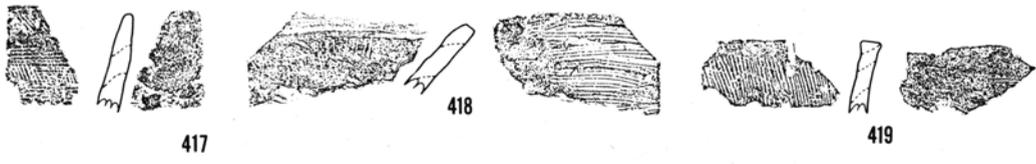
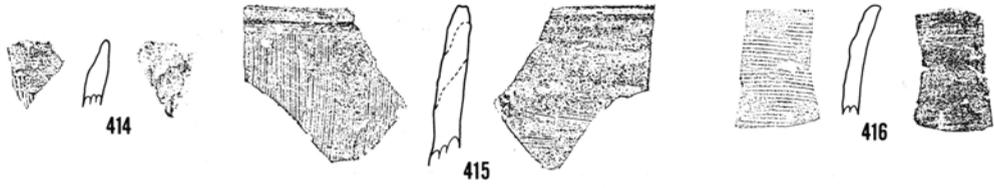
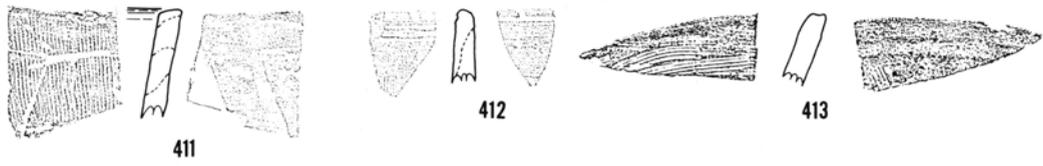
318・319、S K 72 320～329、S K 21 330～334、S K 63 335～340、S D 06 341、ピット567
 342・345、ピット336 343、ピット551 344、ピット17 346、ピット332 347～350、ピット501



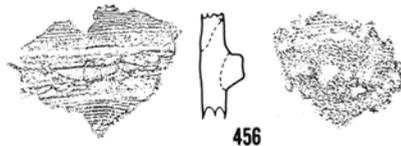
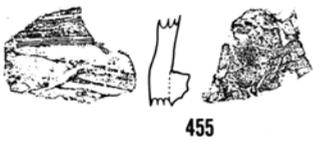
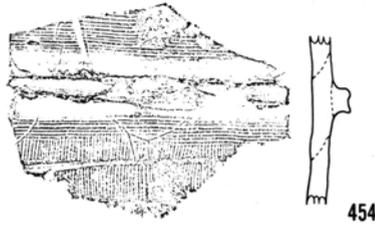
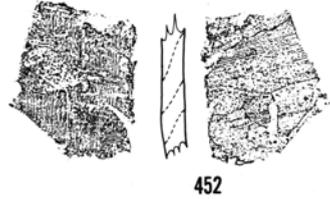
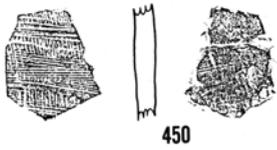
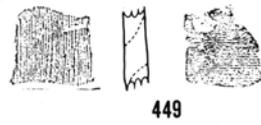
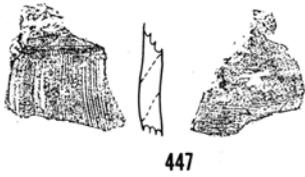
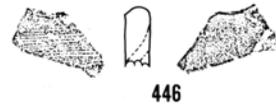
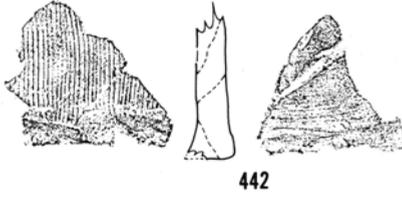
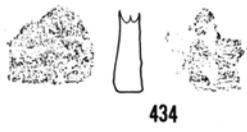
351~410、S T出土

0 20cm

图版32 实测图 (14)

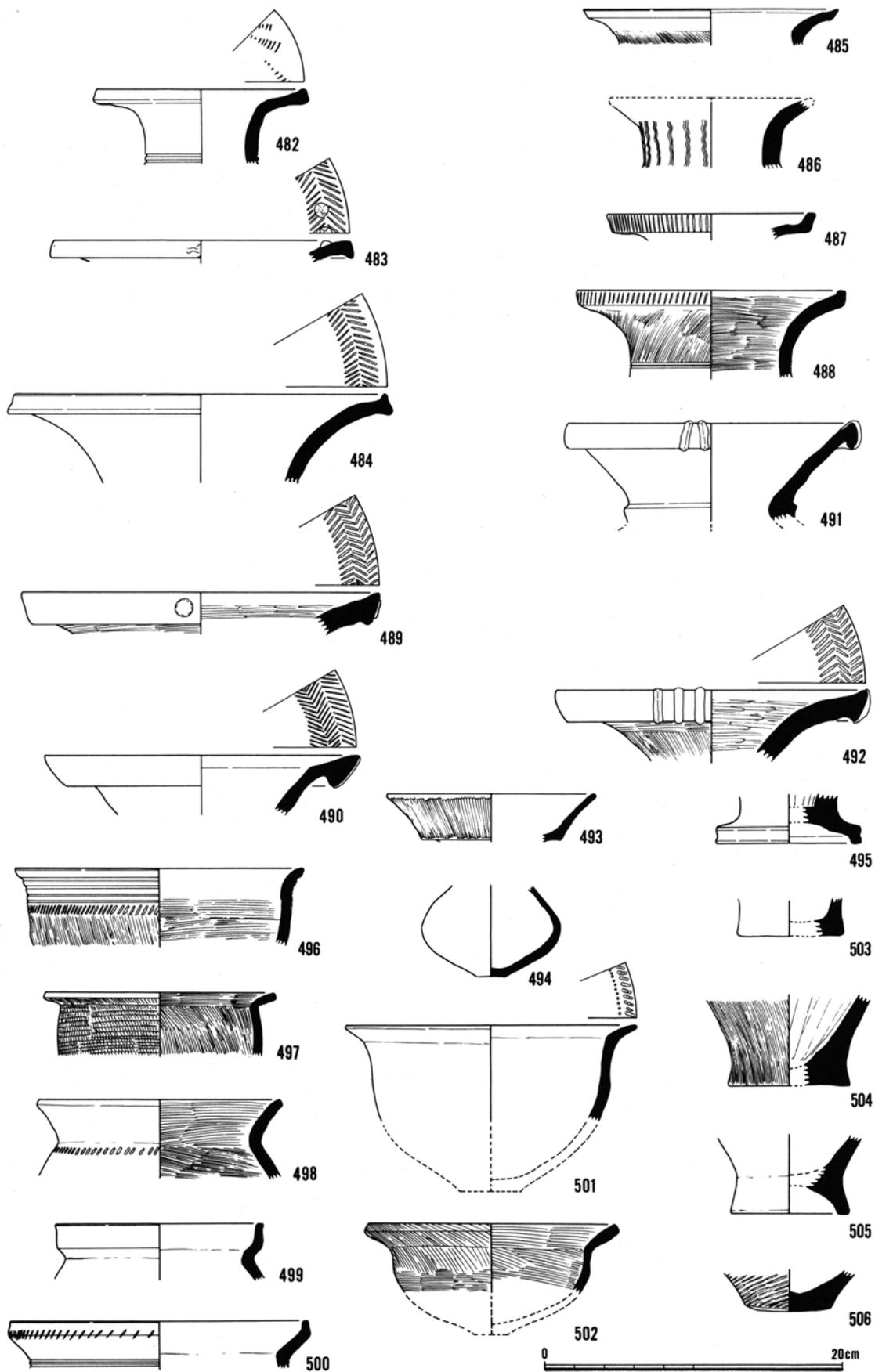


0 20cm

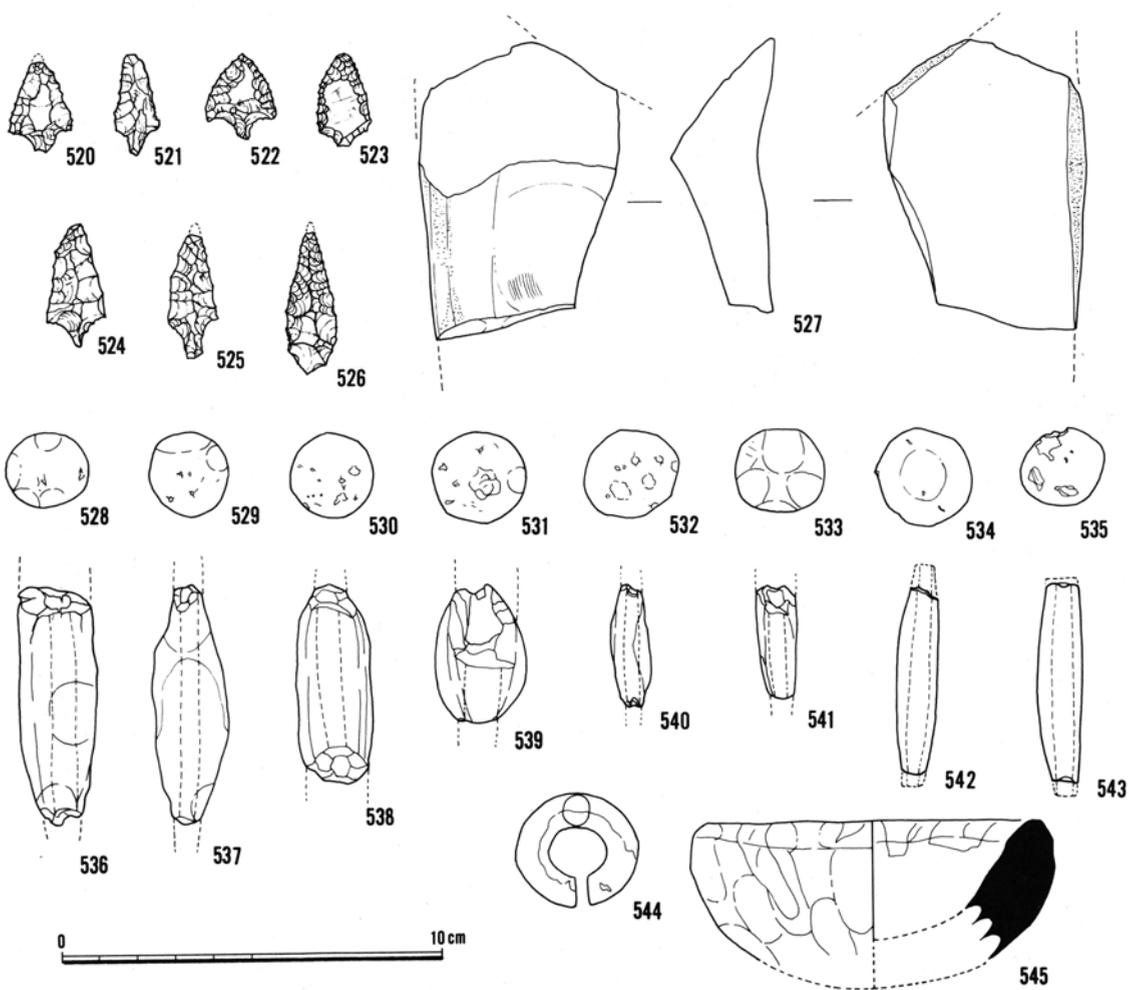
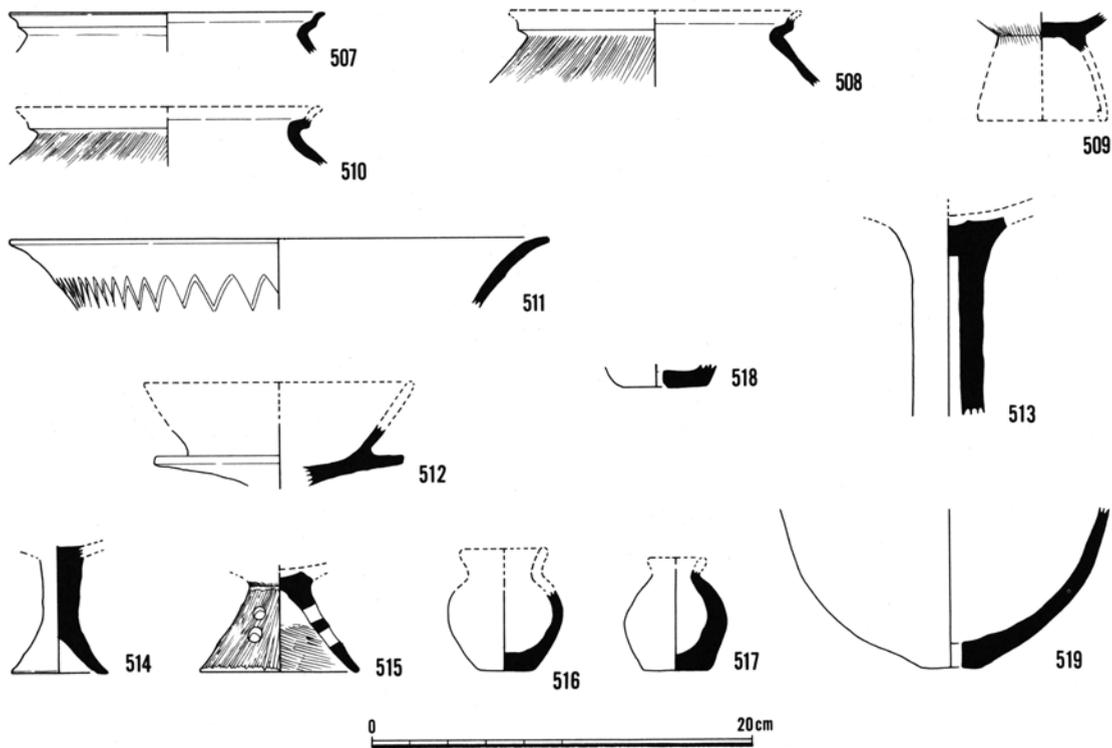


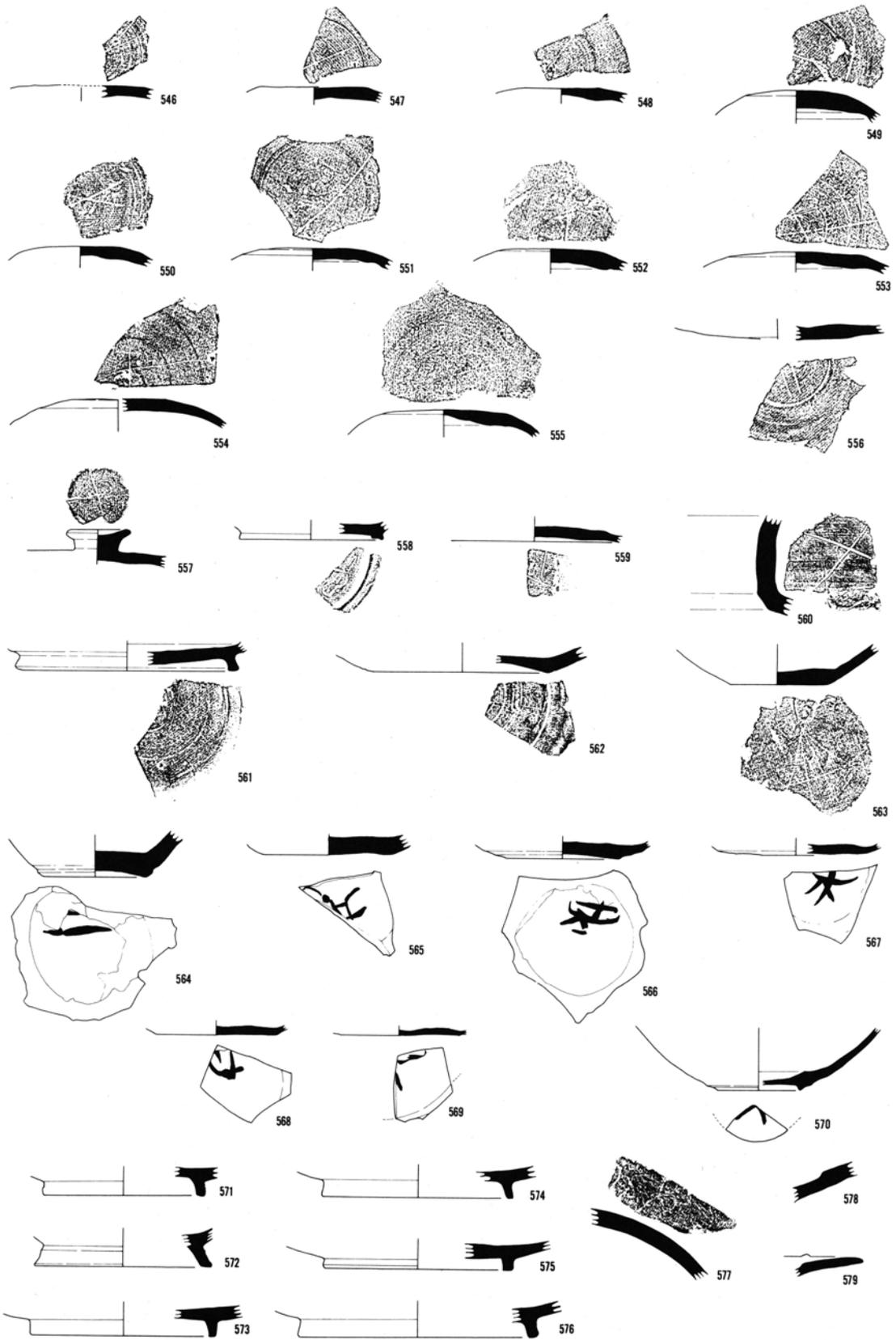


0 20cm



图版36 实测图 (18)





546~563、ヘラ記号をもつ土器

564~570、墨書土器

571~579、緑釉陶器



調査区全景
(東より)



西微高地全景
(南より)



東微高地全景
(東より)

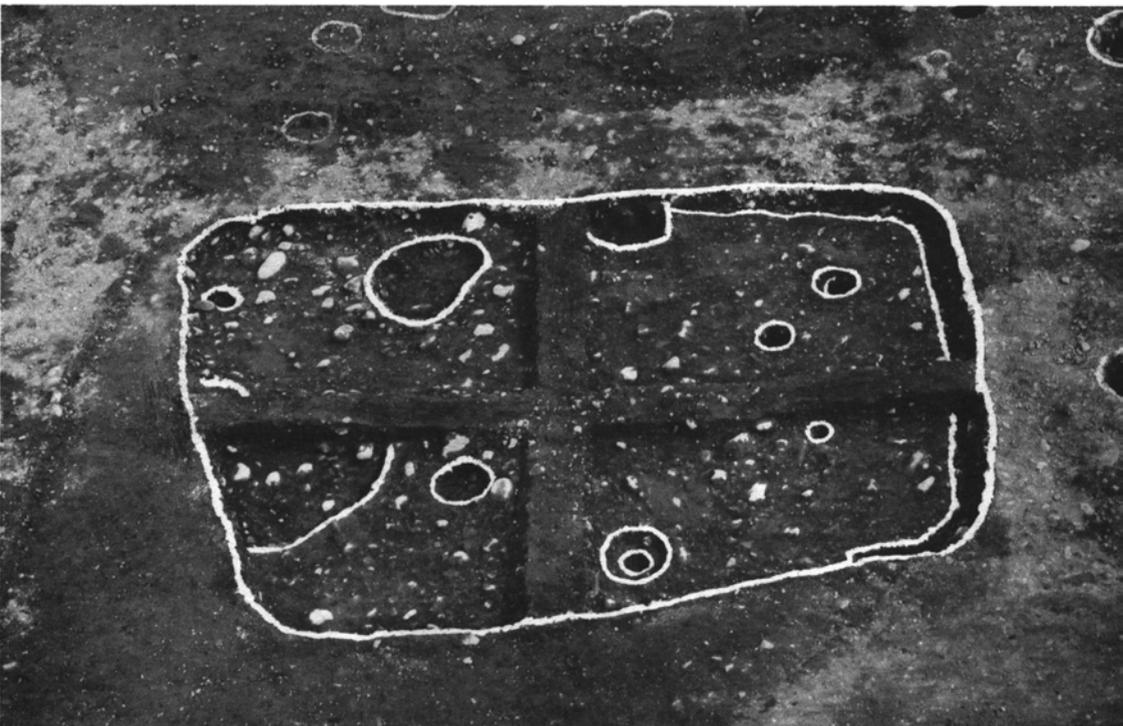
S B01~09全景
(東より)

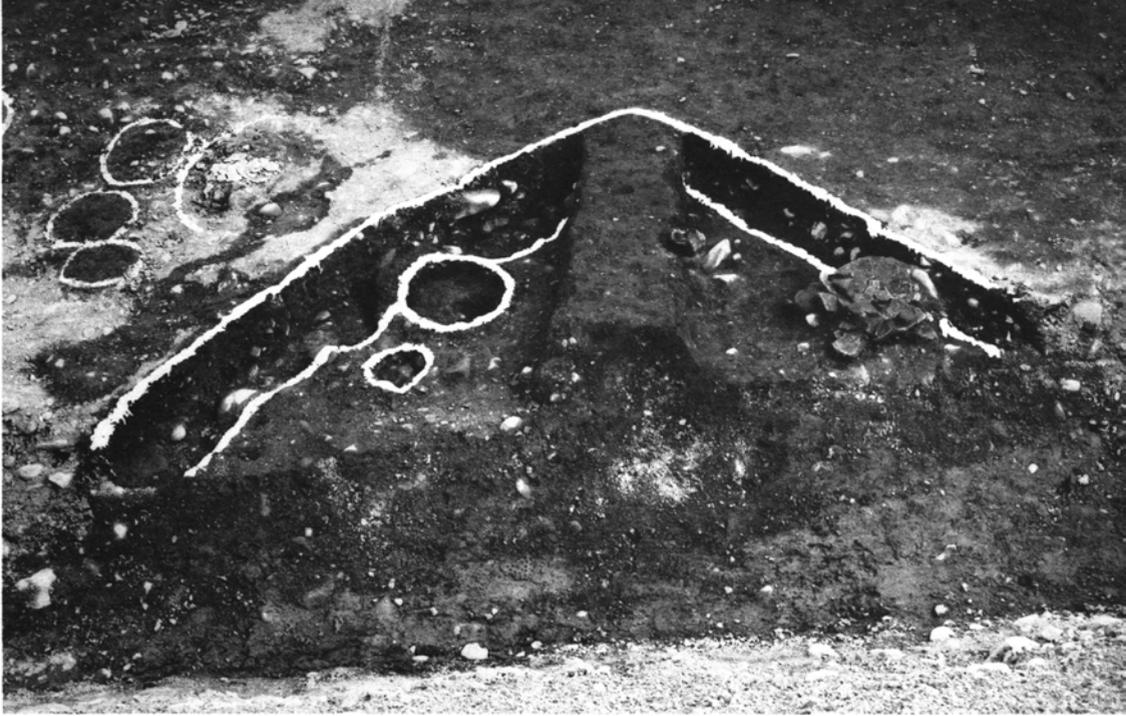


S D03土器出土
S B04~S B10全景
(北より)

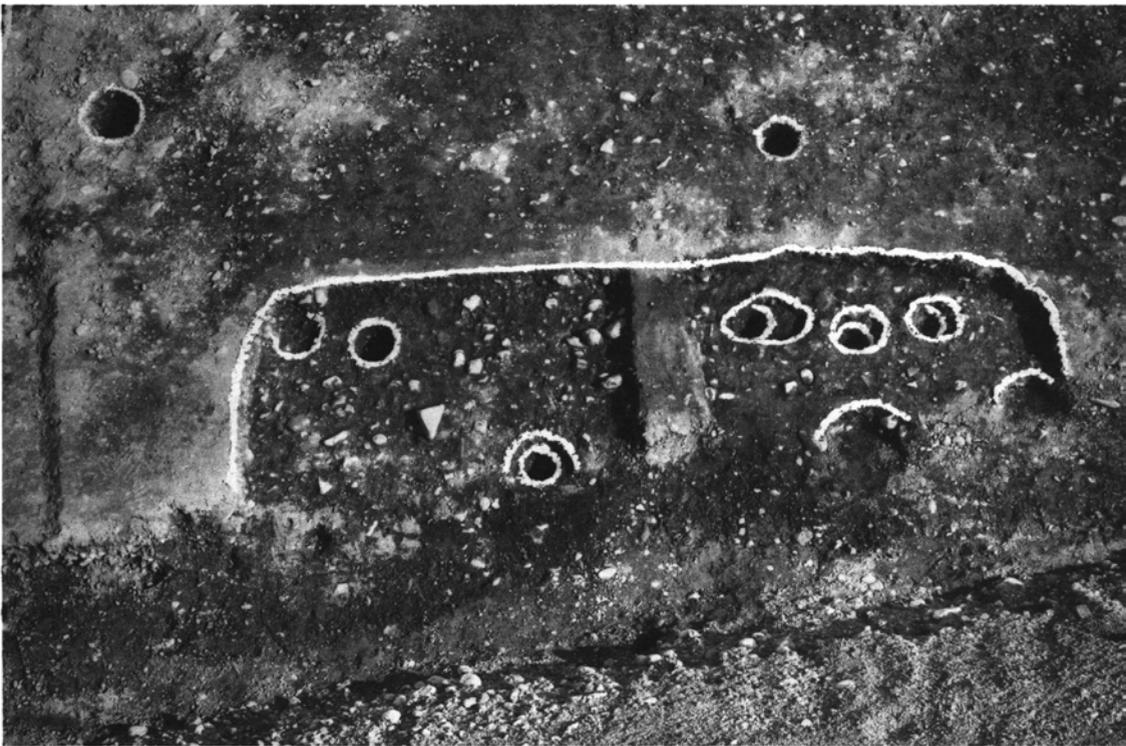


S B04全景
(西より)

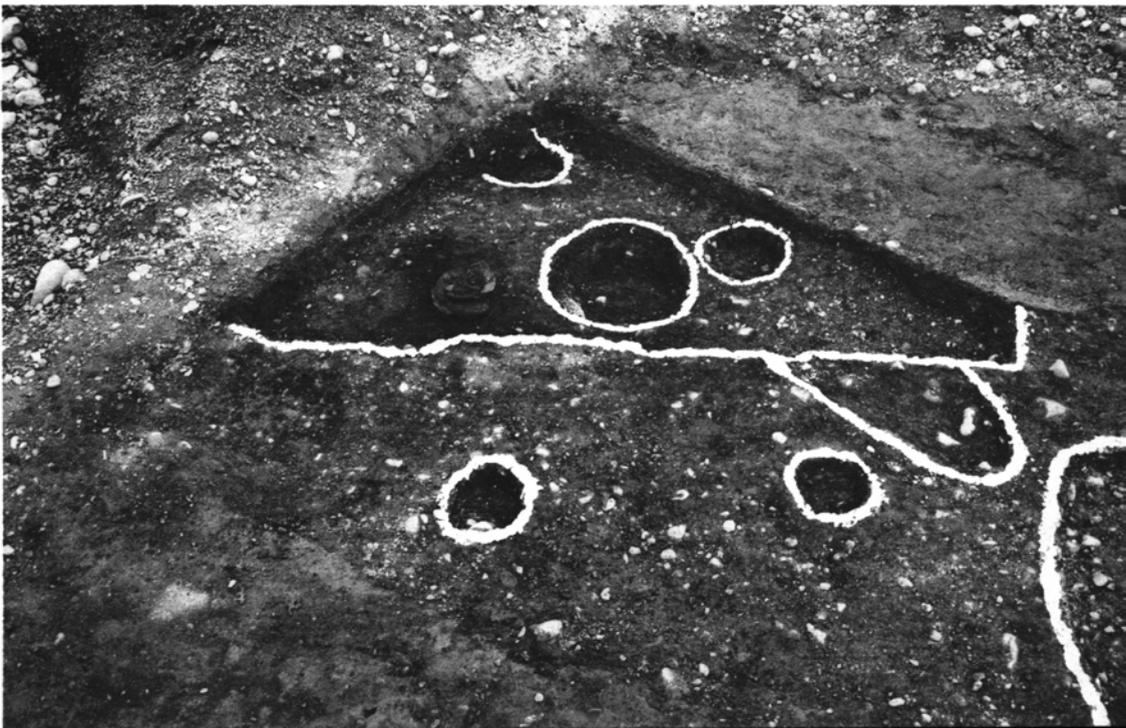




S B03全景
(西より)

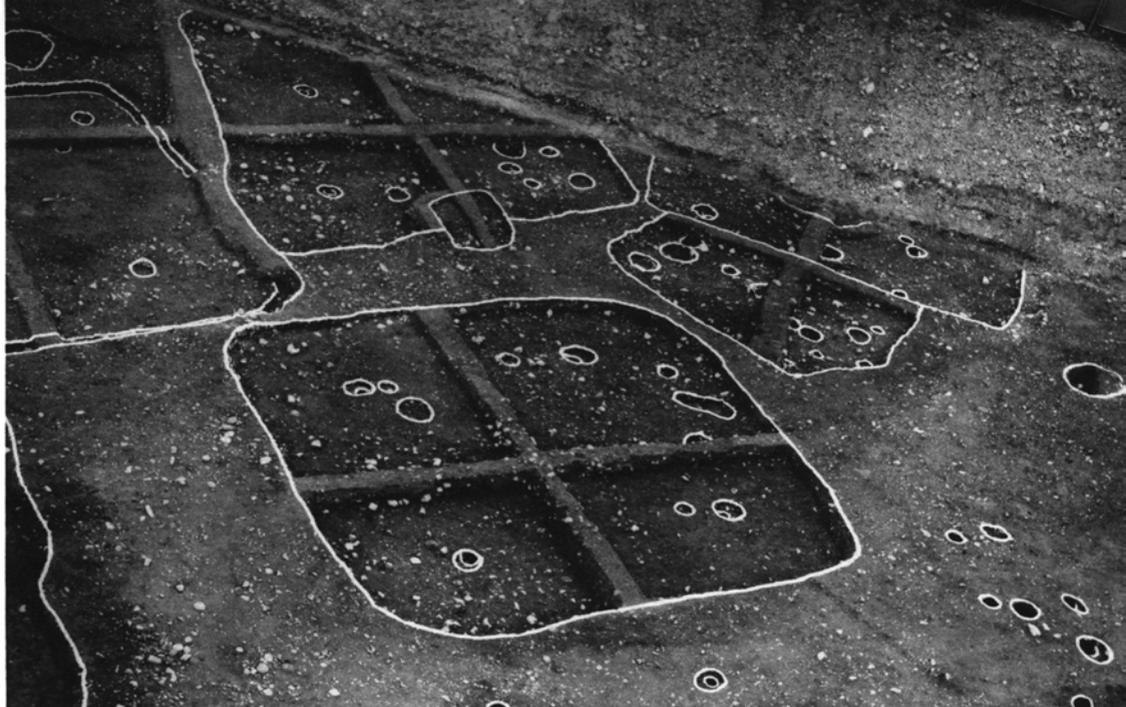


S B05全景
(西より)



S B01全景
(南より)

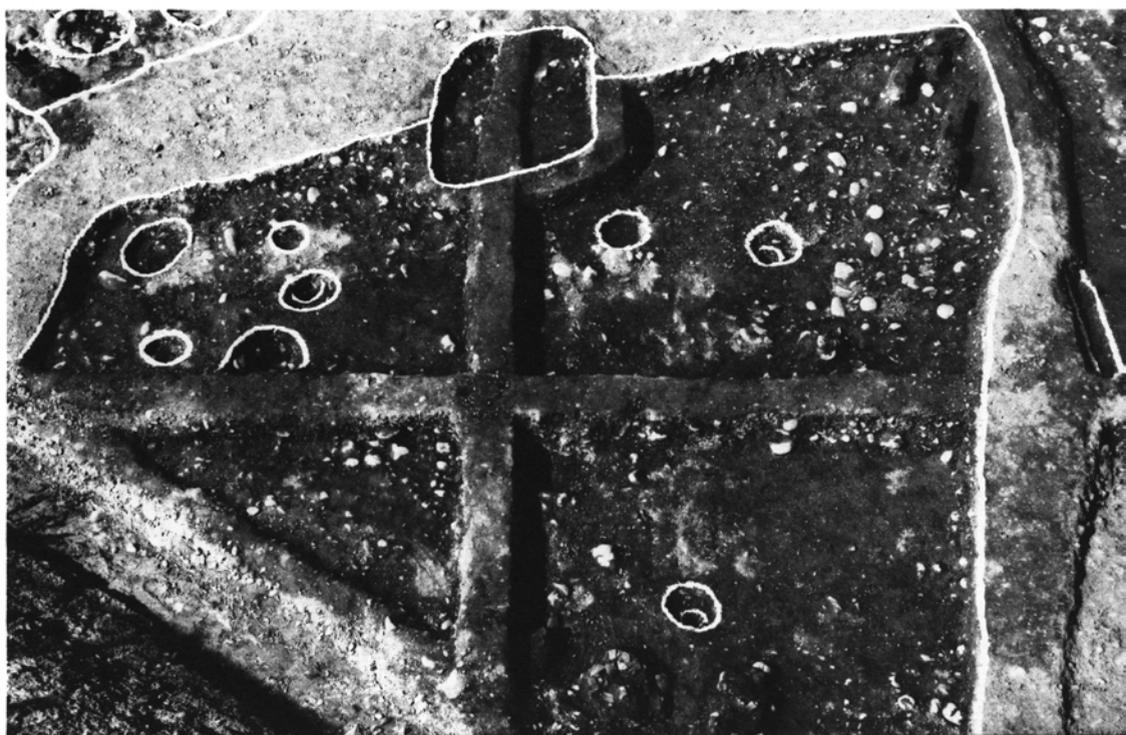
S B06~09全景
(北より)



S K35・36
S B06全景
(南より)

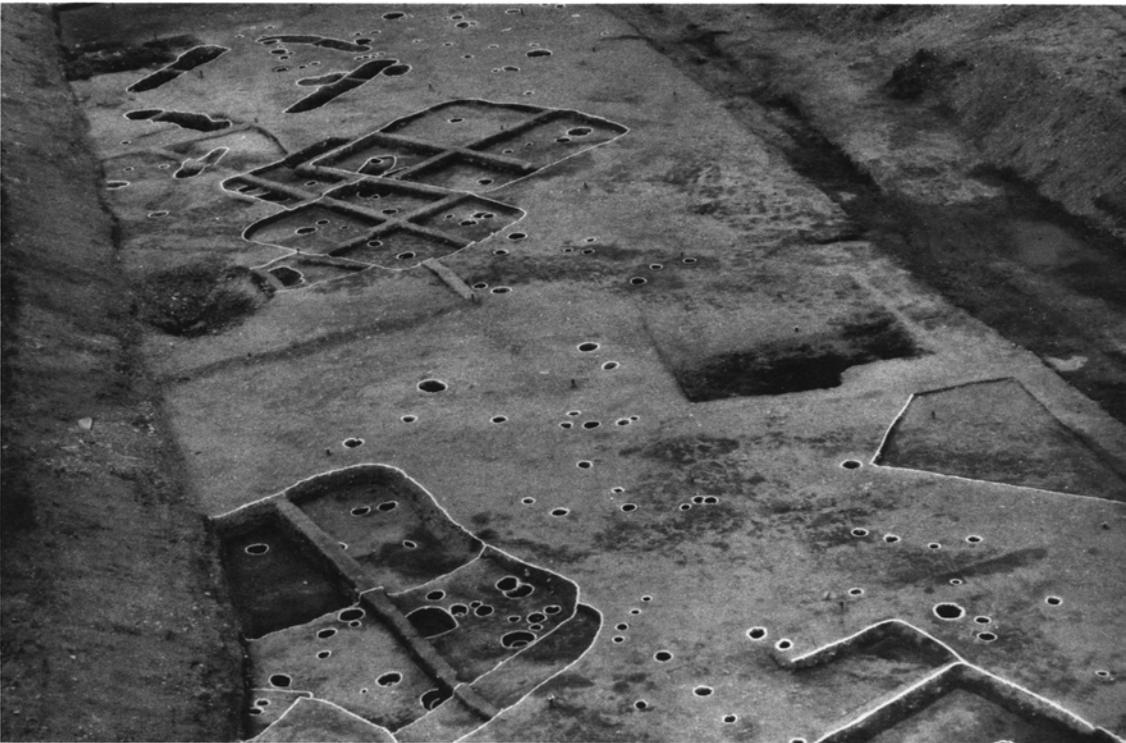


S B07、S K33全景
(南より)

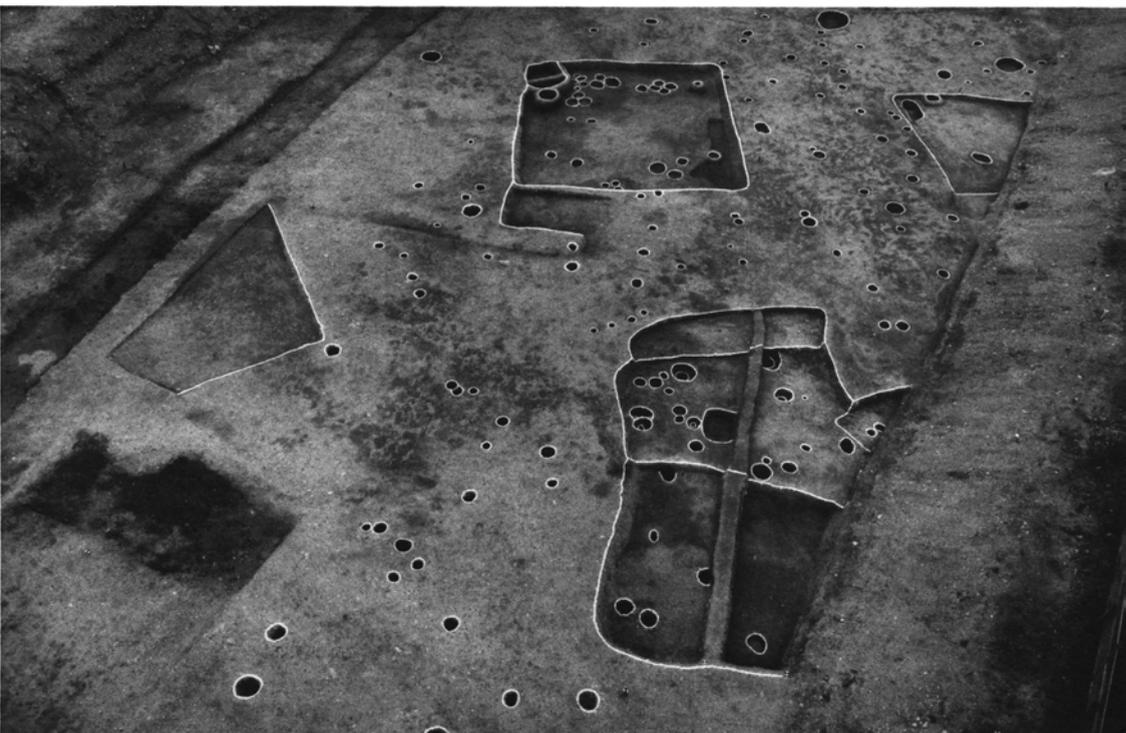




S Z 01~03
S B 11~21全景
(東より)



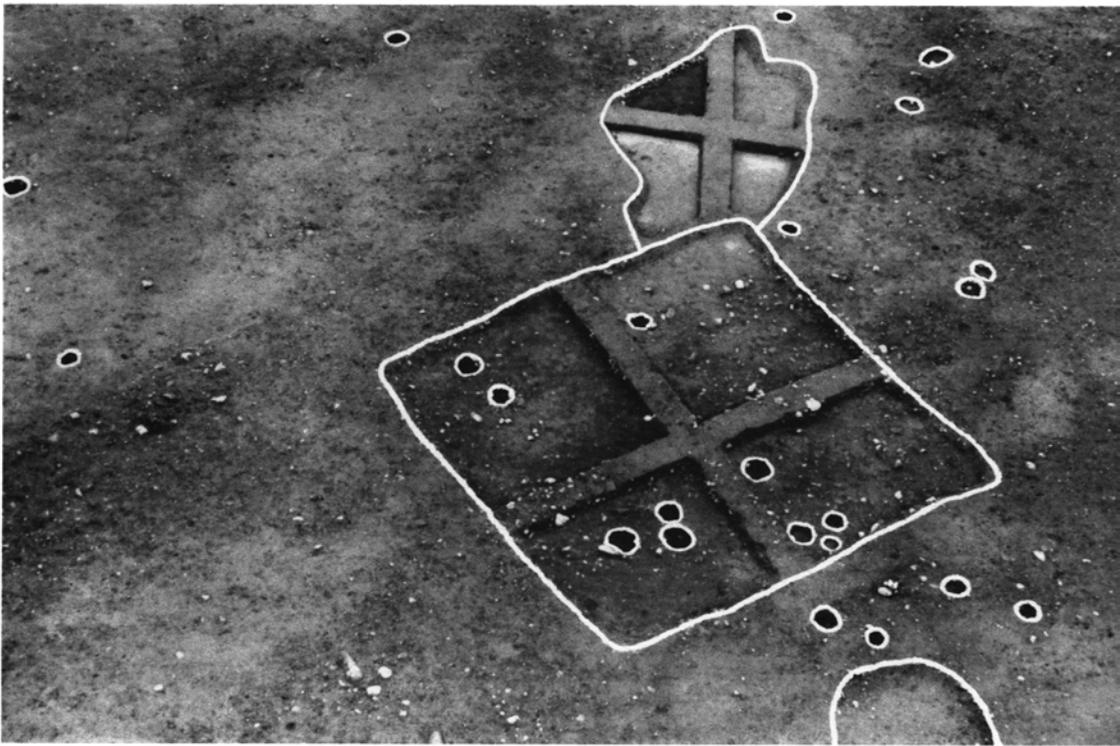
S Z 01・02
S B 12~21全景
(西より)



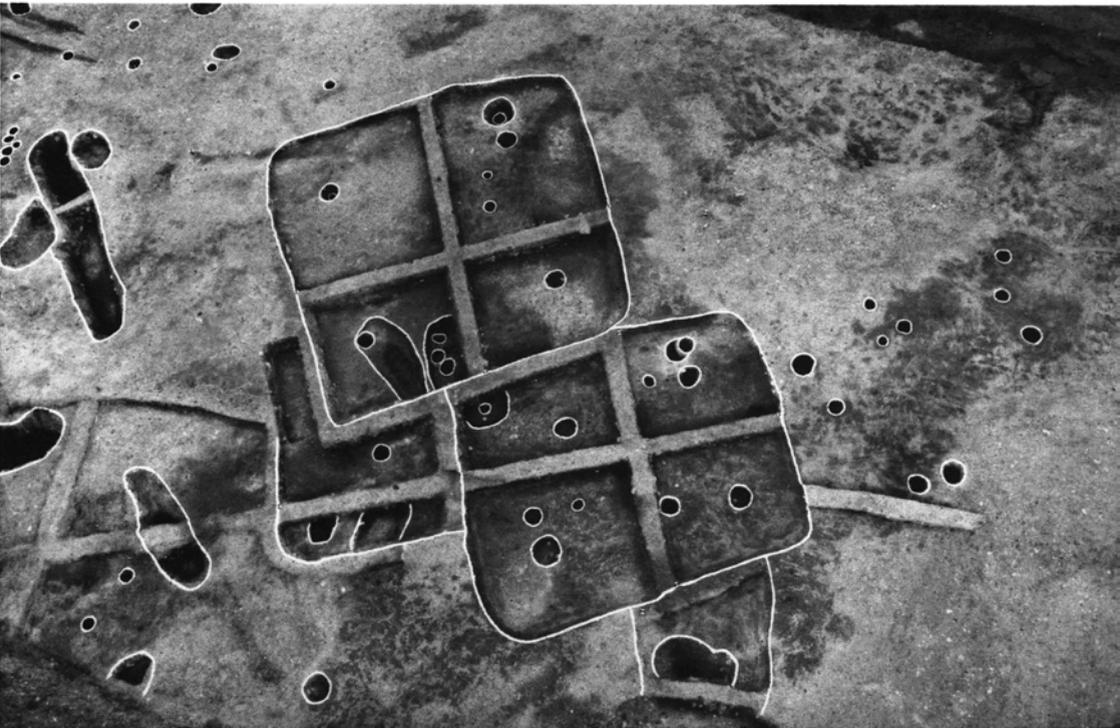
S B 11~18全景
(東より)



S B24・S K56全景
(北より)



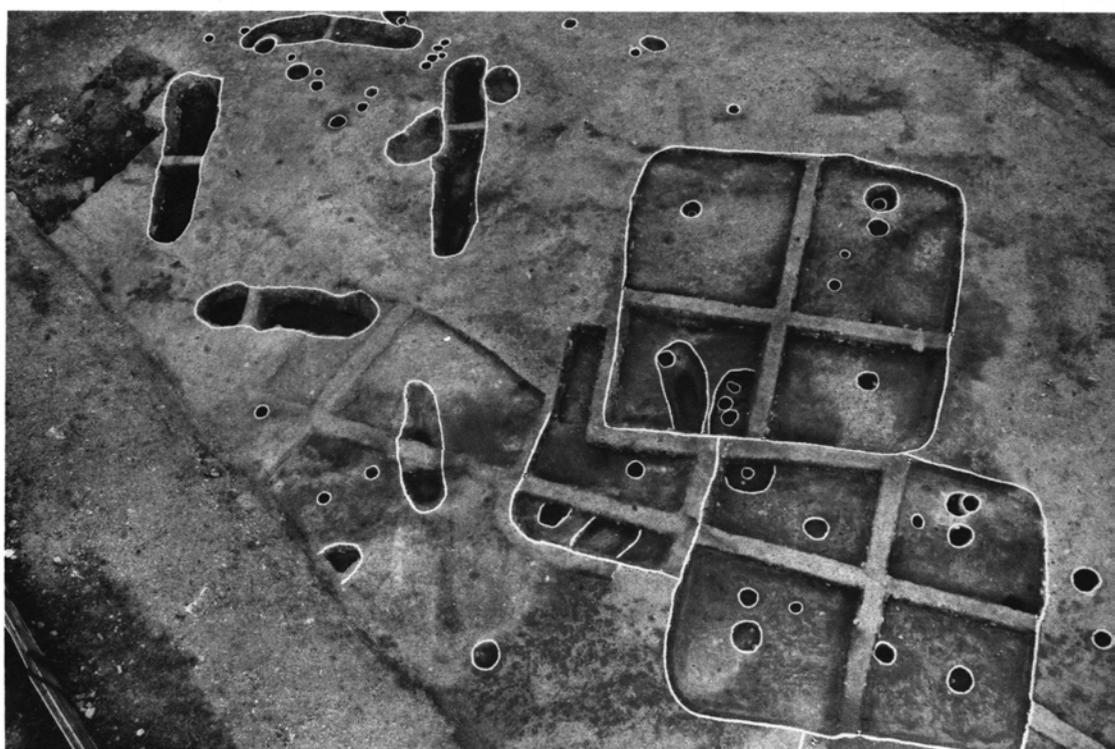
S B22、S K45全景
(北より)



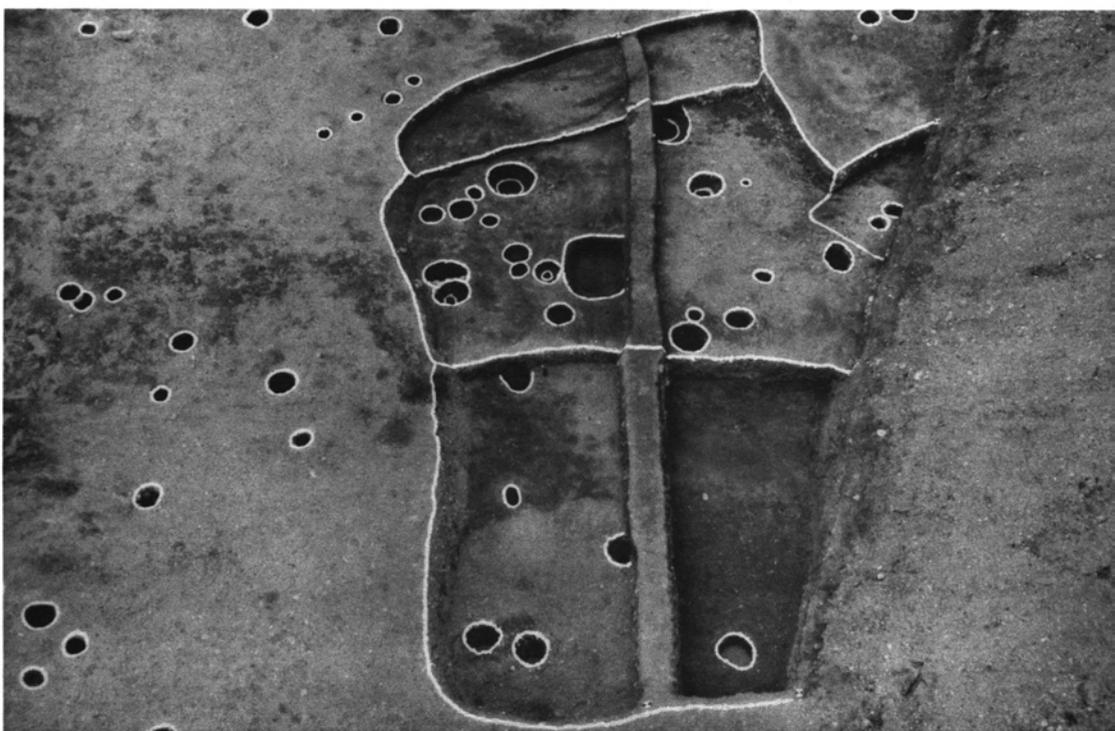
S B17~21全景
(北より)



SZ01全景
(南より)



SZ01・02
SB19~21全景
(北より)

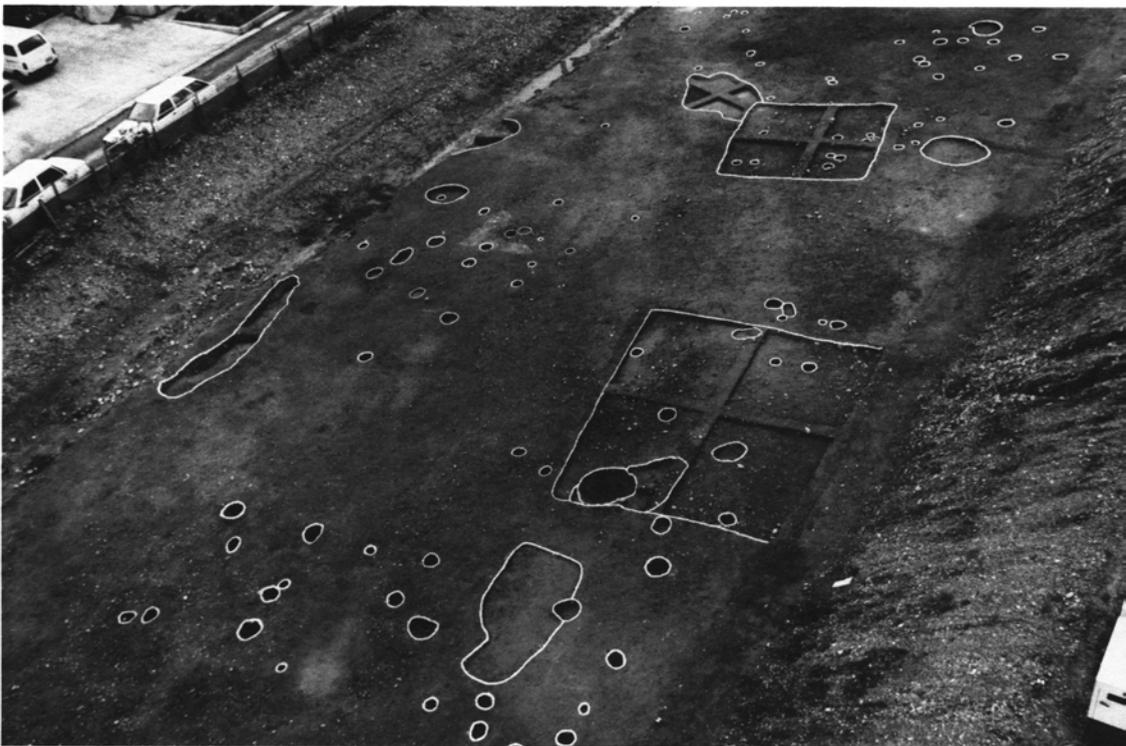


SB12~15全景
(東より)

S Z 03
S B 16・17全景
(東より)



S Z 04
S B 22・23全景
(東より)



S Z 04
S B 22全景
(北より)



ST01~07
水田跡A地区全景
(西より)



ST01~07
水田跡A地区全景
(南より)



ST04~18
水田跡A・B地区
SD06全景
(西より)



ST12~17
水田跡B地区全景
(西より)



ST13~19
水田跡B地区全景
(西より)



ST29~31
SF01・SD04
水田跡C地区全景
(西より)



ST06~10
SD06、SK21
水田跡A・B地区全景
(西より)



ST06~10
SD06、SK21
水田跡A地区全景
(西より)



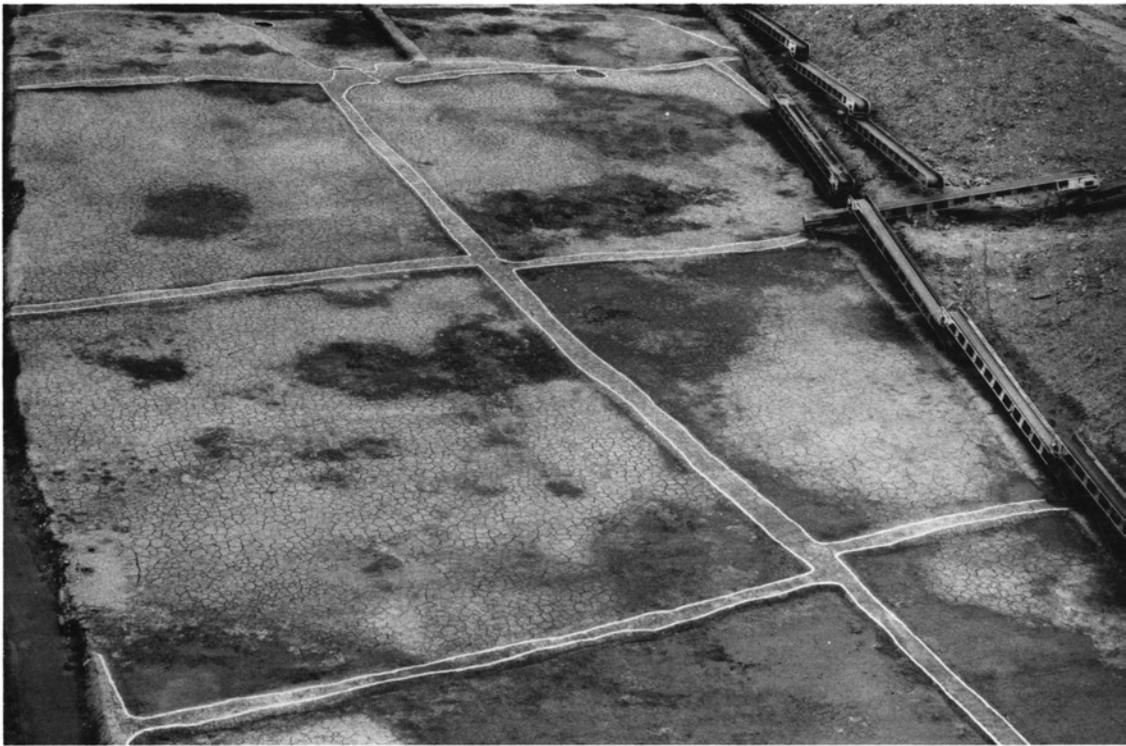
ST21~28
SD06、SK21
水田跡B地区全景
(西より)



ST21~28
水田跡B地区全景
(東より)



ST21~28
水田跡B地区全景
(東より)



ST29~34
SF01、SD04・05
水田跡C地区全景
(東より)



図版51

S B03土器出土
(東より)



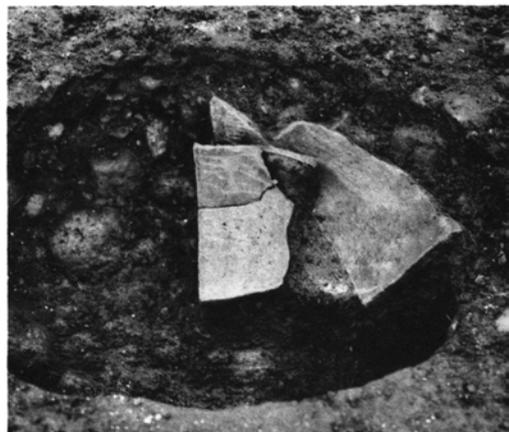
S B03土器出土
(南東より)



S Z04土器出土
(北より)



ビット332土器出土
(東より)



S D03土器出土
(西より)



S K47土器出土
(西より)



S K63土器出土
(東より)



S B01土器出土
(北より)



ビット501土器出土
(北より)



ビット567土器出土
(北より)





85



98



300



288



97



87



96



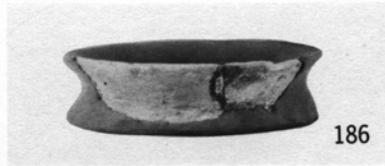
209



249



188



186



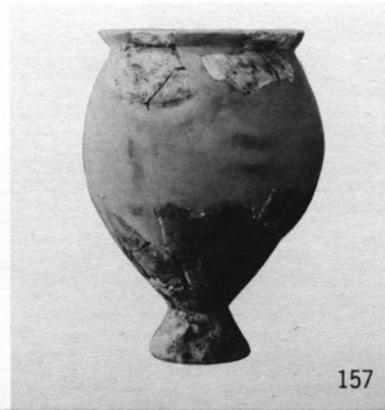
250



226



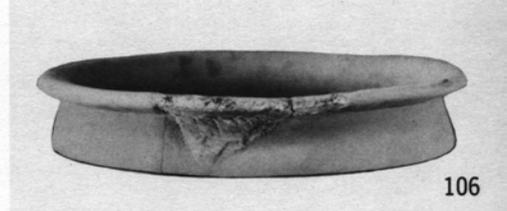
189



157



232



106



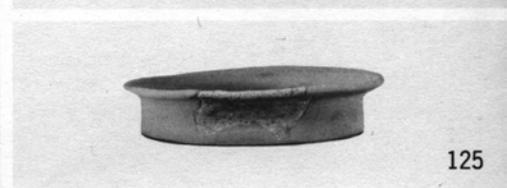
109



108



258



125



254



277



278



171



283



176



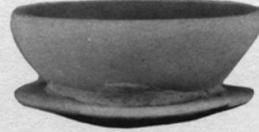
170



233



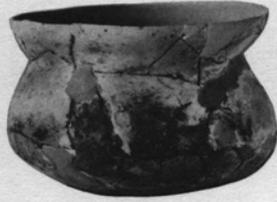
238



511



199



152



261



284



231



260



285



257



347



299



128



163



292



302



159



293



341



129



134



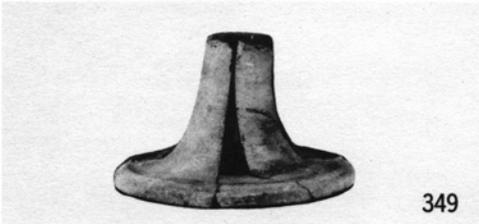
339



348



344



349



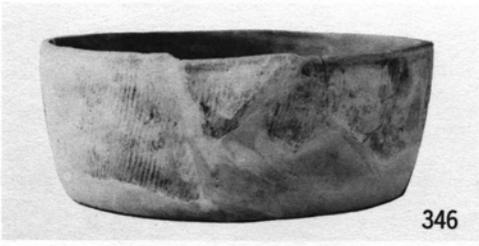
350



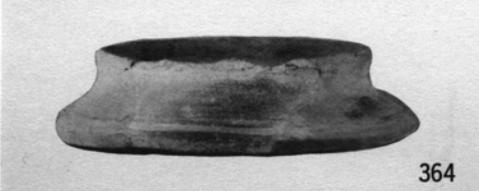
362



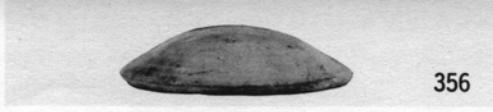
363



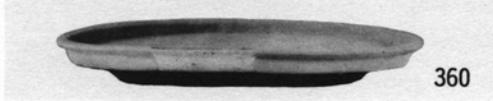
346



364



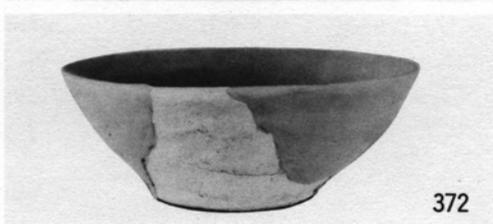
356



360



369



372



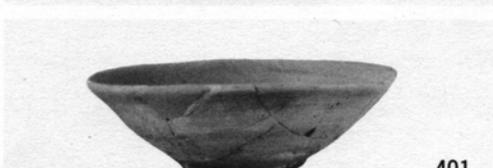
322



366



371



401



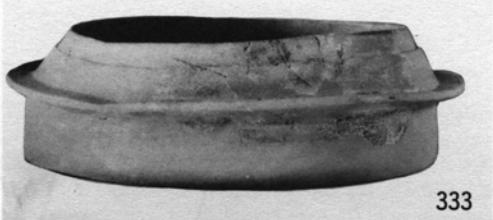
404



410



407



333



373



374



375



376



378



380



377



379



396



384



393



392



390



382



399



388



398



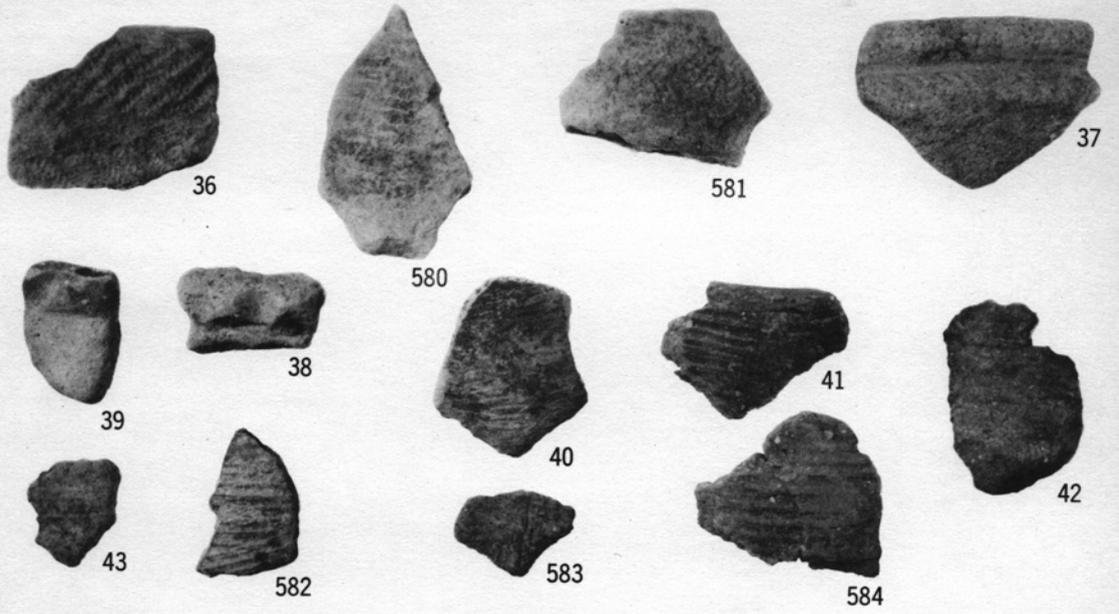
395



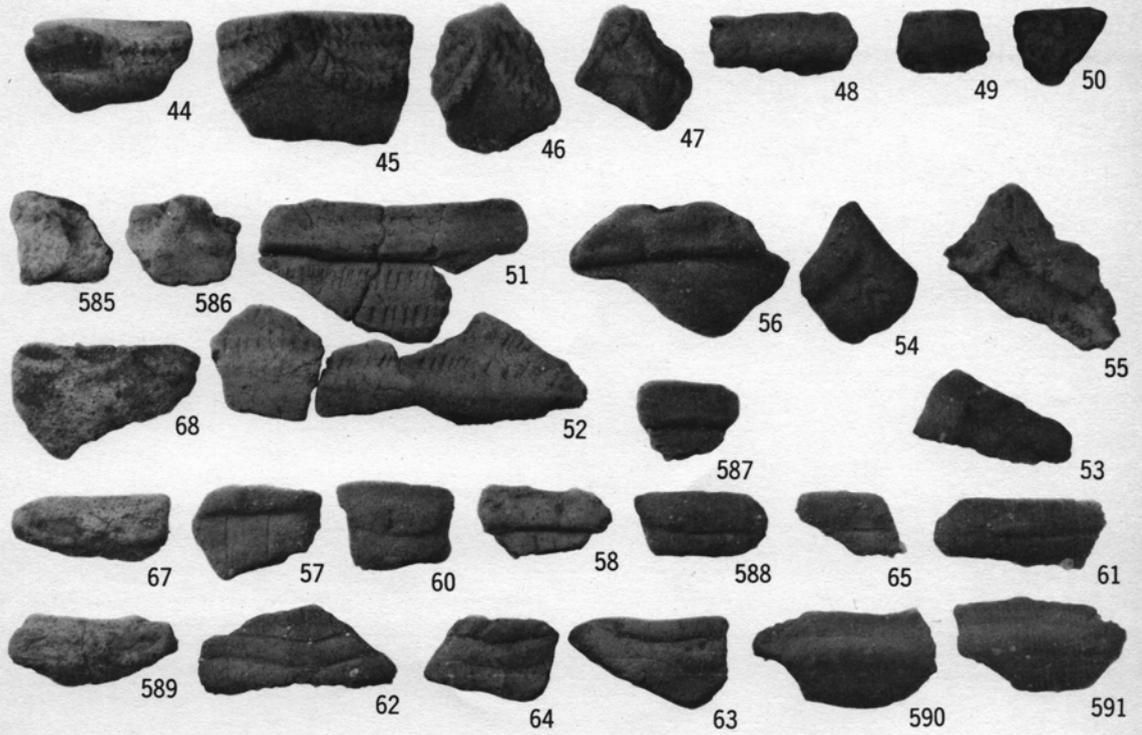
387

図版55

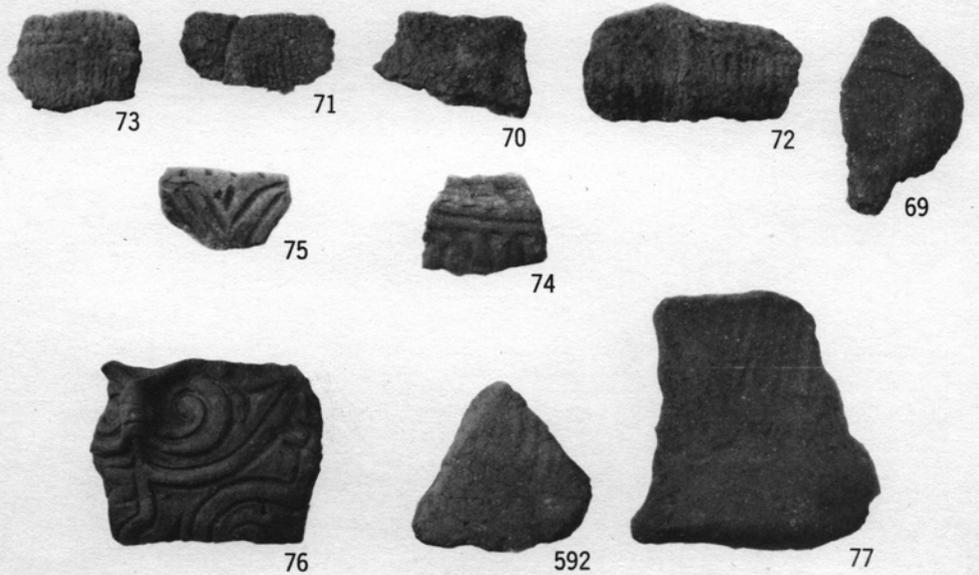
微高地及びH・I・J
トレンチ出土の縄文土器

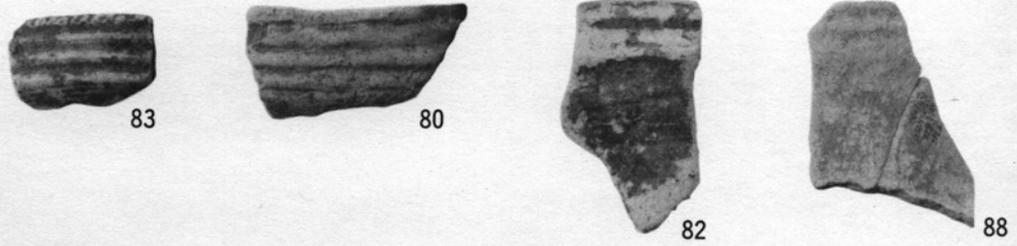
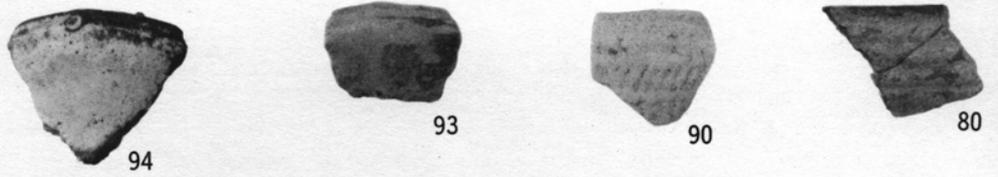


火山灰層下層出土の縄
文土器（北屋敷式）

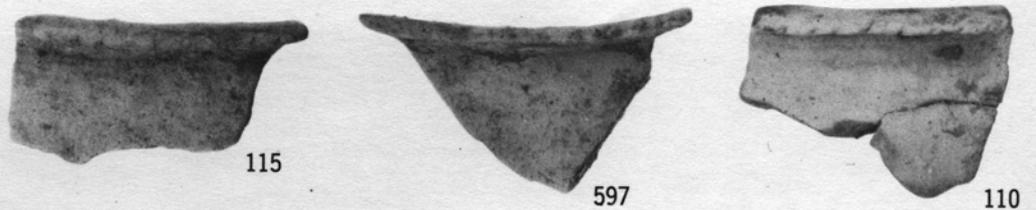
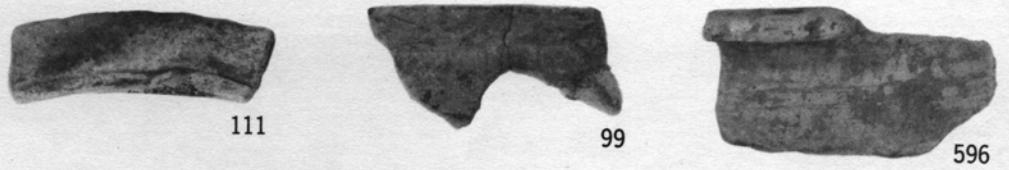


火山灰層下層出土の縄
文土器（船元式土器・
勝坂式土器）





S D03出土の弥生土器

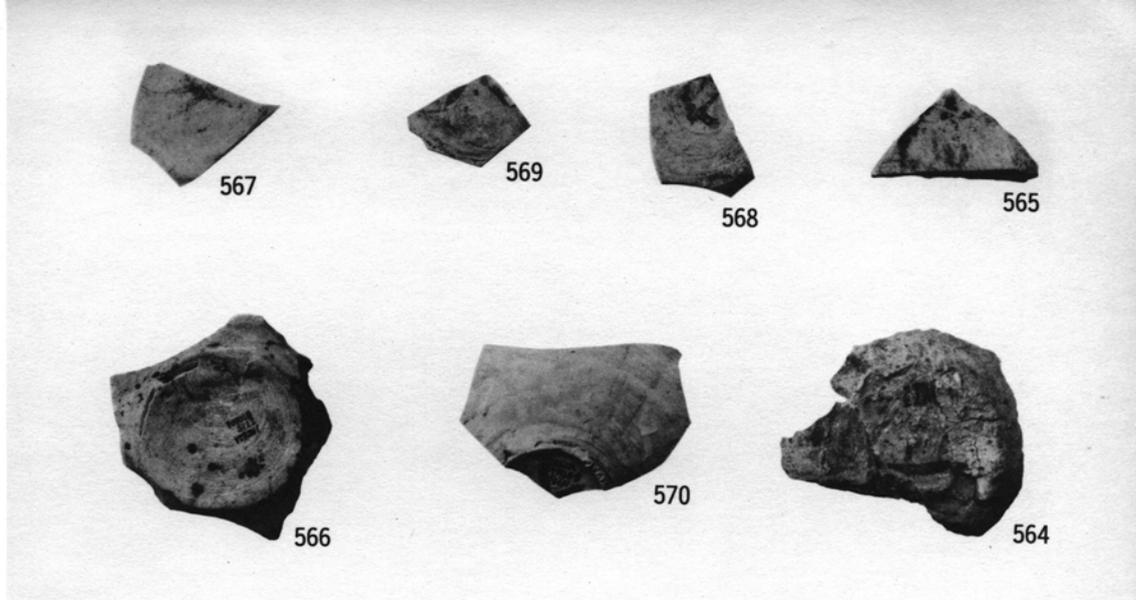


S D03出土の弥生土器

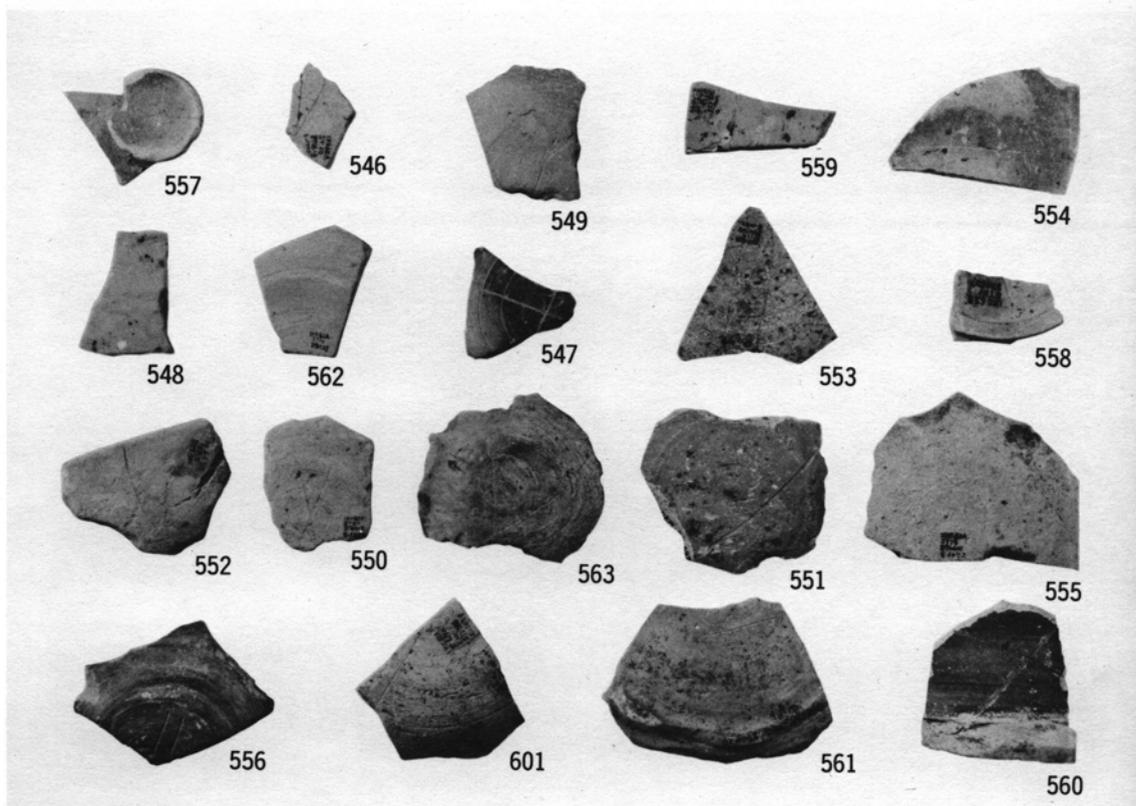


S D03出土の弥生土器

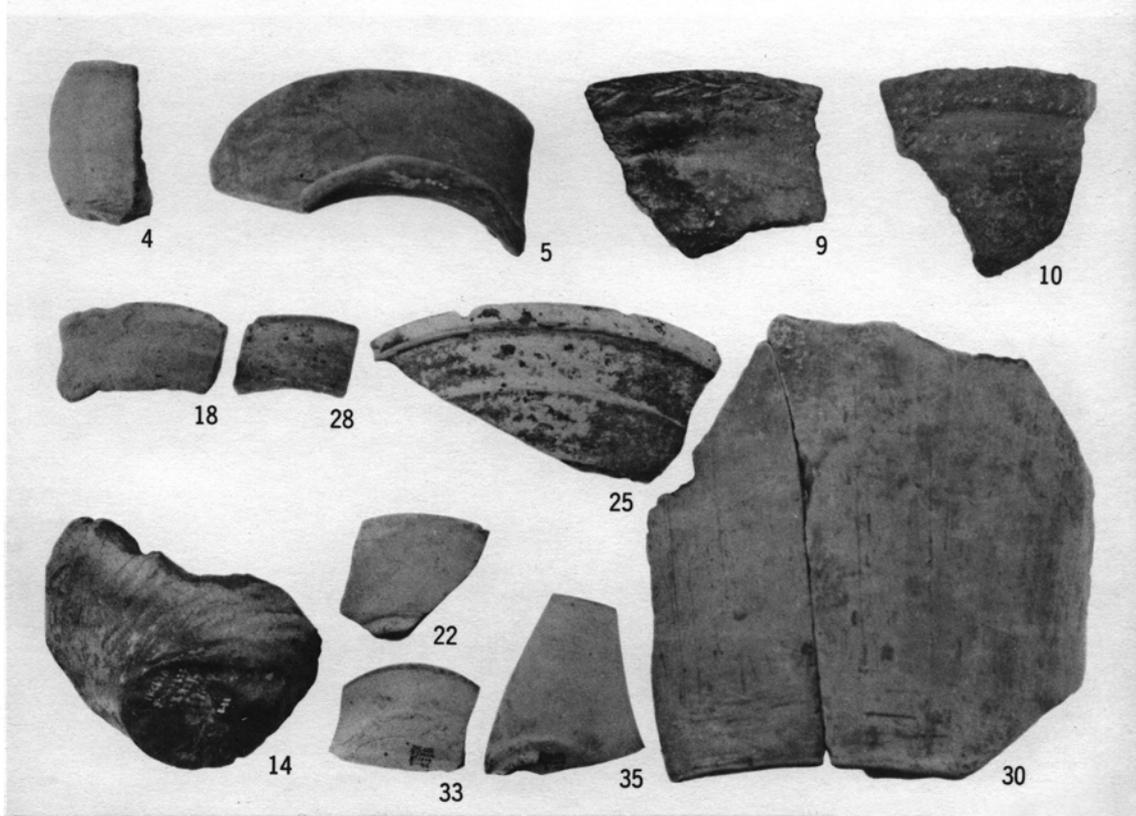
墨書土器

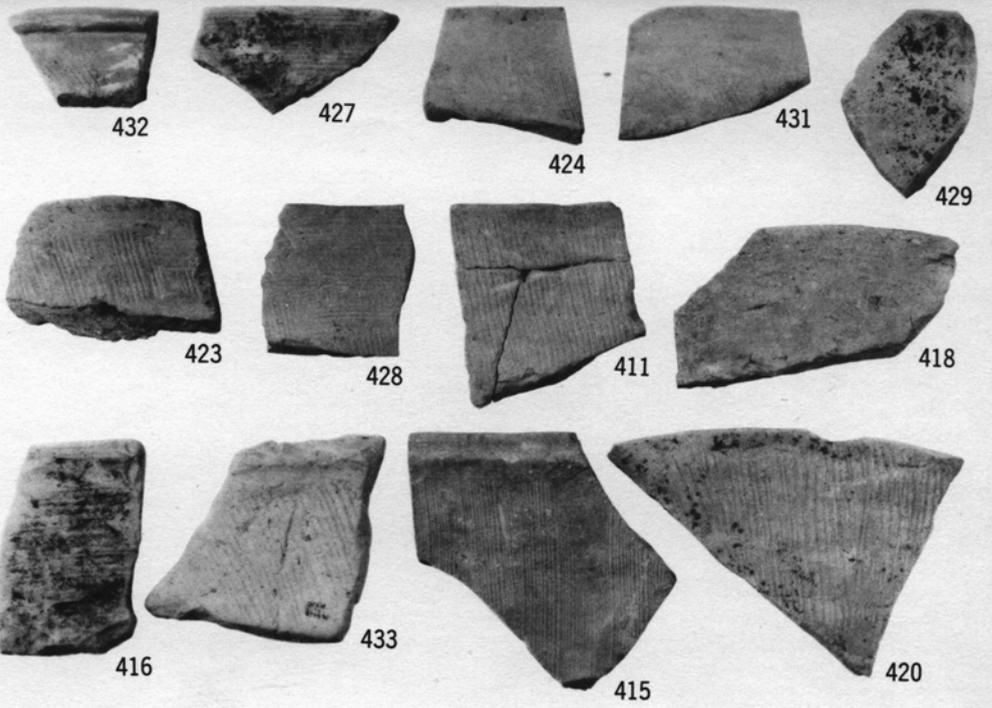


ヘラ記号をもつ須恵器・陶器

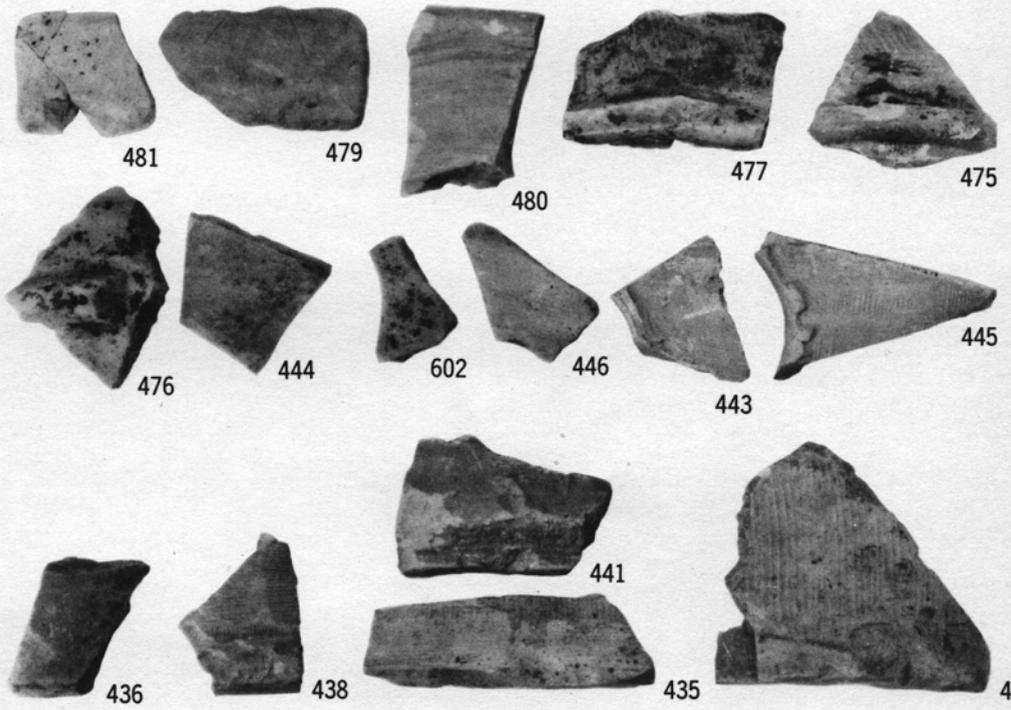


A～S区トレンチ出土の土器

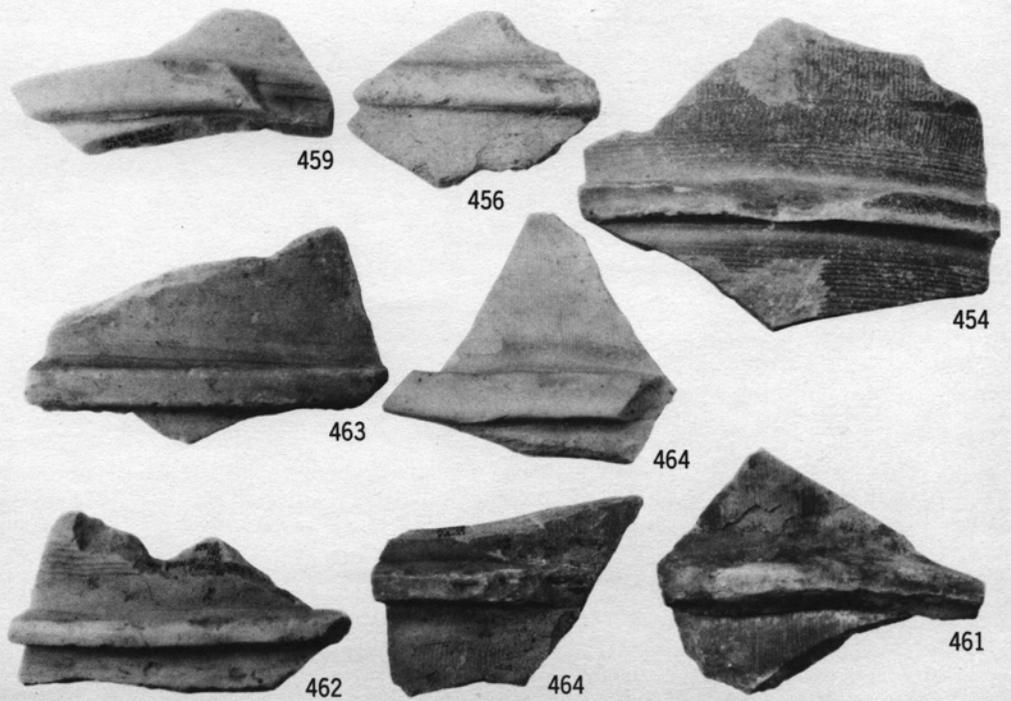




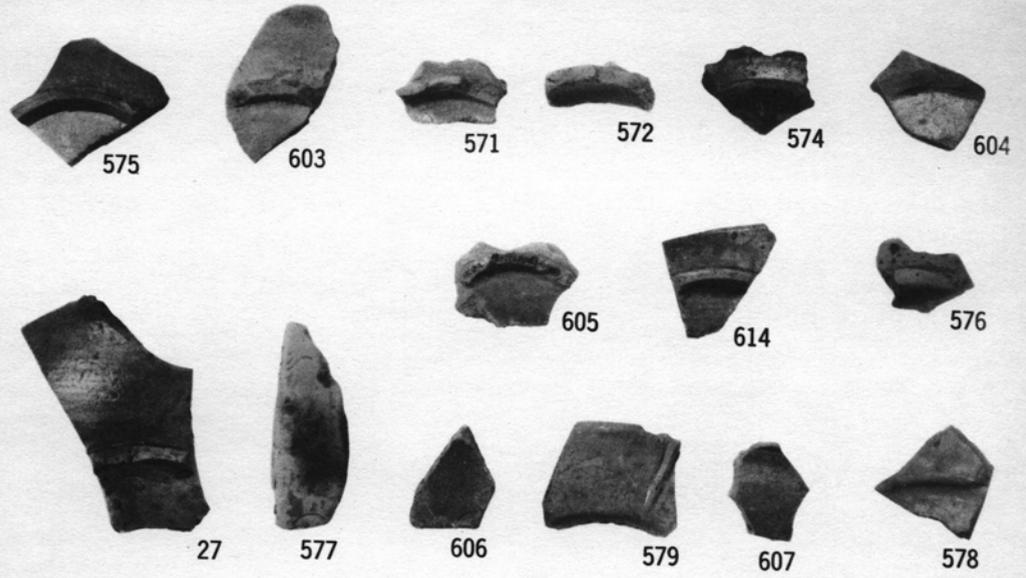
埴輪



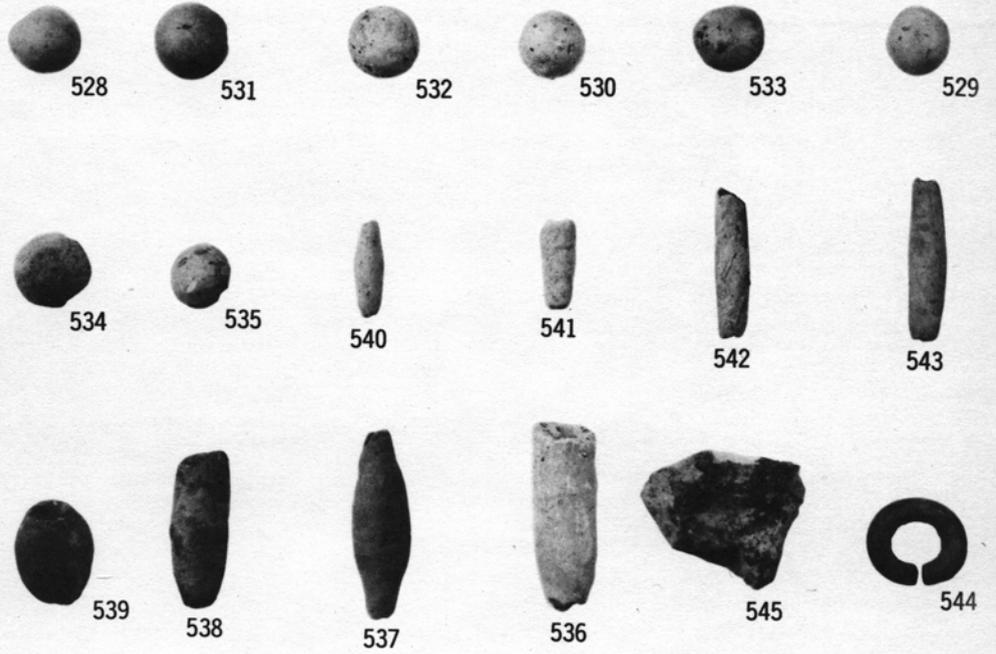
埴輪



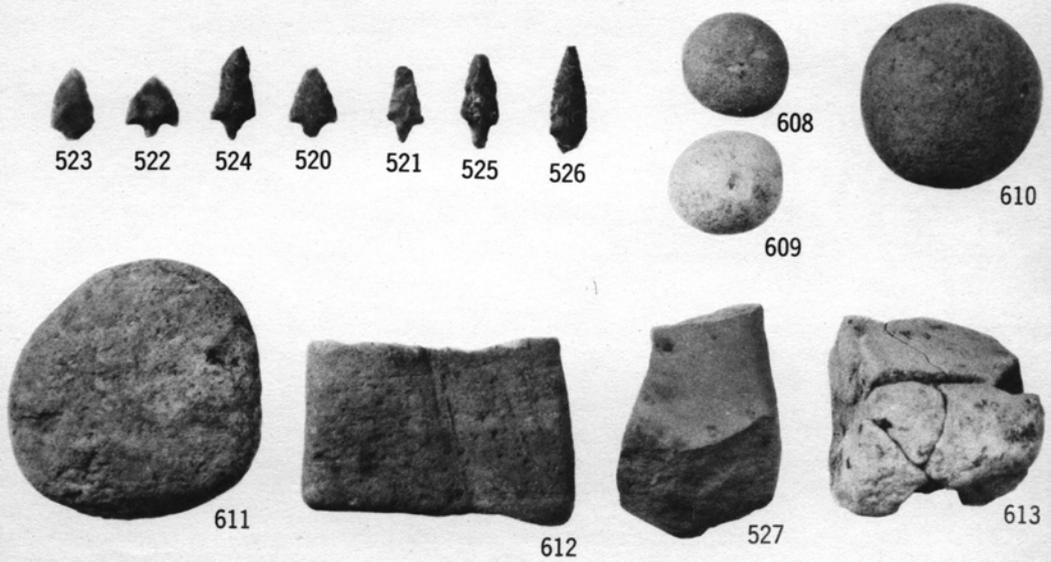
埴輪



緑釉陶器



陶丸・土錘・
金環・るつぼ



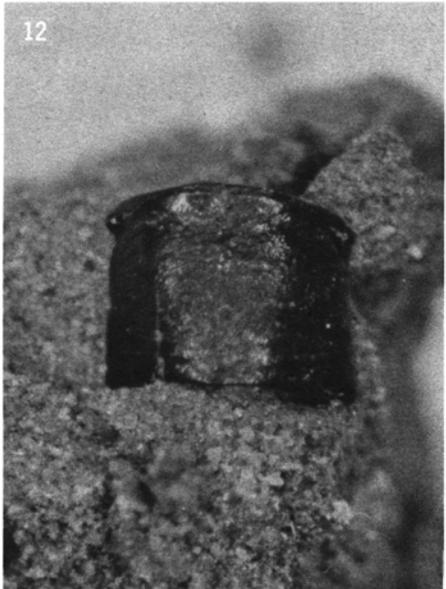
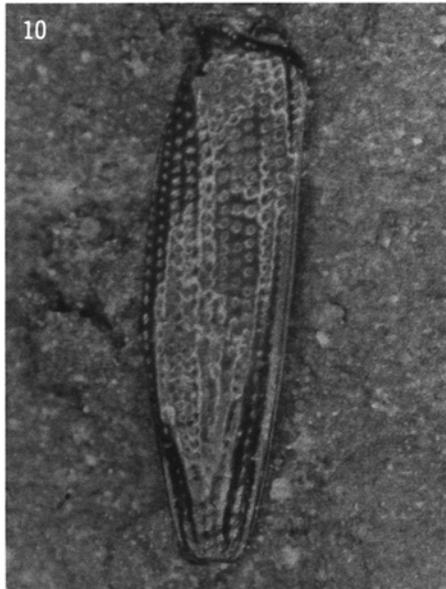
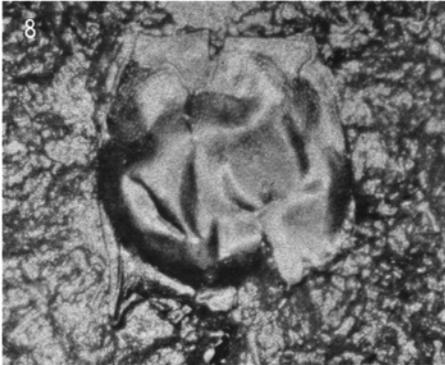
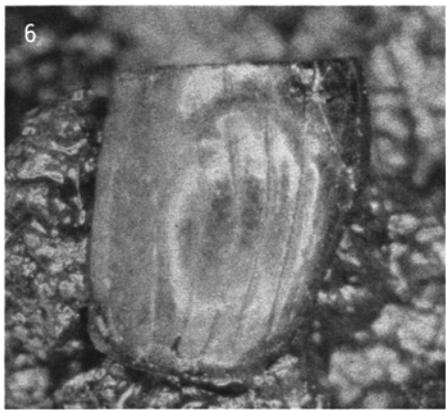
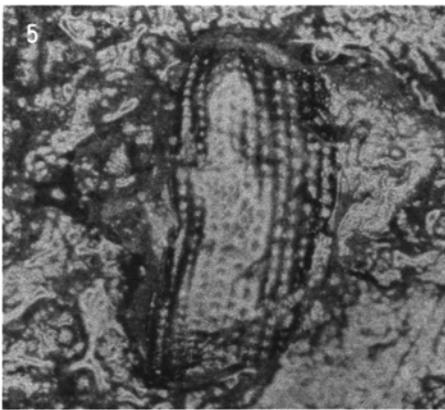
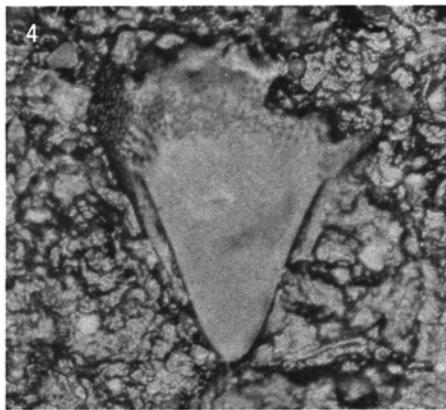
石鏃・石製品

図版60

1. コミズスマシ? *Gyrinus curtus* Motschulsky
右鞘翅 4.1mm
2. アカアシオオクシコメツキ *Melanotus cete* Candeze
右鞘翅 8.5mm
3. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann
右鞘翅 6.8mm
4. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann
小楯板 2.6mm
5. ネクイハムシ亜科 DONACIINAE
左鞘翅 3.0mm
6. ツヤマルエンマムシ *Atholus pirithous* Marseul
右鞘翅 2.0mm
7. ゴミムシ科 HARPALIDAE
前胸背板 3.4mm
8. コメツキムシ科 ELATERIDAE
前胸背板 4.9mm
9. ナガヒョウタンゴミムシ *Scarites terricola pacificus* Bates
前胸背板 幅5.5mm
10. イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire
左鞘翅 4.5mm
11. イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire
左鞘翅 4.3mm
12. イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire
前胸背板 幅1.1mm

1～8 縄文時代中期

9～12 古墳時代～平安時代



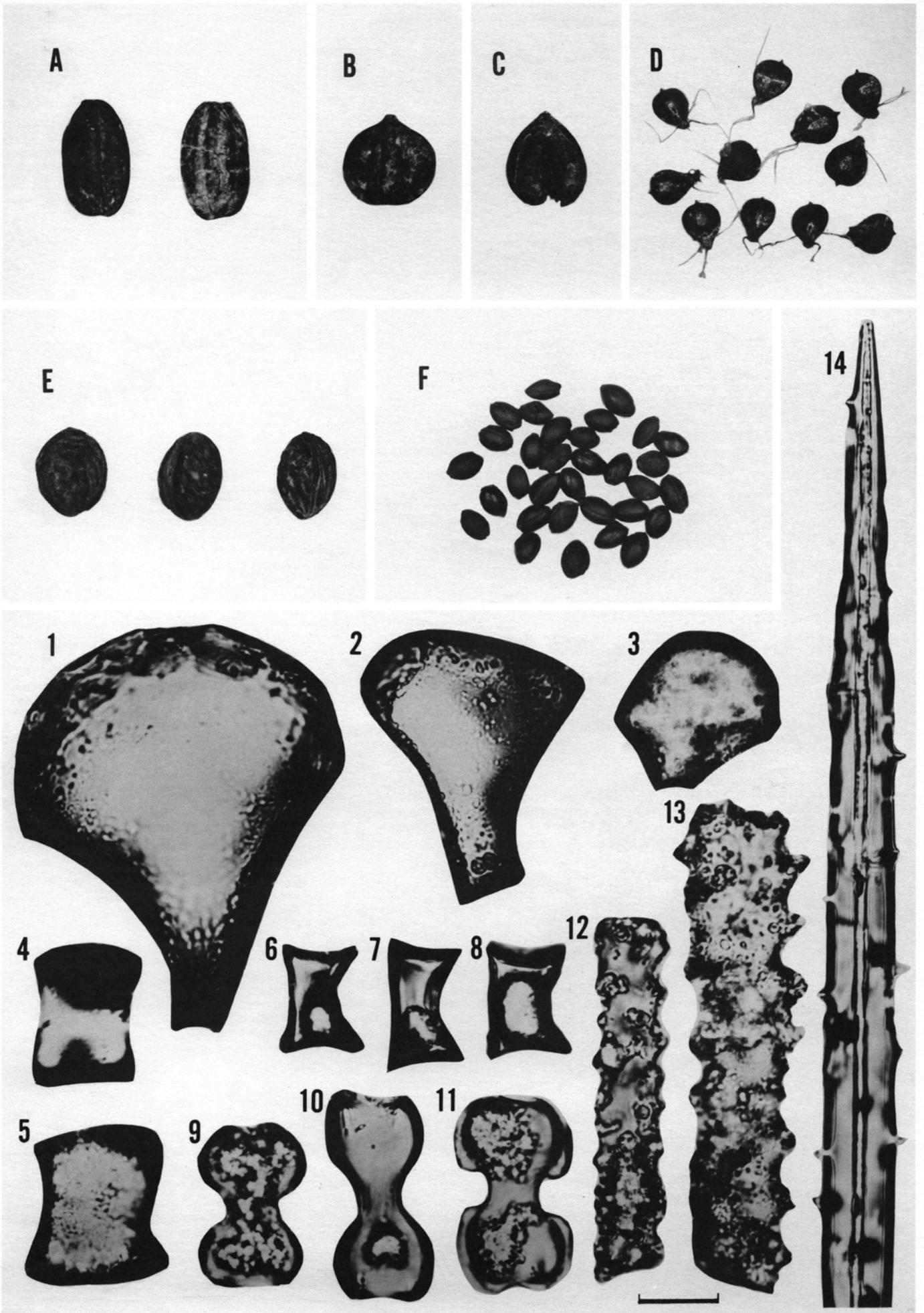
図版61

大型植物遺体

- A. イネ (イネ科・イネ属) ×5
- B. ノブドウ (ブドウ科・ノブドウ属) ×5
- C. ブドウ属 (ブドウ科) ×5
- D. カンガレイ (カヤツリグサ科・ホタルイ属) ×5
- E. モモ (バラ科・サクラ属) ×0.7
- F. エゴノキ (エゴノキ科・エゴノキ属) ×0.7

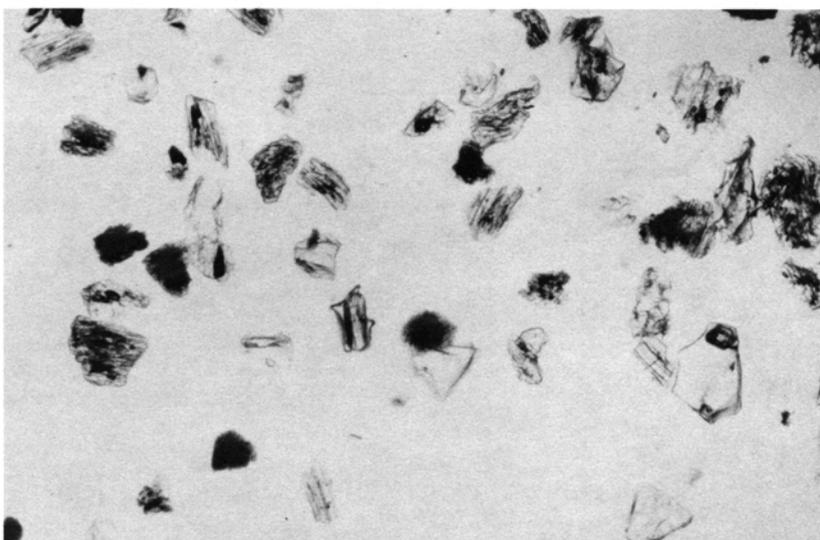
植物珪酸体 (バースケールは10 μ m)

- 1~3 ファン型
- 4~5 タケII型 (タケ亜型)
- 6~8 タケI型 (ササ亜型)
- 9~11 キビ型
- 12~13 棒状型
- 14 淡水海綿の骨針

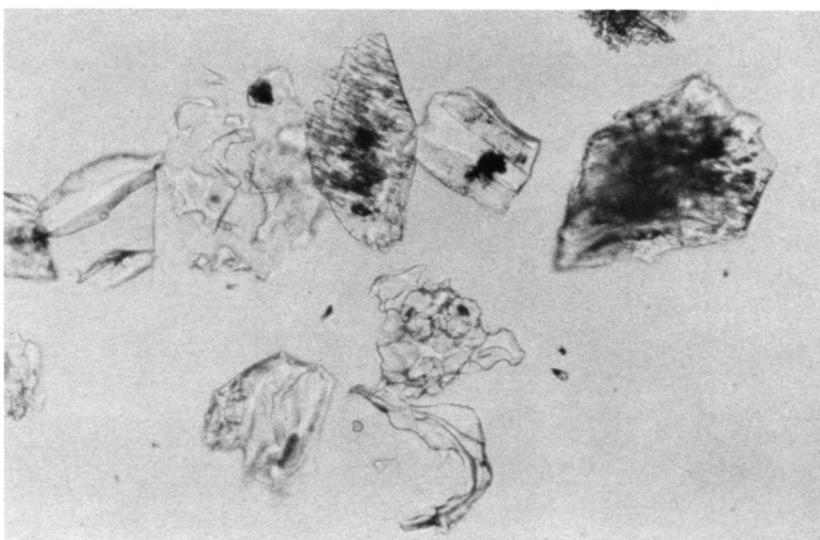


図版62 火山灰の偏光顕微鏡写真

火山灰全体
(単ニコル：×60)
火山ガラスを中心に、軽鉱物・重鉱物を含む。



火山ガラス
(単ニコル：×150)
条線の発達した中間型及び多孔質型が観察された。



重鉱物
(単ニコル：×150)
角閃石や斜方輝石・黒雲母が多い。

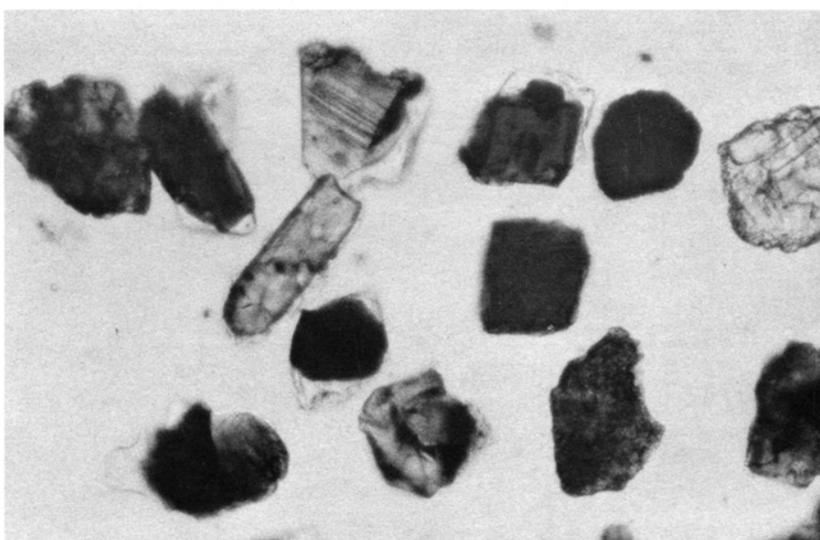


Plate 63.

- 1 . *Melosira granulata* (Ehr.) Ralfs
- 2 . *Melosira granulata* (Ehr.) Ralfs
- 3 . *Melosira granulata* (Ehr.) Ralfs
- 4 . *Melosira* sp.-1
- 5 . *Melosira* sp.-1
- 6 . *Melosira italica* var. *valida* (Grun.) Hustedt
- 7 . *Melosira ambigua* (Grun.) O. Müller
- 8 . *Melosira distans* (Ehr.) Kützing
- 9 . *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kützing
10. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow
11. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow
12. *Fragilaria bicapitata* A. Mayer
13. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve
14. *Eunotia flexuosa* (Bréb.) Kützing
15. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow
16. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kütz.) Rabenhorst
17. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst
18. *Amphora ovalis* var. *libyca* (Ehr.) Cleve
19. *Amphora ovalis* var. *libyca* (Ehr.) Cleve
20. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Müller
21. *Cymbella minuta* Rabenhorst
22. *Cymbella affinis* Kützing
23. *Cymbella gracilis* (Rabh.) Cleve
24. *Cymbella cuspidata* Kützing
25. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve

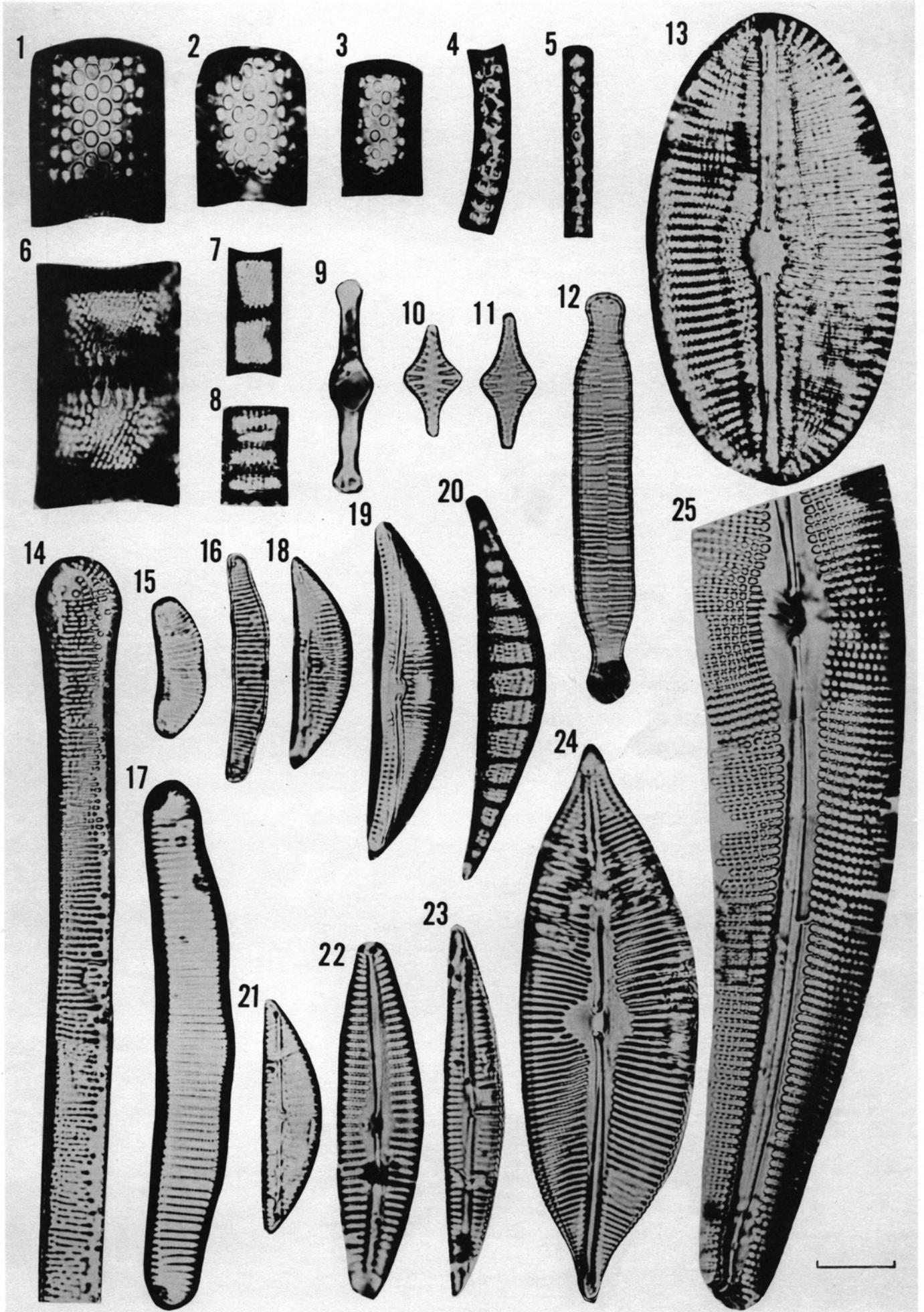
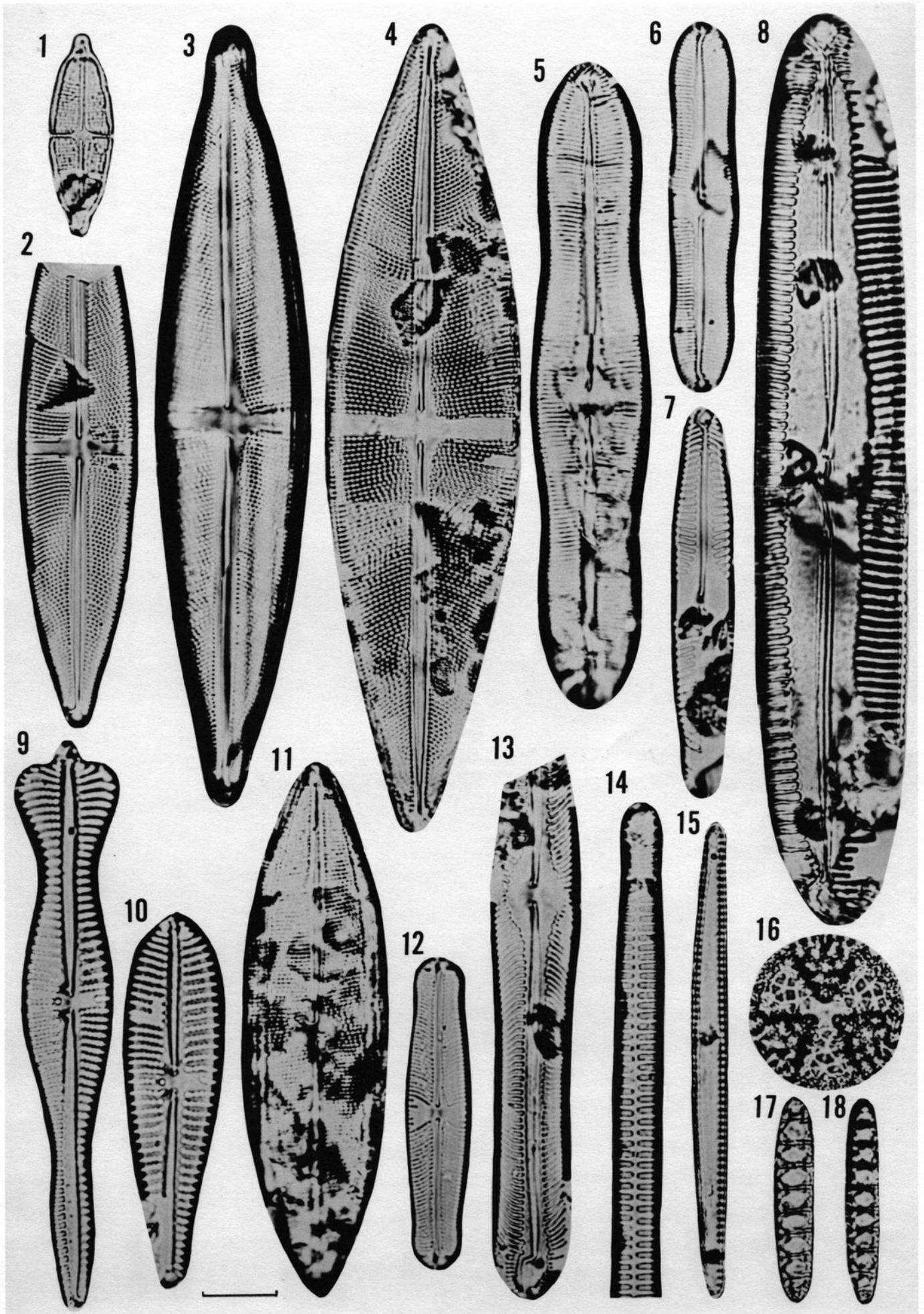


Plate 64.

1. *Stauroneis smithii* Grunow
2. *Stauroneis phoenicenteron* Ehrenberg
3. *Stauroneis phoenicenteron* Ehrenberg
4. *Stauroneis phoenicenteron* Ehrenberg
5. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve
6. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve
7. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve
8. *Pinnularia hemiptera* (Kütz.) Cleve
9. *Gomphonema acuminatum* var. *coronata* (Ehr.) W. Smith
10. *Gomphonema augur* var. *turris* (Ehr.) Lange-Bertalot
11. *Neidium iridis* (Ehr.) Cleve
12. *Navicula pupula* Kützing
13. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
14. *Synedra ulna* (Nitz.) Ehrenberg
15. *Thalassionema nitzschioides* Grunow
16. *Actinoptychus senarius* (Ehr.) Ehrenberg
17. *Denticulopsis lauta* (Bail.) Simonsen
18. *Denticulopsis lauta* (Bail.) Simonsen

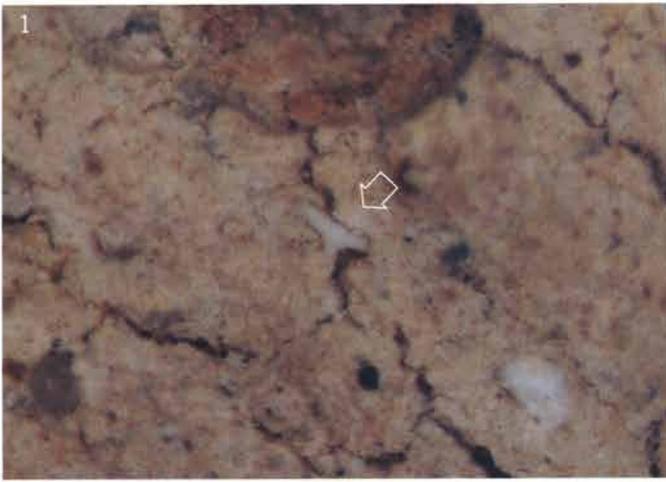
(スケールは10 μ m)



図版65

1. 動物珪酸体（四軸型） 写真中央（矢印）。三方向に枝別れしている。
試料番号37：S字甕（粥鍋遺跡）（写真の長辺約1.6mm）
2. 火山ガラス 写真中央。透明で、ガラス光沢を持つ。
試料番号26：S字甕（松ノ木遺跡）（写真の長辺約2mm）
3. シャモット 土器表面に散在する、赤っぽい粒。
試料番号19：S字甕（定納遺跡）（写真の長辺約14.5mm）
4. モミガラ 写真中央。白く灰のようになっている。
試料番号25：弥生時代中期 高杯（写真の長辺約5mm）
5. 動物珪酸体（二軸型） 写真中央。白い棒状の形態を持つ。
試料番号26：弥生時代中期 壺（写真の長辺約2.3mm）
6. 土器内部の気泡 写真右下から左上に向かって配列している。（写真左が杯部）
試料番号50：弥生時代後期 高杯（写真の長辺約72mm）
7. 縞状の胎土（土器表面） 写真右上から左下に向かって縞状になっている。（写真左が杯部）
試料番号52：弥生時代後期 高杯（写真の長辺約20mm）
8. 縞状の胎土（土器断面） 脚の端部で折り曲げた様子がわかる。
試料番号52：弥生時代後期 高杯（写真の長辺約15mm）

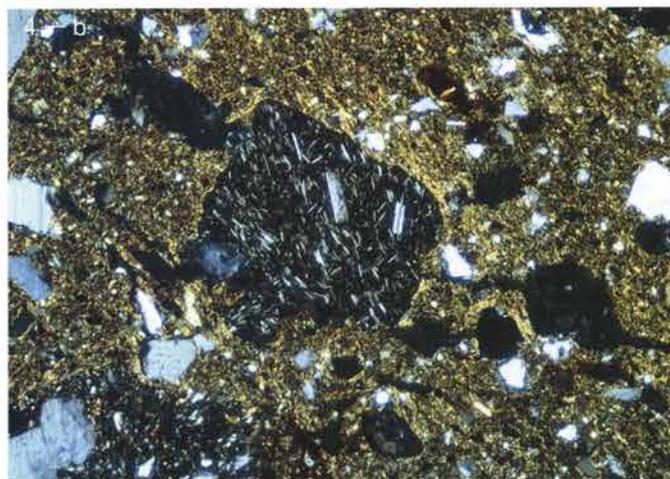
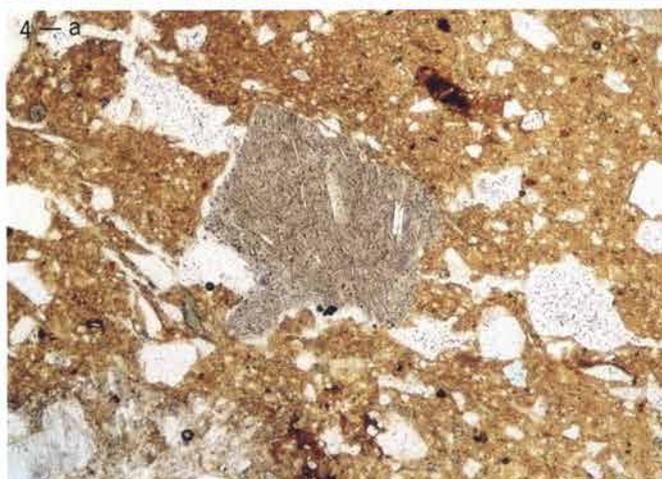
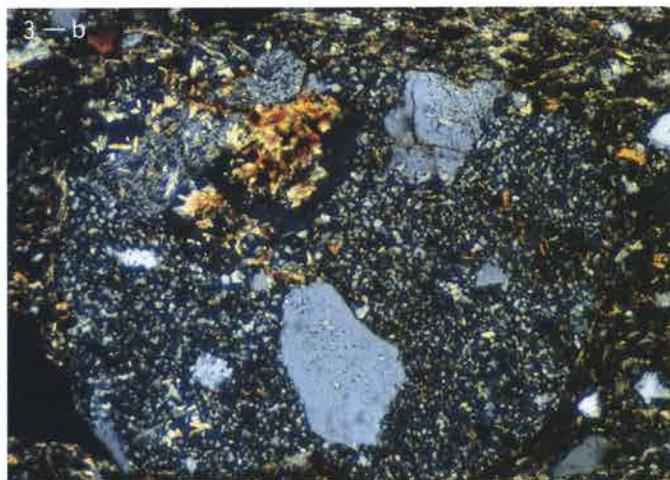
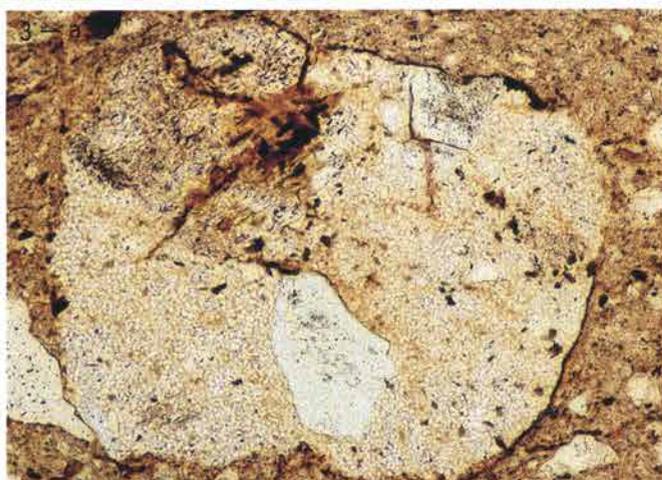
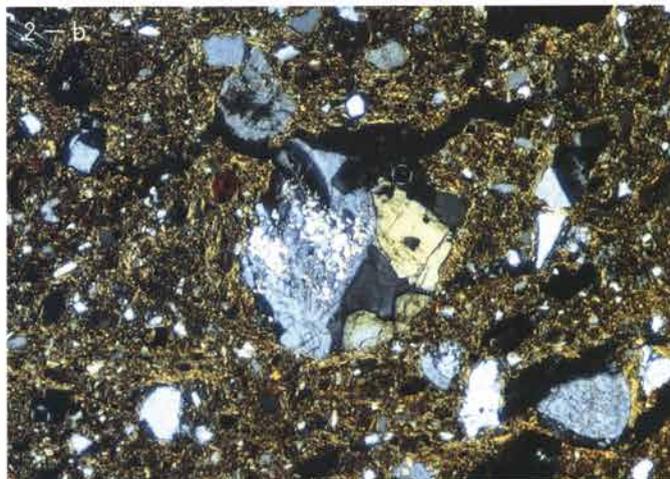
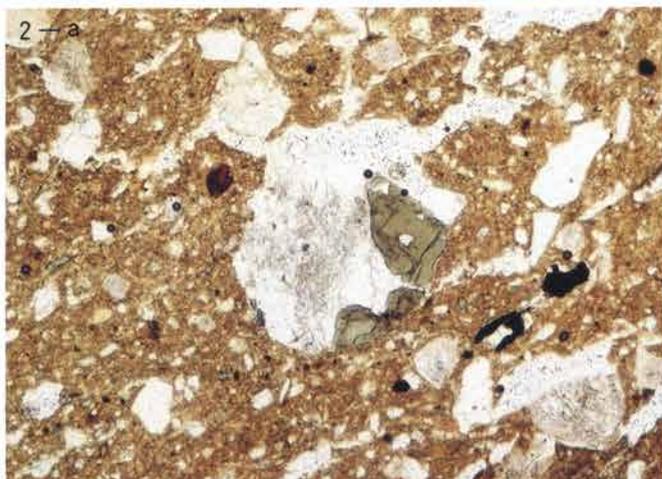
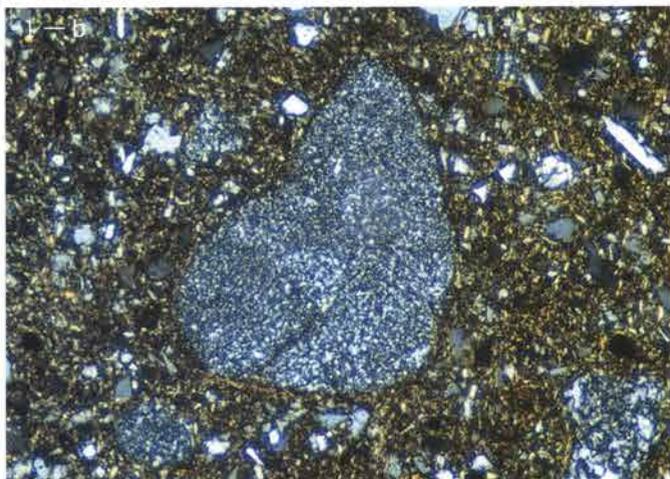
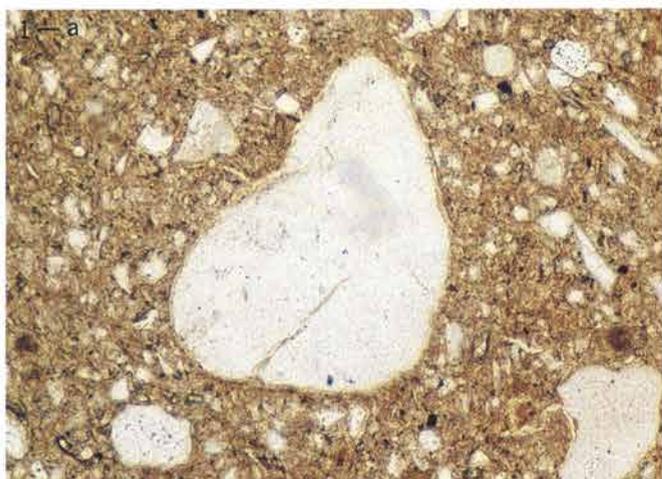
図版65 土器表面の実体顕微鏡写真



図版66

1. チャート (a : 単ニコル b : 直交ニコル)
写真中央。細粒の石英からなる。(×130)
試料番号55 : 弥生時代後期 高杯
2. 花崗岩 (a : 単ニコル b : 直交ニコル)
写真中央。角閃石・カリ長石・石英よりなる。(×40)
試料番号16 : 弥生時代中期 甕
3. 濃飛流紋岩 (a : 単ニコル b : 直交ニコル)
写真中央。石英・斜長石・黒雲母などの斑晶を含む。(×120)
試料番号23 : 弥生時代中期 高杯
4. 火山岩 (a : 単ニコル b : 直交ニコル)
写真中央。斜長石の斑晶を含む。(×40)
試料番号16 : 弥生時代中期 甕

図版66 岩石片を含む土器薄片の偏光顕微鏡写真



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集

町 田 遺 跡

1989年3月31日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社